

不敗の魔術師が青春するのはまちがっている。

佐世保の中年ライダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死したはずの、不敗の魔術師と呼ばれた男は
21世紀の地球にて新たな人生を歩む。

目次

魔術師再び、そして二人は出逢う。	前編	1
魔術師再び、そして二人は出逢う。	後編	10
時は流れて二人は再会し、そして彼は四人目の部員となる。	前編	20
時は流れて二人は再会し、そして彼は四人目の部員となる。	中編	32
時は流れて二人は再会し、そして彼は四人目の部員となる。	後編	42
魔術師は剣豪将軍と邂逅する。		53
魔術師は剣豪将軍のラノベの洗礼を受ける。		59
魔術師は銀河の歴史を語る。	始	72
魔術師は銀河の歴史を語る。	続	80
魔術師は銀河の歴史を語る。	終	92
魔術師は銀河の歴史を語る。	余	113
銀河の歴史を語り終えた魔術師は。		144
魔術師の穏やかな日常、そして。		153
来訪者は突然に。		162
魔術師は過去と現在に思いを馳せる。		171
それぞれの帰り道。		179
魔術師は三人の過去に立ち会う。		189
四人の絆は深まり：そして。		199
四人は不本意ながらも事に当たる。		207
魔術師は彼女と斯く語りき。		217
魔術師と捻くれ者は、リア充グループの様子を見るか。		227

魔術師と捻くれ者の言葉はトップカーズトリーダーに届いたか。

236

魔術師はプレゼントを選ぶために仲間と共に、そして。

魔術師は優しい嘘を肯定し、そして。

魔術師と重荷を抱えた少女との邂逅。

魔術師は仮面の少女を案じながらも、昼食の一時を楽しむ。

魔術師の言葉に彼女は何を見出すか。

246
256
265
275
285

魔術師再び、そして二人は出逢う。 前編

ひっそりと、小さな輝きを点在させる永遠の夜の中を行く金属の箱の中で今一つの命の灯火が消えようとしていた。

アイボリーホワイトのスラックスの左太腿には熱線に撃たれた事により肉を穿たれ、其処から止めどなく溢れる赤い液体の流出を幾らかでも止めようと巻かれた同色のスカーフも効力は無く。

だがそれはみるみるその色を血の赤に染められてしまう、力無くその金属の箱の中の一角の壁に凭れ腰を下ろし今にも消えそうな、誰にも届かない小さな声で最後の言葉を細々と呟く。

『ごめんフレデリカ、ごめんユリアン、ごめんみんな……』

宇宙暦八百年 六月一日 二時五十五分、それが一つの命がその世界から永久に喪われた時間だった。

何時からだろうか少年が眠りの中で夢を見る様になったのは、その夢を見始めた頃は自分とは違う誰かの人生をまるで追体験しているかの様でワクワクしていた。

何故ならその夢の中の人物の視点の中に視える世界が明らかにこの地球上とは違う夜の世界、未だ人類が到達出来ない遠くの宇宙空間だろうと思われる場所が殆で、その中を行き交う大小無数の宇宙船の船影にまだ年端の行かない少年が夢中になり影響を受けるのも致し方無い事であろう。

だがその夢が続くにつれ、その視点となっている人物の人生を追う毎にやがて彼はその夢がただの夢では無いのではと思う様になり、やがて。

「……いやはやこりやまいったな、一度死んだ位では私の罪は許される物では無いのと思ってはいたんだが、こりや一体どういう事なんだ。」

時は二十一世紀の地球、宇宙暦の時代に生まれ望まぬ軍人としての

人生を歩み死した筈の一人の男ヤン・ウエンリー。

その男の記憶をまるで上書きでもされたかの様にそれまで地球という一惑星上で生れ育ってきた少年が引き継いでしまったのだった、いやこの場合は融合か覚醒と言うべきか。

「名前も前と同じヤン・ウエンリーだし、それに見てくれも以前の十二歳当時の私とほとんど同じようだし。」

自室に副え付けられた少し大きめの鏡に映る今の己の姿を、十二歳の少年の姿の彼は感慨深く眺めやり独りごちる。

宇宙暦の時代のヤン・ウエンリーとの相違点を上げるならば今生の彼に前世に於いては早逝した母親がすこぶる元気で健在であり、尚且前世には存在しなかった十歳上の兄がいる事だろうか。

「誰がなんの為にとか、これは夢なのかとか疑問は色々ときかないし前世に於ける私の罪とかその他諸々あれども、今生のヤン・ウエンリーにその罪科を負わせる事も無いだろうしな。」

『ならば今生は精々人様にあまり迷惑をかけず、何よりも人殺しに加担する様な人生を送らない様にしようか』右手を後頭部に当て軽く髪を掻きつつそうヤンは心に思うのだった。

そして前世の宇宙暦の時代のヤン・ウエンリーの記憶に影響を受けてか、今生の少年ヤン・ウエンリーもまた歴史に興味を持ち始め、父親にせがみ多くの歴史に関連する書物を購入し独自に彼がそれを学び始めた事もあったおかげか、二人のヤン・ウエンリーの記憶が統合された今改めてこの世界がどうやら宇宙暦の時代に連なる過去の世界では無くそれとは別の歴史を辿っている別世界。

所謂パラレルワールドの、それも人類が未だ宇宙へと進出を未だ果たせていない時代だとヤンは理解していた。

「どうやらこの世界は太平洋戦争後辺りの時代から歴史の流れが変わっているみたいだな、だとするとその辺りが前の世界との分岐点だろうか。」

この世界ではその後、米ソによる東西の対立からの東西冷戦構造や競う様に繰り広げられた軍拡競争。

しかし経済破綻などに依るソビエト連邦の崩壊などを経てその構

造も崩れ現在に至っているが、あちらの世界では二大国の対立からやがて二十一世紀中盤には全面核戦争へと突入し地球上の北半球等は壊滅状態と成り果ててしまったのだった。

「だけど、この世界もあちらと形は違えど争いの火種は彼方此方に散らばっている様だな。

世界各地に核兵器を保有する国家も多いし決して多く楽観視は出来無いつて事だろうな。」

まあ出来るだけ大事にならない様に願っておくかな、と他人事の様
にヤンは小綺麗に整えられた黒髪を無造作に掻きながらポツリと漏らすのだった。

歴史研究家になりたい、その為に前世に於いて父ヤン・タイロンに
ハイネセン記念大学歴史学科への進学を許されながらも、その父の事
故死によりその夢は叶わずに潰えたその夢をならば今生ではと望み。

『お前は兄貴と違って我が家の男が持つ商才ってモノを受け継いで
はいない様だしな、まあそれなりの援助はしてやるからやりたい事を
やるといいさ。

それに歴史の分野で儲けたやつが一人も居ない訳でも無いしな。』
と今生の父タイロン氏にその志望を話したところ、彼はそう言っ
て息子の志望に理解を示してくれた。

言い方は違えどもそれは前世の父タイロンと同様の言動であった
事にヤンは僅かばかりの驚きと深い感謝の念を彼に抱きつつ、尚一層
に世界各国の歴史書を読み漁る日々を送る事となるのだった。

その中でも彼が最も興味を惹かれたのはアジアのとある島国であ
る一国、現在はアメリカに居を構え海運業を中心に手広く世界を相手
に商売を続けるヤン家だが、その祖先が中国本土より渡り住み現在も
祖父母や親戚が居住する台湾、その近隣に位置する弓状列島日本。

その日本の歴史と文化、またそこに住まう人々の精神性に殊に興味
を抱いたヤンは本格的に日本の歴史と文化について学びたいと思う
様になっていた。

「そう言えばムライ中將のルーツは日本だったよな、日本かいつか

実際に行つて現地でその文化と歴史を学びたいものだな。」

その様に前世に於いて縁のあつた謹厳実直な彼の部下であり参謀であつた一人の人物に思いを馳せながらも、自身の望みを口にするの
だつた。

そしてその願が叶い彼が初めて日本へ訪れる事となつたのは十四
歳の初夏のことであつた、そこで彼は一つの出会いをはたす事とな
る。

彼がその少年に声を掛けたのはもしかしたらほんの些細な気紛れ
だったのかも知れない、それは春から夏へと季節が移り替わりもう間
もなく吹風も爽やかさの成分の中に暑さと湿気を感じ始める頃合い
になろうかとしている時期の事。

左肩に黒いバッグを掛け無造作に伸ばされた黒髪にひよこひよこ
と風に揺れる俗に言うアホ毛と称される一房の癖毛を遊ばせ、正面に
『I♡千葉』とデカデカとプリントされたTシャツを着用しブルー
ジーンズに赤いスニーカーを履いた、年の頃は十三く四歳程のスラッ
と痩せた体格の淀んだ瞳を持つその少年は、JR御茶ノ水駅で電車を
降り改札を抜けたその先で御茶ノ水周辺の地図を眺めながら頻りに
首をひねつたり傾げたりしている黒髪に大きなリュックサックを背
負い左肩には自分と同じ様にシオルダーバッグを引っ掛けている自
分と近い背丈の少年と思しき後ろ姿が何故だが気になつてしまつて
いた。

『はて参つたな、何の道どのみちをどう行けば良いのやら。』初めて訪れた日
本の憧れの地、本好きの聖地御茶ノ水にやって来たは良い物の少しば
かり方向音痴の気がある彼は駅前に設置されている案内板の前で途
方に暮れていた。

生憎と左手は肩に掛けたシオルダーバッグを落とさない様に添え
ていて、右手にはスマートフォンを持ち地図アプリを開き案内板と交

互に見やっっている為に彼の癖である頭を搔く事も出来ずにいるのだった。

『ふう……いや早どうにも相変わらず私は方向感覚も悪いしこういった物の扱いが苦手なのは如何なものだろうかと我ながら呆れてしまふよ。』

もう一月もすると梅雨に入ろうかと云う湿り気のある空気に些か辟易としながらも、憧れの聖地でお目当ての古書との出会いの時間を前にして彼ヤン・ウエンリーは己の不甲斐なさからその出鼻を挫かれた事に思わず溜め息を吐いてしまふ。

『戦略戦術を錬る時等に星図を読むのは割と得意だったし、この星の戦史を学ぶ上で地図や海図を読むのも苦にならないんだけどなあ。』

その様にぼやくヤンだが、確かに戦術策を錬る事に関しては前世の宇宙暦の時代に於いて彼に匹敵する者はただの一人しか居なかったし、また戦場においても刻一刻と移り変わる戦況を的確に読みその状況に応じた判断力も指揮能力も的確で、幾多の戦場で生き残る事が出来たのだった。

しかし彼のその策を実行するには艦隊運用の名人として彼が最も信頼を置いていたエドウイン・フィッシャー提督が居てこそだったのだが。

その艦隊運用の名人が彼の傍らに居ないからと言う訳ではないのだろうが、この地球と云う一惑星上の日本と言う国の一隅でヤン・ウエンリーは今現在ある意味迷子になっていると云う、そんな状況に置かれているのだった。

どうするか、迷う事を覚悟にこの辺の道を適当に動いてみようかと彼が方針を決めめぐねていたその時、少し躊躇いを含んだ少年の物と思われる声が背後から聞こえてきた。

「なあ、少し前から見ていたんだけどもしかしてお前って道に迷っていたりするの？」

案内板を前に途方に暮れている様に見える同年代だと思われる少年に、躊躇いがちに声を掛けてみた淀んだ眼の少年は己の声を聞き彼の方へと振り向いたその少年の顔を見て驚いてしまった。

その振り向いた少年は自分と同じ黒髪のアジア人の特徴がありはする物の、よく見れば若干肌の色がアジア方面の人のそれとは違いう上に顔付きにも僅かばかりだが欧州方面のものであろう特徴が感じられるのだ、それは件の少年にそちらの血が流れているという証左である。

それはこの国に生まれ育った淀んだ眼の少年から見ても明らかに自分とは違う国の人間、つまりは彼が外国人であると言う事はつきりと理解出来た。

『やっべえな思わず声掛けたけど外人だったのかよ、うわおどうするかなあこのままソーリー人違いデースとか言つて誤魔化してエスケっちゃうか。』

あまりの予想外の出来事に淀んだ眼をした少年は内心にそんな事を思うのだった。

その声が己に掛けられた物だと判断したヤンは声のする自分の背後へと向き直り、その声の主の顔を確りと見留め、自分の顔を見て驚きの表情を浮かべ戸惑うその少年の、暗く淀んだ特徴的な眼にヤンは思ってしまった。

『何をどうすればこんなにも淀んだ目になってしまふのだろう。』

何も知らぬヤンが彼の眼がその様になってしまった経緯を知りはないが、だが彼はその眼でこれ迄あまり良く無い人の負の部分に多く触れてきたのではないのかと、それが正しい答えであるのかは別としてその様に推察する事は出来た。

「あーっ、いや参ったな。えっと、りうゆー……Doyou und erstad Japanese?、で良いのか。」

少したどたどしい英語を使い不器用にコミュニケーションを図る

うとするその淀んだ眼の少年に姿にヤンは思わず心の中で気持がほころぶ思いだった。

ヤンの想像でしか無いが、きつと辛い体験をして来たのだと思われる少年が不格好にだが他者を気使う姿に、目付きは兎も角としてその少年はきつと心根の優しい人物なのだろうと思い、ヤンはその少年に好意を抱くのがあった。

「ありがとう、来日するに当たり日本語を勉強して来たからね言葉の方はある程度大丈夫だよ。」

実はね初来日して憧れの本の聖地に赴こうとしたのは良いものの、何処に行けば良いのかサツパリで途方に暮れかけていたんだよ。」

日本という国に興味を持ち、何時の日かその国へと赴き日本史を研究する為に学び始めた日本語だが、元来の地頭の良さからヤンは直ぐにその言語をマスターし話せる迄に至っているのがあった。

「おっ、おうそうなのか見た所俺とそう変わらない歳なのに大したもんだな、いやマジ凄えな。」

少年はしどろもどろに受け答えをするがヤンがスラスラと操る日本語とその語彙に素直に称賛を贈り更に続けてヤンへと語り掛けるのがあった。

ただし今度はあまり大きな声ではないがはっきりと聞き取れる程には確りとした声音で。

「まあ、通りは多けど本屋なら殆どの通りにあるし、大抵の道は何処かで繋がってるから何処に行っても大丈夫なんだけどな。」

「そうなのかい、出来れば古書と歴史書の充実した店に行きたいんだけど、申し訳無いけど心当たりがあるなら道順を教えてくださいませんか。」

その少年の言葉にヤンはこれ幸いと目的地への道順を尋ねるのだが、件の少年はヤンの請願に僅かに面倒くさ気な表情を作ると右手で頭を掻きながら、これまた面倒臭そうな声音で答える。

「ハア、面倒なんだよなあ道順の説明とか……けどまあアレだ、俺の今日の目的はお前と同じで古本屋を巡って目当ての本を探す事がメインだし、俺としては其処に行くまでに誰が着いてきたって一向に構

わらない訳なんだが、まあお前にもお前の都合が有るだろうから別に俺の方から無理強いは出来ないし、嫌なら他を当たってくれても構わないぞ。」

少年のそれは一見面倒だと断っているかの様に思える物言いだが、その発言は自分が道案内をするから一緒に行こうと遠回しに言っているものであり、この発言からもこの少年が基本的に他者に対して不器用ながらも優しい心遣い出来る人物であると言う事が伺い知れるというものだ。

なのでヤンは、此処はこの少年の心遣いに有り難く甘えさせてもらおうと決め少年の意思を尊重する事にした。

「ありがとう、その申し出はとても有難いよではそう言う事でよろしくお願いしたいんだけど良いかな。」

ヤンは穏やかな微笑をたたえた表情でもって少年の心遣いに礼の言葉と案内を願う旨を要請すると、それを受けた少年は「……おう、そつ、そうかそれじゃあ行くか。」と言葉に詰まりながらも返事をし、案内の為にヤンを先導し二人は書店を巡る事となったのだが、その返答から感じられた事として少年はもしかするとヤンがそんな要請をしてくると思っていなかったのではないだろうか、最初の言葉のつまり具合に少年がまるで意外な返答を受けたかの様な素振りに感じられたからだ。

であるからヤンはその戸惑いから少年はこれまで余り他者との様に共に連れ立って行動をした経験が無いのかではと推測する。

何故そうなのか彼の人生を見てきた訳でも無いから断定は出来ないが、彼はあまりその他者との関わり方が良く無い物だったのかも知れない、その様な経験を経て彼の目付きはあの様な物になったのではないのだろうか。

『まあ、其処がどの様な場所で在ろうとも負の部分や汚い部分が全く存在しない訳が無いしね、きつとこれ迄彼の周りの他者は外見や挙動だけを見て彼の本質的な心根の優しい部分に気がつく者が存在しなかつたんだろうな。』と、その少年の不器用な優しさに触れたヤンはそう思うのだった。

しかしこの様に少年に付いてアレコレと推察をしていたのは良い物の、この道中彼に肝心な事を聞き忘れていた事に気が付いたヤンは自らの迂闊さに内心苦笑しながら少年に問うのだった。

「ああどうもコレは肝心な事を忘れていたよ、そう言えば僕ら二人共お互い名を名乗っていなかったね。」

僕はヤン・ウエンリーと言うんだ、因みにだけど東洋式にヤンが姓でウエンリーが名だよ、もしよければ君の名を教えてもらえないだろうか。」

ヤンのその問いに少年は何とも、今更かよとでも言いたげな怪訝な顔でヤンを見やって来る、そして暫しの間何かを思案したかと思うとその特徴的な髪型の頭部を掻きながら面倒臭げに。

「あーとだな、俺は別にそんなの名乗ろうが名乗るまいがどうでも良いと思うんだが、まあお前が名乗ったんだしそうなると此方が名乗らないのもアレだな。」

俺は比企谷八幡って者だ、別に覚えてもらおう必要は無いからさっさと忘れてくれて構わないぞ。」捻た物言いだヤンへと己の名を名乗るのだった。

比企谷八幡、その名を持つ少年は覚えてもらおう必要は無いと言うが、ヤンはきつと彼の名を忘れたしないだろうとこの時感じていた。

前世に於いては共に悪事を働いた幼馴染みの名を忘れていたり、後に彼の妻となる女性との出会いはおろかその名さえも覚えていない位頼り無い記憶力だが。

魔術師再び、そして二人は出逢う。 後編

少年比企谷八幡の案内の元入店してみた神保町の古書店『其処はヤンにとって正に夢にまで見た桃源郷にも等しい場所に思えたのだ』と言うのは些か大袈裟だろうが、古い紙とインクの匂いと山のように積まれた歴史を感じさせる店の佇まいなどがヤンの琴線に大いに触れる物である事は間違えが無い。

『否この店だけでは無い、この街全体が私の望む極楽浄土と言っても過言では無い！』と態度にこそ出さない物のこの時のヤンの精神状態は彼にしては大きな興奮状態にあった。

「いやあ、ありがとう比企谷君。」

此処ならお目当てのモノに出会えそうだよと、ヤンは相変わらずの優しい微笑を湛えて言う。比企谷少年を促し共に店内へと入店した。

此処でのヤンのお目当てとする物は主に日本の歴史や文化に付いて書かれた古書を見つけ出し購入する事なのだが、それ以外にも何やら数多くのお宝が存在していて、驚いた事の中にはもう現地でもお目にかかれない様な海外の本までもが書棚に並んでいる。

成程この店をチョイスしヤンを案内してくれた比企谷少年は駅からの道中の会話の中からこの店がヤンの捜し物には最適であろうと判断して此処へと連れてきてくれたのだろう。

『成程ね、日本人は気配りやおもてなしの精神を持つ気高き人達の住まう國だと言うのは真実なのだろうけど、その中でも彼のそれは最良の部類なのかもな。』

尤もその言動があまり素直では無いから人にはそれが分かり辛いのだろう。』

店内に所狭しと並べられた背の高い書棚の列を眺めながらヤンはその様に思うのだった。

因みに駅から書店までの道中、比企谷少年はあまり積極的に口を開きはしなかったのだがヤンが尋ねたところ答えてくれたのは、彼の出生地である千葉県的事や読書が趣味である事など。

またそれなりに好みのジャンルは有りはするものの、基本的に活字が好きなので小説を始めエッセイや漫画、ライトノベル等多方面の分野の本を読んでいるとの事だった。

この日千葉に住む比企谷少年がこの東京の地を訪れたのは、自宅にある父親のコレクションする時代小説を読んでいたのだがその中に幾つか抜けている巻数が在った為に先を読み進めなくなってしまう、その抜けている分を購入する為だったそうた。

『地元の本屋とかネット通販も調べたんだが見当たらなくてな、だから此方まで出てきてみたんだが……やっぱり人が多過ぎるのはどうにもやり難いし居心地が悪いんだよなあ、しかも段々蒸し暑くなり始めてるしな。』

彼の発言から感じられる自身の郷土への愛着と大勢の人がごった返す都会が、どうやら苦手である等僅かに語られる彼の気持ちにはヤンにもそれなりに共感出来る部分もあり、また彼の為人をもう少し知りた思わせるには十分だったし。

『ああ、僕の故国の台湾にも梅雨はあるし今は時期的に梅雨真っ只中って所だし日本でも沖繩辺りはそうだよな。』

『……うへっ、なあ今でさえ蒸し暑いのに梅雨の事とか考えさせないでくれるか、気分が滅入るから。』

『ははっ……すまない確かにコレは憂鬱になりそうな話題だったね。』

その様な取り留めのない話題も絡めつつ歩む道行きは中々に楽しい一時でもあった。

店内を入念に物色しヤンは大量のお宝を入手することが出来、その結果大いなる満足感に満たされたのだがその大量の買い込まれた本の小山を、同じ店内で見付けたであろう数冊の時代小説を手にした比企谷少年が若干引き気味の目で見えていた事をここに記そう。

「それじゃお互い目的は果たせただし此処らでお開きだな、ああそうだお前駅迄の道は解るよな。」

本を購入し終え店内から通りへと退店すると少年比企谷八幡はそう言つて解散を促すのだが、しかしヤンとしてはこの僅かな時間を共にしたこの少年と此処で別れる事が妙に惜しく感じられていた。

「うん、君のおかげでそれは解るんだけどね、ところで君は此れから何か予定はあるのかな。」

出来るならば今少しこの少年とは行動を共にし言葉を交わしその為人を知りたいとそう感じていたヤンはこの不器用な優しさを持つ比企谷少年（此処からは八幡と呼称しよう）否、八幡にそう問わずにはいられなかったのだつた。

「そうだな、俺も此処で目的は果たせし後は帰るだけなんだが、もう少し足を伸ばしてラノベの新刊とか漫画でも探してみようかと思わんでも無い。」

それにもう直ぐ昼時だし小腹も空く頃だろうしな、とこの後の予定を話してくれた。

「だったら比企谷君、もし君が迷惑で無ければ僕もそれに付き合わせてはもらえないかな、日本のサブカルチャーにも興味があるし現地民の君のオススメを聞いてみたいし見てもみたいしね。」

比企谷八幡が御茶ノ水駅前で出会つた自分と同世代の外国人の少年ヤン・ウエンリー、日本の歴史関連の書物を求めていた彼を古本屋へと案内した事で気紛れに彼な声を掛けた事による義理は果たし終えたと、八幡はそう思つたのだが。

ところがその外国人の少年は今少し自分と行動を共にしたいと言つて来た、これまでの十数年間の人生経験に於いて家族以外の他者と学校及び学校行事以外に過ごした経験が無く、また誰かに好意的な態度で接してもらえた事も無い八幡はこの申し出に対してどう答えるか咄嗟に応答が出来なかった。

「マジかよ……………」

ポツリとそう漏らし八幡は考える、これまで八幡に接触を試みて来

た他者には大抵が悪意に依るものだった。

嘲笑や蔑みの対象として彼を見るか或いはその存在さえ認知していない者さえ居る程だった。

故にこの眼の前にいるほんの少し前に出逢ったばかりの外国人の少年の自身に対する、そう云った負の感情を感じさせない対応に何故か戸惑いさえ感じている自分の感情が何処から出て来るのか解らなかつた。

まあ普通に考えればこれ迄の八幡の人生には関わりを持っていないヤンが、どの様にすれば彼に悪意を抱けのかと逆に問われるだろう。

彼の目つきの悪さを理由に第一印象が悪くなると云った事は有り得るかも知れないが、しかし少なくともヤンにはその程度の事で悪意を抱く理由など欠片ほども無いのだが。

結局八幡は僅かな時間だがヤンの申し出をどうするかと考えた末に彼が同行する事を受け入れ、彼と共に今暫く書店巡りを敢行する事とし今は二人神保町の書店内のライトノベルコーナーにて八幡が新刊の物色を行っているところにヤンも付き合っているのだが。

「あの比企谷君、すまないんだけどもし良ければ君のオススメの作品を幾つか見繕って貰えないだろうか、さっきも言ったけど僕はこの国のサブカルチャーにも触れてみたいと思っっているのね。」

ただそれに付き合うだけと言うのは些かばかりつまらない物であるが、生憎とヤンとしては興味を持ち始めたばかりの分野に対する知識の持ち合わせがあまり無い訳で、ならばその方面の知識を持つ人物に尋ねる事こそが取っ掛かりとしては最も手っ取り早いと云うものだろう。

「……………まあ、そりゃ構わないが、俺が勧めた物がお前の好みに合致するかどうかは解からんからな、保証は出来ないし後からの苦情も一切受け付けていないからな、てかそうなっても知らんけど。」

そうしてヤンは八幡から勧められたタイトルのライトノベルと漫画を各数冊ずつ購入する事とした、この後ヤンは思いの外これらの物が気に入り日本の漫画やライトノベルの愛読者となってゆくのだがその事はまだこの時はそれを知る由もない無いのだが。

「いやあ今日は君のおかげでとても良い買い物が出来たよ、本当にありがとう比企谷君。」

ところで流石にもう正午を回っているし小腹も空いた事だし何処か昼食を採れる所へ行かないかい、とは言え僕はこの辺りの事に詳しくないからまたしても君に甘える事になるんだけどね。」

「そうだなああ、俺も確かに腹は空いてるしな、まあ軽くつてんならバーガーシヨップとか牛丼屋とかだろうけど、お前何か苦手な食材とか宗教的理由で駄目なヤツとかあるの?」

ヤンの昼食の誘いに八幡はそう言って同意し更には彼の好みなどに対して気遣いの言葉を掛けてくれた。

「いや、特にコレと言って苦手なものはないし僕個人としては無宗教だからソチラ方面で駄目って事は無いかな。」

「へえ、意外だな向こうの人って宗教に対しては厳格ってイメージがあつただけだな。」

「ハハハっ、まあ宗教に対しては色々と思うところがあつてね、それに会った事も無い神様とやらが決めた戒律なんてものを律儀に守るなんてね、欲深き罪人たる一般的な中学生には土台無理な話だと思わないかい。」

前世に於ける宇宙暦の時代に因縁があり、またその時代に暗躍していた地球教の事もあるし彼自身が学んで来た歴史的な事象を鑑みてもヤンは宗教については懐疑的にならざるを得ないのだった。

それにヤン自身は知らぬ事だが彼の暗殺に動いたのは地球教の思惑があつたが故の暴挙だったのだ。

「……とまあこんな感じでな千葉つてのは日本に冠たる偉大な街なんだが、ただ残念な事だがネズミの国もパンダの国も千葉に在りながら東京を冠しているんだよ。」

八幡に案内されて入ったハンバーガーショップにてヤンと八幡は向かい合って互いに注文した品物を口にしながら会話を楽しんでいた。

当初はあまり言葉が弾まなかった八幡だったが、ヤンが彼の地元である千葉についての話を聞きたいと話をふると八幡はまるで水を得た魚の様にとの形容がピッタリと当て嵌まるかの様に饒舌に語り始めたのだった。

「なるほど、それは何とも……だけど君がそれ程に愛着を持っている街なら一度僕も足を運んで見たいものだね。」

その様子が何か微笑ましくヤンはその話を割と真剣に聞き入り、そして今言った様に彼の地元へと赴いてみたいと心から思いそう口にしていた。

「おつ、そうかだったら俺……っ。」

そのヤンの言葉に八幡は少し分かり難いがその表情に嬉しさの成分を顔にし返答を、おそらくだが『自分が千葉の街を案内をしよう』とそう言おうとしたのだろうが、それを言い切る前にその口を噤んでしまった。

それはやはりヤンが知らぬ所で彼がこれまでに経験した他者との関わりの中で培われてしまった八幡の、どうにも拭いきる事が出来無い人に対する猜疑心故にであろうか。

そう思ってしまうとヤンは八幡には無く、八幡をその様な状況に追いやってしまった事情に遣る瀬無いものを感じずにはいられなかった。

『だからと言って私が彼に何かをしてあげられる訳でも無し、いやそもそも誰かに何かをしてあげる何て云う考え自体が思い上がりも甚だしいって物だな。』

まだついさつき出逢ったばかりの少年の、何も知らないに等しい他者に一体何が出来るって言うんだか、全く我ながら度し難い。』

その様にヤンは自の考えに自省を促し思いを改めるのだが、しかしそうは言っても先刻出逢ったばかりの眼の前の少年に行為を抱いているのは紛れもない事実である。

「そうだね、さっきの御茶ノ水駅での僕の為体を君も見えていたから解るだろうけど、どうにも僕は方向感覚があまり良く無いみたいだね。」

まあだからもし僕がいつか千葉へ行く機会があったら比企谷君に案内をして貰いたいと思うんだけど、ああ勿論当然君の都合が良ければでけどね。」

だから精々ヤンが言える事はこの程度の事ではないのだが、そう言われた八幡の方は案外この一言が嬉しかったりするのだが、其処まで八幡の内心を理解出来るには逢ったばかりでもあり、流石にそれは出来無いだろう。

「…………ハア、お前って何かすっげえ物好きだよな、まあどうなるかは知らんけど一応考えておくわ。」

昼食を終え二人は午後からも二人で神保町〜水道橋近辺の店舗を巡りやがて二人は最初に出会った御茶ノ水駅前へ到着した、それは二人の別れの時が訪れた事を意味するもので。

「今日は君と出逢えたお陰でとても充実した時間を過ごせたよ、ありがとう比企谷君。」

ヤンは心からの感謝の念をその一言に込めて八幡に告げる、もしこの場で八幡がヤンに声を掛けずとも案外他の誰かがヤンに声を掛けていたかも知れないし、或いは道に迷う事を覚悟して適当にぶらついたとしても問題は無かったのかもしれないが、八幡と出会えた事でヤンはこの数時間の書店街散策がとても充実した物になったのだと、誰憚ることなく言えるだろう。

「ああ、まあどういたしまして、つてかこの日本にはな家に帰るまで

か遠足つて格言があつてな、だからヤン……お前も帰り着くまで気を抜くなよ。」

ヤンの感謝の言葉に当の八幡は日本の学生にとつては馴染み深い、遠足終わりの解散時の名台詞を引き合いに出し方向音痴の気がありそうなヤンに注意を促すが、その台詞には照れ隠しの意味合いもあつたりする……。

「ハハっ、家に帰り着くまでが遠足かうんうん成程それは至言だね、了解まあ僕も精々気を付けることにするよ、だけどそれは君もだよ比企谷君。」

のだが、どうやらヤンはそれに気が付いていない様だったのだが、八幡が口にした『家に帰り着くまでが遠足』と言う発言を妙に気に入る関心する始末だ。

「お前は知らないだろうが俺は帰宅に関しては他に並びうる者が存在しない程の謂わばプロ中のプロだからな、例え其処が何処であろうとどんな状況に置かれていようとも常に最適なルートを選択して速やかに家へ帰る事が出来る、その俺の帰巢本能の前には例え犬や鳩の帰巢本能さえもが霞んでしまふだろう。」

「だからアレだ俺に関しては心配無用つて事で無問題だ。」

「……………へえそれは凄い、そうかなら心配は無用と云う訳だね。」

「ああ、そうだな。」

「……………」

「……………」

しかしその様な事は兎も角とし、今別れ際にヤンと八幡の二人はそれが妙に惜しくもあり別れ難いとも感じていた。

ヤンはこの異国の地で出会った何とも捻れて入るが心根の優しく、また志向自分とも近いと思われるこの少年がとても気に入っていたし、八幡もまた自分に対し偏見や蔑みの気持ちも無く普通に接してくれる、この異国からの来訪者と過ごした時間が本人には自覚が無いかも知れないが悪く無いと感じていた。

であるのでヤンはここで一つ八幡に対して自身の望みを告げる、それは。

「……比企谷君、最後に一つ頼みがあるんだが、その何と申すか……そのだね僕と友になつてはくれないだろうか。」

「……………」

友となつてくれないか、ヤンのその自分への願いを聞いて八幡は何も言わずただ少しだけまるで痛みを感じたかの様な表情を見せている。

その表情を見留めたヤンは推察するきつと今彼は心の中で葛藤しているのだろう何と答えるべきかと、僅かな逡巡からやがて八幡は答えを決めたのか口を開く。

「それは、意味が無いだろう。」

八幡はヤンに己の思いを告げる、俺達は今日偶々此処で出会い行動を共にしたいとだけの関係だと、道に迷っていただけの外国からの来訪者に道案内をしただけの人間とされただけの人間。

「だから此処で別れたらもう会うこともないだろう。」

まあ、今はたとえ直接には会えなくてもSNSなんかを使えば繋がるだろうって、もしかしたらお前は言うかもしれないが……だけど俺は、そう言う希薄な関係を希んじやいなんだよ。」

だから俺はそんなものは要らないと、八幡はまるで未練を断ち切るかの様に少しだけその声に力を込めて語る。

八幡の言う事をヤンは完全に理解出来たとは、彼のその思い全てに共感出来たとは言えないが、それでもその彼の胸の内に去来する物の幾許かは理解出来る。

おそらくだが彼は恐れているのかも知れない、遠く離れそうそうに行かうことも叶わずにやがてその距離に比して関係も希薄になって行き、遂には……。

「そうか、ねえ比企谷君……近い将来僕はこの国の歴史を学び研究する為に留学して来るつもりでいるんだ、そして叶うならそのままこの国に骨を埋めるつもりだ。」

現時点での君の意思を、確かにもう直ぐこの国を去る僕が覆す事は出来ないかも知れない、だからねもし僕が再びこの国を訪れた時は……その時僕はこの国に長く留まるつもりだから、その時僕はきつと

君に会いに行くよ。」

『だからその時は、改めて友誼を結ぼう。』と八幡へ告げる右拳を差し出しながら、約束の証として。

「……………まあ確約は出来無いが、その時はな。」

僅かな迷いを見せながらも、その差し出されたヤンの右の拳に八幡も自らの拳を軽く触れさせる。

「……………うわっマジかよ、コレ案外恥ずかしいモンなんだな。」

「はははっ、僕も同感だよ。」

この約束が現実のものとなるのはそれから三年後の事である、無論この時の二人にそれを知る由はないのだが。

これが、その後終生の友となる二人の男の出会いの日の一幕である。

時は流れて二人は再会し、そして彼は四人目の部員となる。 前編

春も終わり季節は初夏へと移り変わりゆく5月の半ば、一週間の始まりの月曜日。

千葉県は市立総武高校2年F組の教室にその少年は居た。

教室内では生徒達がそれぞれの仲間たちと集い朝のHRまでの短い時間を思い思いに語らっている、そんな中で彼は独り机に突っ伏し腕枕に頭を置き薄く目を閉じ周囲の生徒たちの楽しいな会話を聴くでも無く、まあ眠っては居ないので多少は耳に入ってくるのだが脳内一人遊びにふけていて彼の名は比企谷八幡。

ボツチを自称する彼は、他者と積極的に係りを持つことをしない性分であるのだが一人だけ仲良くしている生徒が(まるで少女と見紛う容姿をした男子生徒)居るのだが、残念な事にその生徒はまだ教室内に姿を現さない為、独り寂しく脳内遊びをつづけていた(その内容は他者からすると本当にどうでも良い物事であるので割愛しておく)のだがそんな時ふと彼は何処からか視線を感じた。

これ迄の経験ゆえか彼は妙に他者からの視線に敏感であった故に直様視線を感じた先に顔を上げ眼を、その特徴的な酷く淀んだ眼を向けて見ると。

クラスでも一際目立つ、八幡曰くクラスのトップカースト集団の中の中の一人の少女がかれを遠目に見つめていた。

桃色掛かった茶髪とその頭髮の右側部にひとつお団子を結った少し華やかな髪型に愛くるしく可愛らしい顔立ちの小柄であるにも関わらず、とても豊かで母性を感じさせる膨らみを持つ少女。

由比ヶ浜結衣。

急に八幡が顔を向けた為に由比ヶ浜と八幡の視線が交わりよ期せずして二人の眼が合ってしまった。

少し驚いた様な表情を一瞬だけ浮べる由比ヶ浜であったがその表情は直に穏やかな優しい微笑に変わる、鈍感な或いは鈍感を装って

る彼には理解し難いだろうがその眼差しは親愛に満ちている。

しかしその微笑を見た八幡は、表面上慌てた様子もなく彼女から顔を背け再び腕枕に顔を沈めてしまった。

なので彼はその後に見せた彼女の寂しげな残念そうな表情を知る事は無かったのだが、当の彼の内心は今それどころでは無かった。

『やっべく、何？何なの今の表情！可愛すぎるだろ!!思わず告白してフラれる所だったじゃねえか!?!:フラれるのかよ。』と彼女の笑顔に激しく動揺していたからだ。

『おつ、落ち着け俺、こんな時はそつ素数を数えるんだツ:つてプツチ神父かよ!』人知れず心を落ち着けるため腐心する八幡だが、その甲斐あつてか落ち着かせる事に成功し再び思考遊戯を開始した。

そして思い返したのは数年前に出逢った一人の外国人の少年の事、僅か数時間行動を共にした自分と同じ年の流暢な日本語を操る少年。

当時八幡はある出来事がきっかけで人間不信となり、他者との関係を持つことを拒み独りであろうとし(その気質は現在でも変わらないのだが) 実際学校等でも誰とも会話をする事もなく常に独りで居た。そんな彼がふと何故か、それはもしかすると単なる気まぐれだったのかも知れないが、所在無げにしている様に思える自分と同年代に見える少年の姿に何故か声を掛けてしまった。

不慣れな場所で迷っていた外国人の少年を道案内し暫しの時間を共有したのだが、八幡にとってその少年と過ごした時間は案外悪くなかった。

少年は物静かな為人で、口調も物腰も柔らかく人を包み込む様な懐の広さと暖かさを八幡は感じた。

会話が途切れ場が沈黙しても、気まぐれになることも無くごく自然な空気が二人の間に流れていたし、だからそれ程多くの言葉を交わした訳でもないのだが八幡は思ってしまった。

『もしかしたらこいつとなら、コイツみたいなのやつならと良い関係が築けるんじゃないか』——と。

だがこれ迄の経験から彼はすこし恐れ戸惑ってしまったのだ、たった僅かな時間を共にしただけの少年に友人になつてほしいと請われ

た時に。

自分は又、相手に勝手な幻想を見るのでは、そしてそれを押し付けるのでは無いのだろうか、そして勝手に相手に幻滅しもしくは幻滅されてしまうのではいかと。

それ故に恐れた。

幸いだったのは相手が旅行者であった事、それを理由に少年の申し出を断る事が出来て。

だが少年は彼に言った、もし又出会えたらその時は友人になってくれるかと。

その彼の提案に互いの拳を突き合わせ………そこまで回想した所で彼は腕枕から顔を上げボソリと呟いた。

「今思い出しても、すげえ恥ずい。」

思わず顔が紅潮しそうになるがそれに耐え平静を装おうとしたその時「何が恥ずかしいの八幡!」と彼の呟きに返す言葉が帰ってきた。

驚いた彼の目の前に立っていたのは先程まで彼が求めていた、現状唯一人彼が少しだけ心を許した少年の姿が。

一見すると可憐な少女の様にも見える線の細いスタイルに学校指定のジャージ姿のれっきとした男子生徒、戸塚彩加。

「おはよう八幡、2日振り!!」と屈託の無い笑顔で話し掛けてくる戸塚に、八幡は内心の喜びの感情を極力抑えて「おっ、おう戸塚おはよう」と自分としてはクールに振る舞っているつもりで応えるも内心は戸塚を賛じる思いで胸がいっぱいなかった。

『2日振りの戸塚の笑顔やつべ〜!最高っ!正に天使戸塚エル。その笑顔正にプライスレス!』

「もう八幡は、又そんな事言っつて」と微苦笑気味に戸塚は照れながらそう口にする、本人は気づいていなかったのだが八幡の心の言葉の最後の方は口を吐いて言語化されていた。

故に戸塚は苦笑したのだが、そんな微苦笑さえもが八幡には空より舞い降りた天使の笑顔に映るり、男と知りつつもその戸塚の笑顔に心を惹かれるのだった。

「所で八幡何が恥ずかしかったの？」

先程の問を聞き返す戸塚にしどろもどろに必死に誤魔化す八幡だったが、そんな二人の元にてくたくたと歩み寄り「やつはろー彩ちゃん！」と戸塚に声を掛け、そして八幡の顔を見ながら「ヒツキーもやつはろー！」と声を掛けて来たのは、先程八幡を見つめていた由比ヶ浜結衣。

「やつハロー由比ヶ浜さん」

「おう、おはようさん」

戸塚と八幡は歩み寄りながら放たれる由比ヶ浜独特の挨拶に応える、コミュニケーション能力の高い由比ヶ浜は戸塚とも普段から仲良くしてるのだが、同じ部活に所属する八幡は教室等の人前では誰かとあまり話をする事なく一人を好む性質の為、所謂周りの空気を読む気性の由比ヶ浜は積極的に八幡に声を掛けられずに居る。

なので八幡と彼女にとって共通の友人である戸塚彩加の登場は、八幡に大っぴらに声を掛け話す事のできるまたとない機会なのである。

そして彼女は二人に（特に自身の意識が向く八幡と話したかった）話題を嬉々として話を振る。

「ねえねえ二人共気が付いた？ほら教室の後ろ机がひとつ増えてるでしょ？」

教室後方を指し示しながら二人に問う由比ヶ浜、その彼女の指し示した方向に目を向けた二人は確かに机と椅子が一組増えている事を見留める。

「ねっ！ さっき優美子達共と話してたんだけどさ、あれってヤツパ転校生がこのクラスに来るって事だよね！男子かな？女子かな？チョー楽しみく！ねっヒツキー、彩ちゃん！」

「ホントだーうん、ホントにそうだね由比ヶ浜さん」

この意味する事は一つで要はこのクラスに新しい生徒が増える事を意味し、由比ヶ浜の言葉に戸塚は楽しそうに答えるのだが、それに対して八幡は「別に、どうでも良くね？」と素っ気無く応える。

その答えは由比ヶ浜にとって望んでいた答えでは無く少しの憤慨を顕しながら彼女は八幡へと詰め寄る。

「もうヒツキーってば！何でそんな反応なの転校生だよ転校生！興味有るでしょ普通。もつとさあクラスの事に関心持とうよ、気になるでしょう！」

腰に両手を遣り少し体を前に屈め八幡に問う由比ヶ浜の少しプンとお怒りモードの彼女の可愛らしい顔が迫り、更にはその先に有る彼女の豊かな胸が激しく自己主張をしながら迫ってくる。

その様に焦った彼はそこから目線を外し、ドキドキと高鳴る心を抑え込む様に『あれは胸部装甲板、あれは胸部装甲板。決してたわわな実りでは無い！』と心中呟きながら「イヤ別にマジ興味無いから：何？興味持たないとマズいの？死ぬの？ヤダ怖い！」と捻くれ返答を内心の動揺を隠しながら呟く。

「もう！ヒツキーは！何でそんなに捻くれるのさ？」プンスカと怒った態で八幡に突っかかる由比ヶ浜とその二人の様子に「たはははっ」と戸塚の苦笑の音が響く、そんな朝の一幕が暫しの間八幡の席の周りで繰り返り広げられたのだった。

朝のHRの時間の始まりを告げるチャイムが鳴り、暫くすると2年F組の教室に現れたのは担任教師では無く、八幡の良く知る、この学校の現国教師であり、彼の所属する部活の顧問である平塚静教諭であった。

『そう言や今日担任休みだとか言ってたっけか先週』と思い返す八幡は軽く挨拶と連絡事項の伝達が終わる頃再び思考を始める、先程まで思い返していたあの外国人の少年の事を。

そんな八幡を他所に平塚教諭の話は続く「今日から、このクラスに新たな仲間が加わる事になった」と転校生の加入を告げる説明がはじまるが八幡はその言葉に興味を示す事なく一人回想を続ける。

「入って来たまえ」と平塚教諭が廊下に居るであろう件の人物に声を掛け、そして余り大きな音を立てずに開かれた扉から入室して来る男子生徒。

教室内はその様に少しざわつき、ポツリポツリと生徒たちの感想の音が八幡の耳にも聴こえてくる。

一瞬だけ八幡も、教壇に向かい歩くその転校生に眼を向けるがその姿を良く観る事なく再び思考を続ける。

『そっぴいあいつの名前…』

「今日から皆の仲間になる」あの時の少年の名を思い出すとする八幡の思考とかさなる平塚教諭の声が響き「さあ、皆に自己紹介をしまえ」と転校生へ向け挨拶を促す。

『たしか、ヤ「ヤン・ウエンリーですどうぞ宜しく」八幡の思考とヤンの挨拶の声が被さった。

扉を開き教室内へ入室して来た転校生は、黒い瞳と無造作に伸びた黒髪に

洋と欧州あたりの混血であろうと思われる風貌をしていた。

外国人で有ろうと思われる転校生の登場に生徒達のざわめきが拡がる、皆口々に転校生の事を話しているのだろう、そんな中一人の男子生徒が発した「なんだよ、男かあ」と云う声はしっかりと聴こえて来た。

内心苦笑しながら『失望させてしまったかな』ヤンは思うのだった、教壇の平塚教諭の隣でたった一言の挨拶を済ませヤンに「それだけで良いのかね？」と平塚教諭が尋ねるが頭を掻きつつヤンは返事を返す。

「2秒スピーチのヤン」前世に於いて彼は軍人として高い地位に就いていた為に、公の場でのスピーチを求められる機会が多々有ったのだがその殆どの場を彼はたった一言で終わらせていたものだったがそれは今生に於いても変わりが無いようだ。

軽く教室内を見渡し彼は一人の男子生徒と眼が合った、淀んだ眼で信じられないモノでも観ているかの様な表情を浮かべて彼を観る男子生徒。

数年振りの再会にヤンは微笑を浮かべて彼を見つめ優しく知性的な声で声を掛けた。

「やあ久しぶりだね比企谷君」

ヤンの言葉にざわめきたつ生徒達、まさか海外からの転校生が、同

じクラスの生徒と知り合いだと知ればそうなるのは必然と言えるであろう。

ましてやそれがクラス内でも半ば孤立している様な生徒なのだから。

「おう、そうだな」と気の無さそうな口調で八幡は返事を返すのだが内心は驚きと戸惑いで一杯一杯だった。

「愚腐っ、愚腐腐腐腐っ、ヤンハチ頂きました」

「姫菜擬態しろしー」

その二人が見つめ合う後景にと一部女子生徒の、男としてはあまりゾツとしない世迷い言と切り捨ててしまいたい声が聴こえたが、もしかするとそれはクラス内ではお約束なのだろうか皆スルーを決め込んでいる。

「ふむ、君は比企谷と知り合いなのかね」平塚教諭は先の二人のやり取りからそう判じてヤンに問うと「はい」との答えが返り、少しだけ考え込むと平塚教諭はふむと結論を導き。

「ならば君の席は比企谷隣で良いのではないだろうか」と告げ八幡の隣の席の女子生徒へ席を替える旨の確認を取り、女子生徒はそれに快く応じ席の移動を始める。

『ええ、喜んで席を替わられる俺って泣いてもイイんじゃないかね……』
内心嘆く八幡の思いは女子生徒には届かなかつたが、一部の男子生徒からは同情の念を抱かれた様であった。

「改めて宜しく比企谷君」

自分に譲り渡された席へ着いたヤンは隣の八幡へ改めて挨拶をし、された当人は声を出さずに彼は軽く頷いた。

〜時は数日遡る〜

それはヤン・ウエンリーがこの総武高校への編入試験に合格し、編入手続きと学校の説明を受ける為に学校を訪れた時の事、応接室にて学校長、教頭、二学年の学年主任、そして生活指導担当の平塚教諭の4名がヤンの入学説明に同席していた。

一通りの説明終えた後ヤンは校長から質問希望要望が有るかと問

われると、率直に自らの要望を告げるのだった。

「はいでは一つだけ希望が有るのですがよろしいでしょうか、この学校の二年生に比企谷八幡と云う生徒が在席していると思うのですが、出来れば彼と同じクラスへの編入を希望したいのですがそれは可能でしょうか？」

そのヤンの要望に平塚教諭以外の三人の教師はその生徒に心当たりが無く疑問を呈すのだが、彼を良く知る平塚教諭は比企谷八幡についての説明を三人に始める。

「比企谷八幡は、2年F組へ在席する生徒で、私が顧問を務める奉仕部の部員であります。」

「ちなみに学業成績の方は、理系に関してはイマイチなのですが、文系に関しては特に私が受け持つ国語に於いては学年三位の成績を残しております。」

「ほう、学年三位の成績ですかそれは中々」

「して、奉仕部とはどの様なクラブなのですか、聞き覚えが無いのですが」

他の教師の疑問の声に、待っていましたとばかりに平塚教諭は答える。

「簡単に説明しますと、校内におけるボランティア活動を行うクラブと言えましょうか、悩みを持つ生徒や校内行事へのサポート等を行う事を旨として活動しております」

「ちなみに部長は、2年J組の雪ノ下雪乃が務めております。」とこの様に追加を加えて奉仕部に付いての説明を終えると、各教師達は感想を述べる。

「ほう、あの雪ノ下雪乃がですか。」

「学業成績学年一位の雪ノ下が主催するねえ。」

と述べる教師達の発言は、雪ノ下雪乃と云う生徒への高い評価が伺える。

「ええ、その雪ノ下です」と肯定の意を示す平塚教諭は改めてヤンへ問う。

「君と比企谷の関係に付いて聞きたいのだが教えてもらっても構わ

ないだろうか？」

「三年程前、私がこの国を初めて訪れた時の事です、御茶ノ水の駅で目的地への道が解らず迷っていたのですが、彼が声を掛けてくれました……」

「それで君に道順でも、教えてくれたのかね。」と一旦言葉を切ったヤンへ、平塚教諭は日頃の彼の言動を鑑みて問うのだが。

「いえ、彼自ら道案内をしてくれましたねその日一日私と行動を共にしてくれたのです。」

「……比企谷がねえ、ふむ……」平塚教諭は意外だど云う思いに加えて少しだけ感心した様な声音でそう呟いた。

「ええ、おかげで有意義な時を過ごせました。」

ヤンの話を聞き終えた平塚教諭は校長始め他の教諭達へ彼の2年F組への編入賛成の意を示し、更に付け加える。

「彼は海外からの転入生です、生活習慣等の違いも有るでしょう、ならば気心の知れた者が側に居ればサポート等も受けやすいでしょう。」

各教諭陣が賛成の意を示した事によりヤンの2年F組への編入が可決されその手続きも終了し、学校を後にしようとするヤンを「ヤン君すまないのだが少しだけで構わないから私に付き合っては貰えないだろうか？」と平塚教諭がヤンを呼び止めた。

「……ええ構いませんよ。」

訝しく思いながらも平塚教諭に付き合い二人は場所を移すそこは、自動販売機とベンチの置かれたスペースで奇しくも八幡のお気に入り場所（彼がベストプレイスと呼び昼休みのひと時を友人戸塚彩加がテニスの自主練に興じているのを眺めて過ごす）のすぐ近くであった。

「コーヒーで良いかね」と自動販売機にコインを投入しながらヤンへ問う平塚教諭、大人として此処は晴れて自身の生徒となった学生に奢るつもりの様で。

「あついやこれはありがたいがとうございます平塚先生、ですがその正直コーヒーは苦手です。出来れば他の物をお願いします。」とヤン素直に答える、記憶にある前世の時間を含めれば彼の方が平塚教諭よりも歳上なのだが、こちらの世界で過ごした肉体的年齢は彼女の方が歳上であるので、やんは相手の立場を鑑みて素直に奢ってもらおう事にした。

「ああ了解した。」

平塚教諭からペットボトル入の紅茶を受け取り礼の言葉を述べると、二人は共にベンチへ腰掛けると直様に平塚教諭はポケットから煙草とライターを取り出し一言ヤンに断りを入れると火を付け煙を吸い紫煙を吐く。

趣味嗜好は個人の自由との思いもあるヤンだが前世に於いてもまた今生の将来的にも自身はタバコを嗜むつもりは今の所無いし、それに教育者が生徒の前で喫煙を行うのは如何な物かとも思うのだが同時にこの美人教師がタバコに火を付け啣える姿がとても様になつて見える事に感心もするのだった。

「比企谷は率直言つて厄介な性格をしていてね…」

そう言つて平塚教諭は四月に彼が提出した高校生活を振り返つてと云うタイトルのレポートにまつわるエピソードをはじめ彼女から見た八幡の人物像を語り聞かせるのだが、それを聞いたヤンは思わず他人事のように苦笑し平塚教諭に恨めし気に軽く一睨みされてしまひヤンは『失礼しました』と一言詫て平塚教諭に話しの続きを促すと教諭は頷いて話を続けるのだが、その語られる八幡のエピソードの続きを静かに拝聴するのだった。

「そして私は彼を強制的に奉仕部へ入部させたのだよ、そこで人との付き合いを繋がりを読んで欲しいと思つて故の事なんだが、正直私自身も強制と言うのはあまり良く無い事だとの自覚もあるんだよ。」

八幡を奉仕部へと強制入部させた、言い方を変えると放り込んだと言つても差し支えないあの日の自身の行いを自嘲気味に、平塚教諭ヤンへ語ると『ふう』と呼気を吐き出しひと息つくつと、隣に座るヤンへと顔を向け今度は彼に質問を発した。

「二つ教えて貰えないかなヤン、君の眼には比企谷八幡と云う男はどの様な映り方をしているのかをね。」

問われヤンもまた平塚教諭へと語り始める比企谷八幡と出逢つた日の事を。

とは言えどもヤンが彼に付いて語れる事などあの日の僅かな時間の中で的事柄しかないのだが。

「……と云う感じでして、ほんの僅かな時間でしたが彼と行動を共にしましてね、その僅かな時間で思つたのです。

彼とは馬が合つたんだらうとね、その僅かな時間がとても居心地が良く感じられましたよ。」

ヤンにしても八幡にしても基本的にお互い他者に何かを押し付ける様な強引な性格をしておらず、故に二人適度な距離感を保てていたのも功奏していたのかも知れないし、何よりもヤンは八幡の持つ不器用な優しさに感銘を受けていた、その思いが殊に大きかった。

「そして私は別れ際に彼に言ったのですよ私と友となつてくれないかとね。」

平塚教諭はヤンの横顔を見ながら「それで比企谷は何と？」と問い質す、そしてヤンもチラリと平塚教諭に目を向けてみる彼女の表情を見ると、その彼女顔には生徒を心配する教師の貌をしていると思えた。

なのでヤンは『この人はおそらく心の底からの教育者なのだろうな、それもかなり生徒思いの』と平塚教諭に対しその様に高評価をくだしこの人ならば構わないだらうと思うのだった。

「そうですね、彼は少し考えてから私に『それは意味の無い事だろう』とそう言つて申し出を断りましたね。

それは私が海外からの旅行者だった事もあるでしょう、ならばもう二度とは逢う事は無いかも知れないだからそれは意味が無いとね。」

「これはあくまでも私の予想に過ぎないのですが、その当時彼の身に何かがあったのでは無いかと思うんです。

人と深く関わることに躊躇する、或は拒絶してしまおうと考える様になってしまう様な何かがあったとね。

ですがそれでも彼は誰かとのつながりを、その全てを捨て去ることは出来なかったのではないかと、本人に言うかと否定されてしまうでしょうが彼は求めているモノが有るんだと私は推察します。」

ヤンは一旦言葉を切りドリンクを口に含み喉を潤し更に続ける。

「だからこそ見ず知らずの、道に迷っていた私を心配して声を掛けてくれたのでしよう、それはきつと彼が本来持つ心根の優しさ故なのです、誰がどう思おうとも否定されようとも私にはそう思えるのです。」

前世に於いて、幾多の戦場で敵と相対し敵の心理と策を的確に読み、不敗を誇った彼の洞察力から導き出した八幡に対する彼の人物評。

「私の申し出を断った時の彼の表情は何処か悲痛な、何かを耐える様な表情でしたがそれと同時に後悔するような複雑な感じでしたね。

ですが私が絶対に再び日本へ来るとそして彼に会いにいくとそう約束しましてね、もしそれが叶ったらその時は友としての友誼を結んでくれと申し出て、彼は渋々ですがその時はと約束してくれましたよ。」

平塚教諭はヤンの語る八幡評に感嘆を禁じ得なかった、僅か一日に満たない時間で、比企谷八幡と云う少年の為人の本質を洞察してのけた未だ成人に満たない異国の少年。

「君には申し訳ないのだがヤン、もし君さえ良ければひとつ私の頼みを聞いては貰えないだろうか？」

平塚教諭は真剣な面持ちでヤンをしつかりと見据えて乞い願う、それを受けてヤンもまた彼女を見据え「お聞きしましょう」と答え話を促すのだった。

平塚教諭からの頼みとは一体どの様な事なのだろうか。

時は流れて二人は再会し、そして彼は四人目の部員となる。 中編

一時間目の授業終わりの休み時間、2年F組のヤン・ウエンリーの席の周りにはクラスメイト達が彼に詰め寄っていた。

転入生を迎え入れた学校のクラスでは良く有る光景であろうが、クラスメイト達の挨拶や質問に若干の疲労感も感じていた。

その光景を比企谷八幡は彼の隣の、己の席でその特徴的な淀んだ眼で肩肘を付いて観ている。

入れ代わり立ち代わりヤンにアピールをする同級生達に他人事ながらもウンザリしている様だ。

『…全くリア充って連中はどんなイベントにも直に食い付いて来やがって、何なの君達川を泳いでる鯉なの何でも食べる悪食なの？』

少しは静かに転校生を迎えるって事を知らないの？弁えようよパーソナルスペースをさ、あとヤンの表情観てる君達メツチャ戸惑った顔してるよ！ちゃんと観てあげて人の事、君達には優しさと云う物が無いの？俺は超優しいよ、だから人前では話し掛けないし、何ならずっと話し掛けないまであるからね。』

声に出さず独りごちるそんな八幡の元に小柄な身体でててくと歩み寄り由比ヶ浜が「ヒッキー大変そうだねヤン君皆にかこまれてさ。」と彼を思い遣る。

「まあ転校生てのは、大概どこの学校でもそんな扱い受けるもんじゃね？転校した経験無いから知らんけど。」

由比ヶ浜の言葉に面倒臭さの成分百パーセントで出来ていきますとでも云う態度がアリアリと伺える声音で八幡がそう答えると、彼女はちよつとだけしようが無いなど言いたげな表情で八幡を見やると直ぐにヤンの方を同情と苦笑の混じった顔を向けつつも。

「うんそだね、やあでもさあヒッキーがヤン君と知り合いだからてびつくりしちゃったよ、いつ知り合ったの？」

未だ己の心にハッキリとした答えは出てはいないが、八幡の事が他

の誰よりも気になる由比ヶ浜は好奇心に駆られそう問うのだが。

「それは俺も知りたいかな、ヒキタニくん。」

「うん、僕も知りたいな八幡」

由比ヶ浜の質問に便乗する様に八幡にヤンとの関係に付いて聞いてきたのは葉山隼人と戸塚彩加だった。

葉山隼人、この二年F組に於いて最も鋭い影響力をもつ一団の、クラスのトップカーストグループのリーダー的存在であり、サッカー部に所属し学年問わず女子生徒から高い人気を誇る彼が八幡へ質問する。

「はあ、そんなに知りたいかねえ…別に大した事じゃない何年か前道に迷っていたアイツを道案内しただけだ。」とヤンの方を親指で指差して素っ気無く答える。

「そんな事無いよヒッキー！だってきヤン君外国人だよ！普通外国の人に簡単に声掛けられないよ、言葉解かないしさあ！」

「僕もそう思うよ八幡！」

「うっ……っ。」

由比ヶ浜が感激と賞賛を全面に押し出し八幡を称えると、戸塚もそれに追従し彼を称える。

二人にその様に称賛され八幡も悪い気はしていないのだろうが其処は捻れた性格の八幡、その称賛も素直に受け取れず頬杖を付き表面上は無然とした態度を表すのだった。

「まさか君にそんな一面が有るとはね正直驚いたよ。」

「最初見た時は後ろ姿だったし、声掛けたのも後からだだったし、普通に日本人だと思っただよ。」

後からだと顔とか解んねだろ、アイツ髪も黒いしな。」

爽やかな微笑を浮かべて話しかけて来る葉山に由比ヶ浜と戸塚に對する態度とはどこことなく違いはあるがやはり無然とした態度で返事をするが、ヤンと云う転校生が隣にいる為に物珍しさから人が集まるのは百歩譲って仕方無いと思う八幡だが、人気者の葉山迄もが此処に來られてはヤンとは別の意味で人の注目がこの場に集中するであろう。

なのであまり騒がしい状況や己に注目が集まるのを好まない八幡からするとこの事態はいささか以上に居心地が悪いのだった。

クラスのトップカーストに君臨する葉山がクラスカースト最底辺に位置する八幡に関わる様になり、この様に話しかけて来る様になったのはここ数週間程の間の事である。

ざっくりと言つてしまえば八幡が所属する部活動『奉仕部』の活動中に彼とそのカーストグループとの間に発生した一悶着が原因なのだが、それは此処では割愛しよう。

「あの時は本当に助かったよ、もし君が声を掛けてくれなければ、私は今少しあの場所で迷つて途方に暮れていただろうからね。」

あまりの質問攻めに辟易としていたヤンだったが、その人の波が治まり一段落着いて八幡達の会話にその話のタネと言える当人たるヤンが加わる。

「ヤン君はじめましてやつはろー、あたし由比ヶ浜結衣よろしくね。ヒツキーとは同じ部活なんだ。あつ、ヒツキーは比企谷だからヒツキーなんだよ！」

由比ヶ浜は、何時もの変な挨拶で、自己紹介をする。

「はあ、何お前その説明、何か『バカボンのパパはパパだからパパなのだ』みたいな言い方だなおい。頭悪そうだぞガハマさん。」

由比ヶ浜のやんへの自己紹介と彼女に着けられた、聞きように依つては不名誉でいてそしてセンスの自身の無いあだ名を彼に教える彼女の言動に茶々を入れる八幡。

「もうっ何さヒツキー！あたしバカボンとか知らないし！意味解かない！」

ムキーツ！と八幡に怒りをぶつける由比ヶ浜だったが、その仕草と言動にはあまり迫力を感じられず『寧ろかわいいただけなんだよなあ』と八幡は思っていたりするのだがそれを性格的に素直では無い彼が口にする事は無いのだが。

「まあまあ落ち着いて結衣。」

憤慨する由比ヶ浜を苦笑しながらなだめつつ葉山はヤンへと向き直り挨拶をする「俺は葉山隼人、よろしくねヤン君。ヒキタニ君とは、

うくんそうだな何だろう？」と口調も物腰も一見すると爽やかな好青年と云った雰囲気を感じさせるのだが、ヤンには彼が何だか只の爽やかな好青年なだけでは無いと思われた。

しかしヤンにも流石にその彼に対する印象が何処から来るのか初見では解らないのだが。

「さあな、只のクラスメートじゃねえのか？知らんけど。」

投げやりと言うかどうかでも良さ気な口調で八幡が答えるが、自身と葉山の関係それは確かに当の本人達にも解らない事の様で、その答えも二人似たものとなったのだった。

「あつ僕は戸塚彩加テニス部だよ宜しくねヤン君。八幡とは友達、そうだよね八幡！」

「おつ、おう。」

三人の挨拶を受けヤンも「いやあこちらこそ宜しく、由比ヶ浜さんに戸塚さんと葉山君。」と返礼をするが、一人戸塚の表情が少しばかり冴えない物へと変じてしまい、ポソリと彼は呟く様に言うのだった。

「ヤン君、僕は男だよ。」

戸塚の外見は一して男子としては肉付き良く無い様に見受けられるうえに、面立ちも中性的で確かに少女と見紛われても仕方の無いのだが最近では体力筋力アップのトレーニングを行っており、インドア派学者肌のヤンより余程身体能力は高かったりする。

「ええ〜っ！そつ、それは失礼申し訳ない戸塚君、その改めて宜しく。」

即座に戸塚に対して詫げるヤンに良くある事だから気にしない様にと戸塚は述べる。

元々戸塚自身以前からよく少女に見間違われていた事もあり、またヤンが真摯に謝罪してくれた事もあり戸塚も遺恨を残さずその謝罪を受け入れた。

「でもさ、ヤン君日本語すつごい上手だよね！ホントにびっくりだよねっうん本当に凄いよお。」

「うん、ホントに由比ヶ浜さんの言う通り凄いねヤン君。」

ヤンの操る日本語に素直に賞賛する由比ヶ浜と戸塚が賞賛するが、

それはこの数分間に他の生徒達にも同様な賞賛を頂戴していた事もありその事に何度も礼の言葉を述べると適当に愛想笑いでやり過ぎしていたが、この二人はどうやら八幡ともそれなりに付き合いがある様なのできちんと答えることにした。

「ありがとう、まあ将来は日本で学ぶつもりでいたからね、11歳の頃から日本語の勉強を始めたんだよ。

まあ所謂好きこそ物の上手なれってヤツかな。」

「好きこそ物の??」とヤンのその言葉に疑問顔の由比ヶ浜に八幡が答える。

「ちよっお前っ、はあ…『好きこそ物の上手なれ』って言うな、諺だよことわざってか由比ヶ浜お前ヤンより日本語知らないのな…はあ、そんなお前に同情の念を禁じ得ない俺が居るわ。」

態とらしく同情的で残念なものを見る様な表情を造り由比ヶ浜に視線を向けてそう言う八幡。

「ムツカーツ！あたしだってことわざ位知ってるし何さヒツキー、人の事バカにして！キモいマジキモいし、二回もため息なんか吐いちやってきホントあつたまくるうっつ！」

プンスカと八幡の態度に憤慨する由比ヶ浜だが、八幡は右手の小指を耳の穴に入れ耳をほじくる仕草で由比ヶ浜を適当にあしらう。

そんな八幡に更に怒りの感情を強くする由比ヶ浜とそれを宥める戸塚と苦笑混じりにため息を着きながら由比ヶ浜を宥める葉山。

ヤンはそんな彼等を暖かな眼差しで見つめる、あの日出逢った淀んだ眼の少年は、何処か人を拒絶している様な雰囲気醸し出していたが、今の彼は以前よりその雰囲気は、少し柔らかくなっている様にもえた。

『なる程ね、こんな風に言い合う事のできる人達が居るのか、だからあの時よりも彼の眼は荒んでいる様には感じられ無い訳だ。』

あの日出逢った淀んだ眼をした少年のその眼は、あの日より幾分が和らいでいる様にヤンには感じられた。

それは比企谷八幡と云う少年にとって何か良い出逢いと経験があったが故ではないかと推察する、平塚教諭が言っていた強制的な部

活への入部が彼に良い影響を与えているのかも知れないと。

こうして一時間目の休み時間は終る。

二時間目、三時間目後の休み時間もヤンの席の周りにはクラスメイト達が、入れ代わり立ち代わり訪れては彼に対し質問や自己PRに励む、そんな状況を所業があると躲したり躲し切れなかったりでかなり疲れを感じていたヤンだったのだが、そして迎えた昼休み。

その昼休みもクラスメイト達に昼食を共にと誘われるが、その申し出を断りヤンは八幡の案内で彼と共に購買で昼食のパンを買い込み、現在は八幡のお気に入り場所ベストプレイスにて二人腰掛けドリンクと共にパンを食している。

八幡はご愛飲のマックスコーヒーを、ヤンは午後の紅茶レモンティーを食事の共として。

食事も一通りの終え八幡は気になっていた事をヤンに尋ねる。

「なあヤン、お前は俺がこの学校に居るって知って此処に来たんだよな…何で判ったんだ？イヤ調まあべたんだろうけど違うか。」

「うん、ご明察だよ比企谷君、私は君がこの学校の生徒だと知ってここへ来たんだ。」

訝しげに己を見つめ問い質す八幡にヤンは静かに肯定の意を示し告げる、飲み終わった空缶を弄びながら。

「君が言うように私はその方面の職業の人に依頼してね、そして調べてもらったんだよ。」

キーワードは、かつて君が語ってくれた千葉県とそして君の姓…君の姓は日本でも珍しい様だね、割と直に発見の報せを受けたよ。」

ベンチの自分の傍らに空缶を置き「すまない比企谷君、余りイイ気分じゃ無いだろう…否、かなり君の気を悪くさせたと思うけど。」と謝罪する。

「…だな、確かにマジで気分のイイもんじゃねえな…けど全くなあけどあの時の約束し本当に実行するなんて思いもしなかったわ。」

「何と言うか、申し訳ない。」

頭をガシガシと掻きつつ八幡はヤンへ向けて率直に己の心境を述

ベヤンは改めて謝罪し二人は暫し何も言わず心中感慨にふける。

何とも言えない気不味さもあるその雰囲気は「ハア…」と八幡の溜息と共に終る。

「なあ、何でだ？…俺はそんな大層な奴じゃ無いと思うんだが、理由解らないんだよお前がそこまでする理由がよ？」

八幡の疑問、ヤンがそこまでしてこの総武高校へ転入して来た理由、ボツチを自認し人との係わりを極力避けて来た彼は自分に自分自身へそこ迄される価値を見い出せない。

「そうだね…理屈を付けようと思えば色々と言えるかも知れないんだが…」

ゆつくりと彼に対し自分の本心を誤解が無い様に語りたいヤンは言葉を探す様に思案し見つけ出した言葉を告げる。

「極論するとね、単純な事なんだ…そうだね、あの日君に教えてもらってもらったジョジョの奇妙な冒険のセリフをアレンジ引用していうとだね。」

八幡の顔を見、右手の人差し指を立て「んっ、んんっ」と咳払いをした後、言った。

「…たった一つのシンプルな答だ…私は君を気に入ったって事なんだよね。」

そのヤンの言葉に八幡は、少し呆れと驚いた様にヤンの顔をみつめ「何？お前あれからジョジョにハマったの!?マジで!？」と、そう言った八幡の口の端は小さく引くついている。

まるで溢れ出そうな笑いの衝動を堪えるかの様に。

「うん、あの作品は実に面白いね、向うでも売っていたんだけど、英訳版しか無くてね。」

ジョジョの面白さの一つに日本語としてもあの独特な台詞回しがあると思うんだよね、だけど英訳版だとその部分が伝わり辛くてね。

だから通販で日本語版を取り寄せて読んだよ。」

ヤンの告白を聞きクスリと笑ってしまう八幡、笑いを抑え八幡はヤンへ自分も又ジョジョのセリフをアレンジ引用して言うのだった。

「…ヤン・ウェンリーは日本の漫画にハマった！意外、それはジョ

「ジョ！つて所か。」

二人は互いの顔を見合いフツと笑みをこぼす。

「あの日の約束覚えているかい？比企谷君。」

ヤンは八幡へ問うと八幡は「ああ覚えている」と静かにしかしハツキリと応えた。

ヤンは拳を差し出し願った次に出会えたら友になつてくれないかと、そして八幡は応えたのだったその時はなど。

しかし実際八幡はこの時が来るとは思つてもいかなかったしあまり期待もしてはいなかったのだった。

故に思い掛けずも訪れた『その時』たる今日という日とこの異国の少年の律儀さに感心を抱くのだった。

そして八幡はため息一つ吐くとボソリと言葉を紡ぐのだった「約束しちまつたんだから、しようがねえか…」と頭を掻きながら。

「そうだねこれから宜しく頼むよ比企谷君。」

静かに笑みを湛えてヤンは告げる。

「ああ、まあよろしくな……それとな君てのは要らねえから、そのな呼び捨てで構わないぞ何だかムズ痒いしな。」

八幡は顔は解りにくい但至少照れた様子でヤンへ告げる。

「解つたよ、ではこれからは八幡と名前で呼ばせてもらうことにするよ。」

ヤンは八幡の意を汲む事にしそう告げると、あの日のように拳を差し出す。

「えっ、またやんのかコレ……。」

そうボヤキながらも八幡は不承不承を装いつつもヤンに付き合い自らの拳を突き出し、コツンと軽く合わせるのだった。

ヤンと八幡がベストプレイスへ居た同じ頃の校舎特別棟四階。

そこには八幡と由比ヶ浜が所属する奉仕部の部室が有り、現在その室内には二人の女子生徒が昼食を摂っていた。

「でね、ヤン君て日本語すつごく上手なんだよ！そんでヒツキーてば、ヤン君の方があたしより日本語上手だって失礼しちゃうよねっ、

もうマジムカつく。」

由比ヶ浜結衣は本日転入して来た、転校生ヤン・ウエンリーの事を話題に出してもう一人の女子生徒との昼食の時間を楽しんでいた。

「そう、そのヤン君と言う人がどの程度の日本語を話せるかは実際に話して見ないと解らないけれど由比ヶ浜さん、貴女は確かにきちんとした日本語を学ぶべきだと、私も思うのだけれど…」

と由比ヶ浜の先程の発言に対して、八幡と同じ様に彼女の碎け過ぎる日本語の使い方に苦言を呈する女子生徒。

雪ノ下雪乃。

長い黒髪と端正な容姿の美しいこの少女こそが件の奉仕部の部長である。

「ひどっ！もうゆきのんまでつあたしちゃんとした日本語使ってるじゃん！」

雪ノ下の苦言に憤慨しながら、由比ヶ浜は雪ノ下へと反論する。

「それにそんな事言ったら、とべっちなんてもつと酷いし！」

更には、自身と同じグループに属する友人戸部翔を引き合いに出し自己肯定して見せる。

「とべっちと云うのは確か『べえ』とか『○○っしょ』だとか変な言葉使いをするサッカー部の彼の事ね。」

由比ヶ浜さん貴女は下を見て自分の立ち位置に安心するのではなく、上を手本として自己の向上をこそ目指すべきだと思うのだけれど。」

澄まし顔で、由比ヶ浜を嗜める様なセリフを吐く雪ノ下。

「ううう…ゆきのんいち悪だ…」

しょんぼりと呟く由比ヶ浜を優しげな眼差しで見つめる雪ノ下の表情は、とても大切な者を見守る様な慈愛に満ちている。

彼女は由比ヶ浜との関係をとても貴重な物としているのだ。

『けれどまさかあの捻くれ者の比企谷君と友人になろうと思う様な人間が、戸塚君以外に居ると思わなかったわ…一度会って見たいものねそのヤン君と言う人に。』

昼食を食べながらまだ見ぬヤンと云う男に興味を抱いた雪ノ下は

口に出さずに心中呟いた。

その男に彼女が逢うのはこの数時間後この日の放課後の事であるのだが、その事はこの時の彼女が知る由はないのだが。

時は流れて二人は再会し、そして彼は四人目の部員となる。 後編

転校初日、その日の授業も全て終わりが終わった放課後の廊下をヤン・ウエンリーは職員室へと歩を進めていた。

途中すれ違う生徒達に好気の眼で見られながらも職員室へ辿り着いたヤンは、扉を開き挨拶の言葉を述べ平塚教諭の所在を確認すると。

「お来たかヤン、こっちだ。」

自分の居場所を知らせると席から立ち上がり平塚教諭は、ヤンの方へと歩を進め「わざわざ来てもらって済まないな」

と感謝の意を告げると彼を促し「では行こうか、案内する」と彼を伴い廊下へと出て行く。

「どうかね今日一日を過ごしてみてこの学校は、そして比企谷は平塚教諭は歩きながら共に並び行くヤンに尋ねる。

「そうですね…正直休み時間の度にクラスの皆に代わる代わるかこまれるのには、辟易とさせられましたね。

しかし元気で明るく、物怖じしない様は若さと云うものを感じさせられましたね…はははっ。」

溜息混じりに頭を掻きながらそう答えるヤンの様子に平塚教諭「フツ」苦笑を漏らしながら、怪訝な表情を向けるヤンに「ああすまない、君の言動が何と言うかオッサ…いやとても老成している様に感じてな」と謝辞の言葉を告げる。

だか彼女にそう評されるのも致し方無しと言っても良いだろう。

何せ前世に於いて三十三年と、あちらの世界の平時の一般的な寿命の半分の時間も生きてはいなかったのだが、それでも三十三年。

それに今生で当時の記憶目覚めてから五年と、計三十八年分の時間を過ごしているのだから。

「私には、十歳年上の兄が居るのですがその兄貴にも良く言われま

すよ、お前は俺よりもジジむさいとね。」

そのヤンの言葉に平塚教諭の眉がピクリと動き、勢いよく彼へと向き直り「何と君には兄君が居るのかね!!」とがつつき気味に詰め寄り言質確認を取る。

彼に兄が居る、結婚適齢期にあり且つその結婚を希む彼女が食いついて来たのは正にそこであった。

「して、その兄上は独身かね日本に居るのかね!?それに、こつ恋人は居るのだろうか?」

身を乗り出す様に平塚教諭はヤンへ彼の兄の事を尋ねる、その尋常では無い勢いにタジタジとなるヤンは

「落ち着いて下さい平塚先生、兄は親父に仕事を任せられ今はて東京に住んでいます、本人は三十過ぎまで結婚はしない、それまでは独身貴族を謳歌すると常から言っていましたね。」

と宥めすかしながら己の兄が常に語る主張を平塚教諭へ告げる。

「…そうか、すまない取り乱してしまった」

結婚願望の強いこの独身美人教師は出会いを求める余り、生徒の身内にまでその触手を伸ばそうとしていたが寸での所で思い留まった様だ。

「ハア結婚したい…」平塚教諭のその眩きをヤンは聞かなかった事にした。

「ああいや気にしないでください平塚先生、自分の事も兄貴の事もよく言われる事ですし慣れていきますからね、何せ私と違って兄貴はハンスムですし。」

それと八幡の事ですが、初めて出逢ったばかりの時と比べて少し目付きが柔らかくなっていく様に感じられましたね。

尤も私は八幡の過去の事を知っていると云う訳ではありませんが、もしかすると平塚先生が望んだ方向に少しだけ向かっているのかも知れませんね。」

総武高校特別棟四階、奉仕部部室ここでは今三名の部員達が思い思いのスタイルでその時間を過ごしている。

一つの長いテーブルに二名の女子部員と一名の男子生徒がパイプ椅子を置き腰掛けている、部長の雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣は扉から一番奥の方に隣り合う様に座り、比企谷八幡は彼女達から距離を置き一番扉側に腰掛けている。

雪ノ下と八幡は文庫本を静かに読み進め、由比ヶ浜は携帯電話をポチポチといじりながら。

三人の手元には雪ノ下が淹れた紅茶が置かれ優しい香りを漂わせ、それが穏やかな時間の流れを演出するのに一役買っている様だ、その静かな流れは第三者の出現により唐突に破られる。

「私だ入るぞ」ノックも無しに部室の扉が開かれ平塚教諭が返事を聞く前に部室内へと入室して来た。

いつもの事ではあるのだがそれでも雪ノ下は「はあ平塚先生、いつもノックをしてくださいと言っているではないですか」と溜息と共に苦言を呈する。

「イヤすまんすまん、急いでいたのでな、実はな今日は新入部員を連れて来たのだが。」

平塚教諭のその言葉に三人は興味を示し扉の方へ顔を向けるとその平塚教諭の後から、入室して来た一人の男子生徒の姿にそれが誰かいち早く気付いたのは由比ヶ浜だった。

「あ〜っヤン君だよっはろー！ってヤン君奉仕部に入るんだ。」

と由比ヶ浜の何時もの造語による挨拶の声がヤンへと掛けられ、それにヤンも返事を返す。

「うん、そう言う事になってしまったね。」

「比企谷と由比ヶ浜は知っているだろうが雪ノ下は初対面だな、彼はヤン・ウエンリー今日この学校に転入して来た宜しく頼むぞ雪ノ下。」

平塚教諭からの紹介を受け、平塚教諭が言う雪ノ下と言う女子生徒

に向い「ヤン・ウエンリーです宜しく」と後頭部に右手を当てて挨拶をするヤン。

「雪ノ下雪乃です、此方こそよろしくヤン君、私がこの奉仕部の部長を勤めているわ。」

座っていた折りたたみ椅子から立ち上がり軽く頭を下げごく短い自己紹介をする雪ノ下にヤンは『ほう、ずいぶんと絵になる美しい少女だな』と素直に感嘆の念を抱いた。

そこに居るだけで他者にその存在感を焼き付ける、そんな存在とヤンは前世に於いて相對した事があつた。

戦場に於いて幾度も銚を交えたが、直に對面し言葉を交わし合つたのは唯の一度だけだが。

その身から溢れ出る生命力の強さと美しさと苛烈さを體現したかのような美貌に黄金色の豪華な髪と鋭い輝きを放つ蒼水色アイズブルーの瞳を持つ時代の覇者。

彼とのその唯一度の邂逅をヤンは生涯忘れる事は無かつた、無論それは今生の現在でも。

ヤンの眼にも彼女、雪ノ下雪乃は確かに美しい少女との印象を受けたが、それは彼とは違いその佇まいから感じられるのは儂さか或は脆さなのか。

由比ヶ浜がヤンが座るためのパイプ椅子を用意し、八幡の座る位置の側に設置し着席を促す。

彼女に例を述べヤンはその椅子に座る。

「さてヤンの紹介も終わった事だし、後は君達部員同士で交流してくれたまえよ、では。」

片手を挙げ部室を後にする平塚教諭にたいし、四人はそれぞれに挨拶する。

「うす」と八幡が「はい」と由比ヶ浜が「はい」と椅子へと座り直した雪ノ下が、そして「案内して頂きありがとうございますました平塚先生。」とヤンが。

平塚教諭が退室し、ピシヤリと部室の扉が閉じられた後やはりと言ふべきか、一番始めに声を発したのは由比ヶ浜であつた。

「えへへ〜ヤン君、これからは部活でも一緒だね」

「ああ、よろしくね由比ヶ浜さん」

ヤンの返答に気を良くした彼女は、ヤンの隣で文庫本を片手に頬杖を付いている八幡の元に歩み寄り「良かったねヒツキー、部活でもヤン君と一緒にだよ」と笑顔で声を掛ける。

「あつ、おうそうだな…」とクールを装いつつ彼女から眼を背け、極僅かに顔を赤らめながらボソリと答える八幡。

端から観るとその態度は、不意に女子に近付かれた事を意識し焦っているのが丸分かりなのだが。

「おやおやく、ヒツキー君もつと素直に喜んでいいんだよ〜!」

だが彼のその様子に気が付いていない由比ヶ浜はそう言つて八幡を煽る、そんな彼女を一瞥し八幡は「マジウザあ…」と呟く。

「ちよつ、酷いヒツキー!!人の事ウザいとかつて、せつかく部員も増えたのにもつと素直に喜んでいいじゃん!」

お約束の如く由比ヶ浜は八幡に対して吼えるが「あくはいはい、嬉しい嬉しい超嬉しいですよガハマさん。」とぞんざいに答え、これで満足かとはかりに由比ヶ浜を一瞥すると。

「あくもう〜ムカつく!!バカヒツキー!」

ポカポカと八幡の肩を力を入れず叩く由比ヶ浜と「ちよつお前、暴力は止めてもらえますかねガハマさん!」と顔を赤らめながらも嫌がる素振りを見せる八幡だが、その様子からそれを満更嫌がっているとは感じられずそんな二人のじゃれ合いにヤンは苦笑を漏らす。

そんな二人のじゃれ合いにも無視を決め込む雪ノ下だったが、彼女は読んでいた文庫本を徐にテーブルに置き席を立つと皆に背を向けお茶を淹れる準備を始める。

「所でこの部活の活動内容についてなんだけど、そのある程度は平塚先生から説明を受けたんだけどね、普段依頼が無い時等は皆どうしているんだい?」

ヤンは部員三人に対して素朴な疑問を呈する、彼がこの部室へ入つて来た時室内で三人は何もせず思い思いに寛いでいた様に見えたからだ、そして今も。

「そうね、依頼が無い時は特に何かを強制すると言う事はないわね、一応部室内に待機してもらい依頼が発生した際に直に動ける様にしてくれて良いわ。」

著しく公序良俗に反しない限りは自由に過ごしてもらって結構よ」雪ノ下の説明にこれは楽で良いとヤンは呑気にも気を良くする、極論をする此処でと昼寝を、否夕寝をして居ても構わないと言う訳だとヤンは心中呟いた。

流石は前世に於いて履歴書の趣味の欄に昼寝と書くだけの事は有る。

「なるほどね、だから八幡と雪ノ下さんは本を読んでいる訳だ。」

ふむ明日からは私も何か本を持ち込む事でしょう。」

顎に手をあてて考え込む様な仕草でそう述べると、そんなヤンの言葉聞いた由比ヶ浜はキョトンとした顔で疑問の声をあげる。

「あれ、ヤン君ヒツキーの事八幡って名前で呼んでた？教室居るときは苗字で呼んでたよね」

「ああ昼休みからな」

「うん昼休みからね、そう呼ぶ事にしようと言う話になってね。」

由比ヶ浜の疑問に二人は答える。

「その方が友達っぽいって戸塚も言っていたしな…」

八幡がそう付け加えるとそのタイミングで空かさず雪ノ下が紅茶を淹れながら八幡の言葉に対して皮肉る。

「あら、ポッチを自称する貴方が友達っぽい行為等と云う事を行うなんてどう言う風の吹き回しかしら、ふふふ珍しい事も有る物ね。」

「これこそが正に初夏の珍事と言う事かしら珍し谷君。」

「うっせ…たまにはそんな事も有るんだよ、ホントたまにはたけどな、一生に何回有るか知らんけどってか雪ノ下お前の方はどうなんだよ由比ヶ浜以外に友達って居るのか。」

雪ノ下はその声にたっぷりと皮肉の成分を含ませた毒舌を持って八幡を誂い、それに八幡の方も同様に対抗する。

ヤンはその二人のやり取りにかつての彼の仲間達、その中でも毒舌を持って知られる幾人かの人物の事を思い起こし懐かしさを感じた

のだった。

しかし八幡のその返答に由比ヶ浜が驚きと同情の思いの籠もった声をあげ、彼の肩に手を置きその肩越しに彼を見つめる。

「ヒツキー……たまにある事が一生で何回かってレベルの物事なんだね。」

「由比ヶ浜さん彼のレベルを一般のそれと当て嵌めてはいけないわ、もしかするともう二度とは経験出来ないかも知れないのだし、その僅かな経験を噛み締めさせてあげるのも優しさのうちよ。」

由比ヶ浜の言葉に、八幡では無く雪ノ下が、毒舌を持って答える。

『おやおや、この娘さんは本当に中々の毒舌家の様だな、これは気心の知れた者に対しだけなのかそれとも誰に対してもそうなのか……後者だとしたら不意に敵を造ってしまうんじゃないかな。』

彼女の言動をヤンは危惧する、出来ればその様な言動は親しい者達のみ止めおいてほしいと。

紅茶を淹れ終え、紙コップに入れた紅茶を雪ノ下はヤンに差し出す「よかったらどうぞ」と言葉を添えて。

紙コップから放たれる香しき芳香にたちまちヤンは幸福感に包まれる、これ甘露に違いないとその香りらか容易に想像が出来た。

彼女に礼を述べ早速とばかりにその紅茶に口に含むゆつくりとしっかりと味わう様に、そして。

「うん旨いー」

ヤンの口からは紅茶に対する賞賛の言葉が飛び出した。

「これは実に旨い、こんなにも美味しい紅茶を飲んだのは実に久し振りだよありがとう雪ノ下さん。」

ヤンの素直な賞賛とお礼の言葉に「どういたしまして」と素っ気無く答える雪ノ下は、彼の方を見る事なく再び文庫本のページを捲るがその頬が僅かながら紅ている事に気付いているのは彼女の様子を暖かな眼差しで見つめる由比ヶ浜だけであった。

「お前って、つくづく紅茶好きなんだな」

幸福そうに紅茶を飲むヤンを淀んだ眼で眺めていた八幡はしみじ

みとした口調で言う、昼食の時もそうだったし三年前に共にハンバーガーシヨップで食事を共にした時もヤンは紅茶を飲んでいた事を八幡は思い出していた。

「ああ私は昔から紅茶に目が無くてねえ、だけど自分で淹れた紅茶はどうもちつとも美味くなくてね…」

しみじみとしたヤンの独白に、雪ノ下が紅茶の淹れ方をレクチャーする。

「美味しい紅茶を淹れるには、茶葉の分量、その茶葉に合ったお湯の温度と、そして蒸らし時間、その管理をしっかりと出来れば美味しい紅茶を淹れるわ。」

そうヤンに告げる雪ノ下だ、そこはヤン・ウエンリー、前世に於いて親しき者たちから、社会生活不適格者等と呼ばれる程に家事等はおろつきしであったし、今生でもやはりそこも変わらない様で。

「ハハハッそれがどうにも私はそう云った手順と言うのを上手になせ無い様でね、出来上がる物は大抵出来ない物になってしまうんだ。」

頭を掻きつつヤンは言い訳をするのだがそんな彼を八幡は残念なモノを観る様な眼で、雪ノ下は溜息吐きつつ冷々とした眼差しで、そして由比ヶ浜は同類を見つけたかのような笑みを浮かべて其々に眼を向ける。

そんな周りからの目に居た堪れず「ハハハ…」いたたまれず頭を掻きながら乾いた笑いでヤンは誤魔化そうとするがそれは如何ほどの効果がある事やら。

微妙な何とも言えない空気が漂う、雰囲気を変えようと、由比ヶ浜はヤンにあだ名を付けようと提案し、自らが考え出したあだ名を発表する。

『ヤンヤン』言うのはどうかとの由比ヶ浜の提案はやはりと言うべきか、そのあだ名は大変に不評であった事は言うまでも無いであろう。

「プツ…ヤンヤンってお前な、うたうスタジオかっつの、プツ、クツ」

ツボに入ったかのように笑いを堪えきれず、由比ヶ浜にツツコミを入られる八幡だかネタが古過ぎる為に彼女からの反応は無かった。

「…しかし、本当に旨い紅茶だね、これは本当に毎日欠かさずに飲みたいと思うよ。」

幸福感タップリの表情を浮かべた顔でそう言うヤンであるが、しかし次の言葉は「ハア、だけどこんなにも美味しい紅茶が目の前に有ると云うのに、なぜ今私は未成年何だろうか」溜息と共にボヤキが漏れる。そんなヤンを、雪ノ下は怪訝な表情と共に彼に問い質す。

「あら、貴方は今自らが美味しいと言った紅茶を飲んでいるのに、一体何が不満なのかしら。」

それと未成年である事に何の関係が有ると言うの？」

ヤンへの返答を促す彼女の瞳には氷の様な冷たさが発せられている、彼女の眼差しに不穏な物を感じ取ったヤンは、即座に「もしかして気を悪くさせてしまっただろうか、申し訳ない。」

君の淹れてくれたこの紅茶がとても美味で有ると思つた事に嘘は無いよ、それこそ喫茶店でお金を取ることの出来るレベルの物だと思ふ程にね…」と謝辞と賞賛の言葉を紡ぎ出すと、次にとんでも無い発言が彼の口から発せられた。

「なぜ私が未成年で有る事に不満が有るかと言うとだね、それは唯でさえ旨いこの紅茶に、ブランデーを垂らして更に美味しくいただく事が出来無い事を嘆いたんだよ。」

「何せ未成年者では、大っぴらに酒を嗜む訳には行かないだろう」人差し指を伸ばして、最後にヤンはそう言った。

ヤンの独白に三人は呆れの眼差しを向け、雪ノ下は此れは此れはと頭を振る。

「ほえ〜ヤン君お酒飲むの!?意外に不良なんだ!!」由比ヶ浜がヤンの口から飛び出した言葉に目を見開き驚きの声を少しオーバーに上げる。

「ああ否、飲むと言っても実家の親父の酒棚や、兄貴の秘蔵コレクションを黙ってチビチビと頂いているだけであつて決して不良では

無いのだけでも……」

しどろもどろに言い訳をするヤンだが次にはグツと拳を握り力説する様に言い出す。

「それにだ、酒は人類の友だよ！私は友を見捨てる事なんて出来ないよ」

力説するヤンに、冷水を浴びせる如く雪ノ下が冷めた目を向け「貴方は友人だと思っけていても、お酒の方はどうそう思っけているのかしら」というと。

ヤンは微笑を浮かべ「きつと思っけてくれているさ、人類は有史以前遙か昔から酒を飲んで来た、今も飲んでいる、そして千六百年後もきつと呑んでいる事だろうね。」と反論する。

「イキナリ人類史にまでなつた！」

ヤンの友人を想う言質にツツコミを入れる由比ヶ浜の声は、人類史にまで及んだ事に驚きの成分が多量に含まれた。

「千六百年後と云う妙に具体的な時が何処から出てきたのかはともかく、ヤン君どうやら貴方は其処の彼と変わらないレベルの問題児の様ね。」

これは彼だけでは無く貴方にも矯正の必要が有ると云う事かしら。」

ヤンのその言動に、雪ノ下の使命感が刺激されたのか呆れ気味にそう言うのだった。

だがその雪ノ下の様子に八幡は心底面倒くさいと言つた態度と淀んだ眼を向けると。

「おいヤン、どうしてくれんの？お前のせいですんごいメンドクさい事になりそうなんだけど、ホントどうすんの。」

これから面倒な事になりそうだと少し恨めし気にぼやき、ヤンはその八幡に心の中で『申し訳ない』と詫ながらも「ハハハ…そこはどうかお手柔らかにお願いします…」右手の親指で鼻の頭を掻きながらそうヤンは雪ノ下へと懇願する。

八幡は盛大な溜息を付き、由比ヶ浜は男子二人を苦笑しながら見つめ雪ノ下はカッパを片手に冷笑を浮かべている。

こうしてヤンは総武高校奉仕部の部員となったのだった、此れから果たして彼等の元にとどの様な依頼や依頼者が訪れるのかそれはまだ誰も知らぬ事である。

魔術師は剣豪將軍と邂逅する。

ヤン・ウエンリーが総武高校へ転入して来て早数日、放課後となり彼は比企谷八幡と共に奉仕部の部室へと向い歩いていった。

生徒たちのヤンを見る好奇の視線は、転校当初に比べると、少なくとも落ち着いて来たが、それでも目を向ける者は皆無とはなら無い様である。

彼に向けられる視線は比較的女子生徒の物が多かった。

その視線を向けて来る生徒達のボソボソと話す声が、ヤンと八幡の耳にも僅かながら聴こえてくる。

大半はヤンの容姿に対する好意的な評価の様である、比較的東洋系寄りの外見で取り立てて美形と言う程の物ではないが、前世と変わらぬ穏やかで優しい眼差しは、見るものに安心感を与えるのか、女子生徒からの評価は割と高いようだった。

「随分と女子から高い評価受けてるみたいだな、このイケメン転校生さんは…」

と八幡からからかいの成分を多分に含んだ声に、辟易とした様子でヤンはぼやいてみせる。

「からかわないでくれよ八幡、彼女たちは単に物珍しさから言っているだけだろうさ、もう暫くすれば私なんぞ見向きもされなくなるんじゃないかな、それにイケメンと言うのは我がクラスの葉山君の様なタイプの人の事を言うんだろ？」

「まあ、どこの学校でも転校生つてのは嫌でも他の生徒にとって興味とか話題の対象になるのは仕方ないんじゃないやね？　ましてやお前は海外からの転校生だしな、動物園に新しく入った動物と変わんねえのかもな、転校した事無いから知らんけど」

八幡はヤンのボヤキに余りにもあんな言を返した。

「やれやれ私は珍獣か何かと同列に置かれて居るのかい、全く甚だ不本意な事だね…」

等と会話を交わしている内に二人は奉仕部の部室へ到着した。

八幡が、扉に手を掛けると扉はガラガラと音を立て開かれた、鍵が

掛かっている事から部室には既に誰が居ると言う事だ。

部室の中には二人の女子生徒が居て、それぞれの席に座り、開かれた扉に目を向けていた。

長い黒髪の見る者の眼を惹きつけて離さぬ程の美しい容姿とどこか硬質さを感じさせる雰囲気を持つ、奉仕部部長の雪ノ下雪乃と、桃色掛かった明るい色合いの茶髪にお団子ヘアと少し幼さの残る愛くるしい容姿の少女、由比ヶ浜結衣。

自分を見つめる二人の女子生徒に、八幡は「うす」といつもの挨拶をして入室し、続いて「やあ、こんにちは雪ノ下さん由比ヶ浜さんも」と挨拶をしてヤンも入室する。

「こんにちは比企谷君、ヤン君。」

「あつヒツキー、ヤン君遅かったね二人共」

彼等の挨拶に、雪ノ下は淡々と、由比ヶ浜は笑顔で挨拶を返す。

「俺達が遅いんじゃないや無くてお前等が早いだけだろ、何なのワープでもしてんの？波導エンジン搭載してる？それとも瞬間移動でもマスターしたのかすげえなお前等。」

八幡は自分の定位置の席に着きながら由比ヶ浜の発言へとツツコミを入れつつ、彼女へジト目を向ける。

「何それ！ヒツキー意味解かないし！」

由比ヶ浜はプンスカと怒りを現した体で八幡のツツコミに応じ、対し雪ノ下は紅茶を淹れながら。

「そんな荒唐無稽な事がある筈無いでしょう、私は授業が終わった後に一度職員室へ行き、平塚先生から鍵を受け取り此処へ来たのだから、由比ヶ浜さんが言う様に、貴方達が遅かったのでしょうか」

負けず嫌いな彼女はそう八幡へと応じてみせる、その表情にはしてやったりと言いたげな微かな笑みが浮かんでいるのだが、他の部員からは後ろを向いている格好になっているので、その表情は他者には見られてはいなかったが。

八幡に続いて自分の席に着きながらヤンは彼等のやり取りに苦笑しながら「まだこの世界では亜空間航法の技術は確立されて居ない筈

だよ八幡。まあ瞬間移動については解らないけどね」

と己の額に人差し指と中指を宛てながらヤンは八幡へツッコむ。

お前ドラゴンボールも見てたのかよ、とヤンヘジト目を向けながら八幡は呆れた様にぼやくのだった。

優しい紅茶の香りに包まれた室内で、それぞれの席に着いた四人の間には、まるでそこだけ世界から切り取られ独立したかの様な穏やかな時間が流れてゆく。

ほう、と気持ち良さげな溜息は雪ノ下が淹れた紅茶を味わうヤン・ウエンリーの口から漏れたものだ、彼の表情は幸福に満ちているかの様に他者からは見えている事であろう。

「お前ホント幸せそうに紅茶飲むのな、よっぽど好きなんだな」

八幡のヤンへと向けられたその言葉は感心なのか呆れなのか、その両方であろうか。

「そりゃあね、これだけ美味なる紅茶を飲んでいるんだから、顔もほころぶだろうさ、実際大したものだよ雪ノ下さんの紅茶はね、これを飲ませて貰えるだけでもこの国に来た甲斐があると云う物だよ」

惜しみの無いヤンの絶賛に、普段余り表情を崩さない雪ノ下も、少しだけ頬を染め面映いかの様な嬉しそうな表情を浮かべていたのだが、彼女はその顔を自分が読んでいた文庫本で他者に見えない様に隠すのだった。

その時、部室の扉を廊下側からノックする音が聞こえ、四人は扉へと眼を向ける、数瞬の間を置き雪ノ下がどうぞと入室の許可を出そうとした矢先。

「八幡よ中に居るのは解っている、我だ入るぞ」と芝居掛かった物言いで八幡の名を呼ぶ声が発せられた。

その声にヤンを除く三人の顔には、心底面倒臭いと言わんばかりの表情がうかんでいた。

これは貴方の懸案よ比企谷君、雪ノ下は己の額に手を当て無言のプレッシャーを八幡へと向ける。

雪ノ下のプレッシャーに事を諦めた八幡は、溜息を吐くと自分だつて相手にしたく無いのかなと言いたげな眼を雪ノ下へ向け、扉の外に居る人物へと声をかける。

「俺の知り合いに我なんて名前、奴は居ない、帰れ材木座！」

それはもう心の底からウンザリだと言いたげな感情が現れたかのような声音であった。

扉の外に居た人物は、八幡の声にこのままでは追い返されると思つたのか、慌てて力一杯に扉を開き、若干涙目になりながら八幡へと呼び掛ける。

「八幡、今我の名前言ったよね！知ってるよね我の事！我だよ我！戦友たる我の事を忘れたとは言わさんぞ八幡よ!!」

それは、大柄で太目の体型に眼鏡を掛け、初夏だと言うのに制服の上にコートを羽織り手には指貫のグローブを着けた、暑苦しい身なりの少年。

八幡はその少年に、見向きもせず紙コップの紅茶を啜りながら「俺は材木座なんかと言う奴の事など知らん」と言う。

「ほらね！知ってるよね、又言った八幡！材木座って我の名前、超言ったよね!!」

彼は涙声で、八幡を指差した腕を上下に高速で動かしながら自分の存在を八幡に認めさせるべく呼び掛けるのだが、ふとその時奉仕部の部室内にいつものメンバー、八幡と雪ノ下と由比ヶ浜の三人以外にもう一人の人間が存在している事に気が付いた。

「なんだ、我の他にも依頼者が来ておつたのか、これは失礼をした」少年は、これまでの醜態を誤魔化すかの如く、最初の芝居掛かった物言いでヤンへ詫げる。

「ああ、いや私今週からはこの部へ入部した、ヤン・ウエンリーと云う者だよ、よろしく材木座くん、で良いんだよね」

ヤンは材木座へ挨拶をする、これまでの八幡と材木座のやり取りに少し呆気を取られていたヤンだったが、気を取り直し彼に語り掛ける。

「おおっ！何と、では貴殿が噂になっておる海外からの転校生か、う

む如何にも我が名は材木座義輝！剣豪將軍材木座義輝！以後見知り置いて頂こう!!」

材木座は、右手の二本の指で眼鏡のフレームを抑え、見えを切る様に身体を前傾させ左手を大きく開きポーズを取りヤンへ自己紹介をする。

その言動は再度ヤンをして呆気に取らせるに足る物であった様で、ヤンはハハハと乾いた苦笑の声を漏らすのだった。

「剣豪將軍、剣豪將軍……ああそうか、室町幕府の十三代將軍足利義輝、材木座君はその足利義輝と同じ名前なんだね、だから彼をリスペクトしていると言う訳だ」

日本の歴史を学び覚えた足利義輝の存在に思い至ったヤンは、材木座に対しそう問うのだが、問われは本人である材木座はと言うと。

「それは違うぞヤン殿！我こそが剣豪將軍！現代に蘇りし剣豪將軍その人也イ！」

と見栄を切り、本人としてはバツチリと決めたつもりなのだろうが、端から見ると只の痛い人にしか観えないと言う事に、材木座本人は気付いて居ないのか、気付いていないふりをしているか、それは他者には解らない。

「ヤン、相手にすんなよ、概ねお前の言ったことで正解だ、コイツは所謂コミュ障でな、そんな風に演じないとマトモに人との会話も出来ないんだよ、所謂厨二病ってヤツだよ」

八幡はヤンへ材木座の事を説明する、その説明に納得しヤンはコクリと頷く。

「で、今日は何しに来たんだ材木座。用事が無いなら早く帰れ、否何なら還ってくれ」

部室への来訪理由を問い質す八幡だが、その言葉は隠しようの無い、寧ろ隠す気の無い彼の本音成分100%で出来ていた。

「けぷこん、けぷこん、そう釣れない事を言うでないぞ八幡よ、否何、我的新たな作品のプロットが出来たのでな、その批評をして貰おうと思っただ、今日はそれを持って来た」

ゴソゴソとカバンの中に手を入れ材木座は、中からレポート用紙を

取り出しテーブルの八幡の席の前にそれを置いて、胸の前に腕を組みふんぞり返り、「さあ、忌憚のない意見を聞こうではないか」と言う。

八幡は材木座の言動に辟易とし、その淀んだ眼を更に濁らせ「うぜえ」とひと言漏らし嫌々ながらも、そのプロットの書かれたレポーター用紙を手を取った。

八幡は手に取ったそれをパラパラと捲りヤンも又八幡の横からそれを覗き見るのだが、材木座自身は、そのプロットの出来に自信を持っているのかニヤリと口角を吊り上げ得意気に問う。

「どうだ八幡よ、我の自信作だこれは受ける事間違いないだ！ムハハハーツ!!」

が八幡はそれに対し興味無き気に淡々とした声音で告げる。

「イヤ、面白いも何もこの程度のプロットじゃそんなの解かんないし、どうせ持つてくるならきちんと作品仕上げて持つて来いってこないだ言ったよな俺、しかも今回も又お前…これ何のパクリだ」とバツサリと切り捨てた。

「うわ〜つ中二またパクリなんだサイテー」

「全く、同じ事を何度も繰り返すだなんて、まるで成長していないのね、それでは人間とは言えないのでは無いかしらね」

女子二人の材木座本人への酷評に、ヤンと八幡はなんだか居た堪れない気持ちになり、材木座は口から半ば魂がぬけかけていた。

魔術師は剣豪將軍のラノベの洗礼を受ける。

雪ノ下と由比ヶ浜の批難に、精神的ダメージを受け材木座は放心状態に陥ってしまった。

「お〜い材木座、口からエクトプラズム出かかっているぞ、早く還って来〜い。」

と、八幡は材木座へ呼び掛けるのだが、材木座の精神は未だ現世に戻って来れない様で、その身体は小刻みにプルプルと震えている。

「八幡、彼は一体…もしかして材木座君は女性に対する免疫が弱いのかな？」

ヤンは材木座の状態を鑑みそう推察した、この部室へ入室してから材木座は、八幡や自分へ話し掛けたら、視線を向けて来てはいたが、女子の方へ眼を向ける事も自ら話掛ける事は無かった。

先程八幡が告げた材木座がコミュ障だと言う言に、女性とのコミュニケーションを苦手としているのでは無いかとヤンは推察した。

「ああ、コイツは女子とは特にマトモに会話も出来ない上に、すっげえメンタルが弱くてな、前に雪ノ下にケチョンケチョンにされて、苦手意識持ちっちゃってるんだと思う。」

ヤンの推察を八幡は、首肯し、材木座の気性について説明を加える。そいつは難儀な事だ、とヤンは材木座に対し少しだけ同情心を抱いた。

「おい材木座、早く起きないと校舎裏に埋めるぞ」

ピクツ、八幡のその言葉に材木座は我に返り、コートの袖口で顔の汗を拭いながら「今のは危なかったぞ、思わず冥府へと召喚される処であったわ、又ハハハっ！しか〜しっ我はココに、現世に還れりヌワ〜ハハハッ!!」

どうやら材木座は、普段の調子を取り戻した様である。

「うぜえ」「キモっ!」「やはり汚物は早急に燻蒸消毒するべきね」

八幡、由比ヶ浜、雪ノ下の三人は復活した材木座の様子にそう口にした。

その三人様子にヤンは、苦笑を漏らし、材木座は恐れ慄いて身を縮

めている。

特に雪ノ下が口にした、某世紀末救世主伝説のヒヤツハーしている人のセリフと石仮面をかぶって吸血鬼に成った人のセリフを混ぜ合わせた様な発言に最大の恐怖心を抱いたのだった。

「その女子二人、罵倒はその辺にしてくれない、でないコイツはホントに涅槃へ旅立ちかねないから：お前ら怖いよ、後怖い」

「所で材木座君、このプロットから察するに君は小説、ジャンルはライトノベルを書こうとしているのではないかと思うんだけど、間違いないかな」

「うむ、その通りだヤン殿、まさに我がしたためしこのプロットはライトノベル、所謂ラノベのプロットである！」

ヤンの質問にしたり顔で答える、材木座の様子に、ふむ、とひとつ頷き更に質問を続ける。

「そしてこれまでの話の流れから、以前に実際に小説を書いてここに居る皆の批評とアドバイスを受けたと言う事だね」

そしてその後ヤンの口から出た言葉に部室内の空気が凍り付く。

「もしもその作品が残っているのなだったら、一度読ませて貰えないかな？」

ピシッ!!

氷が砕けたかの様な音が部室内に木霊した(勿論それは幻聴であるのだが、質問した本人のヤンと由比ヶ浜を除く)

「おいヤン悪い事は言わない、止めておけ精神を病むぞー!」

「甚だ不本意では有るのだけれど、私も比企谷君と同意見よ、人生における最も無駄な時間を費やす事になるわよ」

「えくとね、なんだか難しい漢字が沢山書いてあって意味分かんなかったよ」

三者三様それぞれが材木座の小説を読む事を思い止まらせ様と説得?を試みるのだが、まあ材木座君がその作品を持っていければの話だよ、とヤンは三人に語り改めて材木座へと問い直す。

両手を下ろし拳を握りしめ、材木座は身体を震わせながら小さな声でいった。

有る……と。

カバンの中から取り出した原稿用紙の束を材木座は、震える手でゆっくりと取り出しそれをヤンへと渡した。

材木座曰くこの作品は己に対する戒めとして常にカバンの中に入れてあるとの事、かつてこの奉仕部へと持ち込み酷評を受けて、自信を打ち砕かれた拙い作品。

そうであっても材木座にとっては、初めて書き上げ評価は散々であったが、初めて他者に眼を通してもらった作品、いつかコレを上回る作品を書き上げるとの決意を忘れぬ為に、コレを側に置いていた。材木座はヤンへ原稿を渡し「ではヤン殿、コレは貴殿に預けよう、私の処女作、評価の程の宜しくお願いする」と言い残し退室して行った。

テーブル上の、材木座より預かった原稿用紙の束を、眺めつつヤンはコレを読んだ三人に感想を聞く、尤も由比ヶ浜だけはマトモに読んではいないのだが。

雪ノ下曰くそれは小説と呼べる物では無い、文法も何も有った物では無く、読み進めくことに苦痛を伴う物。

八幡曰くそれは所謂パクリ、材木座の好きな漫画やラノベ、アニメ等のシチュエーションのツギハギ。

ヤンはその二人の評価に何とも言えない複雑な表情を浮かべ、コレは早まった事をしたかと、ほんの少し後悔した。

ヤン・ウエンリーの日本での住居は、千葉市内の閑静な住宅街にある、八階建ての、外観から察するに割と築年数は経っている様に見える2LDKのマンションである。

室内は彼が持ち込んだ数千冊に登る書籍を収めるための本棚で埋り、その数は今後更に殖えることは容易に想像出来よう。

その為リビングその他は生活空間として、そして寝室としても使っているのだが、その空間は入居より僅か十日余の時間で散々な有り様となっていた。

コンビニやスーパーの弁当の容器やペットボトル、ビニール袋や書店の紙袋等が散乱しているのだ、流石にビールの缶などは無いのだが。

「やれやれ我ながら、十日余で随分と汚したものだな…この惨状をキャゼル又先輩辺が見たら何というだろうな。」

と自分で汚して置きながら何とも呑気な物言いである。

『やはりお前さんは、ユリアンが居なければまともな生活など出来る訳が無いんだ、社会生活不適格者の面目躍如、いや本領発揮と言った所だな』

前世における士官学校からの付き合いの六歳年長の毒舌家の先輩ならば、その様に言うのではないか、そして鉄灰色の髪の反骨精神溢れる後輩辺がそれに同調する光景が容易に想像出来た。

「これは、今週末は掃除をしなければならないな」

この言葉が実行されるかどうか、それは誰も、ヤン自身も含めて知る由もない。

食事と入浴を終え、机としても使っているテーブルの上に、材木座の原稿を置きヤンはソレを読み始める。

ヤンが材木座の原稿を読み始めた頃、比企谷家では、食事と入浴を終えた八幡が、リビングのソファに腰を下ろし、彼の妹の比企谷小町と共にゲームに興じていた。

両親共働きの比企谷家では、両親の帰宅時間はかなり遅く家族四人が揃って夕飯を食す事は滅多な無かった。

そしてこの日もご多分に漏れず兄妹二人だけの夕飯の後、僅かばかりの時間を二人で共に過ごしていた。

二歳年下の自分とは違いコミュニケーション能力も高く、要領も良く、少し生意気で時に兄である自分を残念な物を見る様な眼で見ているが、愛嬌のあるこの妹を八幡は溺愛している。

コントローラーを手に持ち、モニターを見やりながら八幡は何気なく思うのだった、今頃ヤンの奴は材木座の原稿を読んでいるんだろう

など。

そんな八幡の様子を目敏く見とがめたのか「ねえお兄ちゃん」と小町が八幡に話掛け、八幡も返事を返す「おう、なんだ小町？」と。

八幡の返事に小町はコントローラーを手にモニターに視線をロツクしたままに何気なく「ヤンって誰？」と尋ねる。

小町のその一言の質問に『ええ？もしかして俺考えてた事口に出た？』と内心に焦る、これは彼の悪癖といえるのだろうか考えてた事を気付かぬ内に口に出している事が八幡には度々ある。

「いやまあ、アレはアレでアレだからアレなんだ」と何故だが八幡は言い淀んで変な事を口走ってしまう。

どうにも八幡は三年ぶりに再会し、かつての約束を果たしてくれたヤンの事を妹に紹介するのがどうにも照れくさいようだ。

「うっわく何変な誤魔化しするかな、小町には言えない様な関係の人なの？小町的にポイント低いよゴミイちゃん」

言い淀む八幡に、小町はじつとりとした眼を向けながら謎のポイントをつけた後、溜息をひとつ着き「まあいつか」とひと言呟きゲームのコントローラーをぽいっと放り、テーブルの上に置いてあった携帯電話を取り、誰かに電話を掛け始めた。

八幡は訝しげな眼で小町を見つる、コイツ電話で何する気なんだと。

「あつもしもし結衣さんですか、小町ですこんばんわく、今大丈夫ですかあ？」

どうやら小町は由比ヶ浜から情報を引き出す事にした様である。

、小町恐ろしい子、八幡は妹のコミュニケーション能力が、自分の周りの他者にまで及んでいる事に戦慄を覚えた。

ヤンが材木座の小説を読み終えた時、既に時間は、時計の針が重なり合い天を突き刺す時刻をかなり超えていた。

首と肩廻りを軽く叩き、凝りをほぐし身体と精神の疲れを追い払うかの様に、軽く溜息を着き。

「ふう、漸く読み終えたか。さてとこれを踏まえて、彼に対してどの様にアプローチをするかだが……」

材木座が納得をしてくれる意見を、出来る事なら今後の彼の創作活動に、ほんの少しだけでもプラスになる様なアドバイスを送れるか。

ヤンは検討を始める。

翌朝、総武高校二年F組の教室では、隣り合った二つの席に座る二人の男子生徒が、揃って机の上に突っ伏し、一人は寝たふりを、もう一人は寝息をたてていた。

ヤン・ウエンリーと比企谷八幡の二人である。

八幡は、他者との関わりを避けるために良くこうして、寝たふりをしているのを知っているのは何時もの事と余り気にする者は少ないが、転校間もないヤンが八幡と同じ様に、伏せて居る光景は教室に居る事が珍しく思ったのか、チラチラとヤンを観る者がそれなりに居た。

そんな中、二人に近づくと生徒が居た。

「ヒツキー、ヤン君やつはろー、早く起きないともうすぐHRの時間だよ」

それは、彼らと同じ奉仕部に所属する、由比ヶ浜結衣である。

ヤンの転入以来、彼女はこうして朝や休憩時に良く話掛けて来る様になった。

「……ああ」由比ヶ浜にチラリと眼を向け、さも面倒臭そうに、のそりと上体を起こす八幡と未だ起きる気配の無いヤン。

「ありあゝヤン君起きないねヒツキー、大分お疲れなのかな？」

少しだけ心配気な様子でヤンの様子に由比ヶ浜は八幡へ問う、大層夜遅く迄材木座の小説を読んで精神力と睡眠時間を削ったんだろう、由比ヶ浜へ八幡はそう答え彼女は、ああそれでかと納得し微笑気味に頷く。

だが間もなくHRの始まる時間、ヤンをこのままにしては置けないと、再度ヤンを起こすべく由比ヶ浜は再び声を掛けると漸くヤンも眠

るのを諦めたのか、その身を起こし眠気眼を見開いた。

「うわ〜っ!!ヤン君の眼がヒツキーに成ってる!大変だ!」

「おい!由比ヶ浜さり気に俺の眼をディスプレイするのは止めてくんない、俺泣いちゃうよ」

「あはは、ごめんヒツキー」

二人のやり取りをぼんやりと眺めるヤンの意識は未だ半覚醒状態で眼の下にクマが出来ており、どんよりとしたその顔は確かに酷い有り様である。

結局ヤンは昨夜はほぼ徹夜してしまい二時間程しか睡眠時間を取れなかったのだが、睡眠を至上のものとするヤンにはベッドとの蜜月の時間がその様な僅かな時間で終焉を迎えた事が残念でならないのだが、しかしそれはまだ八幡や由比ヶ浜達は知らぬ事である。

昼休み、昼食を簡単に済ませヤンは奉仕部の部室を訪れた。

雪ノ下と由比ヶ浜が、部室で昼食を摂っていると聞いていたヤンは、自分も部室を借りようと思い訪れてみたのだ。

扉をノックし二人がいることを確認、挨拶し部室を使いたい旨を二人に伝え部室内の隅に一纏めにされている使っていない机を三つ並べると。

「レデイの前だけど失礼するよ」そう断りを入れ靴を脱いで机の上に寝転んだかと思ったら、あつと言う間に寝息をたて始めてしまった。

「あははっ…ヤン君今日はお疲れ見たいだね、あんまり寝てないんだって、晩くまでまで中二の小説読んでたんだろうね…。」

「…そうなのね、私も同じ経験をしたから分からなくもないけれど…。」

「アハハ…ゆきのんもアレ読んだときすっごい疲れた顔してたよね。」

昼寝を始めたヤンに少し批難がましい眼を向けていた雪ノ下だったが、由比ヶ浜の言葉に自分も同様だったと思出し、ふと笑みをこぼした。

「ねえゆきのんどうしたの？なんか楽しそうな顔してるよ？」

「フフフツ：今思い至ったのだけれど由比ヶ浜さん一応あなたも含めて、私達奉仕部の部員は皆アレに目を通したのかと思うと、何だかおかしく思えてしまったのよ。」

「えゝ何であたしだけ一応なの!？」

「貴女はまとも読んではいないでしょう」

確かに由比ヶ浜はザツと目を通しただけで、材木座の小説をきちんと読んではいなかった。

「うゝ、そうだけどき…」雪ノ下の言葉に由比ヶ浜は不満気に項垂れるしかなかった。

「それで思ったのだけど、もし今後この奉仕部に入部希望者が現れたら入部テストとしてアレを読んで彼へアドバイスをする事それを持ってこの奉仕部入部の洗礼とする、と云うのはどうかしら？」

得意気な笑顔を由比ヶ浜へ向け、彼女に同意を求める雪ノ下であったが、当の由比ヶ浜は。

「うわゝつ、やな洗礼だ!!」と言い放つその言葉通りに心底嫌そうに。

昼休みも終わりの時間が近付いてきた頃合い、まだ眼を覚まさないヤンを、雪ノ下と由比ヶ浜は部室を片付ける為に起こそうとするのだが。

『ユリアン後五分……』寝惚けているヤンの口から漏れ出た言葉は、英語をベースとして作られた自由惑星同盟の公用語であった、なので。

「ねえゆきのん今の英語？」とヤンの寝言が由比ヶ浜には理解出来ず成績優秀な雪ノ下に尋ねる。

「ええその様ね、私達をユリアンと言う人と間違えているみたいだわ。」

留学経験の有る雪ノ下には聴き取る事が出来ていた。

「ヤン君、私達はユリアンと言う人では無いのだけれど、昼休みも間もなく終わりよ、いい加減起きてもらえるかしら」

雪ノ下の再度の呼び掛けに、漸く反応したヤンはその身をのそりと起こし、頭を搔きながら呟いた。

「辺塞寧日なく北地春晩しか、やれやれ面倒な事だね、しかしお陰で幾分サツパリしたよ、ありがとう雪ノ下さん、由比ヶ浜さん。」

目を覚ましたヤンの顔色は僅かな時間とは言えど睡眠を取ったお陰で午前中に比べると少しマシな状態になっていた。

ヤンが部室を退室し雪ノ下と由比ヶ浜は部室の後片付けをしながら先程のヤンの寝言が気になっていたのか由比ヶ浜が興味津々雪ノ下へ問うてみた。

「ねえゆきのん、さっきヤン君が寝言で言ってたユリアンって人がさヤン君の彼女かな？」

「…はあ由比ヶ浜さん、おそろく言葉の響きから貴女はそう思ったのでしょうけれど、ユリアンと言う名は男性の名前よ。」

「えっ、そうなの！…そっかあ何か残念…でもヤン君に彼女居たらどんな人だろうね。」

「そうね、お酒が好きだなんて公言する問題児な彼の手綱をしっかりと握る事の出来る、毅い女性ではないかしら。」

二人はヤンの事を話題にしながら、互いの教室へと向かい歩いて行った。

そして迎えた放課後、奉仕部部室には四人の部員と剣豪將軍こと材木座義輝の計五名が集っていた。

部員四名はテーブルの定位置へ着席し、依頼者である材木座はヤンの正面に、椅子を用意し着席した。

テーブルを挟み向かい合うヤンと材木座、そのテーブルの上には材木座の小説原稿が置かれている。

「さて、ではヤン殿聞かせてもらおうではないか、貴殿の意見をな！」

何時もの如く胸元で腕を組み、踏ん反り返り鼻息荒くその様に言う。

「…：…そうだね、確かに八幡と雪ノ下さんの言う通りだと思ったよ、

それは材木座君自身も理解しているのだろう。」

「そうだろう、と言いたげに無言で八幡と雪ノ下は軽く頷く。

「うっ、うむであるな、確かに我自身それは拙い作品であったと認めるのもやぶさかでは無い。」

「少し確認したいんだが、材木座君は普段読んでいるジャンルはライトノベルや漫画が、メインなのかな他のジャンルの作品等は余り読んでいないのでは無いかな。」

「うむ、まあ概ねヤン殿の認識で間違えては居らぬな。」

材木座の小説を読んで感じた事を確認し材木座の返答にヤンは軽く頷く、そしてヤンは自身が感じたその問題点を指摘する。

「まずは知識だね、文体文章表現から感じた事は先ずそれ、結局は君がこれまで読んできたライトノベルや漫画のシーンを借りてきただけだから結局の所それ等の縮小再生産でしかない。」

以前に八幡が言った様にこれは所謂パクリだよね。」

材木座は以前奉仕部へ持ち込んだ際に雪ノ下に指摘された時と同じ様な言い訳をヤンに対してしどろもどろ述べ、ヤンは一旦材木座を留めさせこう述べた。

「ただね私は全てのパクリが駄目とは思わないよ。」

ヤンのその言葉に材木座はキラリと眼鏡とその奥の眼を輝かせヤンを見つめ彼の次の言葉を待つが、八幡と雪ノ下はヤンのその言葉に怪訝そうに眼を向ける。

「過去からこれ迄に、地球上の多くの国でおおくの人が沢山の創作物を創り上げてきた、書物もまた然りさだから後になればなる程過去に似た様な物が有ったと言われる事が多くなるのは必然ではないかな。」

「ヤンの言う事にも一理有るな、人間の発想力何て限界も有れば、地域や時代人種何かでも似た様な発想になるだろうしな。」

「そうね、確かに世界の各地に散らばる古代の神話などにも類似点が見受けられるものね。」

ヤンの発言に対して八幡と雪ノ下は肯定の意を示し材木座は言葉を発せず静かに聞き入る。

「だから言い方は悪いけどパクリ元となる物、例えば偉人伝等から人物のエピソード等を拝借してキャラクターの肉付け何かも出来るだろうし。」

歴史書や戦史等から事件や戦略、戦術を学べばそれをアレンジしたエピソードを構築出来るんじゃないかな。

それから、君が普段読まない読んだ事の無いジャンルの作品に眼を通して、まあ文法等の基本は押さえるべきだとは思うけど、色々な文章表現の方法を学んで見てはどうだろうか。」

そこでヤンは言葉を止め美味なる紅茶を口に含み材木座は腕を組んだまま唸り考え込んでいる、ヤンの意見を吟味して居るのだろう。

ヤンは微笑を浮かべた表情で材木座を見つめ再び語り始める。

「昨日の君のプロットを見ても、感じたんだけど今現在君はそれをやっていないからパクリ感が隠せていないんだと思うんだ。」

それに付随してリアリティが足りてないんだよ……かの有名な岸辺露伴先生も言っていただろう、大事な物はリアリティだね。」

尤も流石に蜘蛛を食べるとまでは言わないけど。」

「おおっ！何とヤン殿はジョジョを読んでおられるのか!!」

ヤンの口から岸辺露伴の名が出た途端材木座はこれ迄に無い程の食いつきを見せた、歴史書だの他ジャンルの作品だのには材木座の食指が動かないのだろうが具体的に自分か知る作品のタイトルの例として出された事でヤンの意見をとっつきやすく感じたのだろう。

「うん、以前八幡に教えてもらってねそれ以来読んでいるんだ、とまあ私の事はともかく、どうだろう材木座君私の意見は受け入れてもらえるだろうか。」

なんてねハハハ私も偉そうな事を言ってるな。」

材木座は、ヤンの言を受けそれを吟味するかの如く、唸ったりブツブツと呟いたりしているのだが、どうやら材木座はそれを受け入れている様には見えない。

「……色んなジャンルに手を伸ばすと言っても、我も色々忙しくてな、時間が取れるかどうか……うむう、どうすべきかな。」

「忙しいってもお前、どうせラノベか漫画読んでるかアニメ見てる

か、格ゲーかなんかやってるくらいだろう?」

八幡がすかさず材木座の態度に突っ込むそしてそれは概ね正解であろう、材木座はギクツとばかりに身体を引く付かせて、吹けもしない口笛を吹くふりをして誤魔化している。

「一時の快樂の為に己のレベルアップのチャンスと方法を物にしようとしないなんて、財津君? 貴方の小説へ掛ける情熱はその程度の物でしか無いと言う事なのね、これでは何時まで経っても成長の見込みは無いわね。」

「中二つてさ前にゆきのんとヒツキーが言ってた事ちゃんと言いつて無かったんじゃないの、そんじゃヤン君が何言つても意味無いじゃん。」

女子二人の集中砲火に、材木座は反撃も出来ず身体を丸く縮め嵐が過ぎ去るのを待つばかりと云う状況に置かれ、見かねたヤンは二人を諫め再度材木座へ語りかける。

ヤンは内心に溜息を一つ吐きつつも覚悟を決め『やはり反則技を使わざるを得ないかな』とあまり気は乗らないが遂にあの物語を語る事にした。

「これから私が話す事は、ココだけの秘密と言う事にしてもらいたいんだが、

何と言うか余りにも荒唐無稽過ぎて誰かに知られたら心の病気だと思われかねないからね。」

皆の視線がヤンへ集まり、その発言の続きを待つ。

「実は私は…千六百年後の此処とは違う平行世界で一度死んでこの時代、この世界に転生して来たんだ…」

ヤンの告白に奉仕部の三人は、何を言っているんだコイツはと言いたげな眼を向け、そして材木座は、眼鏡の奥の眼を輝かせた。

その眼は自分の同類を発見した歡びに溢れていた。

魔術師は銀河の歴史を語る。 始

ヤンの突然の発言、自分は異世界の未来人で有るとの発言に、奉仕部の三人がヤンを見る目はまるで残念な者を見るかの様な、言わば材木座に対する視線と同等の物へと変わって行った。

『ははっ、まあそうなるだろうな。』

内心そう呟くヤンである、ヤンにとつては前世に於いて実際に体験している現実であつたとしても、それを証明する術など有りはし無いのだ、宇宙暦の彼の居た世界に当たり前に存在していた、宇宙船のエンジンとなる核融合炉も、亜空間航法の技術の実用化も為されてい無い西暦の21世紀の初頭のこの世界なれば致し方無い事で在ろうと言ふものだ。

尤も、そのヤンの元いた世界に於いても21世紀は未だその技術は実用化に至つてはいなかつたのだが。

「まあ皆が今の私に対してどういった感情を抱いているのか、なんとなく解つてはいるつもりだが、取り敢えずは少しばかり私の昔語りにつき合つてはもらえないかな。」

奉仕部の三人と材木座にヤンはそう語り掛ける、材木座は顔を上下にブンブンと振りながら、「ヤン殿是非語つてはくれまいか！是非に是非に！」と椅子から身を乗り出し興味津々と言つた様子でヤンへ話をせがむ。

対して奉仕部の三人は、『話したいなら話せば良いんじゃないやね』位の気持ちか。

コクリと軽く頷き、紙コップの紅茶を一口啜り、「では…。」と前置きをし、ゆつくりとかたりはじめた。

「この地球を含む太陽系から1万光年以上彼方に存在する、バーラト星系第4惑星ハイネセン…私は、そのハイネセンを首都星とする、星間国家フリー・プラネッツⅡ自由惑星同盟と云う国家に属する軍人だつたんだがね。」

一旦言葉を区切り、ヤンは癖であるかのように、その収まりの悪い黒髪の頭を掻き、「ふう。」と息を吐き、話を続ける。

「色々つまあ紆余曲折が有つてだね、最後は暗殺されてしまつてね……気が付いたらこの世界に転生していたんだ……。」

ヤンが其処で口を噤み、その場は沈黙に支配された。

されたのだが、その沈黙はほんの僅かな時間であつた、その沈黙を破つたのは材木座である。

「何と暗殺とな、うぐむ、暗殺のターゲットとされるとは、もしやヤン殿はその自由惑星同盟に於いて高位のソレこそ一軍の指揮官たる軍人であつたのでは御座らんか!？」

暗殺のターゲットとなる物、それは主に時代のキーパーソンとなる者、その者の存在が己にとつて不利益となる存在、政治家や軍人等がその対象とされる事が多いと云う事は、歴史が証明している。

故に材木座が、ヤンの当時の立場が高級軍人ではないかと予想するのも当然と言えよう。

「うん、宇宙艦隊の司令官でね、まあ最終的な階級は元帥だつたんだ、尤もその国も滅亡したんだけどね。」

「なんとお！凄いで御座らんかヤン殿、宇宙艦隊の司令官でしかも軍の最高位である元帥とは、將軍たる我よりも上の階級とは、恐れ入りましたぞお！」

ヤンの応答にいちいちオーバーに反応する材木座の様子に、何だかヤンは愉快的な気持ちがあつていた。

奉仕部の三人はそんな材木座の反応にウンザリとしているのだが。

「ははっ、ありがとう材木座君、では続きを話させてもらうよ、そうだな先ずは……。」

ヤンは語り始める、先ずは彼が元いた世界の西暦から宇宙暦へと至る、謂わば物語のプロローグたる前史。

2 大国の対立より始まる全面核戦争とその後の混乱の時代、それを乗り越え生き残つた人類による再建の時代から宇宙への進出。

太陽系内の惑星開発による生存圏の拡大、人口の増加、やがて技術の確立により実用化されるワープ航法。

外宇宙への進出、人類が居住可能な惑星の発見により、更に拡がりを見せる人類の生存圏。

地球圏に居残り巨大な経済力と軍事力により、外宇宙へと移住した宇宙移民者に不正な状況を科す地球政府。

やがてそれは取り返しの付かない事態となり、地球と宇宙移民の対立、最終的には地球は宇宙移民者達に敗北し、その主権を剥奪され、宇宙の、その辺境の人類社会のその後の発展に何らの寄与もしない、忘れられた1惑星へと墜ちていった。

地球より主権を勝ち取った宇宙移民国家だがその後、彼等自身も対立、内乱により人類社会の安定した状況の訪れには今少しの時間が必要であった。

やがてひと時の安定を見た人類社会、銀河連邦は西暦を廃止、宇宙暦へと年号を改めた。

「……と言う訳で西暦2801年を以て西暦は廃止され、宇宙暦元年と改まった訳さ。」

正味20分程の時間を掛け、あらましを語ったヤンは残り少ない紅茶を啜る、流石に季節は初夏でもあり、其れだけの時間話をすると喉も乾くだろう。

そして紙コップの紅茶を全て飲み干したヤンは、名残惜しそうにそれを見てからの紙コップを卓上に置いた。

そして部室内に居る人達に目を向けてみた。

材木座は兎も角として、奉仕部の三人の表情はヤンが話を始めた頃の表情とは打って変わっていた。

彼等の表情から伺える物は、ヤンの話に対する関心と興味の色、あの雪ノ下でさえもが、ヤンの語る物語の世界に引き込まれていた。

「…すまんヤン、正直ここ迄本格的な物とは思わなかったわ、続きがすっげえ気になるわ。」

「…誠に遺憾ながら、私も彼と同意見だわ…遺憾なのだけれど…。」
「…お前何なの、何で態々遺憾を強調してくれちゃてんの、止めてくれる、俺悲しくて泣いちゃうよ。」

「あら、私は必要だと思ったから強調したのであって、何ら貴方に含む処など無いのだけれど、被害妄想もいい加減にしてもらえないかしら、妄想ヶ谷君。」

含みまくりだよね、絶対に…尚も続く八幡と雪ノ下のいつものやり取り、由比ヶ浜はそんな二人の様子を苦笑いしながら見つめている。

「アハハ、でもさ、本当に凄いなと思うよ、あたしゆきのんやヒツキーみたいにあんま、頭良く無いけどさ、今のヤン君の話、凄く解りやすかったし、続きが気になるよ。」

「うむ、左様であるな、ヤン殿是非話の続きを語ってはくれまいか！」

実際の所、ヤンは公の場でのスピーチ等は面倒くさがり、一言で済ましてしまう様な男なのだが、部下への作戦指揮や説明等の手間は惜しまなかった。

作戦遂行上、秘匿しなければならぬ事柄を外してだが。

部下との意思の疎通を図る為に頻繁に会議を開き、ヤン提督の会議好き等と揶揄されていたりもしたのだ。

彼の養子であったユリアン・ミンツなどはヤンの語る思想、歴史観、国家観、軍事観等の影響を多大に受け、それがヤンの死後（ヤン自身は知らぬ事であるが）イゼルローン共和政府をフレデリカ・グリーンヒル・ヤンと二元に率いる上での指針と成った事は言うまでもないであろう。

「…ありがとう、そう言つて貰えると私も話し甲斐があると云うものだよ…：ではお言葉に甘える事としようか。」

その言葉の後、再び魔術師は語り始めるのだった。

銀河連邦の樹立により、繁栄の時を歩む人類だが、その内外には当然ながら問題を孕んでいた。

そのうちの一つが宇宙海賊の存在だ。

その宇宙海賊の討伐に辣腕を揮った、カリスマ的軍人が居た、『ルドルフ・フォン・ゴールデンバウム』だ。

彼はその後、軍から政治の世界へと転身、そのカリスマ性と実行力で政界に於いて着々と地歩を固めてゆき。

政治の世界の頂点へと立ち、独裁的権力を手中に収め、遂には申請不可侵なる皇帝を僭称しゴールデンバウム朝銀河帝国の樹立を宣言、その初代皇帝の座に付き、銀河連邦議会を解体。

同時に宇宙暦を廃止し、帝国暦を制定した、それは民主共和制の崩壊の序曲、共和主義者達にとつての冬の時代の到来を告げる鐘の音であつた。

ルドルフは自分に与する者たちを要職に付かせ又、貴族の称号と特権を与え、帝国の地盤の強化に努めた、その一方で自分に反対する者には徹底的に排除、弾圧した。

其れは功を奏し帝国の基盤は盤石の物となる、数十億の人々の血に塗れた城の上に。

民主主義の復活にはそれから数百年の月日を待たなければならなかつた。

アルタイル星系、共和主義者達はその第7惑星、その極寒の惑星に於いて強制労働を科されていた。

極寒の劣悪なる環境での強制労働を強いられる共和主義者達の一入『アーレ・ハイネセン』は子供が氷を水に浮かべ遊ぶ様に天啓を受ける。

その惑星に無尽蔵に存在する天然のドライアイスを船体とする宇宙船を建造し仲間達と共に帝国より脱出、帝国の追つ手を振り切り新天地を目指した。

後に長征1万光年と呼ばれる旅路の果て、半世紀以上に渡る旅路の末に居住可能な惑星を発見。

ハイネセンを始め多数の死者を出しながらも辿り着いた惑星、其処で遂に民主主義は復活する、僅か十六万人の民主共和主義の信奉者達によつて。

自由惑星同盟の誕生と宇宙暦の復活はその惑星から始まつた。

脱出行の指導者、ハイネセンの名を取つて付けられその惑星ハイネセンにて。

「おおつ！遂にヤン殿の故国が誕生したのであるか、感無量であるな。」

「ああ、でも怖いな何十億もの人を殺しておいて、それが全体の数パーセントに過ぎないとか、言つてしまえるメンタルがよ、やっぱ社会は怖いし外は怖い、家の中最高だよな、改めて思うわ専業主夫こそ、

俺が目指すべき道だつてな。」

「……はあ、全くこの男は……現実を見なさい、貴方の様な男を養う様な奇特な女性が何処の世界に居ると言うの、夢を見るのは結構だけれど、それは自室で一人ひっそりと見なさい、夢見ヶ谷君。」

「……人の苗字を弄くるの止めてくれる、てか夢見ヶ谷とか随分メルヘンチックにしてくれちゃつて、可愛いなおい、俺には似合わねえ。」

またもや始まる二人の掛け合い、それをヤンは微笑ましげに見ていたが、はたと気づいたように、左手の掌に右手を打ち付けた。

「そうか！ 専業主夫かなる程その手が有ったか、いや八幡、君は中々の慧眼の持ち主だね……うくん、専業主夫か、いい考えだな……。」

八幡の何時も語る戯言に心底感心した様に、ヤンは何度も専業主夫と言う単語を呟くのだつた。

「おうヤン、やっぱお前は俺と同じ類の人間だよな、そうさ専業主夫万歳、目指せ専業主夫、誰か俺を養つて下さいお願いします。」

世間一般的に余り褒められる様な事では無い目標を掲げ、意気投合する二人の様に雪ノ下と由比ヶ浜、女子二人の冷たい眼差しが向けられる。

「ヤン君、貴方は彼を慧眼の持ち主と言つたけれど、私から言わせてもらうなら、真の慧眼の持ち主は、平塚先生よ、比企谷君に続いて貴方という問題児の存在を見抜き、此処へこうして送つて来たのだから。」

こめかみに手を当て、やれやれ呆れたと意思表示をしながら雪ノ下は、平塚教諭こそが慧眼の持ち主と宣いながら椅子から立ち上がり、ティーセットが置いてある場所へと向かう、彼女はヤンの為にもう一杯紅茶を淹れるつもりなのだ。

その行動を見ていたヤンはそれが自分の為であると理解していた、だから。

『いやはやどうしてこの少女は、結構な毒舌家では有るのだろうか、その為人は他者に対し気配りが出来て、それでいて優しい心根を持った少女なんだな。』

雪ノ下雪乃と言う少女に懐かしい人達の姿を重ね合わせた。

『キャゼルヌ』『アツテンボロー』『シェーンコップ』と云った毒舌家として知られる彼の幕僚であった者たち、無論彼女とは性別からして違うのではあるが、そしてその彼女の紅茶を淹れる姿にあの少年の姿が重なる。

生活人として至らない所だらけの自分の、家族となってくれた『ユリアン・ミンツ』の姿を。

「あつ、あのさヒツキーあたしさ、やつぱ旦那様にはちゃんと働いて欲しいんだ……。」

それまでの冷めた視線を二人に向けるのを止め、由比ヶ浜は八幡へ思いを伝える、その頬を朱に染めて。

「……おう、そうか、まあ頑張つて旦那捕まえろよ……つかお前こそ専業主夫志望の旦那捕まえた方が良いんじゃないかねえか、お前の料理を食わされた日には、その旦那死んじゃもうからな。」

「ひどつーあたし死なせないかね、ちゃんと料理作るし！これからママに習うし、ヒツキーの事びっくりさせるんだからね!!」

「……何で俺がお前に吃驚させられないといけないのかはさて置きだな、お前これから習うんじゃないやなくて、習ってから言えよ。」

何気なしに、ヤンは八幡と由比ヶ浜とのやり取りを見ていたのだが、由比ヶ浜の態度と言葉は（元来色恋沙汰には疎いヤンではあるが）、ヤンにさえ解ってしまう程に由比ヶ浜の八幡に対する想いは見え見えであった。

『八幡、君は気が付いているのかい、由比ヶ浜さんの想いに、気が付いていながらその想いに蓋をしているのか、それとも本当に気付いていないのかな?』

神ならぬ身のヤンに他者の心の声を聞く事など出来よう筈は無く、ましてや色恋沙汰など他人があれこれと介入すべき事では無い。

精々傍から見守らせてもらうか、そう思うヤンであった。

「……ヒツキーの鈍感……。」

由比ヶ浜のその小さな呟きは、恐らくは誰にも伝わってはいないだ

ろう、それ程に小さな呟きだったのだから。

「我なんか、蚊帳の外……。」

材木座の切ない呟きは、由比ヶ浜のそれとは違い皆に聴こえた様だが、華麗にスルーされた。

「八幡よ、お主我にかまうのだ、かまってくれなければ我泣いちゃうぞ、男泣きに泣きわめくぞ良いのだなそれで、泣くぞ、泣いちゃうぞ！」

「……うぜー。」

雪ノ下が紅茶を淹れ終え、ヤンへ渡し再びヤンの語りが再開される迄材木座の

絶叫は続いた。

雪ノ下に謝辞を示し改めてヤンは話の続きを語り始める。

魔術師は銀河の歴史を語る。 続

「いやあ甘露、甘露ー」

雪ノ下の淹れた二杯目の紅茶を一口啜り、ヤンの口から紡がれた最初の一言がそれだった。

「…何だか色々脱線してしまったけれど、話を戻そうか……。」

「…何か、色々すまん……。」

脱線の原因となった一言を口にした八幡が、ヤンへ詫びの言葉を告げる。

確かに一言目となった専業主夫発言だが、ヤンもその発言に乗ってしまっている身なのだから謝罪は不要であろう。

気を取り直し、再び、ヤンの口から紡がれる、銀河の歴史が。

『距離の防壁。』国父『アーレ・ハイネセン』の死後、帝国領より脱出した共和主義者達の実質的指導者『グエン・キム・ホア』が残した言葉だ。

同盟領と帝国領の間には宇宙船の航行を阻むサルガツソースペースが拡がっており、彼等が長い年月手探り状態で探し出した、イゼルローン回廊と呼ばれる細長い回廊の様な宙域を通らなければ航行は不可能であり、おいそれと互いの領土への行き来できないのだ（もう一つフェザン回廊と名付けられた宙域も有るのだが其処は後にフェザン自治領が発足、不文律により戦闘行為は行えない、互を国家と認め無い帝国と同盟は其処を通して間接的な国交が行われるようになる所謂三角貿易だ）

その言葉に従い、後進達は同盟の国力強化に努めた。

何と言っても最初の同盟市民は十六万人程しか居ないのだから、国家としての基盤を築くには人口を増やさなければ、やがては帝国もイゼルローン回廊の存在を知り、帝国に呑み込まれてしまいかねない、故に多産が奨励され。

徐々に国家基盤が固まり、着実に人口も増え軍備も整ってゆく。

同盟建国よりおよそ百年、遂にゴールデンバウム朝銀河帝国と自由惑星同盟との間に戦いの火蓋が切って落とされる。

時に宇宙暦640年／帝国歴331年、7月。

イゼルローン回廊出口付近に位置するダゴン星域における戦い、同盟軍は帝国軍の半数の兵力でこれを迎撃。

後に「ダゴンの殲滅戦」と呼ばれる様になる程の同盟軍の圧倒的大勝利に終わる。

それが、その後百五十年に渡り続く事になる、同盟と帝国による戦争の始まりであった。

「…万単位の数の宇宙艦隊による戦いかよ、規模がデカすぎて、何とも想像がつかねえな……。」

「…うむ、それだけの大兵力ともなると、艦隊の統制を取るだけでも一苦勞で在ろうな…。」

「そうだね、私の場合は艦隊運用の名人『フィッツシャー』提督、私の艦隊の副司令を努めて貰っていた人物なんだが、その彼に丸投げしていてよ…実際彼が居なければ、私の立案した作戦の実行は困難な物が多かつたからね。」

ヤン艦隊の屋台骨を支えてくれた、寡黙な男『エドウィン・フィッツシャー』、この時ヤンは彼を失ってしまった事を改めて悼み静かに目を閉じる、彼に対し黙禱を捧げかの様に。

「……………」

そのヤンの様子を、彼の隣に座る八幡は、じつと視ている。

此れまでヤンが語った話、ヤンの語り口調、話術にも拠るのだろうが、ここに居る皆がその世界に引き込まれている。

リアリティーのある設定、登場人物達の人格描写等…聴き進むうちに何時しか八幡はそれがまるで本当に有った歴史の物語を聴いているかの様な気分になっていた、もしかすると他の皆もだろうか。

そして今、『フィッツシャー』と云う人物について語ったヤンの表情と態度、其処に八幡はヤンがまるで実際に居た人、何らかの理由により会えなくなった、大切な人へと思いを馳せているのではないかと思ってしまう。

『……何考えてんだ俺、そんな事ある訳無いだろ、考え過ぎだつての

…』

ガリガリと頭を掻きつつ、八幡はそんな考えに至った自身の思考を否定する。

これ迄に経験して来たトラウマ故に、他者を観察し裏を探す様に人間になった八幡は、人の仕草や態度言葉からそれを読み取ろうとするのだか、今のヤンの様子は八幡から見て嘘を吐いている人間のそれには見えなかったからだ。

ダゴン星域での会戦による圧倒的な勝利により、自由惑星同盟の存在は帝国領全域に知らしめられた。

帝国領を脱しイゼルローン回廊を渡って来た亡命者を受け入れ、同盟の人口は更に膨れ上がった。

しかしその亡命者は、純粋な共和主義者ばかりでは無く、権力闘争に破れた貴族階級の者達迄も含まれており、その様な存在が混ざった事でやがて同盟は建国の理念を失い、変質を招く事となって行く。

同じく帝国も権力闘争や特権意識ばかりが肥大した貴族の有り様により、その内部は腐臭に塗れていた。

「イゼルローン回廊が帝国と同盟の実質的な国境となっていてね、この戦争はそのイゼルローン回廊付近で行われていたんだ、まあ国境紛争の体をなしている様なものさ、だから大規模な戦闘は年に1〜2度位かな。」

「1万光年以上の距離がある上に、万を超える兵力を運用するのですもの、そうおいそれと戦を仕掛ける訳にも行かないでしょうね。」

「同盟の場合は一艦隊の兵力は凡そ1万数千隻と云った所かな、1艦の乗員はオートメーション化が進んだお陰で数百人程度だけど、艦隊全体になると数はその1万倍以上だからね、ちよつとした都市の人口と変わらない数に登るんだ、それだけの人間に飯を食わせるとなるとその量だけでも膨大なものさ。そして戦争なんて物は、生産に何らの寄与もしない、ただ消費するだけの行為だからね、

愚行としか言いようがなよ。」

雪ノ下の発言に対するヤンの返答は、前世と変わらず、戦争を否定するものである、巨大都市一つ分の人口が一度の戦いで消えて逝く、

それも自分の出した命令により、敵味方関係なく。

「あら、ヤン君貴方は軍人だったのでしよう…今の発言を聞くと貴方はまるで軍人を嫌っているように思えるのだけれど、だったら何故軍人になったのかしら？」

「ああ、私は軍人が、そして戦争が嫌いだよ、外敵の存在が無ければ、そんな職業なんぞ無くなってしまえと思ってているよ、後で話すが私が軍人になった理由は訳有でね、嫌々ながら軍人を続けていた訳さ。」

そのやり取りはかつて彼の養子であった『ユリアン・ミンツ』との会話を彷彿とさせる物だった。

幾度となく語った戦争の功罪、事に罪の部分は彼の性分故にしつこい程に語り聞かせた物だ。

『でも提督はそんな軍人ではありませんよね、だから僕は提督の様な軍人になりたいんです、能力は追いつかなくとも、せめてその志だけでも。』

だが、ヤンがその思いを、思想を、語れば語る程に少年の軍人を志す意志は増して行った、ヤン想いとは裏腹に。

ヤン・ウエンリーは宇宙暦767年4月4日生まれた。

星間交易商人の父ヤン・タイロンとカ

トリーヌ・ルクレール・ヤンとの間の長男として誕生。

5歳の時に母親が死去、その後父親の所有する星間交易船で父ヤン・タイロンと共に幼少期から多くの時間を宇宙で過ごした。

「親父の奴は、骨董品を集めるのが趣味でね、私は物心が付いた頃からその骨董品を親父と一緒に磨いていた、と言うより磨かされていたと言ったほうがいいかな。」

ヤンはその独特の思想哲学を持つ父親に影響を受け育って行く、ある日ヤンは父親に質問した、『ルドルフ・フォン・ゴールデンバウム』について。

『ソイツは民衆が楽をしたがったからさ、自分たちの努力で問題を解決せず、どこからか超人なり聖者なりがあらわれて、彼らの苦勞を

全部ひとりでしよいこんでくれるのを待っていたんだ。そこをルドルフにつけこまれたんだ。いいか、おぼえておくんだウェンリー、独裁者は出現させる側により多くの責任がある。積極的に支持しなくても、黙って見ていればそれは同罪だ。』

とにかく専制政治、独裁政治は悪だとしか言わない同盟の世論とは見解を異にしたその意見はスリリングであった。

その様な父親の元で育ったからこそヤンは歴史に興味を持ち、歴史研究家を志したのかも知れない。

「大学の歴史研究学科に入学したいと言った時、親父はこう言ったんだ『まあ歴史で金銭儲けた奴がひとりもいなかったわけじゃない』とね。」

そう言つてヤンの大学進学を認めてくれたのだが、その後間もなく宇宙船の事故で父は急逝してしまった。

「遺された遺族に対する保険金や、取引先への違約金の支払い、それから借金もしていてね、その支払で私はほぼ無一文となつてしまったのさ。」

大学への進学の道を絶たれ、途方に暮れるヤンだが、それでも歴史研究の道を諦めきれないヤンは一つの道を見出す。

「それが同盟軍の士官学校、戦史研究科だったわけさ。」

「それでお前、士官学校に入学した訳かよ…それがさつき雪ノ下に言つた理由か…けど士官学校つて相当な成績優秀者じゃないと入れないんじゃないの、普通はよ…。」

「ハハハ…それなりに勉強はしたからね、まあ私の場合好きな科目や得意な科目は力を入れたけど、そうで無い物は極力手を抜いていたからね。」

55点以下が一つでも有れば即退学となつてしまう為、赤点を回避する為の必要最低限の努力はしたけれど、ヤンはそう締め括つた。

「はあ」雪ノ下はそのヤンのセリフに額に手を当ては溜息を吐く、もう何度目になるのか。

雪ノ下は、これ迄にも八幡の思考や、言動（常人の斜め下等と言われる）に対しそのポーズを度々取っているのだが、ヤンが奉仕部の部

員になってから、その頻度は更に上がっていた。

彼女にとってヤンもまた八幡と変わらぬレベルの問題児と認識しているのだろう。

同盟軍士官学校戦史研究科への入学を果たしたヤンであったが、その戦史研究家はヤンが2年次に廃止されてしまう。

それに伴いヤンは戦略研究科へと転属させられた。

戦略研究科は士官学校でもトップエリートコースであるのだが、ヤンにとっては何の価値も無い物であった。

「天才の誉れ高い首席の『ワイドボーン』に戦術シミュレーションで勝ってしまった為に、『シトレ校長』に眼を付けられてしまって、遺憾ながら戦略研究科へ転属したんだ。」

仲間と共に戦史研究科廃止反対の活動も行ったが、結局その決定は覆らなかった。

「へえ、どんな策で勝ったんだ。」

「うむ、それは我も知りたい、是非ともお聞かせ願いたい。」

ヤンが、どのような策を弄したのか、八幡と材木座はそれが知りたかった。

そしてヤンは、二人の希望に応えその戦術を語った。

相手の勝ち気を誘い戦線を伸ばさせた上、自身は受け身に徹し、伸び切った相手戦線と補給線のスキを付き別働隊で相手後方に位置する補給部隊を攻撃し、継戦能力を奪い勝利判定を勝ち取ったのだ。た。

「…ヤン、俺、お前の戦術すつげえ好きだわ。」

「うむ別働隊を以て補給線を断つか、何とも玄人好みの戦法だな。」
ヤンの取った戦法は男子二人には高評価であるが、女子二人には些か不評で有るようだ。

「でもさ、なんかそれってちよつと卑怯っぽいって云うか、何か、なんてゆうかだよね…。」

「そうね、やはり敵を倒すのならば、正面から堂々と叩き潰すべきよ、でなければ自分自身に対してその功績を誇る事も出来無いじゃない。」

由比ヶ浜はその気持ちを、言語化出来ず、もどかしく感じているのだ。

一方の雪ノ下も、これまた何とも彼女らしい感想を表明する。

これ迄敵対者を正面から叩き潰したとの自負が有る彼女らしい意見だ。

「正面から堂々とね…：そうだね私も敵に対し十倍の兵力を以て事に当たれるなら、多分そうするだろうね。」

そのヤンの返答にピクリと雪ノ下の額が引きつった、ヤンの言葉が彼女には皮肉と挑発の様に思えたのだろう。

キツと、雪ノ下はヤンを睨みつける、その発言の真意を語ることを促す様に。

「…雪ノ下さん、戦争に勝つには相手を上回る兵力を投入する事は、ごく当たり前の事だろう。」

「太平洋戦争、大東亜戦争とも言うが先の戦争でこの国が敗北したのも、結局は国力に於いて劣っていたからさ。」

「ワイドボーンとのシミュレーションは所詮はただの学校のカリキュラムに過ぎないが、それを実戦に置き換えて見るとしようか…：部隊を預かる指揮官として自軍を勝利に導くには、戦う前の段階、戦略の段階から口出ししたい所だが、まずはより精度の高い情報の収集、彼を知り己を知らば百戦して危うからずだ、それから綿密な補給体制を確立する事、古来より飢えた軍隊がともに勝った例は無いんだからね、そして相手に数倍する兵力を揃え、より確実に勝利を得る為に自軍に有利な戦場の設定をする、信頼が置ける有能な指揮官に兵を預けて、戦線に投入する。」

簡単に纏めるとそんな所かな。

だがただの一軍の指揮官たる身ではそこまでの口出しは、中々出来る物ではないからね、その権限が無い。

故に与えられた戦力で事に当たらなければならぬ。

ならば私は勝つ為では無く、負けない事を念頭に置いて戦う事を選択するよ。

さつきも言ったが1隻あたりの乗組員の数は数百人に登るんだ、と

云う事は1隻艦艇が沈む度に数百の命が失われると言う事さ、数百の命その一つ一つに背負っている物が有るだろう、その者の帰りを待っている人が居るだろう、恋人が妻子が、父母が居るだろう。

その死者の数に倍する悲しみが産み落とされてしまうんだ、だから私はその悲しみを少しでも減らす事が出来る様に策を練るのさ、例えばそれが堂々たる物で無く、姑息なものでもね。」

何も言えなかった、雪ノ下も由比ヶ浜も、そして八幡と材木座までもが。

それ程に重かったのだ、彼等にとってヤンが語った言葉は。

雪ノ下も由比ヶ浜も命の重さに対するヤンの考えの深さに沈黙を以てするしか出来なかった。

彼女達は、そこまでの考えには至らなかったのだと自覚させられたのだ。

ヤンの言葉は、とても自分と同世代の男子の言葉とは思えなかった。

自分よりも年長の者に自身の不明を諭された様な気持ちを抱いた。

「……ヤン君……ごめんなさい、私の考えが浅かったわ、貴方が戦争に對してそこ迄の思いを持っているなんて、私は想像もしていなかったわ……。」

「あたしも、ごめんなさい……よく知りもしないのに勝手言っ……。」

二人の少女は自身の発言に非が有ると認め素直に謝罪の言葉を口にした。

その事態にヤンを含む男子三人は、呆気に取られてしまい、思わず息を飲んでしまった。

正気に戻ったヤンは頭を下げ続ける二人の少女に、慌てながらその頭を上げるように懇願した。

「申し訳無い、私は何も君達の事を非難するつもりは無いんだよ、ただ何かを行う時にほんの少しだけで良いから、その周囲の事を考えて行動して欲しいと思ったただけであってだね……ああ参ったな、そんなに

思い詰められる様な事を私は言ってしまったのかな…ははっ。」

何とも、この様子では、今生に於いてもヤンは女性の扱いに手慣れる事が出来なそうである。

「それに私が、さっき言った様な考えを抱くようになったのは、戦場に出て戦争の現実を知ったからであって、士官学校の生徒だった時は、ただ単により簡単に勝つ事を考えていただけなんだ、それにこれは私の持論なんだが、軍人というのは敵を殺し、味方を死なせ、他人を騙したり出し抜いたりすることに明け暮れるろくでもない商売だ。どんなに言葉を飾ろうとその事実は変わらないんだよ。

だからだね、そんな商売を長年続けた私は、やはりろくでなしなんだよ。」

士官学校をごく平凡な成績で卒業したヤンは、自由惑星同盟軍に少尉として任官。

その勤務態度に対する評判は芳しく無く、『無駄飯食いのヤン』『穀潰しのヤン』等と揶揄される程であった。

ヤンの人生の転機が訪れたのは士官学校卒業より一年後、惑星『エルファシル』に於いて有る。

宇宙暦788年、21歳で中尉の階級にあったヤンは、惑星エルファシルに侵攻して来る帝国軍の艦隊より、民間人を脱出させる為の指揮を上官より押し付けられた際の事だ。

守るべき民間人を捨て、自分達だけでエルファシルを脱出しようとした、リンチ司令の艦隊を囮として、同惑星に居住する三百万人の民間人を一人の犠牲も無く脱出させた事により、ヤンは英雄へと祭り上げられてしまったのだった。

「全く迷惑な話さ、司令官の逃亡と云うスキャンダルを糊塗する為に、体よく英雄なんぞに祭り上げられてしまったんだからね。」

「テレビ出演だ雑誌インタビューだのと、分刻みのスケジュールを押し付けられて、辟易とさせられたものさ…だけどそのお陰で、出世もした訳だし、給料も上がり退役後に貰える年金の額も増えたし、こ

れも給料分だと割り切つてスケジュールをこなしたもののさ。」

ハイネセンへ帰還後、ヤンは大尉への昇進の事例受けた、更にその6時間後には少佐への昇進の辞令を受ける。

生者に二階級特進無し、その不文律がこの奇妙な人事の理由であった。

因みにヤンの軍歴、階級に於いて最も短いのが大尉で、最も長かったのが少佐であった。

ヤン・ウエンリー27歳、大佐となった彼は後の彼の後継者となる、一人の少年と出会う。

「なんせ百五十年も戦争が続いているんだ、毎年毎年、孤児や未亡人を量産し続けている様なものさ。」

「軍事子女福祉戦時特例法、発案者の名を取ってトラバース法と呼ばれる法案なんだか、要するに高級軍人の家庭で戦災孤児を養育すると言うものなんだ。」

15歳までの養育費が軍から支給されるが、それは貸与という形であつて、軍人にならなければ返還義務が発生する。度重なる帝国との戦争によつて増えた孤児への対策、と同時に減少する軍人の数、この2つの問題を解決する為の施策だ。

「要するに、子供の将来を金で軍に縛り付けてしまつても無い悪法だよ。」

そこ迄しなければ、兵力の確保もままならないんじや戦争なんぞ止めて、平和の路でも模索すれば良いのにさ。」

士官学校時代から付き合いのある6歳上の先輩『アレックス・キャゼルヌ』からの紹介で、彼はヤンの元を訪れた。

自身の身体程の大きなケースと小さな猫を連れ『ユリアン・ミンツ』とヤンとヤンの官舎にて対面した。

「ヤン君、後学の為に…そう、私の飽くなき知的探究心を満たす為に質問するわ、そのユリアン少年が連れていた猫さん…：…んっ、んんっ、その猫の種類とお名ま…名前を教えて貰えないかしら。」

雪ノ下はキラリとその瞳を輝かせ、その身を椅子から乗り出す勢いでヤンに質問をした。

この日語られたヤン・ウエンリーの話の中で、雪ノ下雪乃が最大の関心を示したのはこの話題であった。

「…出たよ、猫ノ下猫乃さん…。」

「アハハハ…ゆきのん、猫大好きだもんね。」

「貴方達、勘違いをしないで欲しいのだけど、これはあくまでも私の探究心に依る質問なのよ、そうあくまでも探究心を満たす為の質問なのよ。」

「モハハハっ！何を誤魔化す必要が在ろうか、雪ノ下殿。

人間誰しも、好きな物の一つや二…：たつ…：いえ、何でもありませんね…。」

雪ノ下に対して意見をしようとしていた材木座だったが、雪ノ下の鋭い眼光の前に、その意見を最後まで言えずにしゅんと押し黙ってしまった。

何ともメンタルの弱い男である。

「ああ、その私は生き物の種類とかそう言った物に詳しくなくてね、申し訳無いが分からないんだ、名前は『アドミラル』元帥と名付けられたんだ、家主である私はどうせ元帥になんぞに成れないだろうから、せめて猫位は元帥と呼んでやろうと周りの連中が言い立てたもので、その名になったんだ。」

「…：元帥、元帥さん、さぞや立派な猫さんなのでしょうね…：ぜひ会ってみたいものね…：。」

会うことなど叶わぬ、猫との出会いを夢見て雪ノ下は、暫しの間己の心の内にある、ニヤンニヤンワールドへとトリップしてしまった。

尚、彼女が、現世への復帰を果すまでに、数分の時間を必要とした。ユリアンとの出会い、共に暮らす日々の事を語るヤンの表情と声音には、それを聞く四人にも分かる程に、情愛の念に満ちていた。

「ユリアンが来たことよって、見違えた私の部屋を見てキャゼル又先輩等はどう言ったものさ、『有史以来初めてお前さんの部屋が綺麗になったのではないか』とね。」

私としては甚だ不本意な言われようなんだがね：等と不平を口にしながらも、表情はそれを裏切っていた、その事に気が付いていないのは、ヤン本人だけなのだ。

ユリアン・ミンツを養子として迎え、2年余の歳月が過ぎた、宇宙歴796年／帝国歴487年2月、准将の階級に在ったヤンは同盟軍第2艦隊、次席幕僚として出征した、アスターテ星域の会戦に於いて初めて彼と相對する事となった。

「帝国軍上級大将、『ローエングラム伯ラインハルト』正に時代の主人公と呼ぶに相応しい偉大な個性だ。」

アスターテ会戦、それは後に終生のライバルと位置づけられる二人の軍人。

ヤン・ウエンリーとラインハルト・フォン・ローエングラムが初めて直接相對した戦いである。

魔術師は銀河の歴史を語る。 終

「ほう、ヤン殿が其処まで評する人物で在るのか、そのラインハルトと云う御仁は！」

「ああ、彼は正に天才と呼ぶに相応しい人物だよ、この時彼は若干二十歳の若さで帝国軍上級大将に地位に就き、2万隻の艦隊を率いて同盟領へ侵攻してきたんだ。」

ラインハルトの台頭を快く思わない、門閥貴族達の企てによりリークされたであろう情報をフェザーン経由で入手した、同盟軍は第2、第4、第6の三個艦隊からなる、艦艇約4万隻の部隊を編成、これを迎え撃つ。

帝国軍艦隊に対し、前方に第4艦隊、右翼後方に第6艦隊、左翼後方に第2艦隊を配置、3方向から包囲殲滅せんと部隊を展開した。

ヤンはバググからノートを取り出し、大雑把に図に記してその時の状況を説明した。

「…まあ、これが拙かったんだ。」

「…ヤン殿、一体この状況の何処がまずいのであるか、3方向から敵軍を袋叩きに出来る様に我には思えるのであるのだがな？」

「材木座、俺にはこの状況態々戦力を

分散している様に思えるんだがな、4万対2万なら、正面から一方的にボコれんじゃねえの。」

「そうだね私も八幡と同意見だよ、狭隘な谷間の様な場所に相手を追い込めたならいざ知らず、この場合の戦場は広大な宇宙空間で、包囲網が完成しているとはいえない状況だ、だからローエングラム伯はこれを包囲殲滅の危機とは捉えずに、寧ろ各個撃破の好機と捉えそれを実行したんだ。」

そしてヤンの口より語られるアスターテ会戦の推移。

帝国軍は自軍の前方に位置する、最も数の少ない第4艦隊を急襲これを撃破、

次いで右翼に位置する第6艦隊を続いて撃破、ヤンはその攻撃で第

6艦隊に勤務していた士官学校時代からの友人で在った『ジャン・ロベール・ラップ』少佐を永遠に失った（但し、ヤンはラップについて八幡達に話してはいない、彼の婚約者で在ったジェシカ・エドワーズのその後の運命をも含め、話す事が躊躇われたのであろう。）

その間ヤンは第2艦隊司令『パエツタ中将』へ打開策を献策するも、却下され続けた。

そして、その時が来た。

第4、第6、両艦隊を連戦の上撃破した帝国軍艦隊が第2艦隊を急襲。

先手を取られた同盟軍は敵の猛火に晒される。

「智将と呼び、猛将と呼ぶ、それらの区分を超えて部下に不敗の信仰を抱かせる者を名将と呼ぶ、私は正にこの時、名将の誕生の瞬間に立ち会っているのではないかと軽く興奮を覚えたよ。」

帝国軍の猛攻の中、旗艦『パトロクロス』が被弾、司令官パエツタ中将が負傷する事態が発生し遂に。

「負傷したパエツタ司令から指揮権を引き継いで、私が艦隊を指揮する事になったんだ。」

「オオオッ！何とここで遂にヤン殿が艦隊を！何とも胸熱の展開であるな。」

遂に、ヤンが艦隊の指揮を執る、ここ迄ヤンの話を聞き続け、物語に引き込まれていた四人の期待は否が応でも盛り上がるうと言うものだ。

材木座の様に、大袈裟に声は出さないが内心は早くその後の展開を知りたくてウズウズしていた。

「元々の数が少なかった上に、先手を取られ更に戦力を撃ち減らされたんだから、同盟に勝ち目は無い。」

ヤンは開戦間もなく、同盟軍及び第2艦隊が、この状況に陥る事を予測していた。

だから予め、コンピューターに戦術プログラムを入力し、各艦にそ

のデータを開く様に指示した。

「2個艦隊を殲滅し、我々の艦隊に対しても先手を取った、勝ちを確信したローエングラム伯はおそらく中央突破を試みるだろうと予測してね、だからそれを逆手に取る事にしたんだ。」

帝国軍は紡錘陣形を取り、同盟第2艦隊に対しヤンの予測通り、中央突破すべく前進してくる。

それに対し第2艦隊は、あたかも帝国軍により陣形を分断された様に見せ掛ける、中央突破成功を確信した帝国軍であったがラインハルトはそれに違和感を覚えたと言う。

帝国軍により分断された同盟第2艦隊は、高速で逆走し帝国軍艦隊の後方に食らいついた。

「これはもしや！勝てる、勝てるのではないかヤン殿！」

椅子の上に立ち上がり、右手を天に突き上げ、左腕を折り曲げ拳を肩口辺に持つてくる、所謂ウルトラマンの登場シーンのポーズを取り、材木座は興奮に鼻息を荒くまくしたてる。

「いやいや、敵の指揮官はローエングラム伯だ、そう甘くは行かないさ。」

帝国軍は高速で時計回りに旋回移動、更に同盟艦隊の背後に食らいつこうと移動を始める。

そして三十分後。

両軍の陣形はリング状になっていた。

「要するに2匹の蛇が互いの尻尾に食らいつき飲み込もうとしているのさ。」

「…おいヤン、それって最期は両者共倒れ…いや数が多い帝国軍が若干有利じゃないかよ。」

「ああ、その通りだよ八幡、私の狙いは消耗戦に在ったんだ、ローエングラム伯は凡百の指揮官では無い、間違い無く名将と呼ぶに相応しい人物だ、だからきつと私の狙いを理解し対応してくれると確信していたし、実際彼は其処で退却と云う選択をしてくれたしね。」

ヤンの確信通りラインハルトは軍を引き帝国領へと帰還してゆく。

ここにアスターテ会戦は終結した、同盟軍はこの戦いで200万人以上の犠牲を出す結果となった。

「…何てか、規模が異常過ぎだよな、千葉市の人口の2倍以上の人間が一度の戦いで死んじまうなんて……。」

「…そうだね、何かヤン君が軍隊が嫌いって気持ちが分かるってか、なんか嫌だな。」

「こんな仮定は無意味かも知れないけれど、もし第2艦隊の司令官がヤン君の提案を採用していたらどうなったのだろうか、考えずには居られないわね。」

「…うむう、確かにヤン殿とラインハルトの戦いに血湧き肉踊る思いはあるのだが、犠牲が大き過ぎるのであるな。」

アスターテ会戦についての、皆のそれぞれの感想、それはヤンにとつては喜ばしい意見であった。

皆概ね戦争に対して否定的な意見を語った事に、戦争の悲惨さ残酷さが、多少なりとも彼等に伝わった事に、話した甲斐があったと、少しだけホッと胸を撫でおろす。

「…皆が戦争に対して否定意見を述べてくれて私としては嬉しい限りなんだけど、その後も戦争に軍隊に関わり続け血を流し続けた私は、それについて余り偉そうな事は言えないのかも知れないな。」

この後ハイネセンに戻った私を待っていたのは、エルファシルに続いて二度目の、英雄として祭り上げられると云う事態だったんだ、理由もエルファシルと一緒に敗戦という不都合から民衆の眼を反らす為だ。」

が、戦没者慰霊集会において、当時国防委員長で在った『ヨブ・トリューニヒト』のアジ演説に大人気なく（笑）賛同しなかった事により、『憂国騎士団』の襲撃を自宅官舎で受けるも撃退。

「親父の遺品で唯一本物だった、万歴赤絵も壊されてしまって、部屋中がゴミだらけになってしまい、掃除を手伝おうかと思ったんだが返って邪魔になるから黙って座っている様に言われて、でも座れそうな所も無いと言ったら、テーブルの上に座る様に言われてね…。」

「……………」

「なあヤン、お前に専業主夫無理なんじゃね？」

雪ノ下、由比ヶ浜、材木座の三人がヤンの生活者としての無能振りと大人気の無さに呆れ無言となる中、八幡はヤンに対して重い現実を突き付ける。

どう考えてもその体たらくでは、家庭内を支えて行くには無理があると断じられたのだ。

「…どうやら、その様だね…私自身内心では解っていたんだ…ははは…。」

同日夜、ヤンは統合作戦本部長『シドニー・シトレ』元帥に呼び出しを受け、少将への昇進と新設される第13艦隊司令官就任の内定を言い渡される。

本来同盟軍では艦隊司令官の任は中将を充てるのであるが、アスターテ会戦に於いて壊滅した第4、第6両艦隊の残存兵力に新兵を加えた艦艇数約6千4百隻将兵70万人と、通常の半分の兵力で在った。

「そして、その最初の任はイゼルローン要塞の攻略だった…。」

「しかしヤン殿、イゼルローン要塞はこれ迄に何万隻もの艦隊を何度も動員したのに落とす事は叶わなかったもので有ろう、それをたったの6400隻で落とせなど無理難題であろう！そのシトレ元帥は何を考えその様な無謀な命令をしたのだ。」

「まあ、シトレ校ちよ、本部長も組織のトップに居る訳だし、権力争いだとか面倒事も抱えて居ただろうし、私にも思惑があったからね、取り敢えずやって見る事にしたんだ。」

「ヤン君、貴方そんな簡単に取り敢えずだなんて言っているけれど、もしそれが失敗してしまつたらどうするつもりだったのかしら。」

「そうだね…その時は、頭を搔いて誤魔化したかな。」

「…はあ、全く貴方という人は…。」

「アハハ、なんかヤン君らしいね。」

「冗談はさておき、土台が無謀な作戦なんだ、失敗してもシトレ本部

長が辞表を提出して、私という作られた英雄の名声が地に堕ちるだけだよ、私に取っては虚名なんだが。」

「なあヤン、ちよつと考えて見たんだけどよ、これ迄万単位の艦隊で攻略出来なかつた要塞を、6千ちよいで陥とすなんて正攻法じゃ無理だよな、だとしたら考えられるのは…攻略は内側からだと思っただが、どんな手を使つたかは解んねえけど違うか!？」

八幡の問い掛けにヤンは軽い驚きと感嘆の思いを抱いた。

八幡はほんの少しの説明で、その答えに行き着いたのだ、自分の目の前の燃てはいるが、不器用な優しさを持った少年の洞察力にユリアンに通じるセンスを見出す思いだった。

「ああ、八幡…君の言う通りだよ、私が取つた策は正に内側からの攻略さ。」

「ヒツキー凄いい！良く解つたね。」

「べつ、別に単なる消去法だ、外が駄目なら内から、スパイなりなんなりを潜り込ませて陥落させるって思い付いただけだ…。」

更に八幡の見解を聞き、正解を言い当てた彼にヤンは思わずにはいられなかった。

あの時同盟に八幡の様な人材が居てくれればと、尤も仮に彼が居たとしても、きつと自分と同じ様に軍上層部や政治家連中には嫌われたであろうと予想出来てしまえるのだが。

「何と…味方に一人の死傷者も出さずに攻略してしまうとは、ヤン殿の策略、正に鬼謀であるな。」

イゼルローン要塞攻略のあらましを語り終えたヤンに材木座が賛辞を送る。

200万の人命を失つたアスターテ会戦と違い、一人の犠牲も出さなかつたと言うイゼルローン攻略戦に対する感嘆の念を材木座に限らず皆が抱いていた。

「この後私は、奇跡のヤンだの魔術師ヤンだのと言われる様になる

「だが、私自身に言わせると、詐欺師かペテン師位が良いところさ。」
「ヤン君、貴方は先程思惑があつて、要塞攻略に臨んだと言つたけれど、その思惑とはどうな物だったのかしら、差し支えが無ければ教えてもらいたいんだけど。」

ヤンの言つた思惑とは何か、それは雪ノ下だけでは無く他の者も氣になつていた事柄だろう、材木座などは雪ノ下の言葉に大きく領き、八幡もじつとヤンに視線を向けている。

紅茶を一口啜り、頭を搔いてからヤンはその答えを皆に伝える。

「…それは単に私が軍を抜けられる状況を作る為だったんだ…イゼルローンの攻略事態はまあ何とかなるだろうと考えていたし、攻略が成れば少なくとも帝国軍もこれ迄の様に頻繁に軍を動かしては来れないだろう。」

その間に同盟は時間を掛けて失つた戦力、国力の回復に務められる、兵役に取りられている働き盛りの世代を大勢社会復帰させる事が出来る訳だ。

少なくとも同盟から帝国へ逆侵攻等と馬鹿な考えを起こさなければね。

それに、イゼルローン要塞の存在をチラつかせれば、帝国との間に和平に向けた働き掛けを行う事が出来るのではないかと思つていたんだが、残念な事に同盟政府はその馬鹿な事を閣議決定してしまつたんだ。」

同盟政府の閣議により決定した、帝国領への侵攻作戦、この計画に同盟軍は、中將へ昇進し、第2艦隊の残存兵力を加え正規の一個艦隊へと編成されたヤンの第13艦隊を加えた計8個艦隊を投入。

艦艇総数20万隻以上、参加人員3千万人以上を動員。

イゼルローン要塞を橋頭堡として、帝国領侵攻が開始された。

「まるで無人の野を征くが如く、と云う感じで同盟軍はまたたく間に帝国領の辺境の星系広くに進軍して行つたんだ、それが帝国のローエングラム伯が仕掛けた壮大な罠だとも知らずにね。」

「その罠とは一体どの様な物なのかしら。」

一堂を代表する様に雪ノ下はヤンへ質問する、壮大なと表現された

それがこの場に居る皆が気になるポイントで有ろう事、疑い無しである。

「広大な帝国領、それそのものが畏だったんだよ。」

ローエングラム伯は意図的に各星系の戦力を引き上げ、そのうえ住民から物資も徴発していたんだ：同盟は解放軍を謳っているからね、当然住民に物資を分け与える使命がある訳さ。」

「…おいヤン、それってもしかして、焦土作戦ってやつか、住民に物資を分けたら当然同盟軍の懐具合は悪くなっちゃうよな、そうなるよ本部に補給を依頼するだろうし、そこを狙って帝国軍が補給部隊を襲撃する、お前が士官学校のシミュレーションでやった戦線と補給線を伸ばさせるってやつ、それを帝国軍にやられてるんじゃないか？。」

「いやいや、八幡、君は全く大した奴だよ。」

その通り、私もそれに気づいて占領地を放棄して撤退しようと、第10艦隊の『ウランフ』提督とも相談して、司令部への進言を第5艦隊の『ビュコック』提督にお願いすることにしてね。

しかし司令部の見解は一戦も交えずに撤退などもつての他、だと言。」

結果、八幡が言った通り補給部隊が叩かれ、ローエングラム伯の配下の艦隊による反撃が開始され、同盟軍は各地で敗走或いは壊滅、最終的に司令部は残像兵力をアムリツア星域に終結そこを決戦の地とする。

「しかし其処に艦隊を維持しつつ終結出来たのは私の第13艦隊、ビュコック提督の第5艦隊、アップルトン提督の第8艦隊の3個艦隊と僅かな各艦隊の残存兵力だけだった：艦隊の総数は4〜5万隻位かな、対する帝国は全面に7万隻後背から別働隊3万隻、我々は艦隊の後背に4千万個の機雷を配置所謂背水の陣をもってこれに相対したんだ。」

帝国軍の猛攻により第8艦隊が壊滅、第5、第13両艦隊も善戦するが、後背の機雷原も『キルヒアイス』提督の艦隊が指向性ゼツフル粒子を使用し孔を穿たれた事により、後背よりの進軍を許す結果となった。

「残像兵力をビュコック提督に託し私の艦隊が殿を努め、何とか帝国軍の包囲網を突破出来たんだが、その際私の艦隊も3割の損害を出し、ビュコック提督の艦隊も5割の損害を被った。」

最終的に同盟は、この一連の帝国領侵攻作戦で2千万人を死なせ全兵力の4割を失う結果となったんだ。」

「「……………」」

言葉が出なかった。

2千万人と云う死者の数に、誰も軽口も叩けなかった。

暫しの沈黙の後、雪ノ下が意を決した様にヤンに対し意見を述べた。

「…ヤン君、貴方には悪いけれど、自由惑星同盟は滅びるべくして滅んだと言わざるをえないのではないかしら。」

「ゆきのん！」

「良いんだよ由比ヶ浜さん、雪ノ下さんの言う通りさ、同盟は政治は腐敗し汚職は蔓延り、支持率を得る為に安易に無謀な出兵を決め軍部も…これは私にも責任が有るのだろうが、イゼルローンを無血開城させた事により軍事的勝利は斯くも容易く得ることが出来ると錯覚させ、国内の世論までもがそう思ってしまったんだろうが、私は時々考える事が有るんだ、もし私がイゼルローンを落とせなかつたら、もし落とせたとしても多大な犠牲を出した上での事だつたら、帝国領への出兵など行おうなどと思わなかつたのではないかとね…。」

言っても詮無い事だがね、最後にそう付け加えヤンは静かに眼を閉じ語りおえる。

ハイネセンへの帰還後、暫しの休暇の後ヤンは大将への昇進と新たな赴任先が決定する。

「イゼルローン要塞及びその駐留艦隊司令官の辞令が降つたんだ。」

「おお、それではヤン殿は一国一城の主と成つたのであるな、いやはや大したものだなヤン殿は。」

「いや、材木座君それは少し大袈裟だよ、イゼルローン要塞の居住者

は軍民合わせて約5百万だから、精々県知事位なものだよ。」

材木座の称賛の言葉にヤンは謙遜するのだが、イゼルローン要塞は5百万からの人口を有する一大都市と言っても過言では無いだろう。そのイゼルローン要塞を預かるのだから材木座の云う一国一城の主との認識は強ち間違えでは無い。

「イゼルローン要塞は人工天体だから当然全てが作り物なんだが、内部に一応公園等も有ってね、作り物だから味気無いかと思っただが、自然と違い良い所も有ったんだ。」

皆の期待を煽るかの様に、一旦間を置きイゼルローン要塞内の公園について説明をするヤン。

「自然と違って蚊が居ないんだ、なので私の趣味の昼寝が捗る事捗る事、いやあ、あれは私にとって正に至福の時間だったよ。」

勿体つけて紡ぎ出されたセリフがそれかよ、聞いていた四人は若干呆気味の視線をヤンへ向けるのだが！当の本人はまるでどこ吹く風と云う態度だ。

奉仕部の三人と材木座は知らぬ事であるが、ヤン・ウエンリーと云う男は履歴書の趣味の欄に昼寝と書く様な変人なのだ、それについて他者に呆れられる事など彼にとっては今更の事であった。

ヤンがイゼルローン要塞司令官の任に付いて間もなく、銀河帝国より使者が来訪、捕虜交換を打診してきたのだった。

「なんせ、捕虜を食わせるにも金が掛かるし、先の戦いで大勢の戦死者を出したんだから、政府にしたら願ったり叶ったりだろうね。」

それに捕虜には選挙権が無いが帰還兵にはそれが有る、2百万人の有権者だ、この存在は大きいだろう。」

人命の扱いが多分に打算が含まれた物だと語るヤン、そんな薄ら寒い自由惑星同盟と云う国家に所属していたであろう彼に同情の念が禁じ得ない、四人はそう感じていた。

「しかしなヤン殿、もし我がその帰還兵の一人だったとして、いくら帰還が叶ったからとは言え、そのような政府に票を投じよう等とはとは思わないのであるがな。」

「私も君に同感だよ、何で私の貴重な選挙権をトリユーニヒトの野郎とその下っ端どもに……。」

材木座の意見に同意するヤンで有ったが、その口調が些か口汚くなっている事を自覚し女性の前だと言う事に今更ながら思い至り発言を控えるのだが。

「アハハ、ヤン君って意外と毒舌家なんだね…。」

由比ヶ浜に迄そう言われる始末であった。

「おっ！偉いぞ由比ヶ浜、良く毒舌家なんて言葉知ってたな。」

「ちよっ！酷いヒツキー、あたしだってそんなくらい知ってるんだからね、ちゃんと勉強して総武に入学したんだし！」

キイーと怒ってますアピールをしながら由比ヶ浜は、八幡の腕をポカポカと叩く、当の叩かれている八幡はこいつうぜえと言う表情を出そうとしているのだろうが、由比ヶ浜流のコミュニケーションに満更でもないとの思いが有る様で、少しニヤケ気味である。

斯様に、思春期男子の心情は複雑なようである。

「おっ、お前な俺だけじゃ無いからなそう思ってるの、材木座だって雪ノ下だってそう思ってるからね、なあ材木座、だろ。」

「うむ、スタンドも月までブツ飛ぶこの衝撃とは、正にこの事よな！」

ムハハハハッ！

「中二黙るし!!」

「……………ハイ。」

「偉いわよ由比ヶ浜さん、貴女もしっかり成長しているのね、私も嬉しく思うわ。」

「あくん！ゆきのんまでえ！」

八幡から離れ、次は雪ノ下へと抱き付き由比ヶ浜はその身体を揺さぶる。

その様子を八幡と材木座は、『ゆるゆりいただきました。』『尊い。』と口には出さず、心中思いながら二人の女子を生暖かな眼差しで愛でていた。

イゼルローン要塞にて、帝国軍を代表しラインハルトの腹心である

『ジークフリード・キルヒアイス』上級大将と同盟軍を代表しヤン・ウエンリーとの間で恙無く捕虜交換の調印は作された。

「可笑しなものさ、味方の政治家には不信感や嫌悪感ばかり抱くの、敵の将軍には好感を抱いてしまっただからね、

そしてこの時私は思ったんだ、彼なら同盟と帝国の共存の架け橋になつてくれるのではないかとね。」

その願いが叶うことは無かったんだがね…とヤンは述べる。

この捕虜交換の裏にある物をヤンは洞察していた。

「ローエングラム候の狙いは自分が帝国を平定する迄、同盟に帝国に手出しが出来ない様にする事にあるんだ、帰還兵の中にスパイを潜り込ませ、トリユーニヒト政権に不満の有る軍高官に接触させクーデターを起こさせる。」

それにあたりローエングラム候は一見かなり高度なクーデター計画を立案してみせた事だろう、クーデター派はそれとは知らず帝国の策略に踊らされる羽目になるんだからね、だけどローエングラム候にして見ればクーデターの成否などどうでも良いんだ。」

「同盟が混乱して帝国にチョツカイ掛けられなくする、それだけで充分ってかよ、それにまんまとハマるクーデター派も憐れだよな、そういうった奴等って自分の正義つてのを盲目的に信じてんだろうし。」

「そうね、叶いもしない専業主夫などと云う妄想を何時までも持ち続ける誰かさんの様にね、妄想ヶ谷君。」

「…人の野望にケチつけんの止めてくれる、あと勝手に人の姓を改名させんのもな。」

「あら私は部員の将来を心配して忠告をしたまでよ、現実が貴方にとって厳しいからと眼を背けてはいけないと、貴方がしつかり前を向いて人生言うレールを歩んで行くことが出来る様に、敢えて口を酸っぱくして、心を鬼にして忠告しているのよ、それを…」

「解ったから、もう良いこれ以上は俺の人生がここで終わっちゃうから、その辺にしといてくれ。」

「そう、本当はまだ言い足りないのだけれど、何時までもヤン君の話の腰を折る訳にはいかないから、この辺りにしておくわ。」

調印式の終了後ヤンはハイネセンへ赴き、極秘理に宇宙艦隊司令長官ビュコック大将と接触、クーデター発生の可能性を示唆し調査を依頼、同時に発生した場合のこれに対する鎮圧、平定の為の出兵の許可を得る。

ビュコック長官の捜査にも関わらず、クーデター派の実態は掴めず、遂にその時が訪れた。

統合作戦本部長『クブルスリー』大将暗殺未遂事件を皮切りに、同盟国内4つの惑星で叛乱が勃発し、ヤンは本部長代行『ドーソン』大将より4箇所全ての叛乱の鎮圧を命令される。

「4箇所全てとは随分と無体な命令であるな、ドーソンとやらはヤン殿になんぞ含む所が有るのだろうか。」

「…ユリアンが言うには年下の私が同格で有ることが、彼の不興を買っていたらしいとのことだそうだよ。」

「…ああそう言う事。」

叛乱鎮圧の命令を受けて間もなく、ハイネセンに於いてクーデター発生の報が届く。

ビュコック長官等の調査も虚しく、クーデターは発生し、ビュコック長官始めドーソン代行、その他クーデター反対派は拘束されてしまったのだ。

その中で最高評議会議長トリューニヒトはクーデター派の手を逃れ姿を消すのだが。

クーデター派の声明が同盟全土に駆け巡る、それはヤン曰く。

「5百年前にルドルフが言っていた事と何ら変わらない物だった、クーデター派は自分達を正当化する為にルドルフの死体を墓場から掘り起こした様な物さ、ルドルフの帝国の政治体制に対するアンチテーゼとして生まれた同盟がそのルドルフの体制を敷こうと言うのだからね、皮肉も此処に極まれりさ。」

だが其れよりも、衝撃を受けたのはクーデター派の『救国軍事会議』の主導者の正体だった。

元同盟軍参謀総長、帝国領侵攻の失敗により査閲部長へ左遷させら

れていた。

ヤンの副官『フレデリカ・グリーンヒル』の父親である『ドワイト・グリーンヒル』その人であった。

「…なんか、可愛そうだよねフレデリカさん…お父さんと敵になっちゃうなんて…。」

「…ヤン君、まさか貴方は其れを理由にフレデリカさんを冷遇したりなどしていないでしょうね。」

「いやあ私はそんなに信用が出来ない人間なのかな…私は物覚えも悪いしメカにも弱い、彼女程有能な副官に辞められたら私の仕事は滞ってしまうよ。」

「ヤン、お前も素直じゃねえな。」

宇宙暦797年4月20日、イゼルローン要塞の指揮権をキャゼルヌ少将に預けヤンはクーデター鎮圧に出撃する。

4箇所全てを平定し、最終的にはハイネセンを目指し。

順調に各惑星の叛乱を鎮圧し、ハイネセンへ向け進軍するヤン艦隊の元にクーデター派からの脱出者『バグダツシュ』中佐が投降してくる。

「彼はクーデター派のスパイでね、我々に偽の情報を掴ませ、あわよくば私の命を奪う腹積もりだったんだが、シエーンコップ准将が其れを察知し対処してくれたんだ。」

「…処刑したのであるかヤン殿?」

材木座の質問にヤンは首を横に振り否定する、シエーンコップは薬でバグダツシュを眠らせ、クーデター派の第1艦隊との戦いが最終する迄起きない様にしていただけであった。

事が終わり目が覚めたバグダツシュ中佐は、クーデター派から正式にヤンの配下へ転向を表明しヤンもこれを受け入れた。

「…お前正直言つて、危機感なさ過ぎじゃね?!よくそんな危険分子を身近に置けるよな。」

八幡の発言は最もで有ろう、現にユリアンはバグダツシュを危険視しヤンへ彼を排除する様に促したのだから。

「バグダツシユはちやんと計算が出来る男だったからね、私が勝ち続ける限りは裏切ったりなどしないと確信していたからね。」

ヤンの判断は正しかった、バグダツシユはヤンの死後もユリアン達に従い、イゼルローン協和政府の一員として戦い続けたのだ、それはヤンの知らぬ事であるが。

同年5月18日ドーリア聖域にてクーデター派の第11艦隊との会戦。

「この会戦を前にちよつとした演説を行ったんだけど、それが後々厄介な事になるんだがそれは今は少し置いてこうかな。」

第11艦隊との戦いは事前に情報を掴んでいたヤンの采配により一方的にヤン艦隊の勝利に終わる。

最後まで自説を曲げず、降伏勧告も聞き入れず第11艦隊は文字通りの全滅を遂げた。

同盟にとってはアムリツアの会戦で失った兵力に加え更に戦力を減らすだけの虚しい結果となった。

ドーリア星域での虚しい勝利の後、ヤンの元に訃報が届く、後に『スタジアムの虐殺』と呼ばれる事になる事件。

実質クーデター派に対する反対集会である市民集会に武装したクーデター派が乗り込み解散させようとするも、やがてそれは暴動となり多大な犠牲者を出す結果となった。

市民側の犠牲者は2万人を超え、クーデター派の兵も千5百名の死者を出す結果となった。

この事件によりクーデター派の求心力は完全に失われ、第11艦隊の壊滅と合わせ実質的にこの時点でクーデターは失敗したと言って良いだろう。

「だが、まだ完全に勝った訳では無いんだ、ハイネセンには『アルテミス之首飾り』があるからね。」

首都星ハイネセンを守る12機の防空衛星、アルテミスの首飾り、クーデター派の最期の拠り所であるそれをヤンはこれ以上は無いと言う程の演出で持って無効化する。

「国父ハイネセンの故事にあやかって巨大な氷塊に推進エンジンを取り付け、12機の衛星全部に同時にぶつけたんだよ、氷の質量に加え加速を付けることによって、相対性理論に従いその質量は更に増す訳だ。」

同時にバグダッシュ中佐にクーデターが帝国のローエングラム候によって画策された物で有ると同盟全土に向け演説させ、クーデター派に正義は無いと宣言。

それにより救国軍事会議のクーデターは終結した。

クーデター派代表代行として『エベンス』大佐により降伏を受諾する旨が告げられる。

そのエベンス大佐により、代表であるグリーンヒル大将の自決が告げられた。

「……………何とも後味の悪い話だな、誰一人報われた人間も居やしねえじゃねえかよ。」

「……………すつ、フレデリカさん可愛そうだよ…そんなの無いよ……………」
悲しい結末に、由比ヶ浜は嗚咽を漏らし雪ノ下はその彼女を宥める。

この虚しい結末にやるせない思いを抱いたのは彼女も由比ヶ浜と同様なのである。

ヤン艦隊の兵士達を中心にハイネセンの治安回復に務める中、ユリアン・ミンツが思いがけない人物と遭遇する。

自由惑星同盟最高評議会議長ヨブ・トリユーニヒトであった。

「式典であの男と握手をした時、私は薄ら寒さを感じたんだ、あの男は自分で騒乱を呼び込んで置きながら、自分はその間身を潜めておいて、それが過ぎ去ってからのこのこと巣穴から出てきやがったのさ、そして思ってたんだこんな男に権力を与える民主主義とは何なのだろうかとね。」

民主主義回復の為に、地下で戦ったなんて言っではいるが本当に戦ったのはスタジアムの虐殺に於いて犠牲になった市民だろう。

奴は騒乱が終わって、安全が確認出来てから漸く姿を現し美味しい

所だけをかっさらっていく禿鷹の様な男だよ、否それは禿鷹に対して失礼だな。」

斯様にヤンのトリユーニヒト嫌いは、筋金いと言う他無い。

何も得る事なく終結した同盟のクーデター、その中で届いたのは帝国の宿将として知られる、『ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ』上級大将の亡命の報である。

ヤンは彼をイゼルローンに於いて賓客として、客員提督として遇する。

そしてもう一つ、ジークフリード・キルヒアイスの訃報である。

「彼の訃報を知り、私は長年の友を失った様なそんな気持ちにさせられたよ。」

たった一度の出会いだったけど、彼の佇まいには人に信頼感を与えるに足る風格の様な物を感じずにはいられなかったからね。」

私でさえそうなのだから、長年の友人であったローエングラム候の喪失感は何ほどの物だろうか、ヤンはキルヒアイスに対する思いをそう結んだ。

宇宙暦797年は自由惑星同盟と銀河帝国の二国に於いて戦火が交えられる事なく両陣営が内乱に終始して終わった、珍しい年であった。

イゼルローン要塞帰還後、人事移動によりヤン艦隊に所属するベテラン兵士の多くが移動、代わりに送られて来たのは新兵ばかりであった。

明けて翌年、宇宙暦798年。

新兵訓練と哨戒任務に就いていた、アッテンボロー少将の艦隊がイゼルローン回廊帝国側に於いて帝国軍の艦隊と遭遇し戦闘状態に陥る。

この哨戒任務には、軍属となったユリアン・ミンツが宇宙戦闘艇『ス

パルタニアン』のパイロットとして同行していたのであった。

その報に、ヤンは客員提督メルカツツの意見を採用、イゼルローン駐留艦隊全軍を以てアッテンボロー艦隊の救援に向う。

ヤン艦隊到着を以て帝国軍の艦隊は退却、この意図せぬ遭遇戦は終わりを告げる。

この戦いが初陣となったユリアン・ミンツは帝国軍の戦闘艇『ワルキューレ』3機撃墜、巡行艦一隻を撃破と言う武勲を飾る。

「…あまり危ない真似をしちゃいけないと常々言っていたんだけどね。」

「ムハハハッ！ヤン殿は案外過保護である様だな。しかし初陣で武勲を挙げるとはユリアン殿も大した御仁の様であるな。」

材木座の過保護と言う発言には、奉仕部の三人も領かざるをえなかった。

「ヤン君てさ、多分すつごく優しいお父さんに成りそうだよね、女の子だったらきつと甘々だね。」

「それで娘が大きくなったら、邪険に扱われるんだよな、娘の塩対応に涙で枕を濡らす日々が続くんだよ多分、家の親父の様にな、知らんけど。」

「あらそれは比企谷家に置ける日常的な風景なのかしら、小町さんが貴方や御父上に対してその様な対応をされているのね。」

ユリアン・ミンツが初陣を飾った遭遇戦よりしばし後、ヤンに対して同盟政府より出頭命令が届いた。

査問会への出廷を命じる物である、しかし本来同盟憲章に査問会等と言う物は明記されて居らず。

「意図して仕組まれた物だろうねどの辺りの勢力が企図したかは兎も角、私に精神的にリンチを加える為の物だったのさ。」

ハイネセンへ到着すると同時にヤンは身柄を拘束され、副官フレデリカ・グリーンヒル、護衛として選ばれた『ルイ・マシユンゴ』准尉達と引き離されてしまう。

「そして査問会が開始されたんだ、どうでも良いだろうに、私の経歴確認から始まり士官学校時代の成績、入隊後の勤務態度や戦歴迄細く披露される始末さ。」

若くして高い地位に付けて羨ましいのだと宣いやがるんだが、私としては彼等が望むのなら何時だってその地位をくれてやっても一向に構わないってのにさ。

そして本格的に査問が開始され、アルテミスの首飾りを全て破壊した事や第11艦隊との決戦を前に行った発言が問題視されたんだ。」

一つ一つの質疑に正論を以て解答してゆくも、その正論は彼等の望む答えでは無くヤンに対する悪感情は、募るばかりであった。

「要は彼等の望みは私が正論を述べる事では無く、彼等に対して大人しく忠誠を誓う事に在ったんだろね。」

「しかし、親は無くとも子は育つと言う言葉も有る、それを置き換えると国は無くとも人は育つ、とも我は言えると思うのであるが、確かに社会基盤やインフラ整備等大規模な事業を行う為に、国家と言う物がある方が便利な側面も有ろうが、先ずは人が有りてこそ国は成り立つものであるうにな。」

「だな、国なんて入れ物が有っても、中身が無くちや、何の意味も為さないなんて学生にだって理解出来る程度の事だよな、実際この日本だって若い世代の人が見切りをつけて海外に出て行ったりしてるしな、この場合の中身ってのは人だけだな、由比ヶ浜。」

「ちよ、またヒツキーはあたしの事引き合いに出して！あたしの事馬鹿にしすぎだし！」

その無意味な査問会の終結は意外な事態がもたらした物だった。

帝国軍のイゼルローンへの侵攻の報が齎されたからである。

「帝国はガイエスブルク要塞にワープ用推進エンジンを取り付け、要塞まるごとイゼルローン回廊へ移動させて来たんだ。」

ガイエスブルク要塞はイゼルローン要塞より一回り程小さいがその戦力はイゼルローン要塞にほぼ拮抗している。

「おかげで私は、胸にしたためていた辞表を提出するタイミングを

逃してしまっただがね。」

ヤンが直ぐにハイネセンを出立したとしても、イゼルローンへの帰着には一ヶ月余りの時間が掛かってしまう。

「敵の指揮官は移動要塞を自軍の根拠地として使用する事に囚われていた様だからね、戦況は膠着するだろうと推察出来た。」

「だけど、折角持つて来た要塞だろ根拠地として使うのは当然じゃねえの。」

八幡はヤンの言葉に感じた疑問を問いかけてみた。

「この件で、推進エンジンを取り付ければ要塞規模の物体もワープさせられるだけの技術が有ると立証されたんだよ、だったら何も要塞の運用に拘らず、要塞その物を質量兵器としてイゼルローンにぶつけてしまう、と云う手段も取れるんだ。」

その後で改めて別の要塞をイゼルローンへ持つてくる事も可能だろう。

要塞をぶつけるのが勿体無いのなら、それに近い質量の小惑星にでもエンジンを取り付けてぶつけると云う手段もあるね。」

帝国軍の指揮官がその発想に至らなかったのが、今回は救いになったのだ。

そのお陰でヤンは援軍を率いイゼルローンへ到着する事が出来た。

それにより形勢が完全に不利になった帝国軍は遂にガイエスブルク要塞をイゼルローン要塞にぶつけると云う、思考に至る。

しかしそれはもう遅かった。

「12機のエンジンを完全に連動させる事で、要塞を直進させられているんだよ、ならばその内の一つを破壊すれば連動は崩れ要塞はバランスを失いイゼルローンへの衝突は避けられるだろう。」

バランスを失い目標から遠ざかるガイエスブルク要塞をイゼルローン要塞主砲トールハンマーにより砲撃。

ガイエスブルク要塞は永遠に宇宙より失われた。

「……これでまた私を家族の敵と恨む遺族が増えたわけさ、一度や二度死んだ位では私の罪は拭えはしないだろうね。」

イゼルローン要塞とガイエスブルク要塞とによる、戦史上類を見な

い戦いの顛末をヤンはそう締めくくった。

魔術師は銀河の歴史を語る。 余

ガイエスブルク要塞の撃退に成功し、暫しの休息を得たイゼルローン要塞。

風邪を引き込み寝込んだヤンは正式に軍人に成りたいとユリアンより告げられたのだ。

「正直、遂にこの時が来たかと思ったよ。」

雪ノ下が淹れた3杯目の紅茶の香りと湯気を愉しみながらヤンはしみじみと言った。

「で、結局は認めたんذار。」

八幡は一言確認をした、ヤンとの付き合いはまだ短い八幡だが、ヤン・ウエンリーと云う男はそう云う人物なのだろうと思っていた。

「ああ、少しばかり軍隊に対する私の考えと願いを付け加えてね。」
あの日ユリアンに伝えた言葉をヤンは皆へ伝え聞かせた。

「…軍隊なんて物は道具に過ぎないんだ無ければ無いに越した事はないね、だからそれを踏まえて、なるべく無害な道具に成れると良いね…とね。」

「しかしユリアンにそう言いながら、私自身は無害で居れたかと言うと決してそうでは無かったんだよね。」

ほんの少し自虐的な微笑を浮べた表情と口調でそう付け加えた。

宇宙暦798年8月、全宇宙を揺るがす事実が同盟最高評議会議長ヨブ・トリューニヒトより告げられた。

「銀河帝国皇帝『エルウィン・ヨーゼフ二世』の帝国よりの脱出と同盟への亡命が発表されたんだ。」

「…ヤン君、エルウィン・ヨーゼフ二世は、わずか5歳で帝位に就い

たのだったわよね、そんな小さな子供が自分の意思で亡命などするのかしら。」

雪ノ下の疑問は八幡と材木座も感じた物だった、皆が注目する中ヤンは頷き彼の見解を述べる。

「尤もな疑問だね、これは複数の陣営の思惑が絡んだ誘拐事件さ、当時わずか7歳の少年に自分で亡命など選択する意思は無い筈だろうからね。」

幼帝が誘拐されて一番得をするのは誰か、それが解れば真の犯人が誰か自ずと見えて来るだろう。」

帝国の内乱終結後フェザーンに逃亡していた、門閥貴族の残党とフェザーン駐在弁務官。

同盟の国力低下によりその存在に見切りをつけたフェザーン自治領。

「恐らくはローエングラム公は幼帝を扱い倦ねて居ただろうからね、その幼い年齢故、仮にその命が尽きたとしてローエングラム公自身が弑していないとしても、幼児に対する虐待を疑われるだろうし、弑してしまえば幼児を害した残虐な人物として、その求心力を失うだろうからね。」

「ふえ〜、凄いなヤン君、なんか探偵みたいだし。」

緊迫していた雰囲気、由比ヶ浜のその一言で弛緩した。

クスリと皆の口元が微かに緩んだ、その笑みを抑えながら雪ノ下は導き出した答えを口にしてみる。

「もしかするとフェザーンが誘拐犯をそそのかして実行させ、その事実をローエングラム公にリークさえしていたのではないかしら。」

つまりローエングラム公はそれと知りながら、幼帝誘拐を黙認した。

そして同盟政府はその策略にまんまと乗り、幼帝の亡命を受け入れてしまったのではないかしら。」

「ああおそらくは雪ノ下さんの考察通りだと私も思うね、政府の連中はそれによってどんな事態が起こるか、誰も想像出来なかった様だね。」

「要するに自分の手で、ラインハルトに同盟討伐の為の、錦の御旗を与える事になっちまったって事かよ。」

どうしようもねえ、八幡は忌々しげにそう締めくくった。

「全くね、同盟政府はあの時エルウィン・ヨーゼフ帝をローエングラム公につき返すべきだったんだ、そうすればローエングラム公は同盟領侵攻の為の大義名分を得る事も出来ないし、同盟はそれを元に帝国との和解の為の切っ掛けに出来たかも知れなかったんだ、ローエングラム体制は独裁政権ではありながらも極めて民主的な公平な施策を行っている、ならば民主主義国家たる自由惑星同盟はローエングラム体制と共存して行く事が出来る筈なんだ。」

国民の為、より良い政治を行うので有れば何も全宇宙を一つの政治政体でまとめ上げる必要は無いからね。」

そしてヤンの元に届いた一つの辞令。

「…ユリアンが少尉へ昇進の上、イゼルローンを離れフェザン駐在武官とし

て赴任せよとの辞令が降りたんだ、そしてメルカッツ提督の銀河帝国正当政府の軍事顧問就任要請が同時にね。」

それはトリユーニヒト派による、ヤンの勢力の弱体化を目的とした人事であった、彼等は時勢が許せばキャゼルヌやシエーンコップといったヤンの幕僚達をヤンから引き離す腹積もりだったのだ。

後にユリアンがフェザン赴任の折、ハイネセンにてビュコック長官と面談の際にその旨を伝えられたのであった。

「ホントに馬鹿だよな、ヤンがイゼルローンって事実上の国境を守備出来ているから、自分達は安穩と権力ごっこ遊びしてられんのにその守備力を削ごうってんだからな、けどその気持ちは解らなくも無いな。」

「ふえ？・ヒッキーどう言う事?」

八幡の言の葉に上った感想と見出しただろう考察。

若干ながらうざそうな表情を見せた八幡だが、元から説明をする気で居たので素直に口を開き語り出した。

「…要はビビってんだらう同盟政府はよ、査問会にしてもそうだろう。

同盟には帝国って敵が存在し、その帝国との国境を護れる提督がヤンの他に存在しないから、大っぴらにヤンを排除出来無い。

けどヤンが武勲を重ねれば重ねる程、国内の民衆のヤンに対する支持、称賛の聲は高まるだろう、そうなればなる程政府の高官は恐れるだろうよヤンに自分達の立場が取って代わられるんじゃないかとか。

査問会なんかで散々にヤンの足を引っ張る様な真似ばかりやってる政府に対してヤンがいつかブチ切れて自分達に矛先を向けて来るんじゃないかとか思ってたんじゃないか。

「ああ概ね八幡の考察通りだと私も思うね、それに同盟政府に限らず同じ様な事は歴史上幾度も有った事だしね、中央政府から遠く離れた辺境の軍が自分達に達にその牙を剥くのでは無いかと、為政者達はそれを怖れ疑心暗鬼に駆られるのさ、私自身は権力を握るなんて面倒な事はするつもりも無かったんだけどね。」

そしてヤンは見送る、イゼルローンを離れるユリアンとメルカツツ提督の行く末が実り多き物で在るようにと。

「でもさ、ヤン君の予想じゃ帝国軍はフェザーンを通って同盟に来るかも知れないって思ってたんだよね、そんな所に行かせちゃって良かったのかな？」

由比ヶ浜はまるで実在する者の身を案じているかの様にヤンへ尋ねる。

影響を受けやすい彼女は、ヤンの語る世界とその登場する人物達にかなり感情移入している様だ。

「…私は軍人で、ユリアンも正式に軍人になったのだしね、私的感情としては勿論行かせたくは無かったんだが。

軍から給料を貰っている訳だし、勤め人としては給料に対してはそれなりに忠誠心を示さなければならんだ、知っているかい紙幣と云うのは本当は紙ではなく鎖で出来ていて、人生を縛っているんだ

よ。」

「「……………」」

ヤンのその発言に女子二人と材木座は何とも微妙な、呆れたかの様な表情をその顔に浮べた。

「…やっぱり働いたら負けなだな。」

そして八幡はいつもの持論をしみじみと呟いた。

11月に入り遂にイゼルローン回廊に帝国軍が侵攻を開始した、『ロイエンタール』上級大将を主将とし、『ルッツ』『レンネンカンプ』両提督指揮下の計3個艦隊3万6千隻の兵力を以って。

しかしそれは、帝国の真の狙いから目を逸らさせる為の陽動作戦であった。

「流石に、帝国の双璧と呼ばれるだけ有ってロイエンタールの手腕は見事なものさ、間違いなく彼は一流の将帥だ、だから私は彼を嵌める為に三流の詐術を使ったのさ。」

ヤン自身が座乗しない旗艦『ヒューベリオン』を出撃させロイエンタールの撃ち気を誘い、突出させその隙きを突き彼の乗艦『トリスタン』へ強襲揚陸艦を突入させる事に成功。

「私と違い、彼は白兵戦技もこなせるんだよ、シエーンコップがサシでやり合って仕留め切れなかったんだからね。」

「ぐぬぬう、文武両道を地で行く上にレディにモテモテとは、どうやら我等にとって不倶戴天の敵である様だなロイエンタール提督と云う男は、なあ八幡よそう思わぬか！」

材木座はモテない男の嫉妬心を顕にし八幡に同意を求めるが、八幡の方はそれに同意する気は更々無いようで、まるで犬猫でも追い払う様に右手をヒラヒラとさせているだけであった。

ロイエンタール提督よりローエンングラム元帥に対し援軍の要請がなされ、遂にローエンングラム公の本隊が出陣する。

「表向きはあくまでも、イゼルローン方面への援軍としての出撃さ。」

「ぬう、遂に自由惑星同盟の終の始まりの時が訪れたのであるな…。」

材木座の大仰な物言いに、ヤンも静かに頷き肯定する。

宇宙暦798年12月末、固有の武力を持たないフェザーンは帝国軍により無血占領された。

しかし自治領主『アドリアン・ルビンスキー』は帝国軍の搜索網を逃れ、その行方はようとして知れなかった。

「ねえヤン君、ユリアン君は大丈夫なの？帝国軍の人達に見つかったら大変な事になるんじゃないの!？」

「ああ、大丈夫だよ由比ヶ浜さん、ユリアンとは後に無事ハイネセンで再会出来たよ。」

この時ユリアンは帝国軍の警戒網を上手く逃れて、ちよつとした協力者を得る事が出来ていたんだ。」

それはかつて少年時代のヤンの友人、フェザーンの商人『ボリス・コーネフ』の所有する星間貿易船『ベリョースカ』号の事務長『マリネスク』であった。

「尤も当のその本人ボリスは、時当弁務官としてハイネセンに駐在していたんだがね。」

「しかし広大な宇宙の彼方でその様な偶然の出会いがあるとは、ユリアン殿も中々の強運の持ち主であるな。」

そうかもしれないね、材木座の言にヤンは一言そう答え、話を続ける。

ビュコック長官よりの訓令文を受けヤンはイゼルローン要塞の放棄を告げ、実行に移す。

「…ヤン君、折角手に入れた物を簡単に手放すなんて、本当にそれで良かったのかしら。」

雪ノ下の問い掛けは、当時のイゼルローンに於けるヤンの幕僚達の思いと、変わらぬ物だった。

これ迄の様にイゼルローン回廊を唯一の侵攻ルートとした場合に於いてはイゼルローン要塞の戦略戦術的価値は多大な物であるが、帝

国軍がフェザーン回廊を通過し同盟領へ侵攻を果たした時点で、イゼルローン要塞の戦略的価値は失われた。

「どのみち我々がイゼルローン要塞に籠もって居ても、ハイネセンが陥落すれば帝国軍はイゼルローン要塞の返還を要求して来るだろうしね。」

それなら動けない要塞は帝国軍に返してしまつて、艦隊だけでも自由に動かして帝国軍に相対した方がまだマシな結果に成るだろうか。

それにそうしなければ逆転のトライを決めるチャンスが失われてしまつただろうからね。」

艦隊の総数だけでも圧倒的な差があるうえに、フェザーン回廊を通過された同盟に逆転の路が有るのか？

皆の頭の中にはクエスチョンマークが浮かんでいる事だろう。

「この時ローエングラム公は独身だった、それこそが逆転の機会や。」

「…どう言うつもり？」

由比ヶ浜の疑問の声は皆を代表しての物だろう。

ヤンはかつて彼の幕僚達と、そして当時国防委員長だった『ウォルター・アイランズ』に語つた構想を皆へ説明した。

「けれど、圧倒的な戦力差で貴方の言う通り事が運ぶのかしら。」

「言うは易し行ふは難し、だな。」

雪ノ下と八幡の発言に皆は同意し頷くとヤンへ注視する。

この数時間で語られたヤンの戦略戦術構想と物語に、好奇心を刺激された四人は、この後のヤンと同盟の行く末に更なる刺激を求める様に話の展開を聞き入ろうとしている。

イゼルローン要塞を放棄したヤンは途中民間人を安全な中域で降りし、帝国軍と戦闘状態にあるビュコック元帥率いる艦隊の救援に向かうべくランテマリオ星域へ急行。

崩壊寸前にあつた同盟艦隊と何とか合流を果たしハイネセンへと帰還する。

「ビュコック長官とも無事に合流も出来て一安心と言つた所なんだ

が、もう一つ朗報がもたらされたんだ……フェザーンからユリアンが無事に脱出して、私達と合流出来たんだ。」

「ハイネセンへ帰還後、元帥昇進の辞令を受け、アイランズ国防委員長と今後の方針を決定。」

会談を終え一息つき質素な昼食を食して居た時に、ヤンはユリアンとの再会を果たした。

「ぬうつー敵の駆逐艦を奪い脱出するとは、やるではないかユリアン殿は！」

流石はヤン殿の弟子であるな、そして遂にヤン殿が元帥とは、三代の元帥とは此れ又とんでもない快挙であるなヤン殿！」

「私の元帥昇進はビュコック長官のお裾分けかおこぼれを頂いた様な物さ、私は兎も角ユリアンの才能は私よりもずっと上だよ、ユリアンが将来どれ程の人物になるのか、それを見る事が出来なかったのが心残りではあるがね。」

材木座のヤンとユリアンに対する称賛に若干の照れくささを感じつつも、宇宙暦の時代に遺して来た己の未練を自覚したヤンだった。

それを振り払う様に、左右に首を振り気持ちを切り替え、紙コップの紅茶を啜り話の続きを語る。

ハイネセンを出立し、ヤン艦隊はラインハルトを己との直接対決の場に引きずり出すべく蠢動を始める。

根拠地を定めず、同盟領各地に点在する補給基地を都度利用しながらの転戦。

「まあ、コソコソと逃げ隠れしながら帝国軍にチョツカイをかけたつ、ローエンングラム公を煽っていた訳さ、1万7千弱の艦隊で10万を超える帝国軍の艦隊と、まともにやり合って勝てる訳がないからね。」

ヤン艦隊討伐の為に攻撃して来た『シユタインメツツ』提督の艦隊を撃破、その援軍として派遣された『レンネンキャンプ』提督の艦隊を翻弄。

『ゾンバルト』少将が護衛を務める補給部隊を殲滅、補給に不安を既

たした帝国軍の状況を読み、補給物資に偽装した罫で『ワーレン』提督の艦隊に打撃を与える事に成功。

「ミスターレンネン、そしてワーレン提督に対して取った策は心理学的な要素が強くてね、要は相手にこうだろう、そうに違い無いと思考誘導する訳さ。」

「…つくづくヤン殿だけは敵に回したく無いと思わずにはおれんな…。」

僅かに怖れの色を滲ませた材木座の眩きは、その場に居る皆の思いを代表しての物か。

「…そして私の思惑を知りながらローエンングラム公は挑発に乗ってくれた訳なんだが、流石はローエンングラム公だ一筋縄では行かなかつたよ…。」

配下の諸将の艦隊を同盟領各地に分散し、のみならず自身も艦隊を率いて出撃したのだった。

「諸将がローエンングラム公の本隊から最も遠く離れた時点で仕掛けるつもりだったんだが、その時はローエンングラム公の本隊がバーラト星系へ到着してしまう事になってしまうから、その前に仕掛けなければならなかった訳さ。」

「…ヤン君の艦隊は諸将が引き返して来る前にローエンングラム公を打倒しなければならぬけれど、ローエンングラム公は諸将が引き返して来るまで耐えれば良い訳ね。」

「しかも当初の目論みより時間的な余裕も短くなったってかよ、ジリ貧もいとこだな…。」

その結果ヤン艦隊とラインハルトの艦隊の決戦の場となったのは『バーミリオン』星系であった。

決戦を前にヤン艦隊は僅かな休息の時間を過ごすのだが、その決戦を目前にヤンは一世一代の大勝負に出た。

キヤゼル又曰くくなけなしの勇気を総動員したそれは、見事に受け入れられた。

「うわあ〜！ヤン君すごい、良かったね、おめでとう！」

両の掌を合わせ満面の笑みで由比ヶ浜はヤンへ祝福の言葉を述べ

る。

良かったねフレデリカさん、笑顔の中の、瞳の縁にひと雫の涙を浮かべ由比ヶ浜はそう言った。

雪ノ下と材木座も心なし優しい表情をしている、ただ一人八幡だけが何故か複雑そうな表情で。

「……この話の中のヤンは暗殺されちまうんだろ、残された奥さんの事とか考えたらおめでとうって、何か言えねえんだよな……。」

そうつぶやくと言うには少しだけ大きな音量でボソリと言った。

その八幡の眩きに女子二人は、その事に思い至りバツの悪そうな表情を浮べたのだった。

宇宙暦799年4月24日、バーミリオン星域に於いてヤン艦隊とラインハルト・フォンローエングラム元帥の艦隊による艦隊戦の火蓋は切って落とされた。

「当初私は、帝国軍ローエングラム公こそが先に奇策に打って出てくるだろうと予測して、それに対処して動こうと考えていたんだが、どうやら彼の方も同じ様に考えていた様でね、バーミリオン星域会戦は単純な艦砲による打撃戦から幕を開けたんだ。」

しかし両将の思惑とは裏腹にやがてそれは無秩序な乱戦へともつれ込む。

ヤン、ラインハルト共に望まぬ形の乱戦にある事態の收拾を図るべく、普請する事となった。

「連携の取れていない敵第一陣と二陣にそれなりのダメージを与える事が出来はしたんだけど、此方もそれなりの損害は被ってしまったってね、一旦引いて戦力の再編を図らなければならなくなってしまったんだ。」

戦力の再編を果たした帝国軍は、かねてよりの計画に乗っ取りヤン艦隊に対し多重的縦深防御陣を以って対応した。

「二つの防御陣を突破しても、空かさず直ぐに次の防御陣が現れて我が艦隊の前に立ちはだかるんだ、マリノ准将などはその状況を大昔のペチコートの様だとボヤいていたそうだよ。」

「そのローエングラム公の策を見抜いたのはユリアンだったんだ：全く大したものだよ、それを考案し実行したローエングラム公も、それを見抜いたユリアンもね。」

ユリアンの言を受けヤン艦隊は前進を止め艦隊を小惑星帯へと後退、2千隻余の別働隊に小惑星を牽引させる。

「これを帝国軍は1万隻程の艦隊と誤認し、それが本隊なのか囷なのか判断しあぐねたのだろうね。」

結果帝国軍はこれを見せかけた主力と判断、自軍を再編成し進軍を開始。

一方ヤンの本隊はこれを見て小惑星帯より帝国軍主力後方、敵本営へと進軍する。

「別働隊が囷と気が付いた帝国軍の艦隊は本営を護るべく別働隊の攻撃を無視して反転し私の艦隊の右側面に迫って来たんだが、これは予め読めていたから」

帝国軍の攻撃に合わせて艦隊中央部を湾曲させて艦隊の崩壊を偽装し、それによつて帝国軍に我が艦隊を突き崩したと錯覚させ変形凸型陣を形成してその内側へ帝国軍艦隊を追い込めたんだが。」

これにより帝国軍主力艦隊は囷部隊と合流した同盟軍により完全包囲されることとなった。

「…そこ迄やれたんだから、勝ちも確定した様に思えるんだが、もしかしてそうはならなかったのかヤン?」

八幡からの問にヤンは答える、それは『ナイトハルト・ミュラー』提督率いる艦隊の戦場への到着、同盟軍はその横面に砲撃を受ける事となったのだった。

「全く我ながら、とんだ権威主義に陥っていたものさ、てつきり最初に駆けつけるのは疾風のミッターマイヤーか金銀妖瞳のロイエンタールだと思っていたんだからね。」

「あのさ、ヤン君…えっと、ヘテロクロ、何とかって何?」

「うむ、ヤン殿それは我も知りたく思っていた所、是非教えて頂きたい。」

疑問を呈する二人にヤンは軽い調子で質問に答える。

「ははっ、ヘテロクロミアと言うのはだね左右で瞳の色が違う、所謂オッドアイの事だよ。」

「へえ、そうなんだ！でもそんな人居るんだね、凄いなねゆきのん、ヒツキー、ねっ！」

ヤンの答えに感心仕切りの由比ヶ浜は二人に同意を求めるも、読書家の二人は答えを知っていた様で特に関心した様子も無く、それに反応したのは材木座であった。

「何と、オッドアイにそのようなカッコいい言い方が有ったのか、うむう：私の自宅の近所に飼った猫なのか野良かは解らぬが、やたら人懐っこい白猫が居るのだが、その猫がオッドアイなのだ、我はコレからその猫をヘテロクロミアキャットと呼称する事としよう！」

胸元に両手を組み鼻息を吐き出しながら材木座は得意げに宣言する、そしてその材木座の発言に食い付いた人物は言わずもがなである。う。

「木材屋君、その情報後できつちりと私に報告なさい、良いわね！」
雪ノ下雪乃は好奇に満ちた眼差しと、とても良い笑顔で材木座に対してそう言うのであった。

ミュラー艦隊の来援によりヤン艦隊は再編を余儀なくされる、又長期に渡る戦闘により武器弾薬に限界が見え始めた。

「幸いとは言えないが、余程の強行軍だったのだろう、戦場へ到着したミュラー提督の艦隊は一個艦隊に満たない兵力だったんだ。」

だがミュラー艦隊の猛攻に『ライオネル・モートン』中将の艦隊は僅かな時間で甚大な損害を被り、モートン中将は戦死。

しかしミュラー艦隊の獅子奮迅の戦いぶりに、帝国軍主力艦隊は呼応出来ずヤン艦隊の猛攻に戦力は削られてゆく。

「そんな中で、帝国軍主力艦隊の一軍が起死回生の包囲網突破を試みようとしていた様だったので、私は故意に艦列に穴を開けてそこに包囲を脱しようとする敵主力部隊と包囲下にある味方を救援すべく進軍するミュラー艦隊を殺到させ、そこに一点集中砲撃を加えたんだ。」

同盟軍の苛烈な砲火の前に帝国軍艦隊は甚大なる損害を出し瓦解。もはや帝国に同盟軍の攻勢を止める手立ては無い様に思われた、その状況下に於いて…。

「ミュラー提督の奮戦は見事な物だったよ、彼は我々の攻撃により乗艦を四度も換える事になりながらも、最後まで諦めず帝国軍の艦隊を支えローエングラム公を護り続けたんだ。

そしてその後彼は鉄壁ミュラーの異名を賜る事になったんだ。」

しかしそのミュラー提督の奮戦を以てしてもヤン艦隊の攻勢を止める事は敵わず帝国軍総旗艦ブリュンヒルトが遂に同盟軍の射程内に捉えられ、ヤンは艦隊に対し砲撃の指示を出そうとした。

……その時。

「ハイネセンからの通信文が届いたんだ…。

それは、戦闘行為の即時停止命令だった、同盟政府は帝国に対して全面降伏したんだ……。我々は負けたのさ。」

ごく自然にまるで何でも無いかの様な口調で、ヤンは自軍の敗北の事実を語り紅茶を一口含んだ後軽く息を吐いた。

「……………」

暫しの時、まるで部室内のヤン以外の四人は動きを封じられたかのように、無言不動であった。

それが解かれ最初に発言したのは材木座で、彼は椅子を蹴倒す勢いで立ち上がり右手をテーブルに叩きつけてヤンへ問うた。

「解せぬ、ヤン殿は勝っていたのだろう、政府の停戦命令など無視してラインハルトを撃とうとは思わなかったのか！そうすればヤン殿の当初の目論見通りに成ったやもしれぬのに」

「文民統制こそが民主主義国家の軍隊の在るべき姿、原理原則さ…だから私は政府が極めて非人道的な命令をして来ない限りは、軍人として政府の命令には従わなければならないと思っているんだ、実はシェーンコップが私に、今材木座君が言った事と同じ様な事を言っただんだよローエングラム公を撃てとね。」

あの時シェーンコップは言った、ラインハルトを撃てと、政府の停戦命令など無視しろと、そしてそれによってヤンが何を手に入れる

事が出来るかを力説し促した。

八幡も材木座、男子二人特に材木座は「我もシエーンコップ殿と同意見だヤン殿」と首を大きく縦に振りそう述べた。

「…そうかな、でもどう考えても私に独裁者の服は大き過ぎて似合わないだろうと思うよ、それに第一面倒くさい。」

そしてもし、停戦命令を無視してローエングラム公を撃ち斃したとしたら…復讐心に駆られた帝国軍に同盟領は蹂躪されたかも知れない、ローエングラム公の配下の諸将の全員が全員高潔な為人の人物だとは限らないからね。」

「…その可能性は確かに、かなり高いな…同盟軍はヤンの艦隊以外ほぼまとまった戦力は無いに等しいんだよな、しかもその戦力もバリーオンで大半が失われたんだよな、だったら防衛も反撃もままならないか…。」

八幡のその言葉にヤンは紙コップに眼を向けながら頷く、ヤンの語る同盟の終焉に四人はやるせなさを感じ複雑な表情を浮かべるのであった。

紙コップに眼をやりゆらゆらとその紙コップを揺らしながらヤンは何かを思索しているかの様な表情をしている。

「…どうしたんだヤン何か迷ってる様な顔して、言い辛い事でも有るのか。」

ヤンの表情の変化に八幡は彼の中の逡巡を見て取ったのであろう、それは八幡が言う所のボツチ故の観察眼の賜物であろうか。

八幡のその言葉に紙コップを揺らす事を止め、自分の隣に座る八幡の顔に視線移し、続いて正面の材木座をそして左手側方の由比ヶ浜と雪ノ下を見て静かにヤンは口を開き、その心の内を吐露する。

「…正直に言うとな、私は政府の停戦命令にホツとしたんだ…」

「…何と、ヤン殿何故に…」

「怖かったんだよ私は、自分のこの手でラインハルト・フォン・ローエングラムの命を断つ事がね。」

そこでヤンは一旦言葉を区切り再び皆に眼を向ける、そして「…軽蔑するかい…」と語りかけた。

「理由を話してもらえるかしら、でなければ軽蔑も何も無いでしょう。」

皆を代表する形で雪ノ下はヤンに、その理由を語る事を促す、由比ヶ浜はその雪ノ下の言葉に追従する様にヤンへ眼を向けコクリと頷き、八幡は無言でヤンを見つめ材木座は椅子へと座り直しヤンが口を開くの待っている。

その現況に思わずヤンは苦笑しそうになるが、その思いを押し止め軽く頭を掻くだけに止め、意を決し語り始める。

それはかつて、ユリアン・ミンツに彼が語った己の心情。

「……と言う訳さ、それは私自身の心情に対しては誠実では有ったのだろうけど、共に戦い死んでいった将兵達からすると許されざる裏切り行為であるのかも知れないね…」

ヤンはそのように言葉を結ぶ。

「…あたしはヤン君の事軽蔑なんて出来ないかな、逆にさヤン君凄いなって思ったよ、だって自分の国の人だけじゃ無くて敵の国の人的事まで考えるなんてあたしには出来ないよ…」

「……確かに軽蔑する様な事では無いと私も思うわ、争いに勝敗は付き物なのだからその結果同盟は敗れた、ヤン君は実戦部隊の指揮官として戦場に於ける責任は果たした、それで充分なのでは無いかしら。」

「…そうであるな、ヤン殿は自身の責務を十分に全うした、残念であると我は思うがな。」

「あれだな、10日以上も不休で戦い続けた結果だろそんなブラツクな状況で戦ったんだ、俺なら放り投げてるな、寧ろ始めからやらないと自信を持ってそう言えるまである。」

四人の言葉にヤンは己の思いが杞憂に終わった事に内心ホツとした、そして心の中で四人に『…ありがとう…』と礼を言う。

ポリポリと頭を掻きながら…。

「…で、メルカツツ提督に戦力の一部を預かってもらい艦隊から離

脱してもらったんだよ、後の再起の為にね、要するにロビン・フツドの伝説で言う所の、動くシャーウッドの森を率いてもらった訳さ…。」

足掛け12日間に及んだバーミリオン会戦、長き戦いにより損耗した心身の回復を図る為の休息の時間を終え、遂にヤン・ウエンリーはラインハルト・フォン・ローエングラムと初対面をすることとなり、ラインハルトの乗艦であり帝国軍総旗艦である戦艦ブリュンヒルトへと赴く。

「…そこで私を出迎えてくれたのはミュラー提督だったんだ、挨拶を交わし私は彼もまたキルヒアイス提督同様信頼するに足る人物だと確信できたよ。」

その場で交わされたミュラーとの会話の内容をヤンは、覚えている限り正確に四人に伝え聞かせた。

「…なんだか苦笑と言うか困惑した表情を浮べるミュラー提督の様子が伺える気がするわね、命を懸けて戦った相手の口から出たセリフが昼寝だなんて、さぞかし面食らった事でしょうね…」

額に手を当てやれやれと首を左右に振りながら述べられた雪ノ下の感想は、的確に的を射て居たと言えよう。

実際ミュラー提督は苦笑しながら「うまく行かないものですね」とヤン返したのだったから…。

ミュラーの案内により、遂にヤンは、ラインハルト・フォン・ローエングラムと直接の対面を果たした。

帝国軍総旗艦ブリュンヒルト、その艦内のラインハルトの執務室に於いて。

「…開口一番、アスターテ会戦で彼から送られた通信分を覚えているかと尋ねられてね、そしてそれに私が返信を返さなかった事を揶揄しながら彼は、ローエングラム公は私に自分の幕下に加わらないかとスカウトしてくれたんだ。」

「…ほう、流石にラインハルトは人を見る目がある様だな、我がラインハルトだったとしても当然ヤン殿をスカウトするであろうな！」

ふんぞり返るかの様に椅子に腰掛けている材木座は、さもありませんとばかりに鼻の穴を膨らませながら、無意味に偉そうに宣う。

その様子をヤンは苦笑しながら、他の三人はもうコイツの相手はしていないかと思っているのか、聞き流している。

そしてヤンはラインハルトとの会談の内容を語る、互いの思いを、より正確に自らの思いを伝えるべく言の葉に乗せ。

「…私には私の、ローエンングラム公にはローエンングラム公の性と言う物が有るからねだから私はローエンングラム公の、いやぶつちやけるとこの後すぐ皇帝となりローエンングラム王朝初代皇帝、カイザーラインハルトの臣下になる事が出来ない訳さ…。」

「欠点だらけでひ弱で容易く腐敗し衆愚政治と墮してしまふ事のなんと多いことか、それでも私は民主主義と言う制度が貴重な物だと思うんだ。」

ラインハルトとの会談の様子をヤンはそう締め括った。

その内容を聞いた四人はどの様な、想いを抱いたで有ろうか、例えば雪ノ下雪乃は比企谷八幡とこの奉仕部の部室で初めて出会い、言葉を交わした日こう言った。

人ごとこの世界を変えると…

「私はローエンングラム公の意見にも賛同出来るわ、劇的に改革を進めようと思うのなら独裁政治は実に効率よく実行に移すことが出来るもの、これまでヤン君が語ったローエンングラム公の様な能力と人格を有する独裁者であればだけでも、けれどヤン君の懸念も又最もな事だとも同時に思えるわ、権力者が時間を経てその思想が変異してしまう可能性も大いに有りうるでしょう、権力の使い方を誤りその権力の牙を民衆へと向け弾圧を始める。」

そしてその事実さえも権力者の都合の良い様に捻じ曲げられ書き換えられる。

私達のこの世界でも宇宙暦の世界でも歴史上にいくつもの事例が存在するのだから……」

雪ノ下の独白にヤンは静かに頷く、正に改革をドラスティックに推

し進めるには民主政治よりも独裁専制政治の方が効率的だ、ヤンもその様な一面が有るとは理解しているのだ。

「…敢えて何処とは言わねえけど、現在進行形でそれをやってる国もあるしな、ああやだやだ。」

両手を制服のポケットに突っ込み深々と椅子に腰を降ろし、背中をだらしなく曲げた姿勢で、左右に顔を振りながら呟くと言うには若干高い声音でそう口にしたのは八幡である。

その八幡のボヤク様な一言に由比ヶ浜は頭の中にクエスチョンマークでも浮かべているかの様な表情をしている、彼女はやはり社会情勢などに興味が無いのであろう。

同盟領は帝国の統治下に置かれ、同盟軍を退役したヤンは、晴れて念願の年金生活と美しき新妻を手に入れたのであったが…。

メルカッツ率いる動くシャーウッドの森による同盟軍艦艇奪取作戦が、その望みたる暮しに一つの影を落とす。

「実際私は、メルカッツ提督に内密に戦力を率いて頂いていた訳だし、この手が真つ白だとは言わないけどねえ、意に沿わぬ仕事を十年以上も続けて得た待望の暮らしを…：2ヶ月、たった2ヶ月だよ、私の予定では5年は何もせず楽に暮らせた筈なのにさ。」

帝国高等弁務官レンネンキャンプ、帝国に同盟を売り渡したヨブ・トリューニヒトの代わり自由惑星同盟政府最高評議会議長に就任した『ジョアン・レベロ』両氏のヤンに対する猜疑と思惑によりヤンは僅か2ヶ月でその理想の生活を放棄せねばならなく為ったのだった。

死せるレンネンキャンプ高等弁務官を生きている様に誤魔化し、それを人質としてハイネセンを退去せざるを得なくなったのであった。

結果ヤンはメルカッツ提督の艦隊と合流し同盟軍ダヤン・ハーン補機基地に身を隠し時を待った。

「…私はもしかしたら議長が、私に対し帰順を呼び掛けてくれるのでは無いかと淡い期待を抱いていたんだけど、結局そうはならなかった。」

皇帝ラインハルトは事の顛末を包み隠すことなく全宇宙に公表し、己の非を認めた上で同盟を誅伐すべく出陣を宣言したんだ。」

帝国による皇帝親征が発表された後、程なくしてヤンにも縁のある、一つの星系が自由惑星同盟からの脱退と独立を宣言する。

「シエーンコップやアッテンボローは直ぐにでもエル・ファシルへ行けと言っただけど、私としてはその意見に簡単に乗る訳にいかないと考えていたんだ、アッテンボローなんかはエル・ファシルを拠点にイゼルローン要塞を攻略しそこを民主政治の解放区にしようなんて気楽に言うし、シエーンコップはシエーンコップでエル・ファシルに乗り込んで私にその実権を握る様に提案してくる始末さ、ほんと気楽で良いよ……」

しかし結局はヤンはエル・ファシルへと向かう事となった。

「…最終的にはね、キャゼルヌ先輩に言われた一言で私はエル・ファシルへと向う決断をし、アッテンボローの案に乗る事にしたんだ。」

「…キャゼルヌ中將は何と行ったのかしらヤン君。」

雪ノ下は純粹に一つの決断に答えを出した一言がどんな含蓄を含んだ至言、或いは名言だったのかを知りたいと思ひ質問した。

「ああ、それはね…金が無いからどうするか決めてくれ、だったよ。」しかし、その一言は彼女の知的好奇心を満たす物では無かったようだ。

「…確かに、補給基地つても何れはそこに有る物資だつて食い尽くしちゃまうだろうしな、金が無いと飯だつて食ってけねえ訳だし、ましてや組織の運用となるとな。」

「うむ、キャゼルヌ殿は其の事を誰よりも深く理解して居られたのであるな、流石はイゼルローン要塞事務総監、ヤン殿にとっては大切な金庫番よな。」

八幡と材木座は逆にキャゼルヌの言に対して深く肯定するのだった。

二人はおそらくは小説アニメ、漫画やゲーム等からその辺りの知識を蓄えていたのであろう。

「それにね地球へ行つたユリアン達とも合流しなければならぬか

らね。」

招聘に応じエル・ファシルへと身を寄せたヤン一党であったが……
「首班の『ロムスキー』医師は情熱の人では有るんだが、政治や軍事については素人同然で他の閣僚達も似たりよったりさ、でもまあ、取り敢えずの根拠地は得た訳さ。」

そして、ユリアン達が地球から、フィツシャー、ムライ、パトリチエフといった元ヤン艦隊首脳陣がビュコック長官及び『チユン・ウー・チエン』総参謀長より戦力を託され、同盟各地の様々な少数部隊がヤンの指揮下で働かんとエル・ファシルへと集結。

イゼルローン要塞を再び奪取すべく計画は進行する。

「ユリアン達が地球で得た情報をこの時私は目を通さなかつたんだ、イゼルローン要塞の再奪取計画に注力せんが為にね、後にその資料に目を通した結果、私の一つの目算を見直す羽目になってしまったんだ。」

「ヤン殿、その目算とは？」

「フェザーンの商人達にエル・ファシルのスポンサーに付いてもらうという計画をね……幸いにも私にはボリスと言うフェザーン商人の知己がいる、イゼルローン要塞を落としそれを財貨とし彼等に我が方へ付いて貰える様にボリスへ働き掛けて貰おうと考えていたんだが、富の独占を嫌う皇帝ラインハルトの元ではフェザーン商人達はその財力を接収されてしまうかも知れないと危機感を抱かせたうえで、フェザーンとは逆のイゼルローンにその皇帝ラインハルトに対抗しうる勢力と独裁政治では無い政治体制が未だ健在で有ると知れば乗ってくれるのではないかと思つてね。」

ヤンは材木座の間にそう答え更に続ける。

「フェザーン自治領の創設には地球教が関わっていた、いや地球教が裏側から主体となってフェザーン自治領を創設させたんだよ、地球の過去の繁栄の時代を再び自分達の手に戻すべく暗躍していた訳さ、どんなに抗った所で時計の針を元に戻す事は出来ないのにな、彼

等は千年もの時を仄暗い欲望と共に暗躍していたんだ：だがまあその地球教の本拠地も帝国が討伐してくれたんだけど、それでもその残党は居ただろうしね、何せ帝国同盟問わずその勢力は深く蔓延っている訳だし、サイオキシンの麻薬の密造密輸まで手掛けている程の組織力迄有していたんだからね。」

宇宙暦800年1月、ヤン一頭によるイゼルローン要塞再奪取作戦が開始される。

「この作戦に於いて当然私は、之までの様に直接陣頭指揮するつもりでいたんだけど、エル・ファシル革命政権のお偉方に前線に出る事なく後方：エル・ファシル星から督戦する様にと命じられたんだ、アッテンボローと共にね。」

「…まあ、やはり革命政権の首脳部も私に対する拭い難い猜疑心が有ったのだろうね。」

メルカッツ提督に艦隊の指揮権を委ね革命政権予備軍はイゼルローン回廊へ向け進発する。

「イゼルローン要塞のルッツ提督に対して始めにイゼルローンを出撃する命令を、次にその逆の出撃を禁じる命令に要塞内に内通者が居るから捕えるようにとの通信を送ったんだよ。」

偽の指令を出す事でルッツ提督を翻弄し、彼はラインハルトからの真の命令であるイゼルローンからの出撃命令をも偽物と思い込んだ。

その後再び革命政権予備軍はイゼルローン要塞に偽の出撃命令を伝える、それは脅迫に近い文章で。

「そこで、ルッツ提督は結論を出しただろう、之まで送られた命令は私が仕掛けた罠だろうとね。」

「そう結論付けた帝国はイゼルローンから出撃したのか、ヤンの艦隊を撃つ為に…」

「うん」八幡の確認の言葉にヤンは頷き話を続ける。

ルッツ艦隊の出撃を確認したメルカッツ提督率いる艦隊はイゼルローン要塞へと進軍。

イゼルローン要塞を放棄した時に仕掛けた罠を発動させる。

「美容と健康の為に食後に一杯の紅茶を、それがイゼルローン要塞のシステムを停止させる為のプログラムのパスワードさ。」

右手人差し指を上へ向けながらヤンはほんの少しだけ、所謂ドヤ顔の様な表情でそう語った。

知的でユーモアにとんだセンスあるワードだとヤン自身はそう思っているからだ。

但しそれが、宇宙暦の世界の彼の部下達及び奉仕部の部室に居る四人が、ヤンと同じ様に認識しているかは敢えて語るまい。

イゼルローン要塞の機能停止を確認したユリアン始め突入部隊が要塞内部へ突入。

予備制御室より要塞の機能回復の為のパスワードを入力。

「ロシアン・ティーを一杯。ジャムでは無くママレードでも無く蜂蜜で、それがイゼルローン要塞の機能回復の為のパスワードだよ。」

「……………」

それを知った四人がどの様な表情をしていたかそれも又語るまい、但しヤンが思っている様な表情では無いとだけ記して置こう。

機能を回復させたユリアン達突入部隊は、イゼルローン要塞へと迫りくるルッツ艦隊に対し要塞主砲トールハンマーを発射、それによりルッツ艦隊は戦力の1割を失いイゼルローン回廊より撤退。

残っていた守備隊も潰走、降伏。

イゼルローン要塞は再びヤン一党の手に戻ったのだった。

「おおっ！何と言う駆け引き、何と言う策謀よ、ヤン殿見事であるな！」

材木座は感嘆の思いを込めヤンを讃える、材木座の様に声に出さずとも他の三人もまた、イゼルローン要塞再奪取作戦の一連の展開に感嘆の思いを抱いている様だ。

「ありがとう材木座君、ただどこの結果皇帝ラインハルトは私を討伐する為にイゼルローンへ進軍するだろうと予測出来ていたし、実際そうだったんだ。」

イゼルローン要塞の再奪取が為りヤンは、やがて迫りくるであろう帝国軍を迎え撃つべくイゼルローン要塞へ帰着。

そこでヤンは一つの訃報がもたらされる、それはヤンが敬愛するビュコック元帥の戦死の報であった。

「…後悔したよ、長官のお人柄を考えればこうなる事は予想出来た筈だったんだ、私はハイネセン脱出に際し無理にでも長官をお連れするべきではなかったのかとね……」

「……」

「だけど同時にビュコック長官は、そうなった時に私の申し出に応じる様な方では無いと言う事もね、長官は命を賭して戦う事で残される者達に見せようとしたのだと思うんだ、人の命の有り様をねその意志を…私は運命だの宿命だのと言う言葉は好きでは無いし使おうとも思わない。」

だから私は長官は御自身の意志の従いその道を選びその責務を全うたされたのだとそう思っているんだ。」

「……本当に惜しい方を亡くされたのね、叶う事なら是非直接お会いして御指導をお受けしたいと、そう思える方様ねビュコック元帥と言う人は……」

雪ノ下の言う指導を受けると言う言葉は何を指しての事なのか、この場で彼女は語らなかつた、しかし彼女がビュコック元帥の生き方に感銘を受けたのは確かの様であった。

「そだね、本当に素敵なお爺さんなんだね……」

そう述べる由比ヶ浜な目元には、微かに雫が浮かんでいた。

「……」

八幡は無言であったが、その表情は見る人が見れば、まるで何かに耐えているかのような顔に見えた事だろう。

…そして材木座は、彼らしく大袈裟に嘆いて見せている。

その姿は平常運転と言うべきか……。

ビュコック元帥戦死の報を受け72時間の喪に服した後、イゼルローン要塞に於いてヤン率いる革命政権予備軍、通称不正規軍（ヤン・イレギュラーズ）は皇帝ラインハルト率いる帝国軍を迎え撃つべく行動を開始する。

と同時に自由惑星同盟と言う国家は完全に滅んだ、皮肉にも滅んだ後初めて自由惑星同盟は帝国によって国家として認められたのであった。

それまでは辺境の反乱軍と呼称されていたのであったから。

「このイゼルローン回廊における一連の帝国軍との戦いが私にとって人生最後の戦いになるんだ。」

「おおっ、いよいよで有るか…所で話は変わるが、ヤン殿はラインハルトを即位した後カイザーと呼んで居られるが、エンペラーとは呼ばないのであるな、ああいやな、我個人としても英語のエンペラーよりもドイツ語のカイザーの方が、言葉の響きがそのカツコイイとは思うのであるがな、うむ！」

今更ながらの材木座の独白であった、ヤンはその発言に思わず吹き出しそうになったのだが、八幡と雪ノ下は材木座に対し冷たい眼差しを送るのであった。

「へっっカイザーってドイツ語なんだあたし知らなかったよ…ってか中2そんな今はどうでもイイじゃん、話の腰折るなし！」

少し感心して見せた由比ヶ浜であったが、やはり彼女も結局は材木座の発言に多少はイラツとしては居る様だった。

宇宙暦800年4月下旬、後に回廊の戦いと呼ばれる一連の戦いの前哨戦が始まる。

あらかじめエル・ファシルには無防備都市宣言を出してもらい、戦力をイゼルローン要塞一箇所に集中し不正規軍は帝国軍に相対した。

「旧同盟領方面からはビツテンフェルト、ファールレンハイト両提督の2艦隊が帝国領方面からは芸術家提督の異名を持つ『メツクリン

ガー』提督の艦隊がイゼルローンへ進軍して来ていたんだ。」

先行して旧同盟領方面よりイゼルローン回廊に到着したビツテンフェルト、ファアーレンハイト両艦隊。

ビツテンフェルトとアツテンボローによる喧嘩上等の通信合戦を経て、ラインハルトの本体が到着するまでに、少しでも帝国軍の戦力を減らしたいヤンはそれを持って戦端を開く。

一戦交えた後、帝国領方面より進軍して来るメックリングー艦隊に対処すべくヤンは交戦中の2艦隊に対し偽の通信文を送る、それはメルカッツ提督の名を借りた、裏切りを示唆する内容のものであった。

「真偽の程は兎も角帝国軍はこれを検討する為に時間を掛けることだろう、そのスキに私は帝国領方面のメックリングー艦隊に対し、我が方の艦隊ほぼ全てを投入して出撃、これで上手く行けばメックリングー提督は勘違いをしてくれるだろうと考えたからさ。」

それは功を奏し、メックリングーはヤンの元に集結した戦力の数を見誤り、イゼルローン回廊より撤退する。

これにより帝国領方面からの進軍は封じる事が叶い、ヤンは旧同盟領方面にだけに戦力を振り向ける事が出来る様になったのである。

ビツテンフェルト、ファアーレンハイト両艦隊を戦闘へと引きずり込み、両者共攻勢を得意とする故か、上手く連携を取れない両艦隊を撃ち減らして行く不正規軍。

両艦隊を半数にまで撃ち減らし、そして。

「メルカッツ提督手によってファアーレンハイト提督は討死、ビツテンフェルト提督は残存兵力を率いて撤退し、取り敢えず第一段階は終了ってところだね、けどこの戦闘でうちの艦隊もそれなりに損害を被ってね艦艇は凡そ2万隻といった所かな対する帝国軍は14〜15万隻位かな、普通に考えて勝てる訳がないよね…」

それはローエングラム朝銀河帝国軍における初の上級将の戦死者であった、しかしヤン不正規軍も当然ながら戦力を損耗していたのだった。

ヤン不正規軍は回廊入り口を機雷により封鎖し帝国軍の足止めを図る、しかし帝国軍は指向性ゼツフル粒子を用いて機雷原を爆破し、通路を作り出し回廊へ突入。

「突入して来た帝国軍に砲撃を加えそれなりに損害を与える事は出来たんだけど、数的な劣勢は覆し様も無く損害を出しながらも帝国軍は回廊への侵入に成功してね、いよいよ本格的に戦いが始まったんだ。」

「…14万対2万、絶望的であるなヤン殿、この状況覆す事など出来るのであろうか…」

「ああ、全くその通りだけどそいつは今更さ、取り敢えずは回廊の狭さを利用して守備を固める事にしたんだ。」

しかしメルカツ提督の提案により帝国軍左翼に攻撃を集中、その隙にマリノ分艦隊により敵本体を攻撃する策に出るが、シユタイムツ艦隊が盾となりマリノ分艦隊は壊滅の危機に瀕する。

が、ヤン本体が密集隊形にて突入しシユタイムツ艦隊は側面を突かれ、打撃を被りシユタイムツ提督は戦死。

混乱する帝国軍を立て直す為にロイエンター元帥は本体を後退させヤン艦隊を引き込み包囲しようとするも、指揮系統の乱れにより艦隊の連動は上手く行かず。

「その隙きを付いて一点突破戦法を試み総旗艦ブリユンヒルトに迫ったんだけど…流石は皇帝ラインハルトだ…絶妙なタイミングで我が方のウィークポイントに攻撃を加えて来てね、かなりの損害を出した我々は一時後退を余儀なくされてしまったんだ。」

イゼルローン要塞への後退により一時的な休息を取り、その後帝国軍からの波状攻撃によりヤン不正規軍はその戦力を損耗して行く。

ヤン不正規軍はそれでも善戦を続け、戦況は膠着状態となっていた、だが。

「そして遂に皇帝ラインハルトは、私が最も恐れていた戦法に撃つて出て来たんだ。」

「どの様な戦法なのかしらヤン君。」

話の先を促す雪ノ下の質問に、ヤンは答える様に続ける。

それは帝国軍の圧倒的な戦力を最大限に利用した縦列陣を以て、ヤン艦隊に対し休む間も無く攻めつづけると云う、単純な戦法である。

「1陣がこちらに対し攻撃し、武器弾薬を使い果たしたら、次の陣と交代し撤退、それをひたすら繰り返したこちらの損耗を促すと言うこととさ、至極単純な戦法だね、だからこそ恐ろしいんだ戦力差が圧倒的だからね。しかも最初の1陣目からして鉄壁ミユラーの艦隊だ、それ以外にも帝国の双壁に猪武者だと揶揄されてはいるが、攻勢に於いて無類の力を発揮する黒色槍騎兵团艦隊、それ以外も皇帝ラインハルトの配下の諸将は一流揃いだ、それらの相手をしなければいけないなんて、ほんと誰か代わってくれないかと心底思うよ。」

誰か代わってくれないかと言うヤンの本音、これ迄に語られた宇宙暦の物語に於いて、ヤン以外の者にそれを指揮出来る者が存在しないであろう事が、話を聞く四人にも十分に理解が出来ていた、若干1名理解力に不安を抱える人物は居るが、理解していると、此処は好意的に考えよう。

「…そして第4陣と相対した時、私はかけがえの無い損失を被ってしまったんだ…：：：フィツシャー提督が戦死してしまったんだ…：」

長年ヤンの麾下に於いて艦隊運用に手腕を発揮した、ヤン艦隊のいぶし銀的存在、ヤンをして名人芸とまで評された手腕はヤンの立案する作戦に必要不可欠な物であった。

「…これで私は翼をもがれた鳥も同然になったと言っても過言では無い、そう言う状況に追い込まれた訳さ…：」

「しかし帝国軍はそこで一旦兵を引いてくれて、まあ戦術的には帝国軍に多大な損害を与える事が出来た訳で、あちらも戦力の再編を計ろうとしたんだろうと思うんだが、我々もそれに合わせ再び機雷を設置してイゼルローン要塞へ帰投していた所に、帝国軍からの通信が届いたんだ。」

それは皇帝ラインハルトからの停戦と交渉を呼び掛ける通信文であった。

帝国に対し純軍事的に勝ち目の無いエル・ファシル革命政権と革命政権予備軍のこの戦いにおける最大の目的であった帝国との皇帝ラ

インハルトとの会談のテーブルに就くこと、それが成った瞬間であった。

「…なんだけどね、いや長い期間戦闘が続いて碌な睡眠も休養も取れてなかったものだから、頭がまるで働かなくて、それに付いて直ぐには吟味出来無い状況でね、兎に角睡眠が欲しかった、その時の私のいや私達の偽らざる本音がそれだったね。」

「だよなくあ、俺だって自分の部屋のベッドの上が一番好きだからな、ヤンじゃねえけど俺も睡眠大好きだからな、まあ何だ、ベッドこそは聖域サンクチュアリと言っても過言じゃ無い迄あるな。」

しみじみと首を縦に振りながら、呟くヤンの姿に八幡が共感の言葉を述べたのだった。

「…貴方の場合はそこ以外に居場所が無いだけではないかしら、居場所無し谷君。」

「お前何気に失礼な奴だよな、俺にだって居場所位有るからね、家のリビングとか風呂とかトイレとか、そして何よりも小町のそばとか。」
「て、それほぼ全部自分の家の中じゃん、しかも小町ちゃんのそばって、ヒツキーてばシスコンすぎっ！キモいから、あんまそういう事言うなし!!」

雪ノ下の毒舌から始まり八幡の返しと由比ヶ浜の突っ込み、これも一種の奉仕部の様式美と言うべきか。

その様子をヤンは暖かな眼差しで見つめている。

そして材木座は自分も混ざりたそうな表情で見ている。

しっかりと休養を取った後、改めて皇帝ラインハルトとの会談に付いての打ち合わせを済ませ、ヤンはエル・ファシル革命政権の首脳陣と、護衛を伴いイゼルローン要塞を出立する。

出立に際し選ばれた艦艇は嘗てヤンが査問会に出頭した際に乗艦した、巡航艦レダII。

あの時は無事に帰ってくる事が出来たから、ゲンを担いでと言う心情と大型の戦艦等で乗り付けて帝国軍に対し要らぬ警戒心を抱かせ

ない為との配慮故の措置である。

「この時副官であるフレデリカは体調を崩し寝込んでいたから、連れて行く訳には行かずイゼルローンに残って貰い、ユリアンにも残ってもらったんだ。」

「ユリアン殿としては無念だったのではあるまいかなヤン殿、その様な一大イベントに己が参加出来ぬことが。」

「…かも知れない、でも仮にもし私が行けなかったとしたら、その時は私はユリアンに代わりに行ってもらっただろうね、あの時は、私が行けたから私が行った。」

それだけの事さ、ヤンはそう述べてから、付け加えた先のヤンの言葉をユリアンに語ったのだと。

「そして私達はイゼルローンを出発した訳何だか、それは宇宙暦800年5月31日が終わり6月1日未明だった、この頃私は妙に寝付きが悪くてね、就寝するにあたり、睡眠導入剤を服用していたんだ、そんな状況の時にブリッジから通信があったんだ。」

それは嘗て自由惑星同盟軍の実質的な崩壊の原因となった無謀なる帝国領遠征計画を立案した、アンドリュー・フオーク准将がヤンの暗殺を企て武装商船を奪い、その実行の為レダIIへと向かっているとの情報だった。

「いやはや、此れは又妙な名前が登場するものであるな、その男は確か暗殺未遂で服役中ではなかったか、ヤン殿。」

「その筈だね、だがおそらくは何物かが彼を唆し計画の実行に手を貸したか、或いはそれを利用し私を殺害しようとしたのかも知れないね、まあ死んでしまった私がそれを知る方法は無いがね。」

「……………」

自身の生き死ににまつわる事象を軽い口調で語るヤンに四人は思わず言葉に詰まってしまった。

幾らか大人びて見える雪ノ下（実際は年相応な少女であるのだが）、捻くれた思考をする八幡もその達観した様なヤンの死生観に戸惑う物を感じた様だ。

「時にヤン殿、人は己の死に際して予感を感じると聞くが真である

うか？」

「…ユリアンにも同じ様な事を聞かれた事があるが…材木座君、君は一度も死んだことの無い奴がそれについて偉そうな事を言っているのを信じるのかい？私は信じないけどね。」

実際に宇宙暦の時代に死した経験のあるヤンではあったが、彼はその死に際して予感など感じてはいなかった。

寧ろその身の危機が迫っている状況でフレデリカとユリアンを連れて来なくて良かったと、胸を撫でおろしている様な有様であったのだから。

「そして帝国軍の駆逐艦がそのフォーク准将の乗る武装商船を撃墜し、我々とのコンタクトを求めて来てね、ロムスキー医師を始め革命政権の首脳陣は、紳士的対応としてそれを受け入れたんだ。」

ガンルームのモニターで、その様子を見ていたヤン、ブルームハルト、パトリチエフ、スール、そのモニター越しに見えた光景は。

「…帝国軍兵士によるロムスキー医師達、エル・ファシル政府の首脳陣が殺害される光景だった…。」

すぐさま異変を察知したヤンの部下達はこれに対処すべく行動を開始、防衛迎撃の為にバリケードを築き事に当たる。

「皆が必死に私を護ろうとしてくれていたんだが、如何せんテロリスト達の方が我々よりも人数が多くてね、隠れていて下さい提督から逃げて下さい提督に要請が変わるまでさしたる時間はかからなかったよ。」

その声に従いヤンはガンルームから撤退する、部下達をその場に残す事に忸怩たる思いを抱きながらも。

「とは言っても、艦の中だからね何処に逃げれば良いのやら、艦内通路を当てもなく歩いてる時だった…帝国軍の軍服を着た兵士が私を呼び止めたのは。」

その声を発した後、その男は直ぐ様己が手にしたブラスターを発した。

その熱線はヤンの左脚大腿部を貫通した。

「ブラスターと言う武器は、中々に嫌らしい武器でね、人の肉体を貫

通させる程の高熱を発しながらも、同時にその傷口を炭化させない温度に調整出来るんだからね、その熱線は動脈層を撃ち抜いていて、包帯代わりに巻いていたスカーフを血の色に染めあげてしまっても出血は止まることが無かったんだ。」

「…ヤン君……。」

悲しげに小さな声を発する由比ヶ浜、一人の男の人生の終着点を知った彼女はそれ以外に言葉を口にする事が出来無いでいた。

他の者たちも、それは同様か。

「不思議なものでね、それだけ血が出れば身体は軽くなっている筈なのに、妙に身体が重く感じるんだ、やがて歩く事も出来なくなってしまうにしゃがみ込んでしまったんだ…全く私はフレデリカやユリアン、それにこんな私に付いてきてくれた皆を遺して、宇宙の片隅でくたばってしまったんだ、皆に詫びの言葉も残せずにね…。」

宇宙暦800年6月1日午前2時55分、ヤン・ウエンリーの人生の時間はそこで停止した。

彼自身が、己の人生の終わりを迎えた正確な時間を知ることには無いであろう。

それは今生に於いても…。

銀河の歴史を語り終えた魔術師は。

「こうして宇宙暦の時代で私は一度命を失ってしまった訳さ……」
前世での己の人生とその世界の歴史を語ったヤンはそう一区切りした。

「…そして何時からだろうか、私は不思議な夢を見る様になったんだ、それは時に断続的に時にまるで物語、ドラマのストーリーの様だね、やがて12歳の頃だったかな。」

「何だか不足していたパズルのピースがキツチリと噛み合ったかのような、そんな感覚を覚えてね…私は其れまで見続けていた夢が自分の前世の記憶だと認識出来たんだ。」

今生、21世紀の地球上に於いて、ヤン・ウエンリー少年は、宇宙暦の時代を生きた男の人生をもう一つの己の人生だったのだと認め受け入れた。

「だけどね、残念ながら転生にあたっての特典は何も貰えなかった様でね、異能の力を打ち消す右手も波紋の呼吸も黄金長方形の回転も、当然スタンド能力なんぞ持ち合わせては居ないんだ、材木座君にとってはラノベのネタに出来無いだろうからそこは申し訳無い。」

「イヤイヤ何の、これ迄に語っていただいた、宇宙暦の話だけでも充分であるぞヤン殿！とても貴重な話が聞けたぞ、改めて礼を言おうヤン殿、ありがとう心より感謝する。」

材木座はヤンに対し、本心からの礼の言葉と共にその頭を垂れた。
「そこまで感謝される様な事はしていないさ、頭をあげてくれ」とヤンは材木座に促す、ヤンはまだ語っていないのである、この一連の話のオチを。

「…でだね、12歳にして前世の記憶に目覚め…私は心底絶望したんだ。」

クエスチョンマーク、この奉仕部の部室に集ったヤン以外の四人の頭には、疑問符が浮かんでいた。

普通ならば一度死して、再び人生をやり直す事が出来るのである、

其れを喜び

こそすれど(但し二度目の人生が不幸な境遇であると言うのならば別であるが)絶望する事が何処に有るのか、今生のヤンの実家は裕福であり世界的に商いの手を広げる商家、資産家である、なのに何故。

その絶望する理由をこれからヤンは語る、それはとても彼らしい理由である。

「…だってね、12歳だよ、そんな年齢じゃあ酒だって飲めやしないじゃないか、私の家の家族構成なんだが、両親と十歳年上の兄貴が居るんだけど、両親は勿論の事だが、その時既に兄貴も成人していてね、夜食の席には当然ながら3人にはアルコールが供されるのだが：はあ私の席には子供向けのドリンクが供される訳さ、これを不幸と言わずして何を不幸と言おうか。」

「何と言うか言うべきか、やはりヤン君はヤン君なのね：はあ。」

「あはははははっ、何かヤン君らしいって感じかな。」

「長々と語った話のオチがコレかよ、まあソレでこそヤンって評価しか出来ないわな：。」

奉仕部の三人はそれぞれにここ数日で知ったヤン・ウエンリーの為人と、この日語られた物語とそのオチに彼らしいとの感想を抱いたのだった。

「…まあこんな感じたね材木座君、此れは私がこれ迄に学んだ歴史戦史を元にSF、スペースオペラと言ったジャンルの小説や映画アニメ等の物語に落とし込み、最後に異世界転生物のライトノベルの要素を加えてみたんだが、どうだろうか我ながら中々に上手く纏められたと思うんだが：。」

そう、この日ヤンが自分の過去前世から今生に至る迄の人生を語ったのは、材木座のラノベ作家になりたいと云う目標に対してのアドバイスの為であったのだから、ヤンは其れをフィクションであるのだと、あくまでも物語の創作における作法の一つだと認識させなければならぬのだ。

「…素晴らしい、素晴らしいぞヤン殿おおっ！」

材木座は再びオーバリアクションで己の喜びとヤンに対する感

銘を表したのだった。

大きく身体と腕を振り回しながら、その様を他の者たちは毎度の如く、冷たい目で眺めて居るのだが。

ひとしきり騒いだ後、唐突に材木座は床に正座をし、ヤンに対して手を付き頭を下げた。

所謂土下座というやつだ。

「ヤン殿、頼む我に…俺に書かせて貰えないだろうか、宇宙暦の物語を是非、お願いします。」

真剣な口調で、普段の中2病的な口調を止め懇願する材木座の姿はこれ迄に、八幡でさえ見たことの無い姿だった。

「おい、材木座お前はラノベ作家になりたいんじゃないのか、幾らヤンの話が良く出来ていたからって、今度はソレをパクるつもりかよ。」

八幡はその淀んだ眼に、非難の色を浮かべ材木座へ問い掛ける。

「無論その夢は諦めてはいないさ、これ迄に雪ノ下さんや八幡お前に貰ったアドバイス、それからヤン殿が今日語ってくれた話とアドバイス、其れを踏まえ俺は之から自分を磨く、そして第一の目標はラノベ作家となる事、そして更にその先に宇宙暦の時代の物語を書き綴る事が出来るだけの文章力を身に着ける事だ。 書きたいんだヤン殿やラインハルトや大勢の英雄達の物語を、今はまだ駄目だ俺には其れを書けるだけの実力は無い、だが十年、否それ以上掛かったとしても何時かは…書きたい。」

八幡は驚いていた、これ迄材木座はラノベ作家になりたいと言いながらも、どこかその言動に中途半端さを感じていたからだ、実際材木座自身も己の夢にその様な面が有ると感じていたのかも知れない。

だが、今はそれが無いその眼鏡の向こうの眼差しは決意した者のそれであったのだ、少なくとも八幡にはその様に見えた。

八幡だけでは無い、雪ノ下と由比ヶ浜の二人も材木座の変わり様に驚いている様であった。

二人の目には普段の材木座に対する軽蔑するかの様な眼差しは無い。

「勿論ヤン殿の話をソツクリそのまま書く事などしないさ、自分なりの解釈や他のキャラの視点も加える、そしてヤン殿の死後の物語も書こうと思う、その辺りは俺の独自の解釈で進めるがな。」

ヤンは静か微笑んでいた、材木座の決意の言葉を嬉しく思っているのだ。

願わくば、材木座がその目標に手が届きます様にと願うヤンであった、尤もヤンは神の存在など信じては居ないので、願う先が何処かは定かではないのだが。

材木座が部室から出て行き、部員の四人だけが残った室内。

初夏の頃日も長くはなっているが流石に空の色は朱色と深い青がまじり始めていた。

「今日は随分と口を開いて喉も渴いたけれど、雪ノ下さんの紅茶のおかげでそれも癒されたよ、ありがとう雪ノ下さん、だけど流石に少し飲みすぎたかな、ちよつと失礼するよ。」

そういう言い残しヤンは席を立ち廊下へと出て行った、その行く先は……。

3人になった部室内は暫しの沈黙に支配されて居たが、意を決したかの様に彼女は言葉を紡ぎ出した。

「比企谷君、由比ヶ浜さん、どう思ったかしらヤン君の語った物語は？」

雪ノ下の発したその言葉は疑問符付きであった。

「どうってのは、この場合何を指しているんだ雪ノ下。」

八幡は淀んだ眼に、猜疑的な色を現し雪ノ下の真意を聞くべく質問に質問を返した。

質問に質問で返すんじゃないやあ無い、若干ながら雪ノ下がそう返して来るのでは無いかと期待していた八幡だったが、その辺りの知識に疎い雪ノ下は八幡の意に沿う返答はしなかった。

『べつ、別に期待していた訳じゃ無いんだからね、本当だよ。』と脳

内で八幡はセルフ突っ込みをしていた。

「ヤン君は、普段の言動は問題が有るけれど…そうね私は思ったの今日彼から聞かせて貰った物語、そしてそれに付随する彼の考えやその見識が、とても私達と同じ高校2年生の物とは思えない、それを遙かに越えていると、そう私は思ってしまったのよ、そして…：これは貴方達二人に、もしかしたら笑われてしまうのでは無いかと思わなくも無いのだけれども、私にはヤン君の話がとてもフィクションだとは思えなかったのよ、嘘偽り無く彼は真実を語ったのだと。」

自身の感じたヤンに対する印象、ともすればそれは他者から笑われてしまうのでは無いかと雪ノ下はそう思った。

そう思うのが普通では無いか、彼女は考える。

「苦笑わねえよ、俺も正直そう思ったんだ、何よりもあの話、あれだけのポリュームのある物語をたったの一晚で形にする何てのプロの作家でも無理だろうからな、ヤンが作家志望でこれ迄ずっとあの物語を考え続けて居たなら話は別にだけど、初めて会ったあの時…あいつは歴史研究家志望だと言ってたからな。」

「けど、ソレでもそうだったとしてもあいつは…ヤンはヤンだ、俺はソレで構わない…それで良いんじゃないやね、深く考えても多分真相は解かんねえだろう、確認のしようも無いしな…まあ、知らんけど。」

雪ノ下の思いに対する八幡の返答は、彼女の考えを否定する物ではなかった。

何故ならば、八幡も内心は雪ノ下と同様な思いを抱いていたからに他ならなかったから。

「…：…：…：何かね、あたしは…ヤン君スゴいなあつて思ったんだ。」
雪ノ下と八幡のヤンに対する思いを聞き、由比ヶ浜は自身の思いを口にする。

「あのき、あたしはゆきのんやヒツキーみたいに難しい事は良く解かんないところ有るけどき、前にゆきのんが中2に言ったこともスゴイなって思ったけど、ヤン君のはゆきのんが言った事よりも、もっと凄いつて思ったんだ。」

「…：…：…：。」

由比ヶ浜は自身の考えを、彼女なりに考えながらもしつかりと伝えようとしている、雪ノ下はその姿を正面から真つ直ぐに見つめ、八幡も馬鹿にしたり皮肉を交えたりする事無く、頬杖を付きながらも見守る様に見つめている。

「最初に中2が小説持ってきた時、あたしは印象だけで中2の事キモいって思ってた、預かった原稿だって家で何行が読んで：何かつまらないって思ってた、途中で読むの止めちゃたしね：皆はちゃんと読んできたのに、ゴメンナサイ。」

「…結局さ、あたしだけ適当だったんだよね、ヤン君の話聞いてさ：ヤン君はすつごく真剣に中2事考えてあげてさ、あんなスゴイお話まで作って、それが現実かどうか何てあたしには解かんないけど、ヤン君もゆきのんとヒツキーみたいになんと考えてたんだなあって：だからねあたしも、やつぱちやんとしなくちゃだよね…うん。」

八幡と雪ノ下は驚いていた、ヤンの話を聞いた由比ヶ浜が二人から見て成長している様に思えたからだ、材木座もそうであったが、由比ヶ浜もどうやらその様であった。

そして、その二人に成長を促したヤンの手腕に対して、今はまだ言いようの無い何かを感じ取ったのだ。

由比ヶ浜の精神の成長を目の当たりにした二人は、何故そうなったのか其れを分析する様に思考し始めた、だから由比ヶ浜が椅子から立ち上がった事に気が付くのが、遅れてしまった。

由比ヶ浜が自分の席を離れて、八幡の目の前に立っていることに、二人は気が付いていなかった、だから「ヒツキーごめんなさい」と頭を下げ詫びの言葉を口にする由比ヶ浜に気が付いた時、八幡はその淀んだ眼を大きく開き驚きの表情を浮かべていた。

「ちよっ、ビックリした！何お前急に人の目の前に立っちゃってんの、しかも何をイキナリ頭なんか下げて、ちよっと止めてくんない、イキナリ出すのは熊本名物いきなり団子だけで十分だからな、イヤほんど止めて、それと雪ノ下その携帯はしまえ俺は何もやっちゃ居ない無実だ、冤罪だ！」

「犯罪者は誰しもそう言うのよ、己の罪を認める事は最初はしない

の、だからこそ警察は取り調べを行うのよ、解ったかしら犯罪者谷君。」

「ゆきのん、あたしがヒツキーに謝ってるのはね、ケジメだからなんだ。」

あたしはヒツキーにちゃんと謝んなきゃいけないんだ。」

「そう、私も聞かせて貰ったも良いのかしら由比ヶ浜さん。」

「…うん、大丈夫だよゆきのん。」

何時もの様なやり取りを終え、三人は気を改めて、由比ヶ浜の八幡に対する謝罪の言葉、その真意を聞く事とした。

「えっと、ヒツキーはさ去年の入学の日に事故に遭ったよね、道路に飛び出した犬を助ける為にさ。」

「…ああ。」

「……っ……」

事実確認をする様に由比ヶ浜は八幡に問い、八幡は其れを事実と認め返事をした。

向かい合って互いを見つめ合う二人には見えて居なかった、雪ノ下がその言葉にその表情を変えたことに。

「ヒツキー、ありがとうサブレを助けてくれて…あたしなんだ…あの時ヒツキーが助けてくれた犬の飼い主は…後であたしヒツキーん家にお礼を言いに行ったんだけど、ヒツキー居なくてさ小町ちゃんが居てお菓子渡して、後で学校で直接お礼を言うって、小町ちゃんに言うて帰ったんだ…それでしばらくあたし学校でヒツキーの事探して、でも中々見つかんなくて…でもやっと見つけて、お礼言わなきゃって思ってた…。」

「…あれだよな、由比ヶ浜…学校での俺の態度とか見てお前、声掛けられなかったんだろう、ハツキリ言うて俺は人との関わりを自分で拒否してたからな、だから由比ヶ浜お前みたいに周りの空気を読む奴は、俺みたいなの奴にスクールカースト最底辺に居る奴に声掛け辛いよな、その結果お前は俺に話し掛けるタイミングを失って今に至ってしまったって訳なんだろう!？」

「…うん。」

由比ヶ浜の性格から導き出した、八幡なりの思考の結果を確認する様に八幡は由比ヶ浜へ問うてみた。

その答えは、八幡の予想通りの彼女の返事と頷く仕草。

「ホントはさ初めてここに来た時の、あのクツキーはね、ヒツキーに渡したかったんだ、ありがとうとゴメンナサイの気持ちを込めて…えっとねその、だからあたし今ちゃんと言わなきゃかなって、ヒツキーには今更だっと思って思われるかもだけど…ケジメ着けなきゃ始めらんないかなって…ヒツキー遅くなつてゴメンなさい。」

由比ヶ浜の顔はほんのりと紅潮し、瞳には涙の雫が溢れ出していた、その表情から八幡は感じ取っていた、彼女の言葉に嘘偽りの色は感じられないと。

「…由比ヶ浜、もう一年以上も前の事だ、俺は何も気にしちや居ない、だからお前も気にすんな。」

…けどお前がそれじゃ気が済まないってんなら、俺は…お前の礼と謝罪を受け入れる、それで良いか由比ヶ浜？」

なので彼は、彼らしく捻じた表現で由比ヶ浜の思いを受け入れた。

「うん！ありがとねヒツキー、サブレを助けてくれて。」

涙の雫を滴らせながらも、由比ヶ浜の表現は喜びの色が大きく浮かんでいる。

その表情に八幡は眼を奪われていた、平塚教諭に初めてこの部室に連れて来られて、この場所に佇む雪ノ下と同じ様に八幡は眼を奪われた。

その時と同等が、それ以上の思いを抱き八幡は由比ヶ浜の顔から視線を逸らすことが出来なかった、それ程に今の由比ヶ浜の表現は八幡にとって魅力的に映っていたのだった。

「それでねヒツキー、あの…えっくとね、ヒツキーあつ、あたしと友達になつて下さい!!」「

「…つつ、おっおう!？」

勢いに押され思わず返事をしてしまった八幡だが、『いやいやいやいや、断われねえってあんな顔で頼まれたら、何だよコイツ、ヤバいつ

て由比ヶ浜のやつこんな可愛かったのかよ、いや知ってたよこいつが可愛いって事は、でもあれは反則だつてのヤバい勘違いするなよ、あくまでも由比ヶ浜は友達になろうと言つてんだ、付き合おうって言つてる訳じゃ無いんだからな、勘違いするなよ俺。』

再び、黒歴史を繰り返してはなるまいと八幡は己の心に言い聞かせる。

その時、所用で部室を空けたヤンが戻って来た。

ヤンは部室内に居る三人の立ち位置とその表情から、はて自分が居ない間に彼等の間に何かひと悶着あつたのかと思つたが、何ら確信を持っていても無し何も言わず自分の席に着いた。

やがて時刻は完全下校時間を目前としていた為彼等は部活を終え帰宅する事にした。

この日一人の中二病ラノベ作家志望の少年は、己の目標を見定めてそれを目指し邁進する覚悟を決め、一人の少女は一年に渡り蟠りわ抱いていた心に一つの区切りをつけ、改めて己の恋心に向き合う事を決めた。

しかし、一人の少女が未だ己の中の蟠りの心に向き合えずにいる事にヤン達は気が付か無かった。

5月が終わり間もなく6月を迎えようとしている。月末の一日、ヤン・ウエンリーは奉仕部の部員として初めての依頼を遂行し、まずまずの結果を残した。

魔術師の穏やかな日常、そして。

21世紀の地球上に転生し、日本は千葉県総武高校に於いて学生生活を送る、ヤン・ウエンリー。

かつて日本へ初来日を果たした時偶々出会った同い年の、淀んだ眼をして捻た物言いをしはするが、本質的には優しい気質を持つ少年、比企谷八幡。

ヤンは彼と友誼を結び、彼の所属する部活（一風変わった活動理念を掲げる）奉仕部へと入部し、ヤンにとっては初めてとなる依頼をこなしてから、間もなく一週間が過ぎようとしていた。

その間奉仕部には新たな依頼は舞い込まず、ヤンを含めた奉仕部の面々のはんびりとした時間を送っていた。

奉仕部には所属する部員のうち三人、部長の雪ノ下雪乃とヤンにとっては日本で得た初めての友人比企谷八幡そしてヤン、この三人は読書を趣味の一つとしており専ら部活中は読書に勤しんでいる為に、口数は少ないが互いに自身が読んだ本を勧め合ったり、感想や考察を述べ合うなど良好な関係を築いていた。

「うゝ、あたしも本よもうかな…」

四人中唯一人、読書を趣味としない由比ヶ浜結衣はその日唐突にそう宣った。

「おい、さてはお前由比ヶ浜の偽物だな…お前が本物の由比ヶ浜なら口が裂けても本を読もうなんて言うはずが無いからな！」

由比ヶ浜の発言に対し、八幡は余りにも無体な反応を示した。

「ちよっ、酷いヒツキー！あたしだって本くらい読もうと思えば読めるんだかんね!!」

プンプンと軽く怒りを顕に八幡に対し反論をする由比ヶ浜であったが。

「大丈夫なの由比ヶ浜さん何か悪い物でも食べたの？具合が悪ければ無理をせずに療養をすべきよ。」

自身にとって親友だと思っている雪ノ下にまであまりな発言をさ

れるに至り：

「わあくん！ゆきのんまでひどいよおあたし偽物じゃ無いし悪い物なんかたべてないのにい〜！」と嘆いてみせた。

「まあまあ、二人共端から決め付けは良くないよ、まずは由比ヶ浜さんの話を聞いてみよう、疑うのはその後でもできるからね。」

とヤンは、一見八幡と雪ノ下を諫めるかの様に言うのだが…。

「わあくヤン君まで！それ疑って無い様で疑ってるみたいじゃん！みんながひどいよお！」と言う事であった。

由比ヶ浜が本を読もうかと言ったことには理由があった。

一つは自分以外の三人が読書家である為に若干の疎外感を抱いていた事、そしてもう一つはこの2日前に遡る。

『あのさヒツキー…ヒツキーは文系の大学行くんだよね!？』

『…ああ、まあ、そのつもりだな。』

由比ヶ浜の質問に訝しげな眼を向けながらも八幡は答えた。

『やっぱりさ文系行くなら、本とか読んだ方が良いのかな、ほらいわゆる名作とかさ。』

『まあ、読んでて損は無いだろうな、文学や名作と評されている作品に触れる事で、感性をみがき心を豊かに出来るかもだな、まあ読み手にもよるんだろうがな。』

『ふうん、そうなんだ。』

この様なやり取りがあったのだった。

材木座の依頼をヤンが捌いた後、これまで彼女が秘めていた幡りを解く事が叶い、彼女はハッキリと自覚したのであった。

比企谷八幡に対して自身が抱いている恋心に。

故に彼女は決意したのだ、八幡と同じ大学へ行こうと、彼女の読書発言は、その一環であったのだ。

恋心を自覚したと言っても、まだ彼女は自身の思いを彼に告げる事は出来無かった。

それ故この場では言葉を濁し、ただ単に自分も文系の大学を目指そうと思ひ、読書をしようと思ひ至ったと述べた。

ヤン、八幡、雪ノ下の三人にお勧めの作品を教えて貰ひ、由比ヶ浜

はそれを読んでみようと思っただが、これ迄読書の習慣が無かった彼女が果たして読書家となり得るのかは、未知数であろう。

そして現在はその翌日、週末の金曜日の放課後。

既に部室の定位置に座る雪ノ下と由比ヶ浜にやや遅れて、ヤンと八幡が何時もの様に女性陣と挨拶を交わし入室し其々の定位置へと着席。

依頼者の有無を確認し、尤も入室した時点で部員である女子二人しか居なかったのだから現状依頼は舞込んでいない事は分かっていたのだが。

『ははっ、どうやら今日も静かな放課後のひと時を過ごせそうだな。』内心にそう呟きながらヤンは着席した。

定位置にて、他の部員達の様子を確認しヤンは普段と違う様子に気が付いた。

普段は暇な時間スマートフォンを弄っている由比ヶ浜が（原作では携帯電話）この日は教科書を開き勉強に取り組んでいたのだった。

『ほお、由比ヶ浜さんは彼女なりに真剣に進学に備えようとしている訳か。』

その様子に感心するヤンであったが、これ迄真剣に勉強をしていなかった故に由比ヶ浜のレベルは、現時点では志望校に合格出来るレベルに達しているとは、お世辞にも言えないだろう。

うっつ、と唸りながらペンを片手に教科書を読んでは居るが、余り理解出来は居ないようで、頻繁に隣の雪ノ下へ質問をしていた。

雪ノ下はその都度、読者を中断する羽目になり、幾分か不満気な表情を見せるのだが、友人から頼られている事が満更では無い様で、丁寧に教えている。

「そっかあ、ありがとうゆきのん！」

屈託の無い笑顔で雪ノ下へ礼の言葉を述べながら、同時に彼女へと抱きつく由比ヶ浜。

「由比ヶ浜さん、暑苦しいから離れてちょうだい。」

苦言を呈しながらも、雪ノ下の表情には微かな笑みが見て取れた。

『はいはい、本日一回目のゆるゆり頂きました、ごっつそうさん!』
『うんうん、仲良き事は善きこと哉、実に平和な光景だね。』

その光景を男子二人は其々の感慨に耽りながら眺めやるのだった。

「その不快な眼をこちらに向けなくてももらえないかしら、変質者谷君。」

携帯電話を片手に雪ノ下は何時もの如く、八幡を一見侮辱するかの様に揶揄する。

「ちよつと待て雪ノ下、電話のボタンを押すのを今すぐ止める冤罪だ、そつちがその気なら俺もお前を訴えるからな、誣告罪でな!」

「あら今の日本国憲法に誣告罪などと言う罪名は無い筈よ、それを言うなら虚偽告訴罪と言うべきでは無いかしら。」

「くっ! コンにやろう…悔しいがこの手の知識じゃ勝ち目がねえ。」

何時も通りの八幡と雪ノ下の言葉のドツチボール、この二週間弱の間にヤンはすっかりこの光景に馴染んでしまっていた。

ここはとぼつちりが来ないうちに、可及的速やかに、スクールバッグより本を取り出して読書に勤しもう、そう思い行動に移すヤンであった。

八幡が白旗を揚げ降伏した事により、二人のドツチボールは終了した。

八幡は結果に不満がある様でブツブツと呟きながら、自らもスクールバッグより読み掛けの本を取り出す。

その際にテーブルに置かれたヤンが取り出した本の表紙を一瞥し、その顔にあきれの表情をうかべ、ヤンの顔へと眼を向けた。

「…お前、ブレねえなあ…」

しみじみと呆れ混じりの口調で八幡は

ヤンへ突っ込みを入れるのだ、その本のタイトルが如何にもヤンらしいと思ったのだ、それはここ最近知った彼の嗜好そのものであったからだ。

「ハハハッ、昨日寄った本屋で見つけてね、思わず買ってしまったんだよ。」

その本の表紙にはこう書かれていた。

『日本の銘酒百選』と。

男子二人の会話に興味を懐いた女子二人もヤンが持ち込んだ物が何かを確認すべく席を立ち、そのブツを確認した。

雪ノ下は額に手を宛て呆れの表情を浮かべ首を振り、由比ヶ浜は苦笑をした。

「生憎と私はまだ日本酒と云う物を口にした事が無くてね、これを読んでその味に想いを馳せようと思っただ…ああ一体日本酒とはどれ程の甘露なのだろうか、この口と喉で味わえる日が来る事が今から待ち遠しくてたまらないよ。」

その、ヤンの口から発せられたセリフもまた、ヤンをヤン足らしめる物であった。

ゆったりと流れ行く穏やかなる時間、雪ノ下が淹れた紅茶に舌鼓をうち、本のページをめくり新たに仕入れた日本酒の知識、未だ味わえぬ其れにヤンの期待は否応なく盛り上がる（この作品に於いて宇宙暦の時代に日本酒の製法は伝わってはいない物とする）その甘露を味わう日を夢見て。

その静かな時間の流れが途切れたのはノックも無く無造作に、部室の扉が開かれたからであった。

「やあみんな、やっているかね失礼するぞ。」

開かれた扉から、そう告げる声と共に奉仕部の部室へと歩み居るは、この部の顧問である美貌の独身教師、平塚静教諭その人であった。

「先生、何時も言っていますけど、入る際はノックをお願いします。」

「ん？ああすまんな雪ノ下、今は硬い話は抜きにしてくれ。ハッハハハッ。」

雪ノ下の苦言もどこ吹く風の平塚教諭の言動にヤンは苦笑を禁じ得なかった。

『そんなんだから結婚出来ないんだろうこの先生は、コレだけの美人なのに早く気が付いて改めれば、彼氏なんかすぐに出来んだろう』

に。』と八幡は思わずには居られなかった。

「ほう、比企谷何か言いたい事があるのかね、時間はたっぷりと有るジツクリと聞いてやるぞ。」

不敵な笑みと共に指の骨を鳴らしながら、八幡に詰め寄るその姿はどう鼻屑目に観ても恫喝に見える事だろう。

「…いえ、取り立てて何か考えていませんによ…。」

美人教師のその言動は八幡の心胆を寒からしめるに十分であった。

「所でヤン、材木座が喜んで居たよ、君に道を示してもらえたとな、私も嬉しく思うよ一人の生徒の迷いが払拭された事がね。」

これでこそ、君をここへ連れてきた甲斐が合ったと言うものだ。」

「そうですか、材木座君がね…そう思っ頂けたのなら私も、悪くは無いと思えますね。」

「あく、うんアレはスゴかったもんねヤン君。」

あたしは、小説家になろうって思わないけど、もし小説家になろうて思ったらアレはすっごく参考になったと思うもん。」

「ほう、それ程の物だったのかね。」

平塚教諭が振った材木座の件に由比ヶ浜の高評価が加わり、それに平塚教諭は気を良くした様だ。

「そう評価して戴けるのは嬉しいのですかね、元よりあれは材木座君の方に評価すべき点が多々あったからだと、私はそう思っっているんですよ。」

功績を誇る様子も無く、淡々と事実を告げる様にヤンは口にする。

平塚教諭や由比ヶ浜は謙遜する事は無いであろうと思っっている様子がその表情から伺える。

「私は、そうだな眩しく感じたんですよ材木座君の事がね、彼の原稿を読んでみて、確かに文法など破綻しているとは思いましたが、けど私にはあの原稿から材木座君が作品を、本当に楽しみながらそして情熱を方向けて書いているのだと思ってならなかったんですよ。」

「ヤン君申し訳無いのだけれど私にはあの作品から貴方が言う様な物を感じ取る事が出来なかったわ、あれの何処に貴方はそれを感じたのかしら。」

ヤンの材木座評に納得が行かない雪ノ下はその発言の真意を知る為に、ヤンへ尋ねた、それは雪ノ下だけでは無く、八幡を除く女性陣が等しく感じた疑問の様で、平塚教諭と由比ヶ浜がその言葉にわ領いていた。

「あの原稿を読んで気が付いたんだけど、例の技名や能力等に書かれていた読み仮名などのルビだけだね、あの部分に何度も消しゴムを掛けたあとがある事に気が付いてね、複数の筆跡が見て取れてね、それを見て私は思ったんですよ…材木座君は、彼は本当に心から楽しみながら技の名前一つとっても何度も考え直して書き上げたのだろうとね、技術的には問題点が多く見受けられはしたけど、その点が何とも微笑ましく、そして眩しくも感じた…そう言う事ですよ、だから私は私が出来た事をした、それだけなんですよ。」

そのヤンの発言に雪ノ下は、自身とヤンの違いを知った。

雪ノ下は結果だけを見て、材木座の小説を全てと判断した。

対してヤンは原稿から過程までもを見通して判断を下した。

その結果はその後の材木座の態度から知る事が出来る、その結果に雪ノ下の元来持つ負けず嫌いな性格が頭をもたげたが、同時にヤンを高く評価する気持ちも生まれていた。

それは或いは、雪ノ下雪乃と言う少女の成長の顕れなのかも知れない。

この奉仕部を設立した平塚教諭にとってそれは彼女が望んでいた結果への第一歩なのかも知れない。

子供達が未来へ向けて歩みを進めている、僅かながらもそう思えた平塚教諭は静かに微笑む。

さて、今日の要件は済んだ、平塚教諭は残りの仕事を片付けるべく、奉仕部を後にしようと思いを返そうとして、テーブルの上に置かれた、ヤンが持ち込んだ例のブツに目を留めた。

「…ときにヤン、君はその、行ける口なのかね？」

平塚教諭はヤンにそう質問せずには居られなかった。

「…残念ながら、今の私は未成年で有りますからね、そこはノーコメ

ントと言う事で：しかし成人した暁には確実にそうなるかと確信しますね。」

少し惚けたフリをしてヤンは平塚教諭へと返答をした、その答えに平塚教諭は不敵な笑みを湛え、ヤンの眼をみて告げたのだった。

「そうか：今から楽しみだな、その時はヤン：君と共に酒を酌み交わしたい物だな。」

「：：：そう思っただけなら光栄ですね、平塚先生。」

「ああ、全く楽しみだ：：：では私は職員室へ戻るとしよう、ではな。」

平塚教諭が戻り静けさを取り戻した部室内、そこでは再び平塚教諭が来訪する前の光景が繰り返されていた。

6月を迎えた関東地方、西日本よりは早く日没を迎えはするがそれでも日は長く、完全下校時刻を迎える時間でも空は青の領域の方が優勢を締めている。

そんな時間だった。

ヤンの懐の中のスマートフォンが振動したのは。

その振動に気が付いたヤンはそれを取り出し、画面を確認する。

それはメールの着信を告げる物だったのだ、メールを確認したヤンは戸惑いの声を挙げてしまった。

「：：：ふう、いやはや何ともコレはどうした物か：：：」

「ヤン君、どうかしたの？」

それを皆訝しく思い、由比ヶ浜が代表する様にヤンへ尋ねるのだった。

戸惑い頭を掻きながら、どうするべきかと思案するヤンだが、別段誤魔化す様な事でも無いかと結論付け、話すことにした。

「実はだね：：：その皆の写真を撮らせて欲しいんだけど、了承して貰えないかと思っただけ。」

「：：：その写真をどの様に使うのかしらヤン君、事によっては肖像権にも関わる問題よきちんとした返答を頂きたいものね。」

「まあまあ良いじゃんゆきのん、写真くらいさ、あたしは良いよヤン君。」

女子二人の真逆と言って差し支えない意見に、戸惑うヤンであるが別段悪事に利用する訳でも無く、素直に理由を説明する。

「私と部活を共にする人達がどう言う人か知りたいから、是非写真を送って欲しいとメールが来たんだ、それでなんだけど…駄目だろうか。」

そう端から説明はきちんとするつもりだったので、ヤンに疚しさは欠片ほどもないのだった。

「で、相手は誰で、お前とはどう言う関係なんだ、俺も写真位ならどうと言う事は無いが、その辺はハッキリさせとくべきだろう…女子もいるんだ。」

ヤンが若干言葉を濁している様に感じた八幡は、真実を問う。

それは不器用なりに、女性陣に気を使う八幡の優しさから出たものだ。

「…実は…その、何と云うか…相手はだね、その、私の婚約者なんだ。」

焦りの態度を現しながら、頭を掻きつつ語られたその事実にはヤン以外の三人は驚きを禁じ得なかった。

「…お前…リア充だったのかよ…」

ボソリと溢れた八幡の言葉が、不思議と室内に大きく響いた様に皆感じた。

来訪者は突然に。

写真を取らせて欲しいとのヤンの願いに、由比ヶ浜は笑顔で以て了承し八幡と雪ノ下も多少ごねたものの最終的には由比ヶ浜の説得により折れ、三人纏めてヤンのスマートフォンカメラのファインダーに収まった。

「ふう…いやありがとう皆、この礼は何れ形ある物で返す事にするよ。」

奉仕部の三人に礼を述べ、返礼を約束しヤンは撮影に使ったスマートフォンをポケットへと納めた。

「おう、まあ別に大した事をした訳でも無いしな、期待しないで待つ事にするわ。」

「アハハ…もう、ヒツキー素直じゃ無いんだから。」

「ハア…由比ヶ浜さん、彼に素直さなどを求める事程無駄な事は無いわ、おそらく比企谷君は産まれて来る時にそれをお母様のお腹の中に置き忘れて来てしまったのよ。」

「ほう、良く解ってるじゃないか雪ノ下、本来俺が持つべきだったそれは、母ちゃんの腹の中に蓄積されて其れが小町に回ってしまったんだよ、結論やはり俺の妹、超天使だな。」

何時もの調子の三人のやり取りにヤンは笑みを禁じ得ない、やはりこの二人の少女との出会いが在ったからこそ、八幡はあの時の見せた辛そうな顔をしなくて済む様になったのだろうと、その様にヤンは推測する。

「うわっ出たヒツキーのシスコン発言だ！確かに小町ちゃんは可愛いけどさ、あんまそんな事ばっか言っていると小町ちゃんに呆れられちゃうよヒツキー。」

「安心しろ由比ヶ浜、俺はもう小町に呆れられている、専業主夫を目指すと言った時から小町は俺を冷めた目で見る様に…あれ、眼から汗が。」

それ全然安心できないから…由比ヶ浜の突っ込みが入り、雪ノ下の

ため息と額を手で触れての呆れのポーズ。

『ああ此処はやはり居心地が良いな、此処へ導いてくれた平塚先生には感謝しなければな。』

基本的に此処でヤンと八幡、それに雪ノ下は静かに読書をして過ごし、由比ヶ浜は雪ノ下に見てもらいながら勉強を、その勉強に対する集中力が切れると、他の皆に世間話などの話題を振り、皆がそれに対し思い思いに意見を述べ合う。

或いは、互いが読んだ本の感想を述べ合い、勧め合う。

この日常に、ヤンは心から満足していた。

「あっそうだ、ねえヤン君、ヤン君の婚約者ってどんな人なの？」

奉仕部の三人の中で一番好奇心旺盛であろう由比ヶ浜、ヤンの婚約者について真っ先に質問をして来たのが彼女であったのは、必然と言えるだろう。

「そうね、私達の情報がそのヤン君の婚約者である方に知られるのだから、私達がその人の情報を得るのは、謂わば等価交換と言えるのではないかしら。」

「まあそうだよな、その婚約者が余程やんごとなき血筋に連なる人物で、その秘密を明かせないってのなら、此方からはこれ以上聞きはしないけどよ。」

そうなれば雪ノ下がそれに追従し、八幡は弄ねた言い方で興味を持っていながらも、暗に言いたく無ければ言わなくても良いと助け舟を出す。

この彎曲に過ぎる友人の心遣いに謝しつつも、別段隠す必要も無いの事柄なのでヤンは婚約者たる女性について語れる範囲で話す事にした。

「彼女はだね、私達の2歳年下の今年中学三年生で、もう十年以上この国で生活をしていてね……………」

しかしとは言え、改まって自身の婚約者について語るなど、面映いにも程があると、ヤンは内心溜息を禁じ得ない。

『やれやれ、これはまた何とも恥ずかしいものなだな、前世でもそうだったが此れは何ともムズムズするな…ハハハハ。』

周りの者達に自身の被保護者であった少年や、愛する妻の事を高く評価された時等にヤンはその様な感覚を抱いていた物であった。

頭を掻きつつ（これもまた前世からの彼の癖：無くなな癖とでも言え様ものである）その様に感じていた、ヤン・ウエンリー、二度目の青春の日の一幕であった。

ヤン・ウエンリーの婚約者騒動？から二週間弱の時間が過ぎた日の、とある放課後の奉仕部の部室。

何時もの如く、メンバー達は雪ノ下の淹れた紅茶の味に舌鼓をうちつつ穏やかでゆったりとした、これまた何時もの如き時間をまったりと過ごしていた。

それが破られたのは、比企谷八幡のスマートフォンバイブレーションに拠る物であった。

それに気が付いた八幡は、徐にポケットより其れを取り出してモニターを確認し『はあ？』と疑問符付の声を小さくあげた。

「?!ヒッキーどうしたの、何かあった？」

「…いや大した事じゃねえよ、小町からメールだ、今此方に向かってくるんだとき、俺達全員に会いたいんだとよ…ハア面倒くせえな、悪い皆構わねえか？都合が悪いってんなら断るけど。」

「ほえ、小町ちゃん来るんだ、あたしは全然良いよヒッキー、小町ちゃんにも会いたいからさ。」

由比ヶ浜は至極当然とばかりに了承、内心八幡は断つてくれればなと期待していたが、この様な時に彼女が断る事など無きに等しい。

となれば、雪ノ下も無碍に断る事はほぼ無い事である。

「ほう、八幡の妹さんね…一度会ってみたいけど私も構わないのかい八幡？」

「ああ、全員って言うてから当然ヤンも含まれてんだらう。」

そうして彼らは八幡の妹、小町の総武高校到着の時間に合わせてこの日の部活を切り上げた。

『お兄ちゃんもうすぐ到着するよ、お迎えよろしくでありますく
(・・ω・・)』

と比企谷小町よりのメールを受信し、四人は部室を片し、校門へと向かう。

八幡は一旦駐輪場へ留めてある、自分の自転車を取りに行く為、皆から離れるが、直ぐに再合流し揃って校門へ向かうと、そこに総武高校の制服とは違うセーラー服を着た小柄な少女が四人に気が付いたか、大きく手を振り声を発した。

「お〜い！お兄ちゃん！雪乃さ〜くん、結衣さ〜くん！」

「あつほらヒツキー、小町ちゃんだよ小町ちゃん！ヤン君あの娘がヒツキーの妹の小町ちゃんだよ。」

そんな事は分かってんだよと、八幡が由比ヶ浜に対して憎まれ口を叩こうとしていたが、由比ヶ浜は其れを聞くことなくさっさと駆け足で、八幡の妹小町の元へと向かって行った。

「お〜い！小町ちゃん、やつはろ〜く久しぶりだね。」

「結衣さん、やつはろ〜くです！」

二人の少女は両手を取り合い、姦しく挨拶を交わしている。

その二人の様子を、基本的に静謐を好む雪ノ下と男子二人は苦笑混じりに見守る。

「あの娘が八幡の妹さんかい、何とも活発そうな娘さんだね。」

「まあな、俺の自慢の妹だ、誰にもやらんからなって、お前には婚約者が居たんだったな。」

「全く、中学生にして要介護な、兄を持った小町さんに対して私は同情の念を禁じ得ないわ、比企谷君悪い事は言わないから一刻も早く小町さんを貴方から開放なさい。」

そして此処でも、八幡と雪ノ下は八幡の妹小町を山車に何時もの如く言葉のドッジボールを始める。

一見、否、全く持つて辛辣なる言葉を吐く雪ノ下ではあるが、その面貌には微笑が浮かんでいる事からも、彼女が八幡に対して悪感情を抱いている訳では無い事がヤンには見て取れた。

『案外雪ノ下さんも、由比ヶ浜さん同様に八幡に対して好意を、いやそこ迄行かなくとも彼とこうやつて憎まれ口とも取れるやり取りを楽しんでるのかも知れないな。』

「何を言ってるらっしやるのかしら雪ノ下さん、私と小町は家族として海よりも深く宇宙よりも広い絆によって結ばれているのよ、その絆は何人にも断つ事は敵わなくてよ。」

「今のそれは誰の真似なのかしら猿真似谷君、まさかこの私の真似とでも言うのかしら、だと言うのなら比企谷君、貴方には早急に戒名を用意して貰う事を勧めるわ。」

かつてのヤンの部下達、士官学校時代の先輩であるキャゼルヌを筆頭にシエーンコップ、アッテンボローと彼の部下であり友人でもあった彼らもまた、齒に絹期せぬ毒舌家揃いで知られていたし、上官であるヤンに対してもその毒舌の刃は振るわれていた物だった。

そう思うとこの肉体の実年齢は兎も角として、精神年齢的には彼女らからすると、十分にオジサンと呼ばれてもおかしくは無いヤンとしては、つい生温かい目で見守ってあげたくなくなってしまふのであった。

「雪乃さんもやつはろーですー!」

「や…こんにちは小町さん。」

「お前今やつはろーって言いそうになっただろう。」

「何を言っているのかしら貴方は…ついに眼だけでは無く、耳までも腐敗が進行してしまっただのかしら、この歳で幻聴を聴いてしまうとはいつそ憐れと言うものね。」

「あつ、お兄ちゃん…は、どうでも良いや!」

「ちよつと待ちなさい小町ちゃん、そんな事言うとお兄ちゃん泣いちゃうよ、それはもうシクシクと泣いちゃうよ、更にはさめざめと泣いて、遂にはわんわんと大泣きしちゃうからね!」

ああ、はいはいと、兄を適当にあしらい小町はその人懐っこい笑顔で以て、八幡の隣に立つヤンへと歩み寄り、元気に初対面の挨拶を始めた。

「はじめましてヤンさんですよ、私はお兄ちゃんの妹の小町です、

面倒な兄ではありますけど、どうか見捨てずに仲良くしてあげてくださいね！」

「ああ、いや此れはどうも、はじめまして小町君、ヤン・ウエンリーです此方こそ八幡には良くしてもらっているからね、私の方こそ見捨てられない様にしなければと思っっているんだよ。」

『此れは、なる程八幡が自慢するのも頷けるな、社交性も愛嬌もあり物怖じもしない様だし、何だかんだと八幡の事も大切に思っているみたいだ。』

と、ヤンは小町と交わした一言の挨拶により彼女をそのように評するのであった。

「ところで小町、お前また何で今日はいきなりつか態々ここ迄来たんだ？また大志の時みたいに関介事でも有ったんじや無いだろうな。」

八幡が妹の小町に対して問い質した疑問は此処に居る奉仕部の部員皆が内心に思っていた事柄でもある、此れまで小町がこの総武高校へ訪れた事など皆無であったのだから。

その小町が今日、態々皆を迎えにこの場へと足を運んで来た、それは一体何用があつての事か。

「もう、やだなあお兄ちゃんつてば、何で小町が此処に来る事イコール？厄介事なんて図式が成り立つかなあ、小町はただ単に、皆に会つて欲しい娘が居るから連れて来ただけなんだよ！」

本当かよ…と八幡の眼は妹小町の発言を訝しんでいる。

「ホントだつてば、皆さんちよつと待つてくださいな今連れてきますから！」

そう言つて小町は、校門を出て、直ぐに校門右側へと曲がり姿が消えたかと思うと、十数秒の間を開けて再び姿を現した。

その彼女の左手は誰かと手を繋いでいる様で、やがてその繋手をがれた人物の姿も皆の前に顕になった。

「お待ちせしました！本日皆様にお会いしたいと願いましたのは、彼女のたつての希望であります！」

その姿は小町と同じ中学の制服、セーラー服を着た、金褐色のセミ

ロングの髪とハイゼル色の瞳を持つスラリと均整の取れた体型は小町より10CM程背が高く、明らかに日本人では無い事がひと目見て解る。

その容貌はまだ幼さが残るものの、将来はとても美しい女性へと成長するであろう事が容易に想像ができる。

「紹介します、本日我が校に転校してきた新しい小町の友達であり、ヤンさんと深く関わりの在る人でもあります。」

小町は皆へその少女を紹介するが、ヤンは彼女の姿をひと目見た時から、啞然とした顔をして、小町の言葉はその耳に入ってはいなかった。

「はじめまして、奉仕部の皆さん。」

その口から紡がれた日本語はとても流暢で、生粋の日本人と何らの変わりも無い見事な物である。

「何時もウエンリーさんがお世話になっております、私はウエンリーさんの婚約者のフレデリカ・グリーンヒルと申します、以後お見知りおき願います。」

流暢な日本語と美しいお辞儀での挨拶に奉仕部のメンバーは驚きを隠せなかった。

それは先立ってヤンから聞かされた彼の婚約者である女性の名、材木座を交え語られたかの物語に登場した人物と同じ名前を持つ少女。

ヤンから聞かされた話によると彼女は東京で暮らしていた筈であるのだ、その彼女が何故この千葉県に、しかも何故八幡の妹小町と同じセーラー服を着用しているのか。

「…フレデリカ…何故君が此処に居るんだい、一体何故？」

「何故と言われましても、転校して来たとしか言い様がないのですけど。」

それは小町と同じ制服を着用している事から推察は出来るが、東京に居る筈の彼女が何故この千葉県に居るのかと、ヤンはそう聞いているのだが、フレデリカはおそらく其れを知っていながら、はぐらかしているのだろう。

「…それは君の格好を見れば解るけどね、私が聞いているのは何故

そうなったのかと言う事なんだがね。」

「其れは、単純に言ってしまうとウエンリーさんの側に居たいと思っただけに決まっているでしょう。」

何の躊躇いも恥じらいも感じさせずに彼女は、ヤンの質問に対してにこやかに答えた。

「…ハア、やれやれコイツはまた、ドワイトおじさんが良くもまあ許可をしたものだね。」

ヤンの父タイロンと友人関係でもあり彼女の、フレデリカの父親であるドワイト・グリーンヒル。

彼はこの日本と言う国に入り、生活とビジネスの拠点と定め、半ばこの国に根を下ろしている。

「ええ、父様はウエンリーさんの事がお気に入りですからね、ですから私がウエンリーさんの側に居たいと願ったら、直ぐにある計画を実行してくれましたしね。」

「何せ同じ日本国内でお隣の県なのですから、何ら問題など無いとおっしゃいましたわ、それに将来は毎日ウエンリーさんのと盃を酌み交わしたいと、父様は何時も言っていますから。」

そう言う問題では無い様な気がするのだがとヤンはそう一人ごちる、いくら日本の治安が良いとは言えど、未だ中学生の年端も行かぬ娘を一人で暮させる等とは…。

ん、ある計画だって…。

「あら、一人ではありませんよ、千葉と東京ならば十分に通勤圏ですからね、だったらいつその事引越そうと言う事になりまして。」

…：思わずヤンはひと目も憚らず呆然としてしまった。

彼女の父親は会社の長として、行動力と実行力共に旺盛な人物である事はヤンも知ってはいたが、まさか娘の一言で引越しまでしてしまうとは。

「と言う訳でウエンリーさん、これからはご近所さんですよ。」

「ハア…：やれやれ、まさかこんな事になっていとはね…。」

ヤンのボヤキを聞くフレデリカの表情には、イタズラが成功した事に大層、満足した悪戯っ子の様な笑みがたたえられていた。

「では改めまして、奉仕部の皆さん、フレデリカ・グリーンヒルです
これからよろしくお願いしますね。」

奉仕部の三人に向き直り、改めての挨拶をするフレデリカ。

その魅力的な笑顔に頬を赤くする男子部員と、その様子を目にして
その頬を少しだけ不機嫌そうに膨らます一人の女子部員の姿が確認
出来た。

魔術師は過去と現在に思いを馳せる。

総武高校の正門前にて合流した奉仕部の四人と比企谷八幡の妹小町、そしてヤンの婚約者フレデリカ・グリーンヒルの六名は場所を変え学生達の懐に優しい憩いの場『イタリアンワイン&カフェレストラン』サイゼリヤへ。

「いやはや、このプロシユートは値段以上の価値があるね、出来ればワイン：とは言わないけどビールと共に頂きたいものだね、そしてこのミラノ風ドリアも又とても美味だね、この値段でこの味、此れは毎日でも通いたくなるね。」

上記のセリフが誰の口から紡がれたのかは説明する必要もあるまい。

「ウエンリーさん、そのような発言はこの様な公の場では控えた方が良いと思いますよ、ウエンリーさんはまだ一介の高校生なんですから。」

高校の制服姿でワインだのビールだのと口に出す己の婚約者をフレデリカはやんわりと窘めるが、その態度にはこのやり取りがこの二人には茶飯事であるのだろうと言う事が奉仕部の三人には理解出来る様な気がした。

出会って、部活動を共にする様になり数週間、酒好きを公言して憚らないこの男の為人を多少は知り得たと言っても構わないであろう。

故に彼女がもしかすると、ヤンのこの他者から見るとやや奇行とも取れそうな原動に、苦勞をしているのではないかと他人事ながら同情の念を禁じ得ないと感じていたし。

「ああそうだった…すまないね皆、ここのメニューが思いの他美味かったのどつい欲望が口を着いてしまったよ、ははっ。」

ほぼ癖になつていると言ってもよいであろう頭を掻きつつ、ヤンは騒がせてしまった事を今は謝罪してはいるが、熱りが冷めたらまた同じ事を繰り返すのだろうとなど、この場に居る皆が等しくそう思った、当のヤン本人を含めて。

「はあ…全くヤン君、貴方という人は本当に…現在の自身の置かれた立場という物をもう少し弁えるべきよ…。」

と、ため息と共に額に手を当て、雪ノ下は反省の色のあまり見えないうヤンに注意を促す、それが彼に対しては功を奏しないと解りながらも言わずにはいられないと云ったところか…。

「ふふっ、もう…本当にしようがない人ですね。」

対して、ヤンを嗜めながらもフレデリカは彼の言い草に苦笑を禁じ得ないのである。

彼女にとってはヤンのこういった欠点とも取れる様などころさえも好意を抱くポイントであるようだ、まさに『蓼食う虫も好き好き』とはこの事か。

「あははは…なんかヤン君らしいね、ヒツキー。」

「…おかしいな今日は俺、アイスコーヒーに入れるガムシロの分量控えたつもりだったんだけどな、マッカン並みに甘く感じるわ…。」

「それでフレデリカ、君はこの千葉県へ移住して来るに当たり私と同じ事をやったと言ったけど、何を指してそう言ったんだい？」

サイゼリヤへ集った皆がそれぞれに小腹を満たし、喉を潤わせ終えた事を確認しヤンは先程総武高校の正門前に於いてフレデリカが発言した、ヤンと同じ事をしたと云う言葉の意味を彼女に問うた。

そのヤンの問に他の皆も興味を持っている様で、首を縦に振る者、フレデリカの顔に目を向け彼女を見つめる者とそれぞれ動きは違えど彼女がこれから話すであろう経緯に興味津々と云った様子だ。

「…簡単なことですよ、ウエンリーさんが総武高校への転入を決めるにあたって行った事です。」

ヤンは事も無げに言っただけのフレデリカの言葉にはと考え込む、彼としては普通に編入試験を経て己の実力で総武高校への入学を果たしているの、何か不正等を行った記憶など皆無であり思い当たる節が浮かばない。

『私が行った事、行った事…』とヤンが己の脳内の記憶を辿るささや

かな旅路に付いている間に、その答えに行き着いた人物が一つの回答を導き出し、それをフレデリカへと確認した。

「なあ、それってもしかしてヤンが俺の所在を調べたって事と関係があるんじゃないのか、グリーンヒルもヤンと同じ様に俺の事を調べてその結果小町の存在を知り、小町と同じ中学に転入したって事だ……違うか？」

それはかつてヤン・ウエンリーが友誼を結びたいと思った人物であり、いつか再び出会えたらその時は友となろうと約束した、この場に居るもう一人の男、比企谷八幡。

「はい、正解です小町ちゃんのお兄さん……うくん、何だか呼び辛いので八幡さんと呼ばせてもらいますね。」

数週間前、ヤンがこの千葉へ移住し総武高校にて八幡と再会を果たした時、ヤンは八幡へ語ったのだった。

もう一度八幡と会う為にヤンは、興信所に依頼し比企谷八幡と云う人物の所在を探したと云う事を。

「それで私も八幡さんと云う人はどんな人なのかを知りたいと思ひまして……だってウエンリーさんったら私という婚約者がありながら、私の居る東京では無く八幡さんの居る千葉を選んだんですよ、いくら相手が殿方であつても多少の嫉妬心位湧きますわ、何せウエンリーさんったら会うたびに八幡さんの話ばかりするんですから、たつたの二日私より八幡さんの方が早くウエンリーさんと出会ったからと言ってもです。」

「お……おう、なんかすまん。」

正解を言い当てた八幡に対しフレデリカは女性として、またヤンの婚約者として包み隠さず己の気持ちを正直に語り、その話を聞かされた八幡としては別段自身は何も彼女に対して悪い事をした訳でも無いのに、なんだか申し訳無い気持ちを抱き自然と謝罪の言葉が漏れ出てしまった。

「それで私は八幡さんに私と同一年の妹さん、小町ちゃんが居ると言う事を知りまして、それで「それで小町君にコンタクトを取るべく同じ中学へ転入したと言う訳だね。」……はい。」

更にその経緯を語るフレデリカのそれを遮るように、ヤンが言葉を重ね質問しそれに彼女は素直に答えた。

ハア：とヤンはため息を一つ吐き、その無造作にあまりきちんと櫛も通してしないと思われる黒髪を掻きつつ『やれやれ』と呟き、そして…。

「フレデリカ、フレデリカ：確かに私の選択によって結果私は君に対して不義理を働いた形となつてしまった、それに付いてはすまないと思うし君が謝罪を要求すると言うのなら私はそれに従おう。

しかしだね、もしも君が小町君に接触するに当たりそれが八幡や小町君に対して悪意を抱いていての事ならば、私は君とのお付き合いを考え直さなければならぬだろうね。」

ヤンの口調は静かではあるが、それはフレデリカからするとかなり厳しい物言いとなつた。

短い期間であるが彼と放課後部活動にて幾許かの時間を共に過ごした奉仕部の面々は、普段の彼の呑気な言動と今のフレデリカに対する厳しい物言いに戸惑いさえ感じてしまった。

「おいヤン、それはちよつと言ひ過ぎじやねえか、少なくとも俺にはグリーンヒルが小町君に対して悪意を持つてゐるなんて感じなかつたぞ、もしグリーンヒルが俺達に悪意を持つてゐたら態々俺に対して嫉妬心を抱いたとか言う必要も無いだろうしな、まあ俺からすると男の俺に対して嫉妬心を感じるとか、何処ぞの腐女子が悦びそうな発言は控えて欲しいと切に願はずにはいられないがな。」

その中で逸早く我を取り戻した八幡がフレデリカを庇う、彼はこれ迄の経験から他者が己に対し悪意などと云つた負の感情を抱いているか、そうで無いかをかなり正確にそして敏感に感じ取れる質なのであつた。

その彼をしてもフレデリカの発言にその様な色が見えないと言う事は、つまりはそう言う事なのだ判断して構わないだろう。

「そうですねヤンさん、フレデリカちゃんは今私にちゃんと話してくれましたよ自分の事もヤンさんの事も、後序に家の愚兄とヤンさんの関係についても、だから私はフレデリカちゃんと友達になつたん

ですよ、あつこれって我ながらポイント高いよねっお兄ちゃん。」

八幡の妹であり、本日この場を設ける為に奔走、もとい画策した小町も同様にフレデリカに悪意が無いと断言する、若干ながら余計な部分を加えて。

「……さり気無く俺の事を愚兄とかデイスって無けりや、俺も高ポイント進呈しても良かったんだけどな、ヨドバシカメラ位の。」

実のところヤンもフレデリカが悪意を持って比企谷家を調査したとは思ってなどいないのである、何故ならヤンは総武高校への転入を前にしフレデリカに語っていたのだ。

ヤンが八幡の居場所を探す為に民間の調査機関に依頼をしその所在地を突き止めた事、それにより総武高校への転入を決意し彼と接触を試みようと思った事、そしてヤンがその様な事を行った事を包み隠さず八幡へ語り、もし八幡がヤンを拒絶した場合は総武高校を去る気でいた事を。

「……八幡さんありがとうございます、正直に言いまして私は八幡さんと小町ちゃんに嫌われる事も覚悟していました、自分が預かり知らないところで自分の事を調べられるなんて気持ちの良い事では無いですから、その覚悟を持って今日私は小町ちゃんへ接触し、その事を話しました。」

ですけど小町ちゃんは、それを知りながらそれでも私と友人になつてくれると言ってくれました、ですから私はここに誓います、私フレデリカ・グリーンヒルは小町ちゃんを裏切る様な真似はしません。」

フレデリカは八幡と小町へ正式に謝罪し皆の前で誓いをたててみせた。

それに対して、この場が集った者達は彼女の言葉に嘘偽りが無いとごく自然に受け入れる事が出来た。

「凄いなフレデリカちゃん……あたし達より年下なのにこんなにしつかりと、ちゃんと謝れるなんてさ……なんかあたしフレデリカちゃんの事尊敬しちゃうよ。」

殊に由比ヶ浜はつい数週間前、ヤンの材木座へのアドバイスの話を

聞き、己の行いを顧みる事が出来るようになる迄、今日この日より一年以上前、入学式の日に自身の飼い犬サブレをその身を呈して救ってくれた八幡に感謝と謝罪の言葉を告げる事が出来ないでいたのだ。

由比ヶ浜のそれとフレデリカの行いとは何方がより罪が深いかは、それを受け取る人により印象も変わるであろうけれども。

「…ありがとうございます由比ヶ浜さん、その様に言っただけなんって…えっと、結衣さんと呼ばせていただきますね。」

とは言え先の由比ヶ浜の言によりフレデリカは彼女に対し好印象を抱いた事は確かの様だ。

「うんよろしくねフレデリカちゃん…え〜っと、リカちゃんって呼んでも良いかな？」

「……………少し微妙な気がしますけど、それで構いませんわ……………」

彼女を知る者からするとお馴染みであるのだが、相も変わらぬ由比ヶ浜の他者へのニックネームの命名センスの無さをこれでフレデリカも知った事であろう。

「ふむ、どうやら女性陣の親交も深まった様だし、この件はこれで終わりでしょうか…その前に、私の発言でこの場の雰囲気悪くしてしまった事を謝罪させてもらうよ、フレデリカにもすまなかつたね……………」

ヤンは頭を下げて心よりの謝罪をし、其れを皆も受け入れ、この話は此処までとする事となった。

だがしかし、此処で余計な一言が当のヤン本人の口から発せられる。

「しかしフレデリカが私と同じ事をしたとはね、しまったなこれは特許を取っておくべきだったかな、そうすれば今頃私の懐はかなり潤ってここの払いも私が持ってたんだけどな。」

と、何ともこの男らしい一言が。

「ハア…ヤン君、本当に貴方という人は。」

「アハハ、フレデリカちゃんに聞いていたけどヤンさんってホント変わった人だねお兄ちゃん。」

「良い感じに纏まるかと思っただらうけど、こう言う奴なんだよ

ヤンは。」

この締まらない感じ、これこそがヤンを加えて四人となった奉仕部の日常の風景であり、その四人が共に貴重だと感じている彼等の関係性であろう。

サイゼリヤでの会合を終え、ヤンとフレデリカは彼女の新居へと向い歩を進めていた。

フレデリカが小町と同じ中学へ編入した事からも解るであろうが、その新居は比企谷家と近い場所、同じ学区内であるのだが、帰宅の途を比企谷兄妹と共にせずヤンとフレデリカ二人だけで歩いていった。

「ああ…あのだね、さつきはすまなかつたねフレデリカ：君が八幡達に悪意を抱いていないなんて事は端から解っていたんだけど、その…。」

「分かっていますよウエンリーさんはあの場で私の事を慮ってあの様に言っただけなのだから。」

ヤンがフレデリカをあの場合で窘めたのは彼女が比企谷兄妹について、ひいては比企谷家を調べた事により皆に彼女に対して不信感、警戒心を持たれてしまうのではないかと懸念した為でもあったからだ。

先んじてヤンがフレデリカを譴責することによりその様なマイナスの感情を皆に抱かせない為に、勿論同じ行動を行った自身をも同時に譴責する意味合いもあったのだが。

「そうかい、ありがとうフレデリカ、そう言ってもらえて何よりだよ。」

「いえいえ、本当に気にしないで下さいウエンリーさん、其れよりも覚悟して下さいね、きつと父さんはウエンリーさんが来る事に喜んでハメを外すかもしれませんから。」

「ははは…まあ私もドワイトさんと会うのは楽しみでもあるしね、幸い明日は土曜日だし大丈夫じゃないかな。」

二人は此処で和解し、もつとも初めから諍いがあつた訳では無かつたのだが、これにより今後この件で二人に蟠りが生じる事も無いだろ

う。

『何よりもまた君と共に居られる事を嬉しく思うよ、例え君にあの世界の記憶が無かろうともね。』

口に出さずヤンは心中でそう思う、この奇妙な二度目の人生に於いて、再び彼女と出会い共に歩める事、そして生涯の友として長く付き合いたいと思える人達と出会えた事に感謝の念を懐きながら。

「あつ、ウエンリーさんあれ一番星ですよ！見てください。」

フレデリカが朱色から藍色そして薄暗い黒へと変わりゆく空の一点へと手を伸ばし指差す方角には確かに、微かに小さな星の光が遠慮がちに輝いていた。

『…そう言えばあの子と共にハイネセンの夜空を見上げたのは、あれはいつの頃だったかな…。』

大都会東京のベッドタウンと呼んで差し支えないこの住宅街の一角、地方と違い夜でもあまり暗くない空に輝く星に、ヤンはかつての自分の被保護者だった少年の事を思い出し、自身が消えた世界で少年がそして残して来た仲間達に良き人生を歩んで欲しいと、切に願わずにはいられなかった。

それぞれへの帰り道。

サイゼリヤでの奉仕部の四人と比企谷八幡の妹小町、そしてヤン・ウエンリーの婚約者であるフレデリカ・グリーンヒルの計六名は会合を終え、皆それぞれに帰宅の途についた。

比企谷八幡と小町の兄妹二人は夕暮れの薄暗い路地を彼等の自宅へ帰るべく肩を並べ歩いている。

サイゼリヤの前で皆と別れ、歩き出した二人であったが始めの数分間は互いに口を開かず無言で歩いていたのだが、妹の小町が八幡に確認するかの様に先の会合に集った者達の事を話題に語り掛けてきた。

「ねえお兄ちゃん、小町さ最近は何と安心してんだあ、奉仕部に入ってからのお兄ちゃんは雪乃さんや結衣さんと出会って、それから戸塚さんとか大志君のお姉さんとか色んな人と関わって、前よかちよつとだけ、本当にほんのちよびつとだけ前向きになったかなって思ってたけど……ヤンさんが転校して来てからさ、またちよつとマシになったよね！」

それまではさ、何か変に意地張って屁理屈ばかり言って本当に駄目駄目なゴミいちゃんだつたのに、今は小町的に割といい感じになったと思うよ、あつ今の小町的にポイント高い！」

家族として、妹として誰よりも一番に兄を、それこそ仕事の為にほとんど家に居ない両親よりもずっと長く見守り続けて来た小町だからこそ、兄八幡の小さな変化に気が付いたのだろう。

自転車を押しながら歩く八幡は、妹が下した自身の評価に対し微妙な、不本意そうな表情を作り答える。

「ハア……お前ってさ俺の事褒めるにしても何処かしらデイスって来るよな、まあアイツらと居るのも悪く無いとは思ってるし、ヤンと居るのも変に気を使う必要も無いって感じでなんか楽なんだよなあ、まあそんなんでお前から見て多少なりとも変わって見えるとしてもだ、俺の本質は何も変わりやあしないんだけどな、むしろ変わらな過ぎる自分を褒め称えたい程迄ある。」

「ああ、ハイハイ……でもさ、小町はさつき初めて会ったばかりだけれどヤンさんってホント何かさ、うくん上手くは言えないんだけど良いよね。」

優しい人つてのもあるかもだけどさ、叱る時はさつきのフレデリカちゃんみたいいきちんと叱るけど、何かガミガミ言わないでえくつと何だっけこう……うくん何てんだろ？」

あまり語彙が豊富では無い小町は、右手の人差し指を下唇にあてながらヤンの事をどの様に評するべきかと考え込んでしまった。

その様子から八幡はそれを察し、此処は教えるべきかどうかと判断に迷う、今年中学三年生であり年明けには受験が控えていて、しかも進学校である総武高校への入学を志望する妹に対し簡単に助け舟を出さずに己で試行錯誤しながら答えに辿り着かせる事も必要なのではないかと判断したからなのだが。

「うくん……分かんないやパスパス！」

結局小町はあっさりと思いを放棄してしまい、答えにたどり着く事が出来なかつた、ハアとため息を吐き受験を控えながらのこの体たらくぶりを見せる妹に、一抹どころでは無い不安感を抱きつつも結局八幡は答えを述べた。

「この場合は理を説いて諭すだな……てか小町さんやそんな事でお前さん受験は大丈夫なんだろうな、お兄ちゃんはそのお前が心配で夜しか眠れないよ。」

「そうそうそれぞれ……てか寝れてんじやん普通に、けどヤンさんて結局お兄ちゃんの何処が気に入ったんだろうね、お兄ちゃんつてさ屁理屈ばつかの捻くれ者で相手してて面倒臭いの、ホント何処が良いんだろう、あつてもそれ言ったら結衣さんもただけだね。」

小町は口では兄の事を落としている様な物言いをして入るがその表情には、兄を思いやる優しさを感じさせる様な笑みをたたえている。

そして彼女もまた八幡の様に他者の事をよく見ていた、なんだかんだと言いながらも小町はこの捻くれ者の兄の事を大切に思っている事には違いなく、その兄に幸せになって欲しいと心から願っているの

だ。

なのでそんな中、兄が高校二年生に進級し平塚教諭により奉仕部に強制的ではあるが入部し、他者との関わりを持ち始めた兄とその周りの変化に、それとはなしに気が付けたのだろう。

そして殊、同性である由比ヶ浜の態度の変化、以前会った時とは彼女の兄に対する対応等がどこかが違う様に小町には思えた。

「おい小町ちよつと待ってくれ、ヤンは兎も角としてだが、何で此処で由比ヶ浜の名前が出て来るんだ、意味が分からないんだが。」

にも関わらず、当の本人たる兄八幡はこの様に述べるのだ。

「あのさお兄ちゃん、それ本気で言ってるのかな、何か小町には分かってて誤魔化してるみたいに見えるんだけど、ほら何日か前お兄ちゃんに何かあったのって小町が聞いた事あったじゃん。」

「お、おう…そうだったか?」

「そだよ、小町がそう聞いたらさ、結衣さんが入学式の日の事故の事きちんと話してくれてさ、そんで謝ってくれてお礼も言ってくれたってお兄ちゃん言ったよね、あの時のお兄ちゃんの顔凄く嬉しそうだったよ。」

あの日ヤンに感化され己の行動を顧み反省した由比ヶ浜から八幡は正式に謝罪とお礼の言葉を受け取り、そして彼女は八幡に対し友達になりたい、なつてくれと言ってくれた、その事が八幡自身意識してはいなかったのかも知れないが、その嬉しさが顔に出ていたのだろう。

『それでな、由比ヶ浜が俺と友だちになりたいってそう言ってくれたんだよ、まあ、アイツはアイツなりにケジメって奴をつけたかったんじゃないやねえの、知らんけど。』と八幡は小町に由比ヶ浜との経緯を語ったのだった

「ハア…もうこう言うところはホントに変わんないね、このゴミいちゃんは、女の子がそこ迄言ったんだよ!もう本当に察しなよ。」

「……………」

中学時代のトラウマ故か八幡は事異性に対して警戒心が強く働くのだろう、それは言い方を変えるならば臆病になっていると断じてよ

いのかも知れない。

実のところ八幡も最近の由比ヶ浜が自身に向ける屈託の無い気持ちに気が付きている部分も在りはするのだが、それ故に今はその想いに蓋をしているのだろう。

「はあ…まあ良いや、でもさお兄ちゃん今は良くても何れはきちんとなんか答えを出さなきゃなんない時が来るだろうから、その時は覚悟を決めなよ…えい！」

自身の心の内と向き合い、いずれは確りと答えを出す様に兄へ促すと、小町はこの話は取り敢えずこれで終わりだよ、とばかりに八幡の左腕に飛び付き己が腕を絡めて、上目遣いに兄の顔を見つめ悪戯っぽく『ニシシ』と笑うと。

「たまには良いじゃん、こういうのもさ、ねっお兄ちゃん…駄目かな。」

突然の妹のアクションに虚を突かれ驚いた八幡であったが、基本的に妹のお願いには弱いお兄ちゃん気質の八幡は、一言小町に文句を言おうかとは考えたのだが結局はため息を一つ吐いただけで「まあたまにはな…。」と呟き、妹のスキンシップを受け入れ兄妹仲良く家路へと向う。

「…どうでもいいが、何か歩き難いんだがな小町さん。」

しかし幾らも歩かないうちに、自転車を押しながら歩いている八幡にはこの体勢は歩き難く、その口からは早くもぼやきがこぼれ出てしまう。

「もう、少しは頑張りなよ男の子でしょお兄ちゃんは。」

「うわっ、出たよ必殺の男の子でしょ発言！男女平等とか同権とか言っておきながらも都合がいい時はこれなんだよなあ…。」

「あっお兄ちゃんほら見てあれ！あれって一番星だよね、あんまり明るくないけどさ。」

兄のぼやきを黙殺し、話を変えるべく小町はさして関心を持っていてもない薄暮れの空の小さな星明りを指し示し、兄の気をそちらへと誘導しようと試みるのだが、そんな稚拙な誘導など当の八幡にはお見通しであった。

しかし、此処で更に何事か八幡が述べようとも、小町がそれを取合う筈もないだろうと予測が付く為、八幡は最早何も語らず妹のやりた様にやらせる事にし己もまた小町の指し示す空の一角に視線を向けた、諦めの溜息を一つ吐いて。

どうせ我が家迄の道程はあとほんの僅かな距離なのだから、もういいやと。

雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣は、サイゼリヤでの会合を終え二人で帰宅すべく夕焼けの紅から濃紺、そして黒に変わりゆく空の元雪ノ下が暮らすタワーマンションへと向い歩いている。

「もうホントにさヒツキーってば何時つても何か一言多いんだから！」

由比ヶ浜は先程、解散し皆と別れたサイゼリヤの前で八幡に言われた一言にお冠であった。

『じゃあな由比ヶ浜、雪ノ下を送ったらお前も真っ直ぐ家に帰れよ、知らない人に着いて行っちゃ駄目だからな、あと雪ノ下も野良猫を見掛けても着いて行くなよ、ただでさえお前は方向音痴なんだからな。』等と八幡は由比ヶ浜と雪ノ下の二人をまるで小学生の小さな子供であるかのような物言いで以て、別れの挨拶としたのだった。

当然ながら二人も八幡に対して反撃を繰り出したのだが、弁がたち更に負けず嫌いな気性の雪ノ下は兎も角ボキャブラリーの乏しい由比ヶ浜は大した反論も出来なかったのだが。

「まっ、全く彼と来たら自分の家にはカマクラさんと云う愛らしい猫さんが居るからと言って、私に対してマウントを取ったつもりなのかしらね…本当に困った部員だわ。」

由比ヶ浜が先の別れを思い出し軽く憤慨する様に、相槌をうつが八幡が猫を引き合いに出し彼女の方向音痴をデイスるかの発言に、雪ノ下自身認めたくは無いのだが事実の一端を言い当てられてしまった為、彼に対する反撃は無理筋と言う物であった。

『彼には分からないのね、町中で新たに会おう猫さん達との邂逅にまさる幸せなどこの世に存在しない…と言うのは言いすぎかしらね。』口には出さず雪ノ下は心の中でそう呟く。

「…ねえゆきのんりカちゃんってさ凄く可愛い娘だったよね、本当にヤン君の事が大好きなんだなって伝わって来ちゃったよ、それにヤン君もりカちゃんの事大切に思ってるんだらうね、注意とか叱り方も何か優しい感じだったしき、何か良いよねあの二人ってき、何かこう二人を見てるとポカポカした気持ちになっちゃうよ。」

由比ヶ浜は先のサイゼリヤに於いて、ヤンがフレデリカに彼女の行いを諭すヤンの言動に厳しき以上に温かきを感じ取ったようであった。

基本的にヤンは他者に対して声を荒げ恫喝したり暴力に訴える様な事は無い、宇宙暦の時代に於いても感情を昂ぶらせ人前で大きな声をあげた事はほとんど無かったし、また部下に暴力を振るう指揮官を更迭したりとその辺りは徹底していた。

ヤンが感情を顕に、彼としては比較的大声で怒りを顕にしたのは、彼を知る宇宙暦の世界の人達とてイゼルローン要塞の攻略戦に於いて、降伏勧告を出したもののそれを受け入れず部下達を道連れに玉砕などと言う馬鹿な返答をしたゼークト提督に対した時くらいではなかっただろうか。

もっともその事をこの西暦の世界に存在する雪ノ下や由比ヶ浜が知る由など無いのではあるが。

「…え、ええそうね、彼女はまだ中学生なのにヤン君より余程しっかりしている様に見受けられたわね…。」

由比ヶ浜にヤンとフレデリカの関係に付いて振られた雪ノ下は、その様に答えたのだが、由比ヶ浜はその雪ノ下の返答の仕方に常の彼女とは違う迷いの様な感情を感じ取り、心からの心配を寄せるのだが…。

「あたしき、二年生になってヒツキーと同じクラスになれたけどき…事故のこともあってヒツキーに声を掛ける勇気が持てなくて…それで平塚先生に奉仕部の事教えてもらってき、そこにゆきのんとヒツ

キーが居てさ……ゆきのんもヒツキーも凄く楽しそうで、あたしもゆきのんとヒツキーと一緒に楽しく過ごしたいなってそう思ってたさ、それで奉仕部に入って三人で過ごす毎日が楽しくて、ヒツキーとゆきのんの事大好きになって……それからヤン君が奉仕部に来てもっと毎日が楽しくなって、ゆきのんが淹れてくれた紅茶を皆で飲んで、ゆきのんとヒツキーとヤン君が本を読んでそれで、自分が読んだ本の話をしてあたしはゆきのんに勉強を教えてもらって、でもあたしはあんま本とか読まないから皆の話の中に入れて……そんでさあたしも入れる話を振って、ヒツキーがちよつと費捨くれた事言つて、あたしが怒ってゆきのんが突っ込んでくれて、ヤン君が歴史の人の話とかお酒の話とかしてゆきのんがヤン君に呆れて……えと。」

「……由比ヶ浜さん……。」

雪ノ下には感じられた、由比ヶ浜がたどたくも懸命に真摯に自分の思いを伝えようとしている事が。

だから雪ノ下もその彼女の言葉を真摯に受け止めようと、静かに耳を傾けている、その由比ヶ浜はスクールバッグのシオルダーをギユツと右手で握りしめ、真に言うべき事、語るべき事を伝える決意を固め口を再び開いた。

「……あたしね、ゆきのんの事大好きだよ、それからヤン君の事も、そしてヒツ……ヒツキーの事も！あたし奉仕部が大好き、でもねその中でもね……ゆきのんとヤン君に対する好きと、ヒツキーに対する好きはちよつと違うんだ。」

えつとね違つてたらごめんね、ゆきのん、ゆきのんはさ……ううんゆきのんもヒツキーとヤン君の事好きだよね!？」

由比ヶ浜の自身の気持ちの告白と、彼女の雪ノ下のヤンと八幡への気持ちの問い、それを受けて雪ノ下は。

「由比ヶ浜さん……私は……。」

「ゆきのんってヒツキーとヤン君の二人と話している時ってすつごい楽しそうだなって、何か他の男子と話している時と全然違うなって思うんだ。」

ヤン・ウエンリーと比企谷八幡、奉仕部の部員である自分と同じ年

齡の同級生男子、確かに雪ノ下はその他の男性と比して二人に対して気安く接する事が出来ていると思わないでも無い。

「ヒツキーとヤン君とはさ、きつと二人共ゆきのんと同じ位のレベルで話が出来てるしさ、ヒツキーの場合は変な事とかムカつく事言つて、あたしたまにカチンと来るけど口じや勝て無いし、でもさ優しいところも沢山あるんだよね。」

「そうね…理屈を捏ねさせる事に於いて彼の右に出る者は居ないかと思つていたけれど、ヤン君も案外比企谷君に負けていないのよね、しかも彼の場合は歴史上の人物や事象についての造詣が深いものだから、彼の論は比企谷君のそれよりも説得力があるわね。」

「だよね、何かヤン君って色んな事を沢山知つてて、それを丁寧に教えてくれてさ何か同じ歳なのにお父さん、は違うかな、お兄さん？みたいな感じがするんだよね、だからさゆきのんがヤン君とヒツキーに惹かれるのも分かるなつて思うんだ。」

「なつ…何を言うの由比ヶ浜さん、私は決してそんな事は…。」

由比ヶ浜の話聞き終え雪ノ下だが、雪ノ下自身はおそらく未だ自分自身の気持に気が付いていないのかも知れない。

反論しようと試みるもののもそのままならぬ様で、やがて軽く俯き考え込む雪ノ下、彼女の抱える迷い逡巡もまた解消されてはいない様で、由比ヶ浜は静かに彼女を見守る。

そして待つことしばし…ついに意を決したのか、雪ノ下はその顔を上げ由比ヶ浜へと向き直りその口を開く。

「私は、由比ヶ浜さん…貴女に話さなければならぬ事があるの…いいえそうでは無いわね、貴女と比企谷君に対して話さなければいけないの。」

「うん、話してゆきのん！あたしちゃんと聞くからさ。」

雪ノ下から語られるであろう話し、由比ヶ浜はそれがどんな話しであろうときつと確りと効いてくるだろう、雪ノ下にはそう確信出来る。

「ありがとう由比ヶ浜さん、では月曜日に部室で。」

「うん！」

由比ヶ浜は雪ノ下の要望に笑顔で応えてくれた、その笑顔は同性の雪ノ下から見てもとても柔らかく可愛らしく見え、一瞬雪ノ下はその笑顔に見惚れてしまった。

自分に向けられたなんの打算も、下心も無い心からの笑顔、思えば彼女は何時も自分にこの様な態度で接してくれていたのではなかったか。

『ありがとう由比ヶ浜さん、私も貴女の事が好きよ、けれど今の私にはそれをはつきりと口に出す資格が無いの、だから私はきちんとけじめを付けて貴女にそれを言える様にならなければね、貴女の気持に応えられる様に、そして…。』

そしてその時こそ自分は彼女の真の友人となれるのではないか、雪ノ下はそう思っているのではないだろうか。

頑なだった自分の殻を初めて外側から破り、己のテリトリーへと入って来てくれた初めての同性の友人、彼女は変わった、否変わり始めた。

初めて出会った今年の春先、他者の顔色を伺い周りに合わせて自分を出す事の出来なかった由比ヶ浜が奉仕部に関わり雪ノ下の毅然とした態度に憧れ、心中密かに想っていた男子である比企谷八幡とも漸く話をする事も出来た。

それから暫く後総武高校へ転入し奉仕部の新たな部員となったヤン・ウエンリー。

一年前の入学式の事件、その後の対応を誤った彼女は八幡に対して、謝罪の機会を伺っていたが彼女自身の勇気の無さと八幡の普段の態度からそれが上手く行かずにいた。

そんな時にヤンが奉仕部へ入部し部活動にて共に時間を過ごし、しだいに彼の為人を知って行った。

普段は静かに本を読んで過ごしているが、彼もまた八幡とは多少違うが中々の問題児の様で、平然と酒を飲みたいだのと口にするし、案外面倒臭がりだという事も分かって来た。

しかし一端何事かを引き受けると、口ではぼやきながらもそれに対し真摯に向き合い、解決への糸口を提示する事が出来る。

材木座のライトノベルの件がそうであつた、その件を間近で見ている彼女はそれによつて、初めて己の行動を鑑みる事が出来た。

部活に対しても、八幡に対しても自分は真剣に向き合えていなかったのだと。

「あつーゆきのんほら見て、星が出てるよ。」

由比ヶ浜が左手を上げて指し示す方向には、確かに微かに見える光点を確認出来た。

頼り無く小さく薄い光、夜でも明るい都会では地方の様に満天の星空を見る事など望め無いが、それでも見える星はある。

この頼りなく見える星の輝きも、或いは郊外で見ればそれなりに力強く光り輝いて見えるのではないかと、雪ノ下は何となくその様な事を思った。

魔術師は三人の過去に立ち会う。

比企谷八幡を含む総武高校奉仕部のメンバー四人が、その八幡の妹である比企谷小町からのメールによる呼び出しにより、ヤン・ウエンリーの婚約者フレデリカ・グリーンヒルと邂逅を果したあの日より三日が過ぎた。

この日は大抵の学生にとって、そして会社勤めの社会人にとっても憂鬱に感じられるであろう一週間の始まりの日である月曜日。

その放課後である、今現在比企谷八幡はクラスメイトで部活の仲間でもある由比ヶ浜結衣とヤン・ウエンリーの二人と共に校舎特別棟四階にある奉仕部部屋へと向かい歩を進めているのだが……。

「……………」

彼は訝しんでいた、今朝教室でヤンより朝の挨拶を受けた時から、そのヤンの表情が何だか妙ににこやかと云うか、彼の口の端が緩み切っている様に感じられたからである。

「…でね、あの後あたしゆきのん家に泊まったんだ、って聞いてるヒツキー、ヤン君!」

当初八幡はヤンと二人で部屋へと向かっていたのだが、其処へ由比ヶ浜が二人を追い掛けて合流したのだが『もう二人共っ、あたしを置いて二人だけで行かなくても良いじゃん!』との抗議にヤンは素直に頭を掻きながら謝罪したのだが、八幡はと言えば『最終的には部屋で合流するんだから、別に良いだろ。』と答えたものだから、その言葉に由比ヶ浜がむくれて二人の言い合いが始まろうとした処を、ヤンが間に入り未然にそれを防がれたのだった。

由比ヶ浜からしてみると、教室では三浦を筆頭とするトップカーストグループに属する彼女は、そのグループとの付き合いもある為にも、こちらも大切にしなければならぬとの思いから、積極的に八幡の元へ行くことを控えている。

彼女の本心としては自身が好意を寄せる八幡と教室でももつと時間を共有したいと思っっているのだけれども。

なので彼女にとっては、部室へと向かうこの僅かな時間は彼と共にある貴重な時間なのだ。

「あくハイハイ、聞いている聞いて「もう！ヒツキーってばちゃんと聞いてないし！」……。」

であるにも拘らず、自分の事を適当にあしらっているかの様な態度で以て接する八幡に由比ヶ浜は不満なのだった。

「はははっ……まあまあ由比ヶ浜さん落ち着いて、何だかんだと言っても八幡だってちゃんと聞いているんだからね、君と雪ノ下さんとの仲の良さには私達も都度、ほっこりとさせてもらっているんだしね、君だってそうだろう八幡。」

そして再びヤンは二人の間を取り持つよう立ち回る羽目になるのだった。

「……っ、まあ、そんな事が無きにしもあらずと言えない事も無いと言っておいても良い様な気がしないでも無い。」

しかし当の八幡が、捻た物言いで本心をぼかしてしまう為に由比ヶ浜は、彼の真意を押し測ろうとするも、その胸の内を理解するに至らず。

「もうヒツキーは！それって結局どうなのさ!？」

そう言いながら可愛くポカポカと八幡の腕を叩くのだった。

「痛っ、オイ止める由比ヶ浜、痛いからマジ止めるって（近い近いだろうがよ、ああもういい匂いい匂いい匂い！）解ったから離れろっての……。」

「……うう……もうヒツキーは！」

『やれやれ、何だか私はお邪魔虫の様だな。』止めると言いつつも案外悪く無いなど言っているかの様な表情の八幡、そんな彼に頬を染めながらジャレつく由比ヶ浜、二人を見守りながらヤンは心中そうぼやくのだった。

「やつはろー！ゆきのん昼休み振りだね！」

「やあ、こんにちは雪ノ下さん。」

「うす……。」

先頭の由比ヶ浜が部室の扉を開き、既に部室内で読書に勤しんでいたらしき雪ノ下へ何時もの挨拶を、それに続きヤンと八幡も雪ノ下へ挨拶をするのだが。

「や……ん、んっ……こんにちは由比ヶ浜さん、ヤン君……そして貴方は餅つきでもしたいのかしら、杵つき餅谷君？」

「……そう来やがったか、つか杵つき餅谷って長くね、お前自分で言つてて言い難いとか思わなかった？」

「あら、その程度の長さの言葉で私が噛んでしまおうとでも貴方は思っているのかしら、だとすればその認識をその幻想事改める事ね。」
「あくはいはい解った解りました、つかお前遂にラノベに手を出したのな雪ノ下……読んだのは禁書かよ。」

元々が読書家であった雪ノ下、材木座からの依頼によりライトノベルと言うジャンルの事を多少なりとも知り、且つ同じ奉仕部の部員であり同じ読書家である八幡とヤンの存在。

八幡は元からジャンルを問わず活字を読む方で、無論ライトノベルも好んで居た。

そしてヤンは八幡との出会いによってライトノベルに触れ、以後も読む様になった、今生の彼のライフワークとなるであろう歴史研究や勉強の合間の時間に軽く気分転換に読むのにライトノベルは一冊あたりのページ数も少なく手頃であった事も理由であるのだが。

「なっ、貴方は一体何の事を言っているのかしら。」

その様な環境に居る故にか雪ノ下がライトノベルに興味を抱いたとしても、不思議は無いと思うのだが、雪ノ下はそれを誤魔化そうとしている。

しかしその薄っすらと赤味を帯びた頬と耳を見、そしてはじめに言いやどんだ所を見れば、事実は推して知るべしであろう。

奉仕部の部員四人がこの場に集った時こそ、ワイワイと騒がしかつ

だが、今はそれも一段落。

椅子に腰をおろした四人は、雪ノ下が淹れた紅茶の香りに包まれた部屋の中で静かなひと時を満喫していた。

中でも特にヤンなどはその満喫感が最もその表情に現れている、それは多少意地の悪い言い方をするならば弛み切った顔と言って差し支えが無い程に。

「…なあヤン、お前自分では気が付いていないだろうが、ハツキリ言って今のお前の顔、凄え緩み切ってて、由比ヶ浜流に言うと『キモい顔』してるぞ、マジで。」

この日一日八幡は、朝からヤンが何やら機嫌が良いと云うのか何かを思い出しているニヤニヤとしている様に思われてならなかった。

「へっ!? そうなのかい、いやはやこれはまた私とした事が、ハハハ……。」

紅茶の湯気と香りを楽しんでいたヤンは八幡の言葉で初めてその事に気が付いたようで、紙コップをテーブルへと置いて頭を掻きつつそう言った。

「もうヒツキーってば、またあたしの事を引き合いに出したし! けど確かにあたしもヤン君の事ヒツキーと同じ様に思ってたけどさ、あつてもキモいとかは思っていないからね。」

「イヤ実際お前って以前はしよっちゆう俺の事キモいって言ったよな、まあ最近は言わなくなったけど。」

八幡が言う様にかつての由比ヶ浜は、八幡に対する複雑な心境とその彼の態度に、よく彼に対してキモい等と罵倒していた物であったが今ではその様な事は無くなっていた。

「ううう…それはそうかもだけどさ、今は言わない様に気を付けてるんだからね(うゝつ、だつて、すつ、好きな人の事キモいとか思いたくないし、言いたく無いんだもん…) あたしだつてさー!」

内心の声は未だ八幡には伝えきれずにいるのだが、由比ヶ浜は彼女なりに想い人に対する態度に付いて改めるべきは改めようと努力をしているのだった。

「おつ、おうそうか、まあお前も自分を顧みて反省したつて事なんだ

な、つか今はヤンの事を言ってたんだよ。」

そしてこの場に居る皆の視線がヤンへと向けられる、朝からでは無いが雪ノ下もまたこの部室内で見たヤンの表情を訝しく思ったからだ。

「ええ、確かに私も今のヤン君の表情は何だか何時も以上に緩んでいる様だと思っていたわ…。」

「ええつ、雪ノ下さんにまでそう思われているのかい？そうか…そんなに緩んでいたのか、ははっ…。」

と言いながら、またしてもヤンの表情は崩れているのだが。

「あつ、そつかあ！ヤン君久し振りにリカちゃんと会ったから嬉しかったんだね!？」

ポン！と手を打ち由比ヶ浜はその様に推測した事を述べ、その意見に雪ノ下は同意したのか『なる程、そうなのかも知れないわね…。』と小さく呟くが、八幡はどうやらその意見には否定的な様で。

「果たしてそうかな、その気持ちに全く無いとは思わないけど、ヤンの場合はもつと別の理由がある様に思えんだけどな俺は…。」と私見を述べた。

「おつ、解るのかい八幡?!いや流石だね、確かにフレデリカに会えた事も嬉しかったけど、とは言っても彼女には来日してから二度程会っているからね、それ程久し振りと言ふ訳でも無いんだよねこれがさ。」ならば何なのか、ここ迄来ると皆その理由を知りたいと思うのが人と言う物の心理であろうか。

なので三人は「実はだね…」とヤンの口からその言葉が出た時、早く理由を話してくれと、思わず期待してしまっていた。

「これはオフレコと言ふ事で、あの後フレデリカと共に彼女のお宅へお邪魔したんだけどね…」

別にヤンは勿体つけている訳では無いのだが、其処で一旦言葉を区切った。

しかし聞く方からすると何だか勿体をつけている様に思われるかも知れないのだが。

「フレデリカのご両親、まあお父上のドワイトおじさんに久方ぶり

に男同士で語り合おうなんて誘われたんだけど、その場で私は遂にだ
ね、遂に念願の日本酒を口にする機会を得たんだよ、いやあ、夢にま
で見た日本酒の味はまさに甘露、まさに天にも昇る気持ちと言つても
過言では無かったよ、うん。」

「……………」

「……………」

「……ハア、貴方と来たら全く……」

蓋を開けてみれば中身はこんな物でしたとでも言う様な、何ともヤ
ンらしい内容だった、しかし一高校生の発言としては、本来許された
物では無く。

「ヤン君、貴方は気が付いているのかしら……そんなに堂々と自らが
法を犯した事を公言するなんて……ハア……」

雪ノ下はその細くしなやかな手を額に当てゆつくりとヤンへ問い
掛けると溜息を吐いた、全くこの問題児は良くもまあこの様な事を平
然と述べる物だと、呆れる他無かった。

「あははは、でもさ何だか聞いてみたらヤン君らしいなつて思っ
ちやったよ、あたし……あはは……」

由比ヶ浜は彼らしいと言うが、そう発言するもやはりヤンに対して
呆れてしまっている事には変わりなく、乾いた笑いが口を付いてしま
うのは仕方の無い事だろう。

「てかヤン、婚約者の親父さんとは云え、お前よく指し向かいで話と
か出来るよな……俺には無理だな、そんな状況耐えられないわ。」

「そうかい、まあ何と言うか私がいくら気楽な次男坊とは言つても
ね、それなりに社会的地位を持つ親の子供としてはそれなりに、社交
性を持たなければならぬ場面と云う物に出くわす事もある訳でね、
これが面倒臭くもあるんだけど。」

まあ親のスネを齧っている者としてはそれも給料分の内みたいな
物じゃないかな、それにフレデリカのお父上は何と言うか話の分かる
親父さんって感じの人でね、案外指し向かいでも気楽で居られるんだ
よね。」

「それに話はそこそこで切り上げて二人でチェスを指していたから

ね。」

『ほおんそんなもんかね』ヤンの返答に八幡はあまり関心が無いかの様な、どうでも良さそうな感じでボソリと一言漏らした、案外八幡はヤンの飲酒発言を有耶無耶にする為だけに、にそちらに話を振り向けたのかも知れない。

「ほえ〜っ、チエスって確かキングとかクイーンとかなんか細長い駒で戦うんだよね!？」

そしてチエスと云う、中々普段の生活の中では使われないワードに由比ヶ浜が反応し、自身が知るごく僅かなチエスの知識を披露する。

「……うん、まあ厳密に言えば解説が長くなりそうだから止めておくけど、詳しく知りたければ調べてみると良いんじゃないかな。」

と、この様な感じはどうやらヤンの飲酒問題は有耶無耶となりそうで、話をそちらへ振り向けた八幡も面倒事に巻き込まれずに済みそうだと内心ホッとしていた。

「あつ、そうだゆきのん、あたしとヒツキーに何か話さなきゃいけない事あるって言ってたよね。」

由比ヶ浜の一言により皆の目が雪ノ下へと向かう、それは先日の帰り道にて雪ノ下が由比ヶ浜へ告げた事だった。

「……ええ、そうね……。」

そう一言呟いた雪ノ下の顔色は、何やら愁いの色が見られる。

それはおそらく彼女が何らかの決意のもとに事にあたらないければならぬのかも知れない。

それを雪ノ下は八幡と由比ヶ浜に話さなければならぬと言うのならば、ならば自分は。

「ああ、では私は一旦席を外した方が良いのかな。」

ヤンは三人に気を遣いその様に提案するのだが「いいえそれは無用よヤン君、出来れば貴方にも聞いて欲しいのだけれど。」と雪ノ下からの要請もあり『第三者の立場として』ヤンもこの場で雪ノ下の話を聞

く事となった。

雪ノ下は八幡と由比ヶ浜へ言わなければならぬと、決断をした筈であつたのだが、それでもやはり躊躇いがあるのだろう。

「……………」

何度か顔を上げたかと思えばまた下げてと、中々最初の一言を言い出せずにいる様だ。

「あつ、あのねゆきのん、なんかさ言い難い事ならさ無理して話さなくても良いんだよ。」

それを見かねた由比ヶ浜は労る様に雪ノ下の肩にその手を添えて、優しく話し掛ける。

顔を上げて雪ノ下は由比ヶ浜を見る、その由比ヶ浜の優しい眼差しと暖かな心遣いに、自分の心が軽く暖かく満たされてゆく様に感じられた。

「ありがとう由比ヶ浜さん、大丈夫だから心配しないで。」

「……………そう、うん分かった。」

二人の少女は互いに見つめ合う、その意思を確かめる様に、真剣に。

「由比ヶ浜さん、比企谷君、私は貴方達に……………」

雪ノ下は語り始めた、決意のもと、入学式の日の事を……………。

「……………と言う訳なの、二人共ごめんなさい、今迄言い出せずにいて。」語り終えた雪ノ下は席を立ち二人に対して頭を下げた、深く心からの謝罪の気持ちを込めて。

「ゆきのん、頭を上げてよ……………ゆきのんはただ車に乗ってただけなんだよね、だったら何にも悪く無いじゃん！」

由比ヶ浜はその雪ノ下を慌てて止めさせようとする、それは彼女がそんな雪ノ下の事が見ていられないと感じた事も理由の一つだろう、しかしそれ以上に由比ヶ浜は。

「それにさ、悪いのはあたしだよ、あたしがあの時サブレの首輪をちゃんと確認して買い換えておけば、あの事故は起きなかつたんだも

ん…そうすればヒツキーは怪我なんかしなくて済んだんだし…何よりさ、あたしあの時怖くなつて何も出来なくて、だから…だから…一番悪いのはあたし…ごめんねゆきのん…。」

由比ヶ浜は雪ノ下を真つ直ぐに立たせてから、その雪ノ下の胸元へ継り付き涙を流して彼女へ詫びる、あの事件での一番の加害者は自分だと由比ヶ浜は自覚する様になっていた。

その事で親友が辛い思いをしていたと言う事を思い知らさら、彼女はただ泣きながら謝罪するより他に何も出来なかった。

「…あのだね雪ノ下さん私も由比ヶ浜さんと同意見だね…その確かに君達が関わった事故のその大元の原因は首輪の管理を怠った由比ヶ浜さんにあると言っていていいだろうね。」

そして第三者として、彼らの入学式の日から始まった奇縁とでも云うべき、出会いのエピソードを聞き終えたヤンは雪ノ下に対しそう私見を述べた。

「おいヤン！あの事はもう俺に取っちゃ終わった事なんだ、それを俺は今更引つ張り出す気なんぞ無いからな…だから雪ノ下、お前は由比ヶ浜が言う様にただそのクルマに乗り合わせていただけなんだからな。」

そのヤンの私見を八幡は少しだけ咎める様に否定する。

「だから雪ノ下はその事に対して何も負い目なんか感じる事は無いんだよ、それと由比ヶ浜…お前はあの日俺に謝罪もしてくれやし礼も言ってくれたんだ、だからもう、その事でお前がつかお前も気に病む必要は無いんだぞ…。」

そして雪ノ下と由比ヶ浜に改めて己の思いを伝える、其処に普段の彼が見せる捻た言動は無い、それは彼の本心からの言葉。

「…比企谷君…。」

「ヒツキー…。」

八幡が伝えた本心、それに対して二人の少女はただ、彼の名を静かに呟く。

「…だけどね、八幡…私はその事件君にも責任があると思うよ。」

四人の絆は深まり……そして。

ヤン・ウエンリーは言った、八幡達三人の出会いの発端となった入学式の日の事故の責任の一旦が八幡にもあると。

「……正直驚いたよ、まさか君がそんな無鉄砲な男だとは思わなかった。

けれど八幡確かに君が由比ヶ浜さんの犬を助けたと言う、その無私の行動は立派だと思う……だけどね、その結果君は骨折による入院等という事態になってしまった訳だよね、それにより一体どれ程の人達が影響を受けただろう……。」

ヤンは八幡を見据えて静かに語りかける。

「第一に君のご両親や小町君だって、突然君がそんな事故に遭っただなんて知らせを受けたら、どう思うだろうか、一般的な家族であればそりゃあ平静ではいられなかったんじゃないかな。」

右手の人差し指を立てヤンはそう切り出す、以前ちよつとした会話から比企谷家の両親は共働きである事も影響している為か、基本放任主義であり親子の会話も少ないと八幡から聞いた事があるのだが。

「イヤ、俺ん家の場合は……」

「うん、君のご家庭の事情は以前少しだけ話を聞いたけど、幾ら君のご両親が普段忙しい身で君達を放任しているとは言ってもだよ、だからと言って家庭環境が完全に破綻しているって訳じゃ無いだろう、だったら君の事を一切心配してないなんて事は無いんじゃないかな。」

ヤンの極一般的な意見に反論を試みようと思っていた八幡であったが、確かに事故により自分が入院した際は妹の小町程では無かったが、両親も度々見舞いに来てくれていた事を八幡は思い出した。

「っ……」

その事に思い至っては、ヤンの意見に反論は出来そうに無い、なので八幡もヤンの言を洩々ながらも受け入れるしか無かった。

「それから第二に、君が道路へ飛び出してしまったが為に雪ノ下さ

んを乗せていた車の運転者の方も事故の責任を問われたであろうし、同乗してた雪ノ下さん共々その方も人が車に撥ねられる場面なんて物を否応無しに見せ付けられる事となった訳だよね。」

「……っ、それは、そう……だな……。」

「その時の二人の心境は如何なものだっただろうか、もしその結果最悪君が命を失ってしまったとしたら、ここに居る雪ノ下さんと由比ヶ浜さんはもしかしたらその心に大きなトラウマを植え付けられる事となったかも知れないし、運転者の方は重い刑事罰を科せられる事になっただろう、それにより雪ノ下さんのご実家の家業にも計り知れない影響、或いは被害と言ってもいいかな。」

それを被る事になったかも知れない、それに何よりね八幡、家族を失う事になる残されたご家族の思いはどうだろう、先日私は初めて君の妹、小町君の事を見知った訳なんだが、その初見の私にさえも君達兄妹の仲の良さを互いを想いあっている事を伺い知る事が出来たよ。」

幼い頃から共に過ごす時間が長かった八幡と小町の二人兄妹、最近でこそ生意気な言動を取る妹に対し多少苛つかせられる事はあれども、それでも八幡は妹の事が可愛くて仕方が無いのだ。

「八幡……私は君のその優しさはとても貴重なものだと思うよ、そして雪ノ下さんと由比ヶ浜さんも、もしかするとそう思っているんじゃないかな。」

ヤンのその言葉を受け八幡は雪ノ下へと目を向け、真剣な面持ちで彼女達の顔を見つめる。

「……………」

由比ヶ浜は無言でコクリと首を縦に振り頷き、雪ノ下は痛ましそうにその顔を八幡から反らし俯く。

由比ヶ浜は勿論の事として、雪ノ下もまた普段は彼に対して毒舌を吐きはしているけれども、内心は八幡を憎からず思ってはいる、本人は未だその事に気が付いていないのだろうけれど。

「そのだね、もしそうなってしまったら私も君との再会叶わず、落胆する事となっただろうし君を悼む事となるのは当然の事、こうして此

処で君を含む奉仕部の面々との出会いも無かつただろう……だからね八幡私が結局何を言いたいかと言うとだね…。」

「頼むから君にはもつと自身の事を顧みて欲しいんだ、その…私と出会う以前の君に何が遭ったかは知らないがあの時、私にはなんだが君は人との関わりを極力持たない様にしているのではないかと感じられたんだが、にも関わらず君はあの時私に手を差し伸べてくれたよね、あの時の君との出会いに私は感謝しているんだ。」

「そんな君だからこそ私は君と友誼を結びたいと思ったし、だからこそこの総武高校へ来たんだ。」

そしてそう思ったのは私だけでは無いだろう…戸塚君だって材木座君だってそうだろう、雪ノ下さんと由比ヶ浜さんだって…だから八幡、なるべく覚えておいて欲しいんだ、君は決して独りでは無いんだってね。

だからどうかその事をふまえて、そうだねまずはひと呼吸置いてから事ある時は行動を起こしてみてもはどうだろうか八幡、もしくは私達に相談でもしてくればね…。」

ヤンは真摯にその自分のその思いを八幡へ伝えた、この日本という国で新たに得た友人達との時間を失いたくは無い、その想い故に。

「ああ、すまない八幡…なんだか説教臭い事を言ってしまったね、だけどまあやはり君は良いやつだね、君が身体を張ったからこそ由比ヶ浜さんの家の犬は無事だったんだし本当に良くやったね、ただまあ…もうそう言う心臓に悪い事は止めてくれると私としても助かる。」

『説教臭い事を言ってしまったな』思わずヤンは想像してしまった、もしこれを宇宙暦の時代の彼の部下達が聞いたらきつと揶揄される事だろうと『お前さん自身は人に説教をする程に、常識と言う物を弁えているのかね。』などと、六つ歳上の士官学校時代からの先輩辺りは確実に言うだろうな、と。

しかし、八幡に対して語った心配の言葉は紛れも無いヤンの本心だ、この地で出会った少し、いやかなり捻くれているが優しい心根を持つ友を思う故に口を衝いて出た言葉だったのだ。

「…ヤン、俺は…お前たちが思っている様な人間じゃ無い、ハッキリ

言つて俺は打算計算で生きている人間だ、ただあの時は考えるよりも前に身体が動いたただけだ、まあたまにはそんな事もあるかもだけだな、だから正直に言つて何でお前がそれ程俺の事をそんなに高く評価してくれているのか、理解出来ないでいるんだ。」

それに答える様に八幡もまた口を開き静かに言葉を紡ぐ。

「けど、お前とつるむのは悪く無いって思つてるし、この部屋で過ごす時間も今は悪く無いって思う：俺は何てか、まあその昔色々あつて人の事を心から信じられないで居るんだ、俺なんか近付いてくる奴なんて何かしら裏があるんじゃないかと、常に警戒心を持つている。」

「あの時お前に声を掛けたのもほんの気まぐれだったし、所詮は地元の人間でも無い一期一会つてのはちよつと大袈裟の様な気もするが、まあそんな出会いと別れで二度と会うことも無いだろうから後腐れも無くて済むだろうってな、だけどお前はそんな俺にあんな事を言つてくるし、しかも俺が言つた事を真に受けて本当にここ迄来るとか、マジで解んねえよ。」

ヤン同様に八幡もまた懸命に自身の胸の内にある思いを言葉に纏め紡ごうとしている。

ガリガリと右手で少し乱暴に頭を掻きながら、一言一言。

「でも、正直柄にも無くお前とまた会えて、嬉しいって思えたし、由比ヶ浜がああのを正直に告白してくれた事も、同じく嬉しく思った。

そして雪ノ下、すまん：俺の考え無しな行動でお前にまで、俺は辛い思いをさせていたんだな、だからな：そんな俺がお前達と此処に居て良いのかつて、此処で本を読みながらお前ととりとめの無い会話をしたり、由比ヶ浜と雪ノ下のゆるゆりをほっこり気分で眺めたり、雪ノ下と舌戦を繰り広げたり、由比ヶ浜をからかったり、皆で雪ノ下が淹れた紅茶を飲んで、またに依頼が来たらそれをこなして：これから俺はそんな時間を此処で過ごしても良いのか？」

そして：語り終えた八幡はその顔を上げ、皆の顔を見つめる。

微かにその手を震わせながら、それはおそらく彼が皆の答えを聞くことを恐れているのかも知れないし、或いはこんなにも自身の胸の内を吐露してしまつた事に羞恥心を抱いているからなのかも知れない。

「良いよ……良いに決まってるよヒツキー！あたしはこれからもヒツキーとゆきのんとヤン君と此処で一緒に部活続けたい。」

八幡の問に真つ先に応えたのは由比ヶ浜だった、それは彼女の彼へ対する秘めた想いとあの事故の原因を生み出した、自身の責任を感じたからだろうか。

「……私は比企谷君、貴方の更生を平塚先生から依頼されているのよ、貴方は此処へ入部した当時よりも今は本の少しだけ良い方向へ向かっている様に思えるけれど、けれどまだ更生しきっているとは言えないレベルよ、だから貴方はまだ此処に居るべきなのよ。」

雪ノ下もまた普段の八幡の言動と近い、少し捻た物言いのでて彼に対する自身の思いを少し暈しながらも、彼を肯定してみせた、基本的に八幡と雪ノ下は何処か似たところがあるのだろう。

「……由比ヶ浜……雪ノ下……。」

「八幡、此処に君の存在を否定しようとする様な者はどうやら存在しないようだね、私の気持ちは先程伝えた通りだよ八幡。」

ヤンはそつと八幡の肩に手を置きながら、優しい笑みを彼へと向け、言った。

「……ヤン……。」

仲間の名を呼び掛け八幡は何かを言おうと躊躇う、言うべき事、言わなければならぬ事をどの様に伝えようかと思案しているのだろう。

「俺はまだ何てか……いや、そうだ、な……お前達がそう言ってくれるなら、俺は此処に居ても良いのかもな？」

八幡はもしかするとまた何か何時もの如く、捻くれた言い回しで他者を、この奉仕部の面々との関係を否定しようとしたのかも知れない、けれど彼はそれを押し止めた。

彼は思った、自分を受入れてくれると言う皆の気持ちそれはただ単に自分の事を全肯定するのでは無く、もし彼が間違えた時にはそれを正そうとしてくれるだろう（もしかすると時にはその事が煩わしく感じる事もあるかも知れないが）、この仲間たちとなら或いはそんな関

係が築けるかも知れないと。

「酒と言う物はね、一人で静かに悠久の時の流れと人類の歴史に思いを馳せながら飲むのも良い物だけれど、気心の知れた友と指し向かいで盃を酌み交わしながらいたただくのもまた素晴らしいものでね、私は将来君とそんな関係になりたいと思っっているよ、八幡。」

「それから由比ヶ浜さんと雪ノ下さんともまた、そう云った関係になれれば良いね。」

そしてヤンは如何にも彼らしい言い回しで以て、八幡の事を肯定してみせるのだった、その問題発言とも取れるヤンの言葉に先程は額を抑えていた雪ノ下さえも今は微かな笑みを見せていた。

雪ノ下の告白により始まったと言える今回の奉仕部内の騒動、それは彼ら一人一人の気持ちを確認し合う事で一応の終息を、燻っていた蟠りと共に解けたと言っても良いではないだろうか。

彼等はまだ若く、これからも意見、志向の相違によりぶつかり合う事もあるだろう。

しかしヤンは彼、彼女らとならばそれを乗り越えられるだろうと信じる事が出来た。

騒動は終わり奉仕部の部室内には普段の静かで穏やかな時間が戻って来た。

由比ヶ浜は教科書とノートを開き勉強を、たまにスマートフォンを取り出しては何やら（おそらくはSNSか）やっているようだ。

そして本の虫たる残りの三人は、やはり読者に勤しむ様であった、ただし雪ノ下は由比ヶ浜から何時もの様に質問攻めに遭っているのだが。

「……………はあ…っ。」

勉強も一段落つきスマートフォンを見ていた由比ヶ浜がふため息を漏らした、それは常の彼女らしからぬ、まるで何かを愁いでいる様で更には不快な気持ちを顕にしたため息の様に思われた、なので他の三人はそれを訝しく思いたため息を吐いた由比ヶ浜を注視する。

「由比ヶ浜さん、どうかしたの？」

そして三人を代表する様に雪ノ下が由比ヶ浜へと問う、何時も明るく振る舞う雪ノ下には彼女が意味も無くその様な表情をするとは思えず、またそんな彼女の様子を見ていられないと思っただらう。

「へっ？ああつ、うん、ちよつとね、少し前からさ、やな内容のメールが届く様になっちゃって…それがまた届いたんだ…。」

由比ヶ浜は雪ノ下の質問に躊躇いがちに答え、その答えを聞き終えた雪ノ下の表情は何とも静かな怒りを湛えたかの様な冷え切った物だった。

その表情をみた八幡などは、思わず背筋に強い寒気を感じた程で『うわっ、何なのこいつ、まるで雪女か氷の国の女王みたいなんだけど、怖っ！』と内心一人ごちている。

「ああ、由比ヶ浜さんもし差し支えが無ければ私達も聞かせてもらって構わないかな？」

ヤンもまたそのメールとやらが気になった様で由比ヶ浜にその内容を尋ねた、

とは言えヤンはその内容が怪文書的な物であろうと予想は出来ているのだが。

「えっ…あ、うん良いよ…実はねメールの内容がさ…」

由比ヶ浜がヤンに促され、そのメールの内容を伝えようとしたその時、この奉仕部部室の扉を外側からノックする音が室内に響いた。

もう間もなく完全下校時刻が差し迫っている、かなり遅い時間であるにも拘らず、その様な時間に一体誰が？

四人は内心訝しく、ヤンと八幡などは面倒臭い等と思いつながらも、無視をする訳にもいかぬと雪ノ下を見やる。

「はい、どござ。」

雪ノ下は依頼人であろうと思われる、扉の前に居る人物に入室を促

した。

その応答を以て、扉は開かれ件の人物は扉を開き『失礼するよ。』と一言挨拶をして部室へと入室して来た、それはヤンと八幡、そして由比ヶ浜と同じ二年F組の生徒。でありクラスのトップカーस्टグループの首魁にしてサッカー部に所属する生徒。

「こんな時間にすまないね、部活が終わってから来たものだから」

でありクラスのトップカーस्टグループの首魁にしてサッカー部に所属する生徒、葉山隼人であった。

四人は不本意ながらも事に当たる。

放課後の最終下校時刻も差し迫り本日の業務とも言えない活動を切り上げようかとしていたそんな時刻に奉仕部の部室を訪れたのは、ヤンと八幡そして由比ヶ浜と同じクラスの生徒である葉山隼人であった。

その葉山は入室の許可を得て部室の扉を開くと、この様な遅い時刻に来訪した事を言い訳混じりにそして社交辞令的に詫びて見せるのだが、部長である雪ノ下にその様な飾った様な薄っぺらな言葉など不要であり、早急に要件を述べよとも言おうかの様にそれを一刀両断の元に切って捨て。

「時間も時間なので単刀直入に聞くわ葉山君、貴方はどの様な要件が有ってここへ来たのかしら。」

それはまるで雪ノ下が葉山に対し、ぐずぐずせずにさっさと要件を述べたら早急にここから去れ、と言っている様に感じられたヤンは。

『ふむ、どうやら雪ノ下さんは葉山君の事をあまり好ましく思っていない様だな、はてさてどうしてそうなったのやら他人事ながら野次馬根性を掻き立てられそうだなこれは……。』

などと不埒な事を思っていたりするのであった、しかし流石に葉山は兎も角として毎日美味なる紅茶を淹れてくれる雪ノ下に対しては申し訳無いかななど、思い直し自らに自重するように言い聞かせる。

「ああ…うん、実はこれを見て欲しいんだけど。」

葉山はそう言って己の懐からスマートフォンを取り出して操作をして見せてからその画面を奉仕部の面々に指し示して見せた。

ヤン達はテーブルを挟んでその向こう側から提示されたスマートフォン画面の確認する為に、一箇所に集合する形となってしまう程では却って見辛かろうと思いきや葉山の了承を得てそれを借り受け一人ずつ回し見する形で落ち着いたのだった。

「あははは…最初からこうすれば良かったんじゃん。」

最初にそのスマートフォンを確認する八幡の様子を見ながら由

比ヶ浜が苦笑気味に言えば。

「そうね、私ともあろう者が事を急くあまりにこの様な醜態を晒してしまうとはね、少し自重しなければならぬ様だわ。」

雪ノ下は自らの行動を顧み反省するのだが、その言い様は何とも彼女らしい自信家の如き言い回しでヤンは何ともそれが可笑しく思いのだが、八幡は。

「何処まで上からなんだよお前は。」

と、ジト目を雪ノ下に向けて呟く様にボソボソとボヤクが、その一言に反応した当人たる雪ノ下に「キツ」と鋭い眼光を向けられると、首を軽く竦め視線を外すと手にしていた葉山のスマートフォンを隣のヤンに渡すのだった。

一通り行き渡つたスマートフォン、其処に記されていたのは所謂チーンメールと言われる類いであり、其処に書かれていたものは由比ヶ浜と葉山が所属するグループの葉山を除く三人の男子を中傷する物でたった。

「…やっぱ隼人君にも届いてたんだそれ……………」

それは先程由比ヶ浜が不快感を示していた彼女のスマートフォンにも届いていた物と同一の物で、故に彼女はその事に胸を痛め悲しげな表情を浮かべる。

「由比ヶ浜さん…………ただでさえチーンメールなどと言う下劣で低俗な物をばら撒き、他者の人格を無視し貶めるだけには飽き足らず私の友人にこの様な思いをさせるとはね、この犯人はそれだけでもう万死に値するわね。」

雪ノ下は由比ヶ浜のその様子に憤りも頭にとんでもない事を宣い、当の由比ヶ浜はそんな友人の宣告に冷や汗混じりに苦笑いをして『あんまり過ぎないでねゆきのん…………あはは…………』と諷めるのだった。「えっ、いやその…出来れば穏便に済ます方法を教えてもらいたいです、あまり事を荒立たせたく無いからね。」

しかし当の葉山はと言えば自ら相談を持ち掛けながらも、何とも煮え切らない曖昧な答えを求めて来た、葉山のその曖昧な発言に対八幡が苦言を呈す。

「けどな葉山、雪ノ下の言い分は些か過激に過ぎるけど言ってる事はあながち間違つちやいないんじゃないのか、結局の所こう言うのはその元になつてゐる物をどうにかしなきゃ何時までも終わらないだろうからな。」

その八幡の意見に奉仕部の面々は各自その首を縦に振り頷きその意見に賛成の意を示し、更にその意見にヤンが追加補足する様に私見を述べる。

「うん確かにそうだね、八幡が言うその大元が何かは私には解らないけど、その根を絶たない限りこういつた物は終わらないんじゃないかな……と言う事で由比ヶ浜さん葉山君、君達に何か心当たりはないかな。」

あいにく私は転校間もなくこう云つたクラス内の些事にはとんと疎いし正直言つて興味も無いし、第一何より面倒だしね、そしてそれは八幡も私と似たり寄つたりだろうからこれはもう二人に聞くしかない、そうだろう八幡。」

しかも興味が無い等とあつさりとその本音を漏らす始末だ、何ともこの男は正直が過ぎるとでも言えば良いのか。

その本音に依頼者である葉山は思わず言葉さえ出せずに口をあんぐりと開き、目を見開きヤンを見つめ、奉仕部の面々は苦笑を漏らす。

「ははは……ヤン君は案外正直な人だったんだね、意外だったよ。」
気を取り直した葉山もまた呆氣にとられた気を誤魔化すかの様に苦笑しながらそう述べるのだった。

改めて面々はここ数日間に何か普段と違う事が起こつたと記憶を辿り一つの結論に行き当たる、それは。

「職場見学のグループ分けね、もしそれが事実だとしたら実にくだらない事だと言わざるを得ないわね。」

雪ノ下が彼女らしくバツサリ斬り捨てる、孤高の精神を持つが故に彼女はそう言えるのであろうが。

「うん、でもさゆきのん誰でもがさゆきのんみたいに強く無いんだよね、前のあたしみたいにさ周りの誰かを見てそれに合わせて自分の立ち位置とかさ、あと収まる場所?とかを見つけてさそう言う風に上

手に立ち回らないとすつごい不安なんだよ。」

しかしそうでは無い由比ヶ浜は少しだけそれを見護をする、決して犯人の行いを肯定しての事では無いのだが。

初対面のあの日クッキー作りの依頼をこの奉仕部へ持ち込み雪ノ下の持つ強さに憧れを抱いた彼女だったが、この数カ月間の付き合いで知った雪ノ下の強さ以外の部分を知り彼女なりにその部分をフォローしなければと思いついた、それは雪ノ下の世間ズレした思考や直情的な性格などをだが。

雪ノ下は由比ヶ浜の言葉を聞き厳粛な気持ちと表情を持って受け止め『そう言う物なのね。』と呟く。

「うん、まあ由比ヶ浜さんの言う事にも一理あるかもね、どうだろうか此処でこうしてアレコレと言ったところで答えは出ないだろうし、此処は少しクラス内の様子をそうだね幾日か覗いてみてから対処法を考えると言うのは。」

今日のところはコレで切り上げると言う事で、流星にこの時間だしいい加減腹も減ってきたからね。」

ヤンのその提案は皆に受け入れられ本日の部活動はこれにて終了と相成り五人は部室より退出、一堂は帰路へ就く。

放課後の帰宅の途にある奉仕部の四人は由比ヶ浜と雪ノ下を先頭に、それより数メートル程後方を自転車を押して歩く八幡とヤンが続き歩く。

「…時に八幡、君はさっきのメールの内容をどう見るかい？」

先程の部室であまり発言をしていなかった友人に対しヤンは質問をしてみる、ヤンとしては葉山が持ち込んだ依頼に対して先にも言った様に然程興味は無いのだが、この友人がどの様な考えを持っているのか些かばかり興味があった。

「ん、ああそうだなメールに書かれていたウチの二つは暴力を含む不穏当な物でそれが事実なら警察沙汰になる事必至だが、残る一つはまあ男としては最低だが取りように拠っちゃただ自慢をしてるだけ

とも受け取れる様な物だろ。」

ヤンは神妙な面持ちで友人の推察に耳を傾けるその推察はヤン自身の推察とほぼ同様の答えだった、なのでヤンは一つ頷くと八幡の返答に続けて質問をする。

「では君はこの犯人が三番目の人物であると、そう結論づけるのかな？」

その質問に八幡は「ああ、額面通りに受け取ればな」と答える。

「と言うと？」

「先ず三人の中に犯人が居たと仮定してだな、それを額面通りに受け取ると犯人は他の二人には大きなダメージを与える様な内容の物を書き込まれているのにも関わらず、自分の事が書き込まれていなければそれは自分が犯人だと受け手側に判断されるかも知れない。

なのでそのリスクを減らす為に敢えて自分の事も書込んだがその内容は他の二人と比較するとまだ可愛げのあるレベルの内容に止めたって事だな。

だが逆に敢えて自分の事を悪く書き込んで他の二人を争わせる様に誘導しているとも取れ無くも無い。」

「ほうー」

ヤンは友人の推察に思わず感嘆の声を漏らす、それは八幡の相手の裏を読むと言う彼曰くボツチ故に培ったスキルによる賜物であるのだが、ヤンの推察と近いし答えでもあった。

「私も君とほぼ同意見だよ八幡、けど私が思うにね犯人は君とは違いそこまでの知恵者では無いと思うんだ。」

ヤンは下顎に手を宛てて自身の意見を述べ、そのヤンを八幡は自転車を押しながら怪訝な目で見やりながら問う。

「じゃあお前は犯人はその三又の奴だと言うのか？」

その問いにヤンはお手上げとばかりに両手を肩の辺りまで上げて首を左右に振りながら他人事の様に言う。

「さあどうだろうね、コレばかりはただの推察では結論付けられないからね、と言う事でさつき部室で言った様に暫く彼等の動向を見極めて見なければならぬんじゃないかな。」

「……………ああ、まあ結局はそうなんだよなあ、あくあメンドくせえ。」

「うん、同感同感。」

結局奉仕部男子二人の答えはそこに行き着く、面倒臭いと。

そんな男子二人の会話を部長である雪ノ下は敢えてその会話に加わらずに、聴くだけに留めている。

彼女がこの時そうしたのはこの二人の問題児がこの件に付いてどの様な見解を持っているのかを知りたかったが故なのか、或いは彼女自身意識してはいないのかも知れないがその問題児が示す見識を知らず認めているからなのか。

「けど由比ヶ浜にとっちゃクラスでツルんでる仲間内の事だしな、アイツにとっちゃ他人事じゃ無かろうってな。」

「ああそうだね、それもまた同感同感。」

男子二人のその会話に思わず雪ノ下はその頬を緩めていた、しかしその事に本人は気付かずに居るしまそ又の様に指摘されたとしても彼女は力強く全否定するだろうが。

暫く並び歩いていた四人だったがやがて別れ道に差し掛かる、学校近くのバス停に到着しバス通学者である由比ヶ浜がそのバスに乗る為である。

「それじゃ皆また明日ねバイバイ。」

スクールバッグを背負い両手をヒラヒラと振りながら由比ヶ浜が別れの挨拶をすると、他の三人もそれに答える。

「おう、そんなやな由比ヶ浜。」

八幡が応えたと由比ヶ浜は満面の笑みで「うん！」と元気な声で返事をし、其処ではたと思いい出したかの様に若干躊躇いがちに八幡に近づくと。

「ねえ、ヒツキーあのさ、ええつとねその、あのね…メール、あのヒツキーのアドレス教えてっ！」

顔を真っ赤に染めて勇気を振り絞り由比ヶ浜は八幡に頼み込み、ほ

んの僅かな時間両の眼を忙しくキョロキョロとさせていたがやがて由比ヶ浜はすっかりとその視線を八幡へと合わせた。

「はっ、いや、何で!？」

思わぬ事態に八幡は戸惑いの色を大きく浮かべた表情でそう由比ヶ浜へ問うてしまう。

「へっ、何でって……そりやあたし達奉仕部の仲間だしさ、だから何か有った時直ぐに連絡取れるほうが良いじゃん、でも……本当はあたしが……」

最後の方は何と言っているのか聞き取れなかった八幡であったが、部の仲間として知りたいと言うのならばヤンのアドレスも聞くのが筋ではないのかと八幡はそう思い、それをストレートに聞いてみる。

「だったら俺だけじゃなくてヤンのも聞かなきゃいけないんじゃないのか。」

その問を傍で聞いているヤンは『いやはや私も人の事はあまり言えないけど、八幡もいい加減恋愛沙汰に鈍いにも程があるんじゃないかな。』などと微笑ましく眺める。

「……そっ、そりや当然ヤン君のも教えてもらうけどさっ、あ、あたしがヒツキーのアドレス知りたいのっ！」

由比ヶ浜はその八幡のつれない物言いに憤慨し少しその声を荒げ、羞恥心を抑えながらも思わず己の本心を宣言してしまう事となってしまう。

そしてピイツと顔を背けるもその片方の瞳はチラチラと想い人に向けられているのだが。

「……おっ、おうそうか……。」

八幡はそんな彼女に多少は気圧されたものの、気恥ずかしそうに己を窺う彼女の仕草にあてられ一言小さく返し。

「……うん。」

由比ヶ浜は恥じらいつつも嬉しそうにぼそりと答える。

「そうか……ほら、アレだ俺はこう言うのよく知らんから由比ヶ浜がやっといってくれ。」

八幡はそう言うとう自分の端末を直接由比ヶ浜に渡すべく差し出す、

そして渡された由比ヶ浜はそれが嬉しくもあるのだがまさかその様にアツサリと端末ごと渡されるなどとは予想もしておらず、其の内申彼に対して呆れてしまってもいた。

八幡の方はと言うと、先の由比ヶ浜では無いがその顔を背けながら端末を差し出しているものだから由比ヶ浜はその彼の仕草に悪戯心を刺激された様で。

「うん、ありがと…てかヒツキーその顔ちよつとキモい。」

と言つてしまい、言われた方の八幡は少しばかりムツとしたのか。

「あつ？何お前喧嘩売つてんの、ならコレは要らんだろう。」

そう返す、由比ヶ浜は八幡のその態度に慌てて自身が彼を傷付けてしまったかと後悔し、直ぐ様彼に謝罪の言葉を述べる。

「えつ、あつごめんなさいヒツキー、あたしそんなつもり無くつて…あのあたしはさヒツキーやゆきのんやヤン君みたいに言葉とかあんまり知らないから、こういう時何て言えばいいか解かんなくて…ゴメン。」

しおらしく述べられた謝罪の言葉を無碍に切つて捨てる程には現在の八幡も弄ては居らず、その言葉を受け入れ改めて彼女に端末を渡した。

「おう、そうだな由比ヶ浜もアレだもう少し国語を勉強しないとだな、せつかく雪ノ下に教えて貰ってるんだろうからな。」

「…うん。」

八幡とヤンが由比ヶ浜とアドレスを交換を済ませると、由比ヶ浜は雪ノ下にも部員皆でのアドレスを交換しないかと提案。

「そ…そうね、そうそうあるとは思えないけれど緊急の事態が起こらないとも限らないのだから、それも必要になる事も無いとは限らないのだからそれもやむ無しなのかしら。」

由比ヶ浜の提案に雪ノ下もまんざらでは無いのだが、彼女もまた素直な性格では無い為にこの様な物言いになつてしまうのはある意味様式美とでも言うべきなのだろうか。

バス停で由比ヶ浜と別れて暫し、次に駅へと向かう方向と住宅街へと向かう方向との別れ道に差し掛かり、電車通学の雪ノ下とは此処で別れる事となる。

「では、私は此処で……それから比企谷君、ヤン君、私はあいにくとクラスが違うのでこの件は貴方達に任せてしまう事になってしまい申し訳無いのだけど、よろしくお願いね。」

雪ノ下は葉山が持ち込んだ件を三人に任せきりの状態になる事に忸怩たる思いを抱いているが故に、それを詫げる。

「ああ、コレばかりは仕方が無いからね、こんな私達だけどもまあ泥舟よりは幾らかマシだろうからね、適当にやってみることにするよ。」

「……まあ俺は人に話し掛けるのは得意じゃないけど観察するのは得意分野だからな、その方向で行ってみるわ。」

雪ノ下への返答は何方も彼等二人らしい返事なのだが。

「……………何かしら、私は任せてはいけない人物に任せられない仕事を任せ様としているのではないかと思えてならないのだけど。」

雪ノ下がそうぼやくのも致し方無いと言うほかならないだろう。

魔術師は彼女と斯く語りき。

千葉市某所の閑静な住宅街に建つ八階建ての2LDKのマンション、其処は現在日本に於けるヤン・ウエンリーの住居となっているのだが。

「ウエンリーさんどうぞ紅茶ですよ、熱いですから気を付けてくださいね。」

カチャリと極小さな音をたててリビングの小さなテーブルの上に優しく飾り気の無い乳白色のソーサーと琥珀色の液体を注いだカップと銀色の小さなスプーンを置き、家主たるヤンに差し出したのは今生における彼の二歳年下の婚約者であるフレデリカ・グリーンヒルである。

「ああ、ありがとうフレデリカ、ありがたくいただかせてもらうよ。」リビングのフローリングの床の上に比較的厚手の絨毯を敷き、絨毯の上には先程説明した小さなテーブルとそのテーブルに向かい合う形で置かれた二つの座椅子、その座椅子の上に胡座をかいて座り彼女が淹れてくれた紅茶を味わうべく早速と手を伸ばす。

「はい、私も一緒にしますね。」

ヤンが座る対面の座椅子に、彼からの御礼の言葉に返事を返し彼女もまた腰掛ける、そのスタイルは正座を崩した所謂女の子座りと言われる格好で。

この年の五月の始めにこのマンションでのヤンの生活は始まったのだが、今生に於いても彼の性格及び習性は前世と何ら変わる所も無く、その生活無能力者振りを発揮し入居より十日も経たずしてこの部屋はゴミ屋敷としての片鱗を顕していたものだったが、今はその当時の汚れっぷりがまるで嘘で在ったかの様に整理整頓が行き届いた健康的で健全な住まいへと生まれ変わっていた。

其れは偏にヤンの目の前にいる彼女、フレデリカ・グリーンヒルの功績であった、彼女は久し振りに逢った婚約者の棲家の惨状に齡十四才にして主婦魂的なモノに目覚めたのだらう、将来の夫となる男の生活面を護る者は自分しか居ないと使命感に突き動かされ、その改善

に取り掛かり僅か数日の内に彼の住環境を美しく整えてみせた。

「うん、此れを飲み終えたら君の家まで送って行くよ。」

テーブルから持ち上げたティーカップを自らの顔に近づけ揺蕩う琥珀色の液体から漂う湯気と香りを暫し堪能し、ヤンは静かにそのカップに口を着け口内に流し込む。

口腔から胸部へと染み入る紅茶の味わいに軽く酔いしれる、その味は今生に於ける同級生の部活仲間『雪ノ下雪乃』や前世に於ける被保護者であった少年『ユリアン・ミンツ』が淹れる物と比較すると若干劣るものであるが、それでも充分に美味であった。

『ははっ、これだけの物をご馳走になっていて他者と比較するなんて、私とした事が何と傲慢な。』

反省反省と自らを戒め再度心中で彼女に謝し残りの紅茶ををゆつたりと味わった、内心それにブランデーを垂らしたいと思っている事は口に出さずに。

前世に於ける彼の副官であり妻でもあったフレデリカ・グリーンヒル・ヤンと今生に於ける彼の婚約者であるフレデリカ・グリーンヒルとはヤンが推察するに次元を異にする同一存在と言えるのではないかと思っっている。

とは言え今ヤンの目の前に居る彼女はヤンと違い宇宙暦の時代の記憶を有しては居らず、また年齢も宇宙暦のフレデリカとヤンとでは七歳の差があったのだが今生では二歳の差しかなく、何故その様な差違があるのかヤンには見当が付かなかった。

尤も、それを言うとは前世では一人っ子であったヤンが今生では十歳上の兄が存在しているし、また幼い頃に亡くなった母親も健在であり、それに宇宙暦のヤンが十六の時に宇宙船の事故で帰らぬ人となった父親もまた然り。

「はい、ありがとうございます、お願いしますねウエンリーさん。」

ヤンの言葉に年相応の少女らしい笑顔で答えフレデリカも彼と共に紅茶を味わう、蓼食う虫も好き好きとは言うが彼女は今日もヤンと共にあれる時間がもう少し続く事が嬉しかった。

「ははは、了解ミスグリーンヒル、しかし礼を言わなきゃいけないの

は私の方なただけどね、この紅茶も然り夕飯もとても美味かったよ。」
ここでもう一つ宇宙暦のフレデリカとこの世界のフレデリカとの相違点を挙げるならば料理の腕前もあるだろう、宇宙暦の世界の彼女は、早くに母親を亡くしてしまったこともあるがヤンとエル・ファシルの脱出時に出会いに依って彼女はヤンを慕い、その後を追う様に軍人を志し士官学校へと進み卒業後はそのまま軍務に就いた為に料理等の所謂世間一般が云うところの家庭的な女性の嗜みなどを学ぶ事がほぼ無かった故に、料理の腕前はからっきしであった。

しかし此処に居る彼女は宇宙暦の彼女とは違い母親の健康状態も良好であり尚且つ、家庭的な女性で家事の達人と呼んでも過言では無い。

その腕前は宇宙暦の世界のヤンの先輩にあたるアレックス・キャゼルヌ中將の奥方たるオルタンス婦人にも引けを取らない程であるので、その薫陶を受けて育った此方の世界のフレデリカの家事の腕前の程は十四歳の少女としてはかなりのレベルに達していると見て良いだろう。

「フッフ、そう言っただけで私も作った甲斐があったと言う物ですよウエンリーさん。」

ところで話は変わりますが、ウエンリーさん今日何か良い事でもあったんですか、何だかウエンリーさんの表情が何時もよりも柔らかいと言うか何だか緩んでいる様に感じられるんですけど。」

ヤンと共に紅茶を嗜んでいたフレデリカがその様に尋ねて来たのだが彼からしてみると、他者から観て自身が意識せずにその様な表情を浮かべていた事に意外さを感じてしまった。

確かにこの日ヤンは八幡はじめ奉仕部の仲間達の絆が深まった事を慶んでいたし、その後同じクラスの葉山が持ち込んだ奉仕部への依頼に関して示して見せた八幡の見解に感心していたので、その出来事の残滓が未だに残っていたのだろうかとか己の思いを顧みてそう結論付けてみた。

「ほう、君から見て今の私はそんなふうに見えるのかい、まあ確かに良い事もあったけどね。」

フレデリカの問い掛けに一言答え終えティーカップに口を着けようとしていたヤンであつたが、ふと目の前にいる彼女の表情が何事があつたのか知りたいと語っている様に思えたヤンは暫し黙考、プライバシーの侵害にならない程度に留めて彼女に今日の出来事を語って聞かせる事にした。

奉仕部の三人の関係を掻い摘んでだが聴き終えたフレデリカは、彼らの奇妙な縁により始まつた関係について感想を口にする。

「八幡さんと雪乃さんと結衣さんにその様な経緯があつたなんて、それで結衣さんは八幡さんに惹かれていったんでしょね、自分の身を賭して小さな家族の命を救うだなんて、きつと結衣さんにはその時の八幡さんの行動がヒーローの様に見えたのかも知れませんか、或は白馬に乗つた王子様でしょうか。」

『ふむ、白馬に乗つた王子様か』なる程其れは女性ならでわの感想なのかも知れないな、ヒーロー英雄視されると言うならばヤンにも心当たりはある。

何せ前世に於いては心ならずも当の本人たるヤンが英雄だなどと呼ばれていたのだから。

本人としては甚だ不本意極まりない事ではあつたし、代わりの者が現れたならば何時でも譲るつもりでいたのだが。

「まあ、八幡自身は勝手に身体が動いただけだなんて言っているんだけどね、だけど普通の人ならばそんな時は案外身体が硬直したりして動け無い人の方が多いと思うんだがね。」

普段から訓練をしている人なら別だろうけど、ハハツ全く普段は捻ねた言動をしているし本人は気が付いてはいないんだだろうけど、彼のその本質は優しい人だと私は思うね。」

友人の評価を語るヤンの様子をフレデリカはほっこりとした眼差しで見つめている、自身の婚約者が友人を高く評価している事がその言葉から伝わって来る。

そして友人の為人をその様に受け止める事が出来るヤンもまた八幡にも劣らぬ位に優しい人なのだと思うとフレデリカは内心、自分の

男性を見る目は確かだったのだと喜びと共に感じられた。

「それに雪乃さんもちゃんとお二人に話す事が出来て、きつと蟠りの様な物も取れたでしょうしね。」

「うん同感同感。」

彼ら三人の思いがけぬ事故により始まった関係、世間一般から見ても当たり前のことが出来ていなかったが為に其れは何処か歪な物だったのだろう、言うべき事を言えず燻っていた少女達の思い。

其れはもしかすると一年以上に渡って彼女達の心の枷となっていたのかも知れない、しかし彼女達は決意しやらねばならない事を自らの意思でやり遂げたと言っても良いだろう。

ヤンは思う、関係を正した彼等のこれからがより実り多きものであれは幸いだらうと。

ティーカップの中の紅茶も飲み尽くしてしまったが、フレデリカは今少しヤンにこの日起こったもう一つの出来事の事も聞かせて欲しいと懇願する、しかしもう夜の帳も降り時間も時間だし続きは歩きながらにしようという事になった。

玄関のドアに鍵を掛けフレデリカと共にマンションの廊下からエントランスと歩みながら語るの葉山が持つて来た依頼の事を、尤もプライベート保護の観点からヤンは依頼人等固有名詞は伏せて語るのだが。

「他者を貶める内容のチェーンメールですか、雪乃さんの言ではありませんが私もそのような物は元から断たなければと思いますね、穏便に済ますなんて言っても、その場を取り繕う事が出来たとしてもその火種は燻り続けるんじゃないですかね。」

それが依頼として持ち込まれたチェーンメールの件をヤンから聞かされたフレデリカの感想である、その意見にはヤンも概ね同意ではあるのだがしかし、流石に雪ノ下の発言は過激に過ぎるとも同時に思ひもする。

「まあ確かにね、しかし犯人を晒し者にすると言うのは些かやり過ぎだろうからね、そうだなせめて、例えばだけど依頼人君が他者を介

さない場所でその犯人にやんわりでは無く確りとその行為は良く無い事だからと注意した上で『二度目は無いぞ』と釘を刺す位はやらなければいけないと私は思うけどね。」

ヤンから説明を受けたフレデリカはそう己の意見を述べる、彼女のそれはヤンの思いとほぼ同意見でありヤンはフレデリカの言葉の跡にゆっくりと頷き、同意である事を示した。

そして更に話を続ける、明日八幡と由比ヶ浜と共に葉山グループの状況及び各人の様子を確認し犯人に当たりを付けその対応策を練る事。

それから帰りの道中で語った八幡の推察の事とその推察の的確さに感銘を受けた事等を。

「そうですね、確かに八幡さんの推理した通りである可能性は高いんじゃないかと私も思いますけど。」

ただ、こう言う可能性もあるんじゃないでしょうか。」

ヤンから聞かされた八幡の推察にフレデリカはもう一つ独自の推察をヤンに語ろうとし、一度言葉を止めて彼の表情を見る。

それにヤンは無言で頷く、フレデリカに彼女が導き出した推察を聞かせてもらおうべく。

「それはですねつまり、そのメール自体が依頼者の方の自作自演である可能性です、尤も私はクラスが違うどころか総武高校の生徒でさえもありませんから部外者もいいところですし、その依頼者の方が自作自演するに至ったのか、その理由は解りかねますけど例えばその方が皆さんが指摘した様に職場見学のグループ分けの話題が出た途端に仲間内の雰囲気が変わった事を敏感に察知して、己む無く一人を排除する為にその様な行為に及んだとかでしょうかね。」

フレデリカが語る最中、ヤンは彼女の導き出した推察を聞き軽く驚きその目を数瞬の間ではあったが見開いた、それは彼女が導いた依頼人による自作自演ではないのかと云うその可能性を、実はヤンも可能性の一つとしてそれに思い至っていたからであった。

「それを実行してみたは良いけど自身で収集が付けられなくなつて私達に依頼をして来て何か良い方策を提示してもらおうと思ったと

かな。

ハハハツ、いや実はねフレデリカ、私も君と同じくその可能性もあるのではないかと思つて八幡にも話してみたんだけどね、それは彼によつて否定されたんだよ。」

フレデリカが語つた依頼人犯人説にヤンも思い至つていたと云う事実、その事を聞かされたフレデリカはしかし然程驚きはしなかつた。

何故ならば自分が思い付く位の事にヤンの思考が向かない筈は無いだろうと考へていたからなのだが、それを八幡が否定したという事に付いては些かながら興味を抱き、何故八幡がその様に結論付けたのかフレデリカは知りたいた願つたのだが。

「すまないねフレデリカ、此れは複数の人のプライバシーに関わる問題だからあまり話せる様な事ではないんだ。」

ヤンの返答に多少残念だとは思つたフレデリカであつたが、ヤンがそう言うのであればそれは本当の事なのだと彼女は納得してみせ、その件に関して彼に問う事は控えるのだった。

話は数時間程遡る。

雪ノ下と別れてからヤンと八幡は本屋へ向かうべくは連れ立って歩く、そこでヤンは何気無くと云う体を装つて自転車を押しながら歩く友人に話を振つてみる事にした。

それは先に持ち込まれた葉山からの依頼について、ヤンはもしかすると件のチェーンメールの送り主が依頼人たる葉山による自作自演の可能性は考えられないだろうかとも考へていた。

「ああ、それな俺もそれを考へないでは無かつたんだが、ちよつとした理由から却下したんだよ。」

ヤンの問いに八幡は否定の言葉を口に出す、彼の言うちよつとした理由と言う物に付いて当然ながら興味を抱いたヤンは差し支えが無ければ聞かせてもらえないかと請う。

「ああ別にそれは構わんけど、ヤンお前に一つ尋ねるがお前今日部

室に葉山が来た時の雪ノ下の態度、どう感じた？」

八幡はヤンの質問に対し答える事を了承しながらもその前に逆に問い掛ける、そんな事をこのタイミングで問うて来たと言う事はそれが八幡の答えに繋がって居るのだろうか。

そう推察出来たヤンは自身が感じた事を包み隠さず話したとしても、何ら問題は無いだろうと判断し素直な感想を述べる事にした。

「そうだね、先ず葉山君が入室して来た際に雪ノ下さんは何と云うかあまり彼を歓迎していない様に感じたね、そして彼が話を始めた途端に冷たくあしらっている様な印象を抱いたかな。」

『ああやっぱそう思うよなあ』とヤンの答えを聞いた八幡はボソリと呟き、そして続けて語る。

「実はなヤン、お前が総武に転校して来る前にちよつとした依頼があったんだけどな、まあそれ自体は今回の件にさして関係無いから割愛するけど、その時に葉山達が絡んで来て一悶着あってな、あの時皆は多分気が付かなかったと思うけど、その時の雪ノ下も今日みたいに葉山に対してあまり良い印象を持って無いつて感じの視線を向けてたんだよ、まあてか雪ノ下は葉山だけじゃ無くて俺にも冷たい視線を向けて来るけど、って何か自分で言ってるって少し凹みそうだね、何なんだろうな彼奴の視線って何だかすっげえ冷気のような物を感じるんだけど、そんなでめつちや背筋が凍りつきそうな感覚に襲われるだよなあ……ってスマン話が脱線してしまったな。

まあ、今俺が言ったのはちよつとした前提って奴な。」

葉山と雪ノ下の事を話していた八幡だったがその流れからの脱線しかけたのを軌道修正を兼ねて、一旦言葉を止めてヤンへそれが前提だと説明と確認を取る八幡にヤンは頷いて了承の意を示す。

「そんなじゃあ続けるな、ヤンも知ってる通り俺と雪ノ下と由比ヶ浜の入学式の日の事故が此処で関係してくるんだが、その事故で俺は三週間の入院生活をする羽目になった訳だが、その入院中に俺の病室に弁護士が訪ねてきてだな、まあお約束的なモノだろうが弁護士ってのは雇い人の代理として俺への詫びとかさういった事を話に来たんだろな、その人に病室で色々詫びられたし補償とかの話もしてくれ

た、つかその人が持つて来てくれた菓子折りとか殆ど小町に食われて俺の胃袋には入らなかつたんだけどな、ってどうでも良いよな。

此れが前提その2って処だ、そして今日俺はその事故の相手が雪ノ下ん家の車だったと知って、漸く繋がったってか思い出した事があるんだが、入院中に俺のどこに來た弁護士の名前が『葉山』って人で俺に名刺をくれながらそう名乗ったんだよ。」

此処まで言やお前なら答えに行き着くだろうとの八幡の言葉に、ヤンはまたも頷き肯定する。

「つまりは、葉山君のお父上は雪ノ下さんの実家と繋がりがあつた、おそらくはその葉山氏は雪ノ下家の顧問弁護士つてところだろうね、だとすると雪ノ下さんと葉山君は幼い頃からもしかしたら面識があつたつて事かな。

そしてその葉山君に対して雪ノ下さんがあまり良い顔をしないつて事は過去に何某かの因縁が二人にはあると、けれどまあそれは依頼内容には関係無いだろうね。

関係があるとすればその葉山君のお父上の職業かな、弁護士と云う商売は、事企業等の顧問を務めるとなると能力ばかりではなく信用と実績こそが物を言うつて事だろう。」

ヤンは八幡に己の見解を語り、それに正解とばかりに八幡は頷きヤンの答えに補足する様に口にする。

「まあそういう事だろうな、もし葉山がそんなチェーンメールとか人を貶めるような事に加担つてよりかはそうなると主犯か、そんな真似をして事が公になりやあ葉山の親父さんの信用にも影響があるかもだろうし、下手打ちや商売上がったらだろ。」

だから葉山がそんなリスクの高い真似なんかしないんじゃないかってな、まあ何つうかそう思つたんだよ、実際はどうなのかは知らんけどな。」

八幡が導き出した雪ノ下と葉山の関係を加味した解答、それはヤンにも心底から納得の行くモノだった。

そして僅か十六歳の少年がその様な解を導き出した事に驚きを禁じ得ない、この少年の可能性をヤンはこの時ひしひしと感じていた。

「送ってくれてありがとうございますウエンリーさん、ではまた明日。」

グリーンヒル家の玄関の前、フレデリカを送り届けたヤンは彼女と別れの言葉を交わす。

「いやお礼を言うのは私の方だよフレデリカ、何時もありがとう。」

しかし君も来年は受験なんだから、あまり無理をしなくても良いんだよ、まあ私が生活人として欠陥を抱えている事は自覚しているんだが、その……。」

礼の言葉を述べつつ彼女を気遣うが、その彼女に負担を敷いているのは偏に自身の生活能力無能力者たる故である事に思い至るにヤンは言葉に詰まってしまったのだった。

「ふふふ、気にしないで下さいウエンリーさん私が好きでやっている事なんですから、それに私学業成績には自信がありますし勿論受験に備えてもいますから其処は安心して下さい。」

そんなヤンを安心させるべく述べられるフレデリカの言葉だが、実際彼女の成績は宇宙暦のフレデリカ・グリーンヒル同様に優秀なので、余程の事が無ければ彼女が受験に失敗する事は無いだろう。

「……ああそうだね、解ったよ君の言う通り安心する事にしよう。」

では私はこれで、ご両親によりしくよければ週末辺にまたチエスのお相手を努めますとお父上に伝え貰えるかな。」

あまりきちんと整えられず納まりの悪い黒髪を掻きつつ別れの言葉を告げてヤンは帰路へと就く。

小さく手を振り二人は別れフレデリカは自宅内へヤンは星空を見上げつつマンションへ向かい歩いて行く、関東地方も間もなく梅雨入りが近付いているそんな季節の湿っぽい夜道を。

『さて明日は一体どうなる事やら』と心中の呟きを聴くものは誰もいないのだけれど。

魔術師と捻くれ者は、リア充グループの様子を見るか。

開けて翌朝、ヤン・ウエンリーは総武高校2年F組教室の己の席でハアハアと息を切らせていた。

「ふう、ふいっつ、はーっつ、やれやれ漸く落ち着いてきたよ。」

この男、前世から変わらず今生に於いても朝に弱く自分一人ではなかなか起きれなず、普段はフレデリカからのスマートフォンによるモーニングコールで起こしてもらっている始末であった。

この日も御多分に漏れずフレデリカから一度は起こしてもらったものの、朝食を食べ終わり一息ついたところでうたた寝をしてしまい、そのまま三十分程眠ってしまったのだった。

「と言う訳でね、朝からやりたくも無い運動をしてしまう羽目になってしまったんだ。」

その為彼は学校の始業時間に間に合う様にと自宅からバス停、そして学校前のバス停から教室まで走らなければならなかった、だがそれは自業自得も良いところであり誰かを責められよう事も無く早朝から苦行を自ら強いられた訳だ。

「……………はあ、そりゃあご苦労さん、俺だったらその段階で諦めて開き直ってるわ。」

「ああ、うんヒツキーってばしよっちゆう遅刻して平塚先生にすっごい怒られてるもんね。」

遅刻を回避する為に走って来たと言うヤンの今朝の労力に対し八幡はその様に言う、嘗て遅刻した時苦し紛れの言い訳をし平塚教諭に鉄拳を食らってしまった事を失念してしているのか、或いはその程度の事など何ほどの物でもないとも思っているのか。

そしていつの間にか由比ヶ浜がヤンと八幡の元へ来ていたようで八幡の遅刻常習者ぶりをバラすのだったが、忌々しげに軽く由比ヶ浜を一瞥した後八幡は机に肘を付き頬杖を付いて不貞腐れた素振りを

する。

「ああ、まあ確かに何事も無ければ私もそうしたかも知れないがね、例の件君と由比ヶ浜さんだけに任せるって訳にはいかないかと思つてね、それでどんな様子かな彼らは。」

例の件、それは昨日奉仕部に持ち込まれた葉山隼人からの依頼となる懸案、ヤンとしては何とも馬鹿馬鹿しいと言いたくなるし実にくだらない物だとヤンは思うのだが、それによつて不当に傷付く者が居るのかもしれないと思えばこそ、それを放つて置く事も出来無いなど不本意ではあれど何とかしなければと思ひ早朝ランニングをやらかしたのだつた。

「……はあ、いやな連中もまだ全員は揃つてないからな今ん所これつて言う動きは無いな、まあコレばかりはしようがないんじゃないかねえの。」

八幡の言葉を聞きヤンは葉山グループの方へと視線を向ける、彼らに怪しまれない様に何気ない風を装つて。

とは言つても八幡が言う様にグループメンバーは確かにまだ揃つていない様だつた。

『えーつと確か葉山グループは男子が四人と女子が由比ヶ浜さんを含めて三人だつたな。』

葉山グループに属するクラスメートの顔をまるで覚えていないヤンだが、昨日聞いた話によりグループの人数だけは覚えていた。

現在教室内に固まつて居るのはグループ首魁の葉山と、ヤンはよく知らないが葉山と同じサッカー部に所属する戸部という男子生徒、そして由比ヶ浜以外の二人の女子生徒の計四名だけだつた。

「なんだ、だったら私も別に急がずに遅刻をして来ても構わなかったのかも知れないな、やれやれ何だか朝から損をした気分だよはははっ。」

後頭部をポリポリと搔きながらヤンは真面目な高校生としてはあるまじき、しかし何とも彼らしい問題発言砲がしれつと炸裂し。

「いや、それ普通に駄目だからねヤン君、ヒツキーの悪い所真似ちや平塚先生に怒られるんだからねっ！」

慌てた調子でワタワタと由比ヶ浜が突っ込みを入れる、そんな騒がしい一時がチャイムが鳴り担任教師が教室へと入室するまで続いた。その様な訳で、依頼解決の為の調査は次の休み時間以降に取り掛かる事となったのである。

一時間目終了後の最初の休み時間、先ずは由比ヶ浜がグループの二人の女子に話題を振ろうと試みるが結果は芳しく無く、逆に二人に訝しがられる事となりそそくさと退散。

「えへへっ、ゴメンなんか上手く出来なかつたよ。」

歩きつつ両手を併せて謝しつつ八幡とヤンの元へと近づくと由比ヶ浜に八幡はジト目でヤンは微苦笑しながら彼女を迎える。

「ははっ、まあ由比ヶ浜さんは根が正直なんだろうね、だからこう言つた腹芸が必要になる事や誘導尋問的な事は向かないのかな。」

「はあ…しかししようが無いとは言つても由比ヶ浜と違って俺とヤンは連中と何の接点も無いし、直に話し掛けるなんて芸当はボツチの俺にはハードルが高過ぎんだよな、ここはやっぱり俺は遠間から連中の挙動を観察する事にするわ。」

その由比ヶ浜のアタックの失敗を鑑みヤンと、八幡はその様に評し今後の対応策を述べるのだが確かに八幡の為人からすると方法はそれしか無いのだろう。

なのでヤンも苦笑しつつ八幡の言に賛成の意を示し、二人はほぼ同時に葉山グループ男子四人の様子をそれとなく観察するのだったが、その二人に話し掛けて来る者が居た。

「あれっ八幡、ヤン君どうかしたの葉山君達の方を見てさ？」

それは一見すると少女と見間違える程の愛らしい容姿をしているが、れっきとしたヤンや八幡と同姓で同年齢の少年であるクラスメート、戸塚彩加であった。

「おっ、おう戸塚おはよう、別に何でもなぞ戸塚が心配する様な事はなつてか寧ろお前に何かあるのなら俺がそれを片付けるまでである、だ

から戸塚俺と添い遂げよう！」

その戸塚に声をかけられた途端、八幡は普段の淀んだ眼からその淀みが幾分弱まり更には覇氣の感じられない言動にもその覇氣が顕れたかの如く高揚感いっぱいに捲し立てる。

そんな八幡の言動にヤンは若干呆れつつも微笑ましき故に思わず苦笑し、その八幡に想いを寄せる由比ヶ浜にはその彼の言動が面白く無いのだろう、その頬をむつと膨らませて。

「もう、ヒッキーはまたそんな事言って彩ちゃん困ってんじゃん、それにそんな事はあた……わあ何でも無い何でも無いっ！」

苦言と自身の思いと彼に対する想いが口を衝こうとするが、寸での処でそれを思い止め慌てて誤魔化すが。

何となくだが由比ヶ浜の想いを知っているヤンは優しい眼差しと笑みをもって少女を見つめるが、当の想い人である八幡はそれを知つてか知らずか面倒臭いと言わんばかりな表情でそれを適当にスルーする。

そんな一幕の中でヤンはふと思いついた、この状況を利用して少し様子を見る事が出来ないかと。

「ああそれが実はだね戸塚君、最近由比ヶ浜さんのスマートフォンに不愉快なメールが届く様になったそうで、嫌な思いをしているそうなんだけど生憎と私や八幡にはその様な物は届いていなくてね。

まあこれは私や八幡がクラスの皆のメールアドレスを知らないし、また教えていないからなのだろうけど、戸塚君にはその様なメールが届いたりなどしていないかい？」

ヤンは彼としては比較的大きな声で敢えて周囲に聞こえる程の音声で戸塚へとそれを問うてみる、そして八幡はヤンがその事をいきなり無関係の戸塚に聞く事を咎めようと思ったのだが、やがてヤンの狙いに気が付きその視線を葉山グループへと向け、その様子を覗う。

「ああ、アレかあ！うんそう言えば僕にも届いてたよ、嫌だよなあ言うのってさ、何か勝手な憶測とかで人の事を悪く言うなんて、僕そう言うの許せないよ。」

どうやら戸塚にも件のメールは届いていた様で、彼はそのメールの

内容に義憤に駆られたかその少女と見紛う容姿に憤慨、由比ヶ浜がそんな戸塚に同感の意を示し二人もその行為を糾弾する。

「うん、同感だね。」

ヤンもまた二人に対しそう述べると、更に続けて自身の私見を述べる。

「姿形の見えないネットワークを利用し己自身はその身を潜め他者を不当に貶める、全くもってこれは人として軽蔑に値するしまた唾棄すべき愚行と言う他に無いね、第一そのメールに書かれている事が真実だったならこの三人には何らかの処罰が下っている筈だ、それが無いと言う事はこれはそれが根も葉もないデマゴークだと言う事を如実に物語っているね。」

この位言っておけば良いだろう、ヤンはそう判断し其処で口を噤み八幡の様子を確認する、ヤンが見留めた彼の表情には何かを見つけた、或いは確認が取れたと言う様な顔をしているとヤンには見えた。

「おっ、おう……そうだな俺もヤンに賛成だ。」

あまり葉山達の方を見ている訳にもいかないと八幡は途中からヤン達の会話を聞いてはいなかったが、聞いていた振りをしてそれを誤魔化すべく会話に加わった。

「戸部、大和、大岡、誰がやったか知らないけどあーしはあんた達がそんな奴じゃ無いって知ってつからね、だからアンタ達もそんなの気にすんなし！」

葉山グループの八幡が言うところの女帝、金髪の派手目な女子生徒が大きな声で男子三人に呼び掛ける、その行為の目的とする処はその女子生徒三浦由美子はその外見的にも存在感が強くクラス内に強い影響力がある事を自分でよく理解している故に、その彼女が声を大にする事により三人の男子に何らの罪は無いと印象付ける行為であるのだろう。

「おっ、おうありがとうだべ優美子、そう言ってもらえてマジ嬉し
いっしょ、マジリスペクトするわあ。」

「おう、それな！」

三人の男子はその言葉におちやらけながらも謝意を示す、それによ

り三人の男子の立場はクラス内に於いて救われたと言っても過言ではなからう。

「ほう、彼女はどうかやら中々の傑物なのかも知れないな。」

その結果を導いたその三浦の行動にヤンは思わず感嘆を禁じ得ないと思直に思えた。

「ああ、まあ前に雪ノ下に言い負かされて涙目になってたけどな。」

由比ヶ浜と戸塚が二人の元から離れ自席へと戻って行くと八幡はヤンに向けて頷きボソリと呟く、どうやら犯人は特定出来たなど。

「お前が話してる時結構キョドってたからな、見る者が見りや判るだろう。」

「ああ、だけどそれ自体は最終的な目的では無いのだししもう暫く様子見をしてみた方が良さだろうね。」

ヤンが述べるとそれに八幡も同意し二人は次の休み時間も葉山グループを観察する事とし、頷き合うと次の授業を受けるべく準備を始める。

次の時間は数学であり、理系を捨てている八幡は授業開始早々に起きている事を放棄し一人眠りの園へと赴いてしまったのか小刻みにその身を揺らし始め、それをヤンは苦笑しながらも少しばかり羨ましそうに見るのだった。

数学の授業も終わりヤンは眠りの園に自ら囚われに行った八幡を起こし、二人で再度葉山グループの休み時間の様子を覗う。

今現在葉山を含む四人の男子が、その葉山の席の近くに集い楽しげに会話を繰り広げている、葉山が話を振り戸部が突っ込みつつ合の手を入れ、残りの二人が追従する。

それが彼らの会話の一つのパターンとなっている様で、傍目には内容を変えつつそれを繰り返している。

「大将が話題を振って、太鼓持ちが持ち上げて取り巻き連中が笑い

の声を入れて盛り上がりを装って存在感を示すつてののか、はっ、関係無い俺が傍目からみてる奴らのアレは何とも歪な物に見えて仕方が無いんだが、その内側に居る奴らはアレを心の底から楽しいって思ってるのかね、だとすりゃ俺は存在感なんぞ誇示せずボツチで居た方がよっぽど良いって思えんだけど。」

その一連の流れを演じる彼等に対して八幡は頬杖着きつつ自身の思いを口にしヤンも頷きそれに同意するが、少しだけ彼らの弁護を試みる。

「まあ、だけどね彼等には彼等の思う処と己の立ち位置の確認とそれをキープする為の努力を行っているのかも知れないよ、まあこの例えが合っているとは言えないけど、水面を優雅に泳ぐ白鳥もその水面下では必死に水を掻いている様と同じくね、だからと言ってそれに高評価ボタンを押すかと問われれば押しはしないけどね。」

だが、結局はヤンの思いも八幡のそれと何ら変わり無く結局は彼等の様にはなれないとの結論を述べる。

「……高評価ボタンつてお前は何処ぞのチューバーかよ。」

そんな会話をしつつも八幡とヤンはその視線を葉山グループ男子四人を捉え、その一挙手一投足を観察する。

そんな時間が五く六分も続いていただろうか、やがてその場に変化が訪れる。

「悪い、俺ちよつと。」

おそらくはトイレにでも行くのだろうが、その彼等の首魁葉山がその場を後に教室を出て行く、それがその変化の訪れを八幡とヤンに知らしめる事となったのだった。

「やれやれ、どうやらそう言う事の様だね。」

「ああ、そうみたいだな、つう事でもう後は連中の様子見をする必要は無いだろうしな、結果は放課後に伝えりゃ良いだろう。」

そう結論づけヤンと八幡による葉山グループ監視業務は此処に一旦の終了となった、この後余程のどんでん返しでもなければ二人が付けた結論が覆りはしないであろう。

そして迎えた放課後、昨日と同じ頃合いの時間に葉山隼人は奉仕部の部室を訪れた、一応は昼休みにそれとなくヤンが葉山に接触し放課後に奉仕部部室を訪れる様にと要請をしていたのだが。

そしてヤンと八幡から葉山に対して、その日二人が一時間目と二時間目の休み時間に目視確認し導き出した結論を突き付ける。

「なっ、そんな……。」

それを聞いた葉山は信じられないとばかりに絶句し、両の拳を強く握り締め小さく震える。

二人から聞かされた結果を葉山は否定したいのだけれうが、否定し得ないだけの状況的な証拠を突き付けられたからだろう。

「まあアレだ昔やってたタモさんの番組の友達の友達は皆友達だつてアレ、お前のグループの男子チームはそう成りきれていないって事だ。」

結局の所お前のグループ男子ABCの三人はそれぞれがお前の友達ではあるんだろうがそのABC君達自体はそれぞれを葉山お前の、要は友達の友達に過ぎないって認識でしか無いって訳だ。」

俯く葉山に駄目を押す様に八幡は更に付け加える、それはまるでその事によって葉山に確りと現実を認知させようとしているかの様であり、ヤンはそれが厳しいながらも八幡が持つ不器用な優しさの発露の様に思え嬉しく思うのだった。

「うんそうだね私も八幡と同意見だよ葉山君、だからこそ私は……いやこれは君自身にその気があればの話なんだが、君達は真の意味での友人にならなければならぬんじゃないかな、あくまでも君がそれを望むのならばだけど一つ私達に君に対して提案を出来るんだが。」

だがそれは非常に解り辛く、一つ間違うとそれが八幡に対する反感となるかも知れず、ヤンとしてはお節介かも知れないと思えども援護射撃をせずには居れなかった。

「ヤン君、比企谷君、葉山君がその案を実行するか聞くかどうかは置いておくとして貴方達が出した結論を聞かせてもらえないかしら、貴方達が導いた答えに少しだけ興味が出てきたわ。」

雪ノ下は葉山がどうするのかを答える前に二人にそれを尋ねる、純

粹に彼女自身がそれを知りたいと思ったのも事実であろうが、葉山自身に結論を促す為の誘導を企図しての行動でもあったのかも知れないが、しかし雪ノ下がそれを公言する事は無いだろう、八幡に負けず劣らず彼女も素直な性格では無いのだから。

「……………分かったよ、教えてくれないか君達の考えを。」

葉山はどうやらそれにより覚悟を決め二人の提案を聞く事を決断した様だ、その目には先程よりも力強さが宿っている様に見える。

葉山の決意を見て取ったヤンと八幡はその案を伝える、先ずは八幡がバツサリと結論から告げる。

「葉山、お前今回の職場見学、自分から進んでボツチになってみる。」

八幡のその言葉にヤンを除く三人は訳が解らないと、その顔にクエスチョンマークを浮かべている事がありありと伝わる様な何とも言い難い表情を現すのだった。

魔術師と捻くれ者の言葉はトップカーズリーダーに届いたか。

八幡からの己に対する提案に、それを聞かされた葉山は呆気に取られ思わず彼らしくも無い、間の抜けた表情を奉仕部の面々に対して披露する事となってしまうた。

校内に於いて最も高い女子人気を誇る葉山のそんな表情を見ると言う事は非常にレアなケースなのだろうが、雪ノ下と由比ヶ浜にとつては別段葉山に対し特別な感情を抱いている訳でも無く、彼のその表情に何らの価値も見出さなかつたのだが。

「要するにだ葉山君、今度の職場見学会とやらの班分けなんだけど、君は彼ら三人の誰とも組まず別のチームに加入するんだ。

そしてその旨を予め三人に宣言するって訳さ、件の犯人の犯行動機、と云う言い方も何だけどそれは葉山君を隊長とした三人一個小隊が結成されるだろうと考え、その小隊からあぶれたく無いものだからこそ今回の行動に及んだのだろう。

だったら端っからその君が彼等の隊長としての地位に就く事と共に行動する事を放棄してしまえば、このメールを発信する事は無意味な物となってしまうからね。」

八幡の言を継いでヤンは理解り易く葉山に説明を始める、此度のチエーンメール騒動の発端が職場見学会のグループ分けに於いてあぶれ者となりたく無い犯人が他者を貶める為に及んだ犯行であるの事が休み時間のカマかけによつてはつきりと確認出来たと。

ヤンや戸塚の発言を耳にし明らかに挙動を変じさせた者が居た事を八幡が目視で確認した事を葉山に告げた。

「まさか本当にそんな事の為に。」

その事を聞かされた葉山はただ一言を漏らし呆然とする、彼としては事前にその可能性を八幡達に伝えられては居てもやはり信じられない否、信じたく無いと思つて居るのだろう。

「人の心の箍なんてものは、どんな事が切っ掛けで外れてしまうかなんて他者には解り様が無いからね、それは第三者から見ればほんの些細な出来事としか思えない様な出来事が起因していたりする物さ、しかしその当人にとっては何事にも代えられない重要な事の様に見えるのかも知れないだよ、例えば戦争なんかもそうかもね。」

知ってるかい、戦争の発端はその九割までは後世の人々があきれられるような愚かな理由で起こってるし、更に残る一割は当時の人々でさえ呆れるような依り愚かな理由で起こっているんだよ、全く持つて度し難いものさ、おっと此れは我ながら話が脱線してしまっただけかな、失礼したね。」

ヤンは四人に対して頭を掻きながら詫びを入れ、其処で一旦口を閉じる。

実際後半の脱線部分はさて置くとしてヤンが言った事はヤンや八幡、或いは雪ノ下の様は何処か泰然と又は諦念を持っている者にとつては何程の物でも無いのだろうが、しかしごく普通の一般的なティーン・エイジャーならば。

学年を超え学校内において最も高い人気を誇る男子生徒である葉山隼人、その葉山と友人関係にあり且つ校内でのイベント等を共に行動する事は、その極一般的な生徒にとつてはある種のステータスか、もしくは勲章を授与される様なものではなからうか。

尤もヤンは前世に於いて戦勝を重ね幾つもの勲章を授与されておきながら、それらに何らの価値も見出さず部屋の棚に適当にしまい込み見向きもせず、しかしその箱だけはバスルームの石鹸箱に丁度良い等と考える様な、変人であったのだがこれは人として稀有な例と言わざるを得ないだろう。

「だな、俺もヤンの言ってる事は尤もな事だと思っわ、だからこそお前は今回のメールの件が職場見学会の班分けが根本原因だと思っっているって事と、そしてこんな騒動が今後起こらない様に自分が身を引くからお前達三人でグループを組んで交流を深めてくれとでも言って聞かせりやあ大体解決すると思っぞ。」

別に犯人を名指ししろとは言わんけどな、三人と話すに当たって

メールの事も引き合いに出して、今後こんな事態にならない様に釘を刺すつてのはお前には辛いかも知だが、言わなきやならない事つてのも多分あるんじゃないかねえのか。」

脱線した部分に付いては敢えてスルーを決め八幡は葉山の目を見ながらヤンの言を肯定し更に追加補足を加える、その八幡の目に見える葉山の表情は未だ決め倦ねている様に思える。

「うん、葉山君、君は事を穩便に済ませたいと望んでいるのだろうかどそれだけではないけないと私達は考えるね。

一度腹を割つて話す事は今後も君達の関係を続けていくつもりならば必要な事だと思うよ、皆でビールでも飲みながらつと、いかなまた余計な事を言つてしまったか、んっ、んっつまあそれによつて彼等が自省や自制する様に促し、彼等がそれを是とすれば君達の絆はより強固な物になるかも知れないしそうなれば君達にとつては儲け物だろう。

まあそれも君達次第なんだけどね、それとちよつと辛口な事を言わせてもらうとだね、もしそれが上手く行かず君達の関係が崩れ去つたとしたら、その程度で壊れてしまう様ならばだ、君達の関係は所詮その程度の物でしか無いって事なのかも知れないね。」

そう言い終えたヤンは紙コップの紅茶を口に含み喉の奥へと流し込む、葉山はそんなヤンとそしてに紅茶を啜る八幡とを交互に見やります。

葉山は二人の提案を聞き自身がどう行動すべきか逡巡しているのだろう、ヤンと八幡の提案は確かに現状考え得る限りかなりベストに近いベターな答えだと彼も頭では理解しているのだろう、しかし理解しているからこそ。

「……その程度の物か、随分と手厳しい言い分だねヤン君、俺は彼奴等とならいい関係が築けると信じているよ。」

彼の心に二人に対してほんの少しの反発心が生まれるのは仕方が無いだろう。

「そうかい、だけど間違つた事は言つちやいないだろう葉山君。

君が言う良い関係を築けるか、それとも私が言う様に脆く崩れ去つ

てしまうのかそれは君のいや君達のか、君達次第だよ。」

紙コップの中身の紅茶を意味無く攪拌する様にヤンはゆらゆらと紙コップを揺らし、中の琥珀色の液体表面が波打つ様を見ながらヤンは葉山の言葉に返答をする。

葉山の顔も見ずにヤンはそう言った、それはもう言うべき事と伝えるべき事は伝えたから後は自分でどうにかしろと、すげなく突き放された様に葉山には感じた事だろう。

「まあこれまで仲間とか居た経験が無いから俺はヤンみたいに断定は出来ないが、それでもヤンの言った事は間違いないって、これから先はお前達次第だって俺もそう思うぞ葉山。」

フーフーと紙コップの紅茶を冷ましながら八幡がヤンに同意する旨を伝えた、葉山は次に八幡へと目を向けるが直ぐにその視線を反らした、彼は吟味しているのだろう八幡とヤンが提案した事を。

その様に葉山がこの場で逡巡を見せているのを他所に奉仕部女子二人が声を上げた。

「ヤン君、比企谷君、葉山君は貴方達の提案を実行に移すかどうか決め兼ねている様だけれど、私にも貴方達の提案こそが現状最も適していると認めざるを得ないわ、私も貴方達の調査結果を踏まえて考えてみたのだけどやはり私も貴方達と同様の結果に行き着いてしまうわ。」

「うん、あたしもそう思うな、何てかさメールの事を完全スルーとかしてただ有耶無耶にしちゃうよりか隼人君がちよつとでも注意をした方が良くと思う、そうじゃないとさあたしとか姫菜はさ男子に対して“さいぎしん”を持ったままになっちゃうと思うんだ。」

雪ノ下のその発言は、別に葉山に早急に又強制的に決断を促す様な口調では無く二人の出した結論を高く評価しての発言だったが、由比ヶ浜のそれは葉山と同じグループに属するだけに雪ノ下よりも切実にこの懸案の解決を願っているだけに、葉山に対し事態の収束を請願する発言となった事は当然な流れであろう。

「……………」

二人の女子の発言に葉山は何も言えなかった、無言で下を向いたま

ま答えを出せないでいるのだろうか。

「お前今の猜疑心つてめっちゃ平仮名発音だったよな由比ヶ浜、雪ノ下から勉強教えてもらってる効果はまだ表れてないんだな。」

「うっ、もうヒツキーはそんなの蒸し返さなくたっていいじゃん、そつその内ちゃんど解る様になるんだからね！」

場の雰囲気気味に不味さ、居心地の悪さでも感じたのか八幡が由比ヶ浜の発言に突っ込みを入れ、由比ヶ浜もそれを感じ取ってか多少オーバークション気味にそれを返す。

それが功を奏したのかは定かでは無いが、口を噤み静かに己が此れからどうするべきかを思案していた葉山が顔を上げ奉仕部の面々に向き直り

「分ったよ、君達の提案通りにやってみるよヤン君、ヒキタニ君。」
「どうやら葉山は意を決した様で八幡とヤンの提案を受け入れ実行する事を二人に伝える。」

八幡とヤンはその葉山と改めて目を合わせる、だが決意をしたとは言えどもその葉山の表情には未だ迷いの色が見て取れる、だがそれも仕方の無い事だろう。

いくらヤンと八幡が思案した上に提案した方法とは言え先にヤンが言った様に二人の提案はベストでは無くあくまでもベターであり百パーセントの成功率を保証している物ではない。

身長も高く学業成績も良くその容姿も整っており大人びて見えるとは言えど、葉山は高々高校二年生の子供に過ぎないのだ、今回の問題を奉仕部に持ち込んだと言う事からしても彼の能力が年齢相応の物でしか無い事実を如実に現していると言えるだろう。

だからこそ二人に完全なる成功を保証して欲しいと願ったとしても何らおかしくは無いのだろうか、ソレは他力本願もよい処でその葉山の内心の思いをヤンが知れば『其処まで面倒は見きれないし知ったこっちゃ無い』とあつさり突き放していただろうか。

「不安かい葉山君、私達の家を実行したとして果たして上手く行くだろうかとそう考えているんだろう。」

けれどもどんなに完璧を期して練った策だとても何かしらの不確

定要素は付き物でね、其処から全てが崩れ去る事だつて稀にあるものさ。

まあだけど動かなければ動かなかつたで事態は悪くなつて行くばかりなんだしね、何方にしても一緒さ。」

だが葉山は彼等に百パーセントの保証をして欲しいとは口にする事も無かつた為、ヤンは葉山の表情から不安感を抱いている事だけは推し量る事が出来たが故に慰めとも付かない助言をするだけに留まつた。

「ああ、そうだね……ありがとう、明日にでも皆と話してみるよ。」
葉山はヤンの助言に静かに頷きながら返事と礼を述べ、部室を後にすべく座っていた椅子から立ち上がり奉仕部の面々に頭を下げた。

「……あの隼人君、がんばつて。」

顔を上げた葉山に由比ヶ浜が激励の言葉を贈る、その声は幾分躊躇いが含まれてはいたがそれがグループの仲間として事に当たる葉山に今の由比ヶ浜が出来る僅かばかりの事で。

「うん、ありがとう結衣……やつてみるよ。」

それを葉山も十分に承知してか、由比ヶ浜へ向け決意を口にする。

「それじゃあ、皆もありがとう。」

改めて葉山は奉仕部の面々に礼を述べ部室から退出すべく歩き出す、その表情は未だ覚悟は定まらずと言つたところだろうか。

しかし皆に背を向け歩く葉山に紅茶を飲みつつ、その背を見ながらヤンはその葉山を呼び止めた。

「すまないね葉山君、一つ言い忘れていた事があつてね。」

ヤンは紙コップをテーブルに置き手を離す、空になったコップの中に僅かな時間目を向けるが、直ぐにその目を葉山へと向け直すとその言い忘れていた事を話し始める。

「職場見学会に付いてなんだけどね、知つての通り我々生徒は三人一組の一個小隊を編成する様に指示を受けている訳だけど、その我々を受け入れる企業の総数がその三人一組の小隊の数と同数な訳は無
いよね。」

常と変わらぬ柔らかな表情と口調でヤンは葉山に語り掛け、それを

受け取った葉山はそれが一体何事かと訝しみ思考を巡らせてみる。

総武高校のクラスは一学年に就き十クラスを数え其の総数は数百人規模に登る訳だが、今回の職場見学会に当たり各クラス三人一組の編成を組んだとしてもそのグループは十組以上となり学年単位ではそれが百以上となるし、当然ながら訪問先企業には引率の教師が就く訳でその教員の人員もその百を超えるグループ全てをバラバラにして賄える人数である訳も無く。

やがて葉山は一つの答えに行き着いたのか合点がいったとばかりに目を見開いて頷くと、ヤンに対して返答を返す。

「つまりグループは違えど、職場見学の訪問先は複数の班で赴く事が出来ると言う事だねヤン君、だとすればそれをみんなに伝えれば万事解決するんじゃないのかい!？」

葉山は其処に一条の光を見出したかの様に表情をガラリと変え喜びを露わにそれを問うのだった。

「うん、まあそう言う事なただけだね。」

葉山の問い掛けにヤンは気も無さげに答える、まるでその解答は不適であると言わんばかりに素っ気無く。

そして続く言葉でそれがヤンの本心で有る事がこの場に居る葉山を含む皆に告げられた。

「それはしかし私としてはお勧め出来無いね、なぜかと言えばだねそれをしてしまうって事は結局の処今回の騒動の顛末が、有耶無耶に終わってしまうって事だよね。」

だとすればどうなるかな、もし次に今回と近い状況となった場合今回の犯人か或いは別の誰かがこの事に味を占め同じ様な行動に至る可能性だってある。

だから私としてはそうならない為にも君はグループの首魁として最低限の責任を果たす義務があると思うんだがね。」

じつと静かに淡々とヤンは葉山の目を見つめながら、だが確りとその事実と可能性と責任とを葉山に突き付ける。

葉山はその言葉を聞き愕然とし言葉を失う、それはまるで折角見つけた一縷の望みたる天より降ろされた細い一本の糸をあつさりとな

惨にも断ち切られたかの様に感じた事であろう。

「なる程な、ヤンお前は葉山にグループだけじゃ無く訪問先の企業までも別の所へ行けて言ってる訳なんだよな。」

ヤンの発言の真意を八幡は紙コップの紅茶をちびちびと飲みながら、声に出し葉山に対しての説明も兼ね継ぐように問い掛ける。

「ああその通りだよ八幡、私達の提案としては葉山君が三人と離れる事によりその件の三人に友誼を結んでもらおうとこの案を考案した訳だけど、結局班は違えども皆が一緒に行動してしまっただけならば、結局は我々の提案は無意味な物になってしまおうし、彼等の関係性に何らの変化も訪れ無いじゃないかな。」

ヤンは八幡の問を受けると、そう答えて話を結んだ。

葉山の去った部室には四人の部員と僅かな静寂の時間が訪れた、八幡は紙コップに残っていた紅茶を飲み干してほっと溜息を吐き、ヤンはテーブルに置いていた小説の単行本を手に取りスクールバッグへとしまい込む。

時刻はもう間もなく完全下校時刻となる頃合いだった、今回の依頼の策をほぼ完全に八幡とヤンに任せられた結果となってしまう事に忸怩たる思いに囚われてか雪ノ下と由比ヶ浜は何も言えず無言であったのだが。

「……隼人君達上手く行くかな……」

ポツリと呟く様に溢したその言葉は由比ヶ浜の口から漏れた物だった、同じグループのメンバーであるが故に彼女はこの四人の中で最も切実にその成否が気にろのだろう。

「ふむ、果たしてどうだろうかね、いくら私達が何だかんだと言った所でそれは最終的には葉山君の行動とそれを受け取る側の気持ち次第だろうからね。」

ヤンは由比ヶ浜の問に素っ気無くそう答える、由比ヶ浜はおそらく葉山と同様に上手く行くとの確約の言葉が欲しいのだろうとヤンには理解出来てはいたがその慰めの言葉を安易に口にする事は出来な

かった。

「あくまでも我々奉仕部の役割は依頼者の自立を促す事がその役割であって、最後の最後迄依頼者を手取り足取り導く事が活動の趣旨では無いだろう。」

今言った様にヤンはあくまで奉仕部の趣旨に則り葉山に対し提案をただけであり、それ以上の事など当人達に任せるしかないし、当人達で対処すべきであるし何よりも他力本願となり他者に全ての解決を求めてなど欲しくもないとの気持ちもあるのだろうし、ヤンは自主自立の精神を今生に於いても貴重な物とし葉山達に対してもその精神を持って接していたのだから。

「ならば後は運を天に任せる、もしくは神のみぞ知ると言ったところかしらヤン君？」

ヤンの発見を聞き沈黙する由比ヶ浜に代わり今度は雪ノ下がヤンへと尋ねる、それに対してヤンは返答を熟考する事も無く軽い調子で答えるのだった。

「うーん、それもどうだろうね、何せ私は無神論者だからね、なのでそんな気紛れな神様なんぞと言う存在を信じた事など一度も無いんだよ、それに自分で出来る事、手の届く範囲内の事ははなるだけ自分でやった方が良いだろう。」

だがもしも彼等が本当に出来ない手に負えないと言うのなら話はまた変わって来るんだろうけど、そうなるともう我々学生の手には負える領分では無くなってしまいうんじゃないのかな。」

今回の件はまだ話し合いで解決出来る余地があるとヤンと八幡は判断し、奉仕部の理念の範囲内で出来得る助言を与えたのだ。

後日……………。

ヤンと八幡は職場見学会のグループは戸塚を加えての三人で編成され、そのグループの赴いた企業には件の三人とは別のグループを組んだ葉山の姿は確認出来たが、其処に葉山グループの三人の男子の姿

は無く、その葉山の表情には何か憑き物が落ちたとでも言い表わせばよいのか、八幡達のグループと目が合うと年相応の少年らしい笑顔を向けてくれたのだった。

追記。

葉山が奉仕部の部室に赴いた翌日、どうやら彼は八幡とヤンの提案を実行に移した様で、その日の昼休みが終わる頃には葉山グループの男子四人の表情からは屈託の影が消え失せていたのだとか。

魔術師はプレゼントを選ぶために仲間と共に、そして。

梅雨、それは六月から七月にかけて中国の揚子江流域から日本の南部にかけて特に顕著に現れる季節的に雨が降る期間の事をさしてそう呼ぶのだが、六月も中旬のこの時期日本の関東地方も梅雨入りしており降り続く雨と共に暦の上では既に夏に突入しており、高くなり始めた気温によってジメジメとした湿気を伴い不快感をもたらしていた。

「唐突なのだけれど、六月十八日が何の日か分かるかしら。」

そんな慣れたくも無い環境に突入間もない六月も既に三分の一が経過した、ある日の放課後の総武高校特別棟四階に用意された奉仕部の部室にて本当に唐突にそのような質問をこの場に居る二人の男子部員に投げ掛けたのは、奉仕部の部長にして現在この空間に唯一人存在する女子生徒。

おそらくは街を歩けば十人中八く九人は確実に彼女に注目の眼差しを向けるだろうと思われる程の美貌と知性を持つ少女、雪ノ下雪乃。

因みにこの日はもう一人の女子部員由比ヶ浜結衣が友人との約束がある為に部活を休んでいる為に現在この部室内には三人の部員しか居ないと言う訳である。

「ああすまないね雪ノ下さん、あいにくと私にはその日付に関して思い当たる節がまるで無い。」

その問いにまず先に答えたのは、黒い瞳と髪を持ってはいるが何処かしら日本人とは異なる顔付きの少年と呼ぶには些かながら達観した様な、或いは常に眠た気な雰囲気醸し出している、異国からの転校生、ヤン・ウエンリー。

「……………はあ」

そして雪ノ下の問いに対して何も答えず、只面倒臭げに頭を掻き知

らん振りを決め込むのは淀んだ眼をし周囲の事象を正面からでなく俯瞰或いは斜め下から眺めている様な捻た印象を見る者に与える少年、比企谷八幡。

「あら、人の質問にも答えず面倒臭げに無視するなんてもしかして何か思い当たる事でもあるのかしら、無視谷君。」

そんな八幡の態度を目敏く捉えた雪ノ下は、常の如く皮肉を交えて彼に改めて問い掛けるのだが、問われた当の本人はと云うと。

「お前ねいい加減人の名前を勝手に改変して妙な言い掛かりを付けるの止めてくれる、何だよ無視谷って言われて一瞬ビーストの方の虫かと考えたじゃないかよ、けど言葉の流れからしてシカトの方の無視だって解ったけど、ってか俺は別に由比ケは……………」

その様に反論をするのだが、その流れの中で彼はこの場合に於ける余計な一言を言いかけてしまった。

「語るに落ちとはこの事ね、比企谷貴方は今由比ヶ浜さんの名を口にしようとしていたわね、と言う事はつまり貴方は六月十八日が何の日か知っていると見なしでも構わないわね。」

これにより八幡は雪ノ下にマウントを取られてしまう結果となり、己の口から吐いて出ようとした由比ヶ浜の事を誤魔化そうとするが敏腕検察官の如き雪ノ下の追求の前に敗北を喫してしまい自白を余儀なくされてしまった。

「二昨日だったかな、アイツからSNSで俺の誕生日を聞かれたから答えたんだが、その後の返信でアイツ十八日が自分の誕生日だって返ってきたんだよ、だから覚えていただけで別に他意は無いぞってかそう言う雪ノ下は何で知ってたんだよ。」

目線を彼方此方に彷徨わせつつ八幡は雪ノ下に答え、細やかな反撃とも呼べない程の小さな抵抗として問い返すがその答えは単に由比ヶ浜のメルアドレスに618の数字が存在していた事から、彼女の誕生日がこの日ではないかと推測したとの事であった。

そしてその推測は八幡が由比ヶ浜から受け取ったSNSのメッセージから正解であった事が証明された訳だ、更に雪ノ下は続けてこの話題を俎上に上げた理由を述べ始める。

「そこで貴方達に相談なのだけれど、あいにくと私にはこれまでプレゼントを贈る様な相手が居なかつた事もあるのだけれど、その、自身の感性もどうやら世間一般の十代の女子としては外れているみたいなのよね。」

八幡は内心雪ノ下のその自己分析には素直に頷けるものであるとしみじみと思ったのだが、そのような事を考えていると感の良い雪ノ下の事直ぐにそれを察し口撃を加えられては堪らないと、彼はそれに付いて考えるのを放棄した。

触らぬ神に祟り無し、八幡の脳裏にはその言葉が立体的な形をしたオノマトペの様に過ぎるのだった。

閑話休題、基本ヤンも八幡も二人共そう云つた事には鈍い質なのだが、流石にこの件に対しては何となくだが察しが付いた。

「成程ねつまり雪ノ下さんは由比ヶ浜さんへの誕生日のプレゼントの買い出しを私達三人で行おうと、そう提案しているのだと解釈しても良いのかな？」

ポンと手を打つた訳では無いがヤンはその答えに辿り着き、雪ノ下へ己の回答の答え合わせを求める。

そしてヤンの回答は正解にかなり近かつた様で、雪ノ下はヤンへと向き直りコクリと首を縦に小さく振りヤンの答えに追加補足を加える。

「ヤン君に付いてはフレデリカさんと云うお付き合いをしている人が居るからそれ程心配は無いのだけれど、比企谷君はおそらく……いえ確実に小町さん以外の人に誕生日のプレゼントなど贈つた事は無いでしょうから、女性へのプレゼント選びなど無理だと言っても差し支えないでしょう。」

ヤンから八幡へと視線を移し、中々に辛辣な評価を彼へと降しつつ雪ノ下は澄まし顔でそう述べるのだが、其処で黙っておれずに反論してくるのが比企谷八幡と云う男だ。

「くっ、イラッと来る事言われているがほぼ正解を言い当てられているから反論できねえくっ、てかちよつと待てよ雪ノ下確かに俺はお前が言う様に小町にしかプレゼントなんて物贈つた事は無いが、お前の

その言い方だと小町は女子の範疇に入らないって言ってるのと変わらないんじゃないかね、そうだとするとお前ちよつと失礼だよな、まあ小町も小町で俺の贈ったプレゼントをセンスが無いとか若干酷評してくれるんだけどね……あつ、何か言ってる涙が。」

だが、反論すれども最終的には雪ノ下の下した評価を肯定する結果となっている事に、思わずヤンは苦笑を漏らしそうになってしまった。

ヤンはだが、それを誤魔化すと云う訳では無いのだろうか『んっ、んんっ』と咳払いを二度ほど吐き、途中停止状態となっている雪ノ下の相談の続きを促す。

「ごめんなさい、私としたことがつい比企谷君をやり込める事になってしまったわ。」

それで話の続きなのだけれど、明後日の土曜日かもしくはその翌日の日曜日に一緒にプレゼンの買い出しに付き合っただけで、出来ればその時に小町さんとフレデリカさんにも同行を願えないかしら。」

その雪ノ下の要請にヤンはフレデリカのスケジュール次第だが同行しても構わないと即答するが、基本休日に外を出歩く事を嫌う八幡は理屈を付けてそれを断ろうとするも、ヤンくフレデリカ経由で小町へと連絡が行き結果その小町の『はっ！どっちみちお兄ちゃんだって結衣さんにプレゼント買うつもりだったんでしようが、だったらつべこべ言わずに皆で相談して選べば簡単に済むんだからそれで良いじゃん』との鶴の一声によって、渋々ながら参加する事となった。

「ごもごももおやつはろーです雪乃さんヤンさんお久しぶりですね、今日は愚兄共々よろしくお願いしますね。」

二日後の土曜日、由比ヶ浜を除く奉仕部の三人、ヤン・ウエンリーと比企谷八幡と雪ノ下雪乃に加えヤンの婚約者フレデリカ・グリーンヒルに八幡の妹比企谷小町の計五人は先日の雪ノ下からの要請通りに由比ヶ浜へのプレゼントを購入すべく千葉県某市、某駅前から直ぐ

のベイエリアへと赴いて来たのであった。

「やつ……こつ、こんにちは小町さん今日はお休みなのに呼び立てしてごめんなさい。」

「やあ、こんにちは小町君今日はよろしく頼むよ。」

小町の元気な挨拶に雪ノ下とヤンは挨拶を以て返す、小町の由比ヶ浜に影響を受けた妙な挨拶に思わず釣られそうになる雪ノ下の姿は最早一種の様式美と言っても良いのかも知れない。

「こんにちは八幡さん、御迷惑で無ければ私もよろしくお願いします。」

続けて、フレデリカが八幡へと礼儀正しくお辞儀をして挨拶を、白を基調とした清楚さと涼やかさを兼ね揃えた装いの衣服を纏った、外国人美少女の日本人とは違う美しさに目を奪われそうになるも何とか理性を総動員し平静を装い八幡も挨拶を返すが。

「おつ、おう、まあそのアレだよろしく頼むわ?」

彼の頬は微かに朱に染まっており、その挨拶の語尾もなんと無く疑問形になっている様に感じられ、フレデリカは何だかそれが面白く「はい」と返事をするものの、其処には隠しようの無い笑いの成分が含まれていた。

五人はモールへと入店すると案内板を元に店舗を巡る事にしたのだが、其処で八幡が各自分散し個人個人でのプレゼント購入を提案したのだが。

「はっつ、これだからごみいちゃんなんだよ、だいたいそれだと今日小町とリカちゃんがこの処に来た事の趣旨から外れちゃうでしょうが、良い先ずは目当てのブツがありそうなフロアを此処で厳選して全員で一通り見て廻るって話し合う。」

その後で何を買うか、その段階で初めて散開して個人個人でプレゼントを選んで買うんだよ。」

妹、小町からの至極真つ当な正論による駄目だしにグウの音も出ない八幡は尚も何やら言い訳を述べるも、その尽くを論破されるのだが、それをみかねたねたヤンが此処八幡に対して助け舟を出す。

「八幡、此処は潔く小町君の言う事に従おう、第一其れこそが雪ノ下さんからの要請でもあつた訳だしね。」

それにどの様なプレゼントを選ぶかある程度それぞれの方向性を知っておいて品物がかぶらない様にする事も必要なんじゃないかな。」

ヤンからの提案に不承不承の体を取りながら八幡も了承、雪ノ下もそれが当然とばかりに頷くのだった。

「では。」と小町は店舗案内板に書かれた店名をじっくりと吟味し、最終的に二つのフロアを回って見る事に決定し、女子三人を先頭にヤンと八幡がその後におまけの様に若干の距離を置いて付き従う形で進み始める。

実際の話、雪ノ下とフレデリカは多くの人の目を引きつける程の美少女である事は間違い無く、小町も二人とはベクトルは異なるが澁刺としたマスコットの的な愛らしさを感じさせる。

「何か思っていた通り人目がすっげえ痛いんだがな、こうなる事は端っから分かつてたんだよなあ。」

そんな華のある女性陣の後ろを歩いているのだから、静かに生活を送りたいと志向する八幡にとしはてこの事態に愚痴の一つもこぼしたくなるものだろう。

「まあ気持ちは解るけどね、実際君と雪ノ下さんもそうだろうけど私も正直な処贈り物選びのセンスなんぞ持ち合わせが無くてね、なので彼女達の存在はこの場に於いて不可欠だろう。」

「……はあ、花束なんか食えないだったか。」

ヤンの慰めに八幡は暫く前に彼が材木座を相手に語った宇宙暦の時代に彼が言ったという発言を以て、消極的にだが現況を諦め混じりに受け入れたのだった。

目的のフロアへと到着した一行は先ず最初にキッチン雑貨を取り扱う店舗へと入って行く、それは先だって由比ヶ浜が自宅で母親から料理を習っているとの話を、雪ノ下が聞いていた事が理由であるのだが。

入店し間もなく雪ノ下は一枚のエプロンを手に取りまじまじと見つめる、それは薄い青色の生地にも可愛くデフォルメされた猫のプリントがなされた物で、その様子を見た八幡はこの様な品物にまで猫を選ぶ雪ノ下に、あくまでも彼女は猫派なのだなど妙な感心を抱いてしまふが。

「……生地は綿百パーセントに厚みも割とあるわね……。」

タグを確認し、生地を表裏を指で挟み込み厚みを確認する姿を見て八幡はつい雪ノ下へと突っ込みを入れてしまう。

「別に由比ヶ浜は身に付けるものに防御力は求めちゃいないんじゃないのか、どっちかってとあいつはもつとピンクとかフリフリが付いた馬鹿っぽいのが好みだと思っただがな。」

八幡のその突っ込み雪ノ下は彼を一瞥するとその顎に繊細な細い指を当てて暫し考え込むと「その意見も否定は出来ないわね」と呟くが。

「けれど不安ではないかしら、由比ヶ浜さんは貴方も知っているでしょうけどかなりのドジよ、なので料理中に火の取り扱いを誤る事も考えられるわ。」

雪ノ下が言う由比ヶ浜に対する懸念には八幡にも大いに肯けるものだった、故に八幡は雪ノ下のそれに己の見解を付け加える。

「あ〜っ……だな、だとしたら耐火防災機能のある物を買わなきゃいけないし、だとすると此処じゃなく作業着屋とかでないと売ってないだろう、例えばアレだ溶接工が着用する何の飾り気も無い牛革製のマックス○イナ社のエプロンとかな。」

「まあ、由比ヶ浜がそんな物もらつても喜びはしないだろうし、自宅ならあいつの母ちゃんも居るだろうからその辺は大丈夫だろう、って事で俺ならそっちの薄桃色の犬のプリントの方を選ぶのが無難だと思っただけ、あいつ犬好きだからな。」

犬のプリントのエプロンとの八幡からの提案には雪ノ下も同意らしく、彼女は直ぐ様決断を下すと由比ヶ浜へのプレゼントとすべく薄桃色のエプロンを手に取りレジへと向かう。

「……ありがとう比企谷君、おかげで直ぐに決める事が出来たわ。」

何時に無く素直に八幡に対して謝意を述べる雪ノ下、その際に彼女の顔に浮かんだはにかんだ微笑がとても眩しく感じられ八幡はそれを直視出来ず視線を逸してしまっていた。

その後を訪れる数秒間の所在無い時間が過ぎ去りレジへと向かう彼女の後姿を見送り、そしてその場から消えていた薄青色の猫のエプロンが消え去ってしまった事に気が付き彼はポツリと呟く。

「結局自分の分も買うのかよ、どんだけ猫好き拗らせてんだあいつは……」

無造作に伸びた黒髪を掻きながら、と其処へタイミングを見計らった様に八幡の元に小町が近付き、ニヤニヤとした少し下世話な感じを演じつつ八幡へとこれまた下世話な話を振って来る。

「へっへっへええっ、何々お兄ちゃんつたら今メツチャ雪乃さんに見惚れてたよねえ、まあ同性の小町から見ても雪乃さんって超可愛いしお兄ちゃんが見惚れるのも仕方無いっちゃ仕方ないんだけどさあ……ニヤっ、あくつでもさあ結衣さんだって雪乃さんに負けないくらい超可愛いしさあ、それに結衣さんってお兄ちゃんの事特別に想ってるみ・た・い・だしねえ、ふっへっへっへっ。」

そんな発言で一頻り兄をからかうと、反撃を食らう前に八幡から距離を取り両手を後頭部に回して『果たしてどっちが小町のお義姉ちゃんになるのかな』などと宣い、反撃の機会を逸した八幡はそこはかとなく感じる怒りと気恥ずかしさをどうした物かと一人悶々とその感情に抗うのだった。

ヤンとフレデリカの二人は八幡達と別行動を取り彼等の居る階より一つ上の階へと上がり、フレデリカが選んだファッション雑貨の店へと入店していた。

「どうもこう云う店は場違いな気がするんだが、女性に贈るものならこんな店が良いのかな。」

先程の八幡と同様にヤンもまた収まりの悪い黒髪を掻きつつ独りごちる、同じ店内に入店しながらヤンとフレデリカは互いに距離を置きそれぞれに店内を物色している最中だった。

それは数分前『後で私が採点しますから、ウエンリーさんもいくつが良さそうな物を見繕って見てください』とのフレデリカよりの御達しがあつたが為であるのだがヤンはもう、この時点で何を選んだ物やらと諦め気分に精神を支配されていた。

僅か十分に満たない時間であつたが、その店内でヤンが目星を付けた小物にフレデリカからの合格点が与えられ、彼はその内の一つを購入し現在そのフロアにある休憩用のソファに二人隣り合つて腰を掛けていた。

フレデリカもヤンと同様に由比ヶ浜へのプレゼントを購入していたがそれとは別にもう一つ購入した物がある様で、ヤンはそれを彼女自身が身に着ける物を購入していたのだとばかり思っていたが、その店のロゴが入った紙パッケージに包装されたそれをヤンへと渡してきた時には少し意外に感じてしまった。

何故ならヤンの誕生日は四月であり、その日は二ヶ月以上も前に過ぎ去つていた事もあるからだつた。

「ふふふ、それは誕生日には関係無いですよ、ただお店で見かけてウエンリーさんに似合うかと思つたから買ったんです、だから開けてみてください。」

彼女の言葉に従い謝意を述べつつヤンは彼女から受け取つた包を開き中に収まつていた品物を取り出しに掛かる。

包を開き先ず目に付いたのは黒い布地だつた、その布地が何かは物事に頓着しないヤンには何かは解らないのだが、そして包の大きさ等から勘案してそれが何かしら身に着ける物だと推察出来た。

其処まで推察を進めたヤンはその包に手を入れ直に触つてみると、それがどのような物なのか高い確率で正解を断定出来た。

そのままそれを取り出して眺め見る、白く染め抜いた五稜星のマークこそ無い物のヤンにとってそれは（否前世に於けるヤンにとってはだが）馴染みのあるものだつた。

「……………ベレー帽か……………」

何やら懐かしさと複雑さの二つを同時に感じさせる眩きをヤンの

声
音
か
ら
フ
レ
デ
リ
カ
は
感
じ
取
っ
た
。

魔術師は優しい嘘を肯定し、そして。

「ありがとうフレデリカ、しかしこれはまたベレー帽か……そのだね、一体どう言った基準でこれを選んだのか聞いても良いかな。」

掌の上に置いた黒いベレー帽をヤンは静かに感慨深く眺めながらも、彼はそのベレー帽を贈ってくれたフレデリカに対し何と声を掛けるべきか、また彼女が何を思いこのベレー帽を贈り物として選んだのかそれが気にならない筈も無く意を決してと言うには些か大袈裟だがヤンは彼女に対して問い掛けたのだった。

「……あの、お気に召しませんでしたかウエンリーさん……」

フレデリカとしてはヤンからその様に問い掛けられるとは思ってもしなかった事もあり、おずおずと戸惑いながら問い返してしまふ。

しかしフレデリカのそれも当然と言える反応であろう、彼女からすれば意中の人たるヤンに喜んでもらおうとの思いからプレゼントとして選り贈った物なのだから。

「ああいや、これは済まないねフレデリカそんな事は無いよ、ただ君が何故これを私にとチョイスしたのか気になっただけなんだよ。」

シユンと沈んだ調子のフレデリカの様子にヤンは慌てて彼女へ詫びる、それは己の感慨にばかり気を取られ彼女の真心を蔑ろにしてしまったのだとの反省の思い故に。

彼女からのプレゼントをヤンは気に入らなかった訳では無い、ヤンのその言葉を聞きフレデリカはホッと胸を撫で下ろすと彼女は語り始めた。

「わっ、笑わないで下さいねウエンリーさん、実はもうかなり前のことなんですけど私、夢を見たんです……」

そう言つてフレデリカが語るその理由とは、それはヤンに取つてはある意味ショッキングとも言える内容であった。

「其処は床も壁も天井も金属で構成された途轍もない大きさだと思われる建造物の中でした、その建造物の窓や大きなスクリーンに映る風景は一面の黒と無数の星が煌めく永久の夜の世界でした。」

そこで私は黒いジャンパーとアイボリー色のストラックスを身に着け頭にはベレー帽を被っている今よりも大人になっていてそして私と同じ服装の大勢の人達と一緒にその場所で働いています、当然ですけど勿論其処には今よりも大人なウエンリーさんも居ましたよ夢の中の私と同じ服装で勿論ベレー帽も身に着けていましたよ。」

「……………」

『まさか彼女もそうなのか』と言葉には出さずヤンは心中に呟く、フレデリカが言う巨大な建造物とはイゼルローン要塞か或いは同盟軍の宇宙戦艦、それも旗艦ヒューベリオンの事ではないかとヤンは検討を付けた。

「そして私は今よりもずっと大人になって重大な責務を果たす、そんなウエンリーさんの傍らで、何時もウエンリーさんを見つめているんです。」

でも、その夢の中のウエンリーさんだったらそんな重責を負っているのにデスクの上にお行儀悪く胡座をかいて座っていて、でもそんな態度に私達は安心感を抱いているんですよ、ふふっ何だか可笑しいですよね。」

フレデリカはヤンの目を見つめながら静かに微笑みその夢の話を締め括る、そう話を結んだ彼女の様子からどうやらヤンはフレデリカは自分の境遇とはとは多少違う様だと判じ彼女に尋ねてみようと思いを決する。

「そのだねフレデリカ、一つ聞きたいのだけどその夢を君は何度も見ているのかな。」

自分の時はそうだった、夢を何度も何度も見続けてやがてそれが己の前世での出来事であると言う事を理解し覚醒してしまったのだった。

もし彼女までもがそうだとしたら彼女はどうなってしまうのだろうか、この世界の自分と宇宙暦の世界の記憶とに精神が苛まれるなどと言う事も有り得るのではないだろうか、ヤンはそう危惧するのだ。

「えっ、いいえその夢を見たのは一度だけですけどとても印象に

残っていました、ですがそれがどうかしましたかウエンリーさん。」
しかしフレデリカはヤンの顔を訝しそうな表情で見つめながらそう答える、その答えにヤンは胸元に手を当てホッと胸を撫で下ろし安堵する。

「どうやら彼女はヤンとは違いあの夢をずっと見続けている訳では無い、この先もしかしたら彼女は宇宙暦の世界の夢をまた見る事があるかも知れないが、フレデリカにはどうかそれをただの夢だと認識していて欲しいとヤンは願わずには居られなかった。」

在ったのかどうかとも判らない前世などと云う物に何も今生の人生を縛られる事など無いだろう、自分も自分でそして彼女にもこの今の現実の人生をより良いものにと願うのだった。

しかしだとするならばとヤンは考えてみる、宇宙暦を生きた記憶を完全に持つている己とそうで無いフレデリカとの違いは何なのだろうかと。

更に加えるならばフレデリカの父ドワイト氏もそうだ、ドワイト氏もまたフレデリカ同様に宇宙暦の記憶は持ち合わせていない様であるうえにヤンが知る範囲内ではあるが性格、人格面でも宇宙暦のドワイト・グリーンヒル大将とはかなり違いがある。

『考えたくは無いが、その違いは何かしらの超越的存在の気紛れだとかなのだろうか、だとするならば本当に質が悪いにも程があると云う物だな。』とヤンは自身が推察を進めた思考に慚然とする。

『しかも最近ではこの世界そのものが何者かが創り上げたバーチャルリアリティ空間であるなどと云う学説までも唱えられる始末だし、そこに活きる我々人や生物さえも誰かが操るアバターだなんて言うし、いやはや何ともこりゃあ世も末だ。』頭を掻きながらヤンはそうぼやきたくなった。

しかもこれはヤン自身が時として思う事なのだが、もしかすると宇宙暦の時代なんてものはヤン自身の只の夢の産物でしかなく、そうであるにも拘わらずその夢に精神を惹かれる自分は所謂中二病患者なのではないのかと。

そんなヤンの考察や思いをもしも捻くれていながらも不器用な優

しさを持つ友人へ話そうものなら彼は何と云うだろうか『なら、お前を操るプレイヤーはとんでもない額の課金をしてレアカードでも引き当てたんじゃね』とでも言うのだろうか。

更にポリポリと頭を搔きながらそんな風にヤンは一人ごちると気を取り直すと改めてフレデリカへと向き直り「いや何でもないんだよ、ありがとうフレデリカ大切にに使わせてもらうよ」と感謝の言葉を述べると頂いたベレー帽を無造作に自由惑星同盟軍に所属していた頃の様に己の頭へと被せるのだった。

「ふふっ、もうちゃんと被らなきゃ駄目ですよウエンリーさん。」

フレデリカは苦笑しながらそんなヤンの頭の上のベレー帽を甲斐しくきちんと整え被せ直し、ごく一般的な普通の人の感覚ではそれなりに整っている顔立ちではあるが地味目な印象のヤンが（あくまでも彼女視点ではあるが）それによりヤンの男振りがあがって見え十分に満足感を味わう事が出来た。

「ウエンリーさん、もうそろそろ小町ちゃん達と合流した方が良い頃合いではないでしょうか。」

「そうだねもうそろそろ昼食時だしね時間的にも頃合いだろうし、皆と合流しようか。」

商業施設のベンチにて二人で暫しの休憩時間を満喫し心身の充足感を得たフレデリカの提案、ヤンもその提案に否はなく二人はベンチから立ち上がり八幡達のいるであろう下階へと向かおうとするヤンとフレデリカだったが。

「アレっ!? ヤン君とリカちゃん。」

見知った聞き覚えのある声音の女性の声が二人を呼び止められる、その声にヤンとフレデリカが振り向くと其処にはやはり二人がよく知る少女の姿があった。

夏らしい涼やかな服装に身を包んだ愛嬌のある顔立ちの少し小柄な少女、ヤンの同級生であり同じ部活に所属する総武高校の女子生

徒。

「あつ…やつ、やあ奇遇だね由比ヶ浜さん。」

由比ヶ浜結衣が彼女らしい愛嬌のある笑顔で二人に手を振り、そしていつもの様に「やつはろー」と彼女独特の妙な挨拶を返してくるのだが、このタイミングは少しばかり不味いのではないかとヤンは内心に思う、それは今日この場にヤン達が繰り出した理由が彼女の誕生日のプレゼントを彼女には内密に用意する為であり、しかも雪ノ下は更に後日彼女の誕生日を祝う為のイベントも彼女には内密に計画しているからなのだが。

「うん、あつ！もしかして二人はデート中だった、ゴメンだったらあたしお邪魔だよね。」

「いや、決してそんな事は無いんだけどね、あーっと、実は今日はその…」

由比ヶ浜はヤンとフレデリカが二人でこの場に居る理由をそう判断し詫たのだろうが、別段彼女の事を自由惑星同盟の政治家達のように疎ましく思っている訳では無く、只単に内密にするべき彼女へのサプライズ企画の事を思うとどの様に彼女へ説明すべきかと思案するのだが、戦場とは違い上手くこの場を切り抜ける為の策が思いつかないのだった、しかし今のヤンには頼りになるどころかこう言った場合に於いて彼以上に有能なパートナーが隣りにいるのだった。

「実はですね、今日は私と小町ちゃんとで買い物約束をしていたんですけど丁度都合良くウエンリーさんと八幡さんも予定が無いと言う事でしたので、お二人にも付き添ってもらったんですよ。」

言葉に詰まるヤンに代わりフレデリカが由比ヶ浜へ対応する、その言葉には嘘の成分が含まれていているが彼女の咄嗟の対応力にヤンは脱帽する思いを抱くのだった。

「えっ、ヒッキーと小町ちゃんも居るの、何処!?!」

「多分今は下の階に居ると思いますけど、あつそうでしたつい先程雪乃さんにもお会いしたんですよ、ねえウエンリーさん。」

八幡と小町もがこの施設内に居ると知り由比ヶ浜の表情にはつい先刻ヤンとフレデリカと会った時以上の笑顔で二人の居場所を尋ね

る、其処にフレデリカは更に雪ノ下とも出会ったと嘘を重ねるのだが、このフレデリカの嘘にヤンは彼女の優しさを感じていた。

「あー、うんそうだったね、少し前に確かに雪ノ下さんとも出会ったよ、もしかすると案外今頃八幡達とも出会っていたりしているのかも知れないね。」

それは今日の由比ヶ浜へのプレゼントを購入するという買い物イベントであるが、当の本人である由比ヶ浜にはその事は内密としている。

だがしかし偶然ではあるが、この様に由比ヶ浜と遭遇してしまったが為もしこのイベントの内容を知らない彼女が自分を除いた他の部員全員で出先に集まっているのを見てしまったらどんな思いを抱くだろうか。

休日のおでかけイベントに自分だけ呼ばれなかった、きつとその事に彼女が疎外感を感じてしまうだろう、そう見越してフレデリカは由比ヶ浜を気遣い優しい嘘を吐いたのだ。

殊に由比ヶ浜と雪ノ下は親友同士でもあり、また由比ヶ浜は八幡に對し想いを寄せていると言う事は野暮天のヤンにさえも理解できるのだから。

「えっ！本当につ!?じゃあさ一緒に皆のところへ行こうよ。」

「ええ、それも良いですね、でもちよつと待ってて下さいね結衣さん。」

小町ちゃん達が何処に居るかメッセージを送って確認してみますから。」

そう言うフレデリカはスマートフォンを取り出し手早く操作し小町へのメッセージを作成し送信する、その内容は由比ヶ浜との邂逅とこの僅かな時間で話した内容を手短かにまとめたものだ。

暫しの間を置きフレデリカのスマートフォンに小町からの返信が届いた、その内容はフレデリカのメッセージ内容を三人で周知し由比ヶ浜への対応を話し合った旨を伝えるもので、これを受け準備は完

了と判断しフレデリカはヤンと由比ヶ浜結衣へ八幡達との合流を促す。

「では行きましようか、やはり雪乃さんも八幡さん達と合流されて、今は丁度一つ下の階にいらっしやる様ですよ。」

「うん！」

満面の笑みを湛えて由比ヶ浜が元気に返事を返し早速とばかりに三人は階下へと向かい歩み始めるのだが、進み始めて数分も経たない内にフレデリカのスマートフォンが軽やかなメロディを奏で着信を伝えるのだった。

「すみません、メッセージの着信みたいです、少し待ってくださいね。」

そう断りを入れフレデリカはその場に立ち止まるとスマートフォンを取り出し確認を取る、そのメッセージは小町からの物でフレデリカは素早くそのメッセージを確認する。

「あら、雪乃さん達の元に思わぬ来訪者が訪れたそうですよ、これは急いで合流した方が良いでしょうか。」

小町のメッセージを読み終えフレデリカがヤンと由比ヶ浜にそう告げると二人は訝し気な表情を顕し「その来訪者とは何者なんだい」とヤンがフレデリカへ問うのだが、肝心の来訪者に付いての詳細な情報が見つけられずには記載されていなかった為だ。

「ただ相手は妙齢の女性であるようですよ。」

小町のメッセージの内容からはそれ位の事しか答えられる情報は無かった、結果三人は取り敢えず当初の目的の通り八幡達との合流を優先しようと云う結論となり、階段を階下へと下ると八幡達がいると思われる店舗付近へと向かい行く。

「あつ、おくりカちゃんにヤンさんに結衣さ〜ん！こっちこっち、コッチですよーっ！」

階段を降り、数十メートル程歩んだ所で八幡の妹である小町が三人を見つげジブンの居場所を知らせ小さく手招きをしている、但し何故

だ。小町は小さな声でコソコソとまるで八幡と雪乃そして件の来訪者に対して自分の存在とヤン達の到着を知られる事を不味いとも言っているかのように。

「やつはろー小町ちゃん、てか何でそんなにコソコソしてんの？」

「やつはろーです結衣さん、あーいやあつ実はですねってかアレを見てもらった方が早いですね。」

由比ヶ浜の挨拶に小町も挨拶を返し左手を口元に添えて内緒話でもするような仕草に加え右手の人差し指を小町自身の斜め前方へと指し示す、その指が示す方向へとヤン始めフレデリカと由比ヶ浜が視線を向けると其処から数メートル先に行き交う群衆の中に立ち止まり話をしているらしき三人の男女の姿が、その内の二人の男女は彼等を知る人物比企谷八幡と雪ノ下雪乃で間違いないがもう一人の人物である妙齢の女性は彼等が見つ知っている人物では無かった。

「リカちゃんからメッセージをもらって直ぐに二人にその事を伝えて、小町はちよつと野暮用で二人から離れたんですけど、戻って来たらあんな状況だったんですよ。」

ヤンは小町の言葉を耳に留めながらも八幡達の様子を観察する、ヤンの目に映るのは愉しげに二人に接する妙齢の美女と、それに対してあまり楽しそうには見えない八幡と雪ノ下の様子だった。

いや、楽しそうに見えないどころか二人の表情は雪ノ下は戸惑いと僅かながらの不快感が八幡に至ってはその女性に対して何とも、まるで得も言えぬ恐れのも感情でも抱いているかの様に見える。

「……………」

これは我が友人達にとってあまりよろしく無い状況なのだろうかとその様子を眺めヤンはそう推測するが、何故そんな状況に彼等が置かれているのかこの場からでは何も知れはしない。

「何だかあの女性雪乃さんとかことなく似ている様に思うのですけど、もしかして雪乃さんのご家族、お姉さんなのでしょうか。」

ヤンと共に八幡達の様子を観察していたフレデリカが二人の女性を見比べ自身が導き出した意見を述べる、言われヤンは二人の女性を見比べてみる。

見た所肉体的な特徴は大きく違い女性は雪ノ下よりも遙に女性的な肉感を感じさせる容姿をしているが、確かに顔の造り等はヤンから見ても『なる程確かに似ているのかも』と思わせる。

「うんどうだろうかね、しかしまあ此処で私達がどうこうと言ってもしょうが無いからね、兎に角あちらへ行ってみよう。」

二人の友人の冴えない表情に、かの来訪者の存在は（特に雪ノ下にとっては）あまりよろしく無い人物なのだろうかと推察し、ヤンはフレデリカ達を促し八幡達の元へ向かうのだった。

魔術師と重荷を抱えた少女との邂逅。

由比ヶ浜には内密に、来たる彼女の誕生日を祝う為のプレゼントの買い出しに複合型商業施設へと訪れた当人の由比ヶ浜を除いた奉仕部の面々だったが、八幡と雪ノ下とは別行動をとり其処で期せずしてその当事者である由比ヶ浜と出会でくわしてしまったヤンとフレデリカ。

ヤンは由比ヶ浜への誕生日プレゼントの買出しだと云う事を彼女にはぐらかして此処で出会った経緯を説明し、然る後別行動を取っていた八幡と小町の比企谷兄妹と雪ノ下、その三人と合流すべく彼らが居る下階へと下ると其処では八幡と雪ノ下が彼等よりも少し年嵩と思われる見目麗しい女性と相対していた。

「うん、確かにフレデリカが言う様に雪ノ下さんと面差しが似ているね。」

彼等の元へと歩を進め近づくに連れて次第にはつきりとしてゆく身体的特徴を見留めて、ヤンはその女性をその様に評し共に歩むフレデリカと由比ヶ浜もそれに同意し頷く。

そしてヤン達はごく普通の音量で八幡と雪ノ下、そしてもう一人の女性に声が届く程の距離へと接近し努めて平静を装い（とは言えヤンは常からあまり他者に対して冷静さを失くした姿を見せる事の方が珍しいのだが）声を掛ける。

「やあ待たせたね八幡、と雪ノ下さんも一緒だったんだね。」

側方より聞こえた自身の名を呼ぶ聞き慣れた声に八幡と雪ノ下は、そのどうにも下手な芝居じみた声音のする方へと顔を向ける、同時に件の雪ノ下によく似た面差しのある女性もまた声の主に視線を送るのだった。

そこに居たのは先だって別行動を取る前とは違い収まりの悪い黒髪の頭部に黒いベレー帽を着装し頭を掻いている同級生男子と、髪を少し桃色掛かった茶色に染めて片側側頭部にお団子を作った所謂シニヨンと言われるヘアスタイルに纏めた同級生女子の姿を先ずは見留め。

「おうヤン、由比ヶ浜も一緒か。」

其れまでこの雪ノ下の姉と思われる女性と対峙していた事で緊張し強張っていた表情を若干緩め、そして少しの安堵感を頭に八幡はヤンと由比ヶ浜の名を呼ばわり。

「……あらここにちは由比ヶ浜さん偶然ね、まさか休日^に貴女に逢うとは思わなかったわ。」

雪ノ下もまた八幡の倣う様に由比ヶ浜へと呼びかける、その表情と声音に由比ヶ浜に対する雪ノ下の親愛の思いが込められている。

「うん、やつはろーゆきのん！」

自身に暖かな笑みを湛え挨拶の言葉を贈ってくれた大切な親友の様子に由比ヶ浜は安堵の思いからか、明るく朗らかに返事を返す。

それは由比ヶ浜が先程遠目に見た雪ノ下の表情が小町達が言う様にひどく緊張し、警戒でもしているかの様に思われたからだっ

た。
「ああ、申し訳ないもしかしてお取り込み中だったかな。」

ヤンは八幡達三人を軽く見渡して経緯は解らないが、先程感じたその三人の空気感の様なものからどうにもあまりよろしく無い状況だと察しつつも社交辞令的に詫びると、女性へと向き直り。

「どうもはじめまして、失礼ですがもしかすると貴女は雪ノ下さんのご親族の方でしょうか、私はヤン・ウエンリーと申しまして雪ノ下さんとは同じ部活に所属していました……。」

そうですね、言うなれば同じ釜の飯ならぬ同じポットで淹れられた紅茶を飲んだ仲とでも言ったところでしょうかね、まあ当然ながらもその紅茶を用意してくれているのは他ならぬ雪ノ下さんなのですね。」

ヤンはその様にその女性に対して自己紹介をするのだが、それは八幡や雪ノ下が件の女性に対して何故だか理由は解らないが、警戒心を抱いている様であったのでその雰囲気^を幾分かでも和らげなるべく少し戯^{おとし}けて見せたのだが。

「ぶふっ何それ?! 同じ釜の飯ならぬ同じポットのお湯^{つて}え、アハ

ハハっ可笑しい、もう笑わせないで君い。」

それがどうやら雪ノ下の姉の笑いのツボに入った様でさも可笑しいとばかりに彼女は笑い出すのだった。

そして一頻り笑った後で彼女は態度を改めると、とても気安い感じにこう述べた。

「じゃあ君の事はヤン君と呼ばせてもらうわね。私は雪ノ下陽乃、君のお察しの通り私は雪乃ちゃんの姉だよ、よろしくね。」

それから出来ればそちらの君達の事も教えてもらえないかな。」

「ええどうぞご自由に、では私は姓で呼ぶのでは雪ノ下さんと混同してしまいそうなので、お名前かもしくはミス雪ノ下とでも呼ばせてもらいますよ。」

「うん、了解！」

どうやらヤンの戯けた態度が功奏したのだろうか、彼女へのファーストコンタクトは概ね良好と言って差し支えないものとなった様だ、続いて女性陣二人が挨拶をする運びとなり先ずは。

「はじめまして雪ノ下さん、私はフレデリカ・グリーンヒルと申します、色々至らぬところはありましようがどうぞよろしくお願い致します。」

それから私は此方のウエンリーさんの婚約者でもありますので、どうぞウエンリーさん共々よろしくお願い致しますね雪ノ下さん。」

ヤンの左後方一歩程下がった位置からスツと前へ出てフレデリカは丁寧な会釈と共に挨拶の言葉を述べる、そのフレデリカの異国人とは思えない程の丁寧な日本的な所作と、その幼いながらも溢れ出る為人によって培われている様にも思われる気品に雪ノ下の姉は思わず彼女に見惚れてしまい数瞬の間言葉を失ってしまった。

「そつ、そうなんだフレデリカ・グリーンヒルちゃんね、よろし……えつグリーンヒルって、貴女つてもしかしてあのグリーンヒル商会の……。」

そして我に振り返りフレデリカに答えようとするのだが、何やら彼女にはフレデリカのファミリーネームであるグリーンヒルと云う姓に思い当たる事柄が在ったらしく、驚愕の色が見て取れる表情と声音で確

かめる様に問うと。

「ええ、確かにグリーンヒル商会は私の父の会社ですが、光栄ですわ雪ノ下さんに父の会社の事をご存知頂いているだなんて。」

柔らかな物腰と微笑を崩さずに返事を返すフレデリカに雪ノ下の姉陽乃は何やら思案でもするかのように押し黙ってしまった、しかしそれはほんの僅かな時間の事で彼女は直ぐ様気を取り直すと先の様なフレンドリーな態度で応対を再開するのだった。

しかしヤンと八幡の二人はほんの一瞬の僅かな時間だったが、彼女の表情が薄暗くそして何か気味味そうな表情になっていた事を見逃してはいなかった。

その表情に八幡は戦慄を覚え、そしてヤンは『これは何と言うか、関わり方を考えて付き合わなければならぬ人物の様だな』心中密かに雪ノ下陽乃と云う人物にその様な印象を抱くのだった。

『どうも彼女は何やら色々と抱え込んでいるみたいと感じられるな。』

ヤンは更に陽乃に対してその様にも感じていたのだが、何故その様に感じたのかは後程述べるとしよう。

「そりゃあねえ、グリーンヒル商会と言えば日本員で知られるドワイト・グリーンヒル氏が一代で築き上げた貿易会社として有名だからね。」

「ええっ?!リカちゃん家ってそんな凄いお家だったんだあ。」

陽乃の返答にグリーンヒル家の詳細を知らない由比ヶ浜が思わずとばかりに驚きの声を上げ、その声は意外な程に大きく周りの視線がヤン達一団に向きそれに気が付いた由比ヶ浜は羞恥のあまり縮こまるのだった。

「うう、ゴメンあたしのせいで…。」

あまりの事に堪らず由比ヶ浜が皆に謝罪の言葉を述べるとフレデリカはそんな彼女に「ふふふ、結衣さん凄いのは私の父であって私自身は只の一中学生に過ぎないのですし此れからも変わらさずお付き合いくださいいね。」と助け舟を出し、由比ヶ浜もその言葉に素直に頷く。

「おおやるなグリーンヒル、由比ヶ浜よりよっぽと大人でクレバー

な対応してるわ、これじゃあ由比ヶ浜とどっちが歳上だか分かんねえよな。」

二人の女子のやり取りに八幡は此処ぞとばかりに突っ込みを入れる、それはヤン達がこの場に現れるまでの間に彼等が思いがけず出会ってしまった陽乃と対峙し、要らぬ緊張感を強いられていた事により失っていた精神的な余裕を回復させる為と云う一面があるのかも知れない。

「なっ、ちょっとヒツキーあたしの事またバカにした！」

そして八幡に突っ込まれた事に対して不満を口にしながら由比ヶ浜はポカポカと八幡を叩く、その様子は傍目には所謂カップルが衆目も気にせずじゃれ合っている様にしか見えない。

「おい止めろ由比ヶ浜、大勢の前でこう言うのはボツチには荷が勝ち過ぎてか、俺のメンタルがゴツソリ削られるんだからマジ止めてっつかお前初対面の人の前だろうっ！」

「あっ、そっ、そうだった……えつとごめんなさい、あ……あははっ。」
状況を察し由比ヶ浜は皆に対して慌てて謝罪の言葉を述べるのだが、その後に誤魔化し笑いを加える所が何とも彼女らしいと彼女の事を知る者達は思うのだった。

そして改めて由比ヶ浜は陽乃に向き直り改めて謝罪と自己紹介を行う、雪ノ下と自分とは八幡とヤン同様に部活仲間であり、そして雪ノ下は自分にとって大切な友人であると。

「へえそうなんだ、雪乃ちゃんの友達ねえ。」

由比ヶ浜の発言を聞き陽乃は不敵な笑みを浮かべてそう呟く、否呟くと言うにはほんの少しばかり音量が大きいか。

更にその声音には不穏もしくは聞く人によっては不遜とも取れる様な響きを感じられただろう、現に八幡などはその陽乃の一言を聞き背筋に薄ら寒い物を感じたのか小さくその身を震わせてしまった程だったのだから。

「良かったね雪乃ちゃん、雪乃ちゃんにも友達が出来たんだね。」

陽乃は己の妹に向き治ると声質に少し優しげな成分を含ませてその様に声を掛けるのだが陽乃のその表情にはニマニマとした下世話

な笑顔で、まさに仲の良い可愛い妹を揶揄する姉という様な雰囲気を感じ出しているのだが、肝心の妹である雪乃の方はどうにもその表情が冴えない物にヤンには見て取れた。

「しかも雪乃ちゃんってば友達だけじゃなくボーイフレンドまで作ってたなんてさ、いやあお姉ちゃんビックリだよ。」

比企谷君もヤン君も二人共すっごく面白そうだな子だもんねえ、私も雪乃ちゃん達と同じ年だったらなあきつと凄く楽しい高校生活になっただろうになあ、残念だよ。」

ウリウリと自分の妹の腕を自らの肘で突つきながら下世話な発言を繰り返す陽乃だが、それを言われた方の雪乃の方は如何にも不本意だと表明する。

「べつ、別に比企谷君もヤン君もボーイフレンドと言う訳では無いわ、私達はたつ、只単に同じ部活の仲間と言うだけの事よ。」

しかし雪乃の口から発せられた言葉とは裏腹にその頬は僅かに朱に染まっているうえに、所々で言葉に詰まっている辺り雪乃の心中ではこの部活仲間達に対して彼女なりに絆の様な物を感じているのかも知れない。

だがそれはもしかすると彼女自身、未だはつきりとは自覚してはいないのかも知れない、何せ雪乃も八幡と同様これまで他者との関わりを排してきていた、故にその辺りの心情などに関して稚いと言っても差し支えないだろう。

「そうっすね、貴女の妹曰く俺は部の備品だそうですからね、なので決して俺と雪ノ下の関係は貴女の思っている様な物とは違うっすよ。」

「もう、ヒツキーそれってきつとゆきのんは冗談で言っただけなんだから、真に受けちゃ駄目だよ。」

「ふふふっ知りませんでした、雪乃さんって所謂ツンデレと云う属性をお持ちの方だったのですね。」

「うんうん、普段クールな雪乃さんだからねえ、コレは破壊力抜群だよ。」

雪乃の言を肯定する如く、八幡が自虐交じりに以前彼女に言われた

事を口に出せば、由比ヶ浜は八幡を窘めつつ雪乃をフォローしフレデリカと小町も場の空気を和らげようと口を挟む。

「なっ、何を言っているのフレデリカさんも小町さんも、私にその様な属性などと言う物がある訳無いでしょう。」

「……………」

しかしそれでも八幡は陽乃に対する警戒心を緩めてはいない様だし、雪乃の方はこの場で姉と絡む事を快く思っていない様だと、ヤンは先程から感じていた。

ならば二人の為にこそそろそろ陽乃にこの場から退場してもらった方が良いのではないかと結論付け、ではどうするかと思案し周囲を見渡すと。

『うん……………あれは。』

ヤンは自分達から少し離れた位置にて数名の陽乃と同年代だと思われる男女が足を止めて此方の方に目を向けている事に気が付いた、それはおそらくは陽乃の学友であるのではないかとヤンは当たりを付け、それを利用してみる事にした。

「あー、お取り込み中失礼、ミス雪ノ下、あちらの我々を見て居られる一団ですがあの方々はもしかして貴女のお連れの人達ではありませんか。」

もしそうなのであれば、あまりご友人を待たせるのはよろしく無いのではと、老婆心ながらご忠告して差し上げようかと思ひましてね。」ヤンが陽乃に対しその一団の方を指し示すと彼女とそしてこの場に居る皆がその方向に目を向ける、確かにヤンが言う様に其処にはこちらを窺う陽乃と同年代だと思しき一団の姿があった。

陽乃はその一団から再度ヤン達奉仕部一行に向き直ると少し芝居がかったおちやらけた態度で「いやあそうだったよ私ってば、久し振りに雪乃ちゃんと会えて嬉しくて皆の事そっち除けにしちゃったよ」とその一団が自らの学友達である事を認めた。

「てな訳で皆を待たせてるから残念だけど私もう行くね、それと雪乃ちゃんと皆も突然呼び止めてゴメンねーっ。」

「それと雪乃ちゃんは母さんが心配してるからさ、たまには実家に

顔を出しなさい。」

「……………ええ、そのうちにね。」

陽乃のその指示に雪乃は躊躇いがちに返事をするのだが、その声には常の彼女から醸されている強い意志の力が感じられなかった。

それは彼女が何かしら母親に対して隔意でもあるのだろうか、そんな彼女の姿を目に留めたヤンと八幡はその様に感じるのだった。

「あっそうだ、比企谷君とヤン君だったね、君達つてとつてもイイ感じに面白い子達だね、お姉さん君達の事すつごく気に入っちゃったよ、それじゃまた会おうね、お姉さんとの約束だ・ぞっ。」

パチリとウインクを一つ送り手を振りながら陽乃は機嫌良さ気な笑顔を見せて二人に別れの挨拶を。

「……………いや、別に俺の事はお構いなく間に合ってますから。」

その言葉に八幡は努めて平静を保とうとしながら返事をするのだが、その顔は若干ながら頬の辺りが引き攣っているのが僅かな期間ながらも付き合いのある者達には理解出来た。

やはり彼は陽乃に対して警戒心、もしくは苦手意識を抱いているのだろう。

ヤン達に背を向け片手を振りながら歩き去ろうとする陽乃の後ろ姿にヤンは頭に乗せたベレー帽の上から、その頭を搔きつつ静かな声でその去り行く陽乃に声を掛けた。

「ああ、ミス雪ノ下呼び止めて失礼ですが、一言よろしいでしょうか。」

「……………ん？何かな。」

ヤンの呼び止める言葉に陽乃が振り返るとヤンはその頭上のベレー帽を取り去り右手に持つと、常の彼らしく他者から見ると少しとぼけた仕草と口調で以てその一言を告げるのだった。

「その何と言いますかね、不躰で失礼ですが私が見たところ貴女は随分と重そうな荷物を抱え込んでいる様に見えるのですが、どうかたまにはそんな荷物なんぞ草原の木陰の元に放り出して枕にでもして昼寝でも楽しんで見ては如何ですかね。」

そうすればもしかしたら心も身体もリフレッシュ出来るかも知れ

ませんし、またはこれ迄と違う何かを見つける事も出来るかも知れませんが。」

ヤンの言葉を受け陽乃は訝しげな視線を彼に向けると、つい先程までの気安さを感じさせた声音とはまるでかけ離れた少し低い音声で持つて陽乃はヤンに問うのだった。

「それってどう言う事かな」と、その問い掛ける時の陽乃の表情もまた先程迄の人好きのする明るく朗らかな歳上の女性と言った風情が鳴りを潜めていて、その表情は見る者によっては背筋に薄ら寒さを感じる者も居るかも知れない程の仄暗さがあつた。

「おっとこれは失礼、どうやらお気を悪くさせてしまいましたかね。」

しかしそれを受けたヤンはまるで何処吹く風とばかりに平常心を保つたまま、形ばかりの謝罪の言葉を述べると口を噤みその深く澄んだ黒瞳を彼女に向け静かに見つめる。

「……………」

見つめ合う二人、ヤンと陽乃の間に得も言えぬ沈黙の時空間が形成される、だがそれはほんの僅か数秒間程度の極短い時間で終わりを告げる。

先にその沈黙を破つたのは陽乃の方であつた、彼女はヤンへと向けていたまるで其れまで目に見え無い力を発していたか視線と固かつた表情をふつと和らげ。

「フッフ、いやあ怖いね……まるで底が見えない深い深淵でも覗き込んでしまったのか、もしくは私の全てをまるで見透かしているみたいだね、全く君って一体何者なのかな。」

ヤンに対して感じた思いを素直に口にした、その言葉には嘘偽りの無い陽乃の純粹なモノだった。

「ふむそうですね、何者かと言われても私としては極々普通の一般的で模範的な一高校生としか言えないのですが、まあ付け加えるならば商売人の家に生まれながらその商才をまるで受け継ぐことの出来なかつた出洩らしの次男坊と言つた所でしょうかね。」

「いや、模範的な高校生は酒がどのとか言わないからな。」

「そうね私も比企谷君に同感ね、模範的な高校生は昼寝が趣味などと公言などしなしてしようしね。」

陽乃へのヤンの返答に八幡と雪乃からの反論の物言いが付くのだが、それはヤンにとってはある意味フレンドリーファイア味方撃ちの様な物だろう、なのでヤンとしては当然の如く反論を試み。

「イヤイヤ待ってくれ君達、それは只の見解の相違と言うものではないかい、どこからどう見ても私は人畜無害な一般人だろう。」

ヤンはそう言って皆に対して同意を求めるのだが誰もその反論に首を縦に振る者はなく、その反論は満場一致で否決されてしまい。

「はあ、いやはやまさかフレデリカや小町君までとは。」

不本意だとばかりにヤンの静かな嘆き節が呟かれるのだった。

魔術師は仮面の少女を案じながらも、昼食の一時を楽しむ。

由比ヶ浜の誕生日プレゼントを購入すべく訪れた大型商業施設にて、思い掛けずも遭遇してしまった雪ノ下雪乃の姉、雪ノ下陽乃。

その初対面の彼女への自己紹介を少々茶目っ気混じりに行ったヤンだったが、しかし自身に対する他者からの評価と己自身の評価とのあまりの違いに少々不満気に、ヤンはフレデリカよりプレゼントされた黒いベレー帽の上から頭を掻きつつぼやき節を一つ。

「ふうん只の男子高校生ねえ、まっいつかそう云う事にしといてあげるよ…今日のところはね。」

そんな妹やその友人達の様子を内心の嗜虐心を隠しつつ観察し、雪ノ下陽乃はさも愉快と言わんばかりの表情を浮かべながらその様に告げる。

その言葉に八幡などは心底安堵したとばかりに露骨に、周りの者達に見抜かれる程その感情を表情に現している。

それと同様に妹である雪乃の方もまた八幡程に露骨では無いがほつと溜め息を吐く、そんな二人の様を陽乃は確りとその目に捉えては居たのだが、其れに着いては『取り敢えず今回は見逃すよ』とばかりにスルーを決め込み、別れの挨拶代わりに手を振り身を翻しつつ最後に一言付け加え。

「残念だけど君の言う通り私にも連れが居る事だし、それに今日の所はゆっくり雪乃ちゃんとも話せそうになさそうだしこれで失礼させてもらうね。」

フフフ、でも何連見せてもらいたいものだねえ君の…ううん君達二人の持つてるものをさ、きつと面白いモノを持つてるに違いつて私のセンサーがビンビン感じちゃってるんだよね。

それじゃあじゃね雪乃ちゃん、そうだたまには実家にも顔を出さない母さんの心象を多少なりとも良くしといた方が後々面倒が少な

くなるかもだよ。」

言い終えると陽乃はもう振り向きもせず、雪乃達に絡む為に放っておいた形となってしまうた友人達に謝罪をしながらその輪の中へと入って行きその場を去っていった。

その背中を見送り終え彼女等の姿が見えなくなると、八幡と雪ノ下はまるで目に見え無いプレッシャーから解放されたかの様に安堵の溜め息を吐くのだった。

「たははっいや参ったな、見てみたいと言われても生憎と私は演技者でも無ければ演出家でも無いんだが、そんな一方的に何ぞや期待など持たれてもねえ。」

戯けた調子でヤンは八幡や雪ノ下始め皆の気持ちの切り替えを促すべくそんな冗談口を叩く(それは前世に於いて食う為に軍人となり戦争に加担し多大な戦果を上げその功績から、不敗の英雄として祭り上げられてしまうと云う彼からすると不本意極まりない役割を担わされ演技させられ続けた経験から来る彼の本音なのだった)と八幡や雪ノ下を含め皆の視線が彼へと向けられる、それが功を奏したのか心做し八幡と雪ノ下の表情から緊張感が程良く取れた様に感じられ、ヤンも内心ほっと一息吐くともう一言を付け加える。

「それに仮にもしも私達がミス雪ノ下に対して何某かを披露したとしても、それを彼女がお気に召さず見物料の返還でも求められたとしても此方としてはそれに対応出来無いだろうしね、まあ私としては別に金銭を要求する気は更々無いんだけどね。」

「ああそうかもな、観客なんて者は身勝手なもので勝手に期待しておいて少しでも気に入らない事があれば直ぐに外方向そっぽいてしまおうし、でなけりや飽きたからってポイでハイそれまでヨだしな。

いやしかし何かゾとしねえなあ想像したくもねえわ、けどヤンお前よくあんなおつかかない人にあんな軽口が叩けたな、あんな強化外骨格で完全武装を決め込んでるみたいな薄ら寒い人を相手に。」

ヤンがそう言い終えると二〜三秒の間を置いて八幡がそれに同意する、その彼の表情はげんなりとして心底雪ノ下陽乃という女性との邂逅に得も言えない恐怖感を掻き立てられのだろう。

そんな相手を平然と往なした友人のコミュニケーション能力に八幡は感心と感嘆を以て評価すると、ヤンは相変わらずのマイペースな調子で事も無げに八幡へと返答を返す。

「ああ、まあ彼女の様なタイプの人物にはこれまでに出会った事もあるしね、しかも身内にもそんな感じの者も居たからそれなりに対応にも慣れていてね。」

ヤンと八幡の様なやり取りを傍で聴いていた雪ノ下は、男子二人のその会話の内容に少しばかりの感嘆の思いを抱いていた。

「ヤン君……比企谷君もだけれど貴方達はもしかして姉さんの隠している本質を見抜いたと言うの、大したものねこの短い時間で……。」
幼い頃から姉を最も近くから見ていた雪ノ下はその姉の能力、才能に憧れ目標としていたが何時しかその想いが優秀な姉に対する尊敬の念と同時にその姉の高過ぎる技量や能力に追いつけず、いつしか劣等感と嫉妬心が芽生え始め何とも複雑な感情を抱く様になっていた。

「うん、だけどあれはまあ言わば必要に迫られて心ならずも身に着けた、いやこの場合は身に着けてしまったと言うべきかな、とにかくそんな一種のスキルなのだろうね、だとするならば彼女も被害者なのかも知れないね」

「そう、なのね……。」

ヤンが今し方言った様にそれは彼自身の経験に基づいての発言なのだろうが、そうとは知らぬ雪ノ下にはヤンの鋭い洞察力から導き出された推論なのだろうと感心すること仕切りなのだが、其処は彼女らしくそれを努めて面に出す事はしなかった。

「えっそうなのお兄ちゃん、小町には何だかイタズラ好きな気のお姉さんみたいに思えたんだけど。」

兄を含む年長者達の会話に感心しながらも流石にまだ中学生である小町は雪ノ下の姉陽乃の「ソレ」を見抜けず、今自身が口にした気のいいお姉さんの印象と兄やヤンが抱いた（否見抜いた彼女の本質との違い）と云う違いを疑問に思い小町は兄に尋ねて見るのだが。

「まあな、あれ程上手くってか巧妙に隠してるんだから普通の人間に安易には見抜け無いだろうがな、しかし長年のぼっちライフに依っ

て培われた俺の観察眼ならばあの程度見抜くのは造作も無い事よ。」

顎に指を当て目を閉じる、相手が妹であるが為の気安さから出たポーズなのだろうが、それはどうにも小町には不評な様で彼女はジトつとした目を彼に向け。

「うっわ、なあにそんな意味もない事で一々格好つけてんだろぅねこのゴミいちちゃんは、そんなポーズまで決めて恥ずかしいったらありやしない。」

小町的にポイント低いどころかマイナスだよ……あつところで皆さんもうそろそろお昼どきですけど、どうでしょうこのまま序にフードコートにでも行つて食事でも！」

バツサリと斬つて捨ててしまうのだった、そして空かさずに皆へ昼食をと提案し不満気にむくれる兄につけ入るスキを与え無い、やはり流石は兄妹だけあり面倒臭い兄の扱いは手馴れたものだ。

「ねえ小町ちゃん最近お兄ちゃんの扱いが更にも増してごんざいになってる気がするんだけど気の所為だよ、そうだと言って。」

八幡は余りな妹からの扱いに嘆き節の懇願を入れるが、まるでその存在を端から居ない者の様に扱われ一人涙する。

「あはは……ヒツキー、あのさ、ドンマイ。」

八幡の嘆きを見かねた由比ヶ浜が苦笑しながらも慰めの言葉を掛けるのだが。

「おう何かスマンつてか由比ヶ浜、何気に今までスルーしてたけどお前何で此処に居んの、もしかしてお前俺達の事をストーキングでもしてたの？」

何とも恩知らずな一言を由比ヶ浜に言い放つてしまい、要らぬ怒りと疑惑を持たれる事となってしまう。

「なっ!? もうっヒツキーつてばあり得ない人をストーカー呼ばわりとかサイテーだよ、そんなの偶然に決まってんじゃないん! それともあたしが此処に居ちゃヒツキーは何か都合でも悪いの? あつ何かあたしに隠し事でもしてんじゃないの、ねえゆきのんもそう思わない?」

ポカポカと八幡の腕を軽口じゃれつく様に叩きながら彼の発言に対する不満をぶつける由比ヶ浜と、痛いから止めろなどと言いながら

も実際は然程痛い訳では無く彼女の様に、悪い言い方をするならば『無遠慮』に自身のパーソナルスペースに侵入して来られる事に慣れていないが為にそれがどうにも居心地が悪く感じられるだけなのだ
が、それは由比ヶ浜の様な自身とは対極に（と八幡は思っている）あり、人懐っこく陽気でしかもかなり見目の良い少女に馴れ馴れしくされる事に気恥ずかしさと抵抗感がある為なのだろう。

そんな理由から彼女に対して燃えた憎まれ口を叩いてみたものの。
「えっ、わっ私は別に何も……。」

思いがけずもそれが雪ノ下へと飛び火してしまう事となり今日、この集まりを企図した彼女は由比ヶ浜に対して何と答えるべきか、その言葉が浮かばず困惑に口籠るのだった。

「ふふふっ、まあ結衣さんも落ち着いて下さいな、小町ちゃんが言う様にもうお昼時ですし折角奉仕部のメンバーも揃った事ですし、どうぞ皆さん昼食を摂る事にしませんか。」

再度、今度はフレデリカから提案されたその言はこの場の幾人かにとっては天から降りてきた救いの、細い一本の糸も同然で当然の様にそれに飛び付くのだった。

場所を移し一行は施設内のフードコートへと到着すると其々に好みの飲食物を購入して席へと着く、しかし休日だけあり人出が多く彼らが食べ物にありつくには思いの外時間が掛かってしまい、人が多い場所が好きでは無い八幡と基礎体力の無い雪ノ下などは席へと座ると食事を摂る前にげんなりとして溜め息を吐き。

「あーあ、何でこんなに人が多いんだよ世間には幾らでも飲食店が存在してんだから、もっと分散して他店に行けばいいだろうにな、例えば各々の住まう地域の食堂とかレストランとか喫茶店とかでも良いんじゃないね、それこそ地産地消で地元の経済も潤うだろうし地元経済も回ってみんな万々歳じゃね？」

「うわ、また始まったよお兄ちゃんの我が事を棚上げしての集団批判が、あのさあお兄ちゃんそんな事言ったらそれこそお兄ちゃんだつてじゃあ近所の食堂にでも行ったらどうなのさって言われるのがオ

チだよ。

だいたいさ今ここにお兄ちゃんが居る時点でお兄ちゃんも他の人と同類で同じ穴の貉なんだからさ他所の人達の事あーだこーだ言えないって解つてんのかな、このごミイちゃんは。」

いつもの如く無駄口を叩き妹からの冷めた目を向けられてのその反論に八幡は何らの反撃も出来そうに無く懽然として押し黙る他のなかつたのだが、しかし意外にもそんな八幡の言に同意を示す者が一行の中に存在したのだった、それは。

「小町さんの発言は全く持つての正論であり反論の余地など微塵もない物だし普段であれば私も小町さんの発言を支持するのだけれど、甚だ不本意なのだけれど今回だけは私もその貉谷君の意見にほんの僅かだけ、ええ甚だ不本意だけれど領きたい気分だわ。」

顔色も悪く少し息切れさえしているにも拘わらずその様な減らず口を叩く雪ノ下に皆苦笑を禁じ得ないのだが、彼女からやり玉に上げられた形の八幡は些か面白くは無く。

「お前どれだけ甚だ不本意って言いたいんだよ、しかもなん何だよ貉谷つて韻も何も含んじやないし語呂がいい訳でも無いし、てかさ単だけ疲れた顔してんのにそんな言葉いじりする余裕だけは残ってんだなある意味尊敬もんだわ、否尊敬なんかしないけど。」

「あら別に貴方からの敬意など一欠片さえも欲しいとは思わないけれど、そんなにも私が貴方の意見に消極的に渋々ながらも同意を示すのが不服だと言うのかしら。」

八幡が反撃に転じれば雪ノ下もそれを迎え撃つ、これもこの二人なりのコミュニケーションのとり方なのだろうと云う事がこの一月余りの時を彼らと共にしてヤンにも理解出来た。

その毒舌による憎まれ口の叩き合いを展開する二人の様子に、ヤンはかつての一癖も二癖もあり過ぎる毒舌家揃いの前世の仲間達との日々を思い起こすのだったが、だからと言ってそれを放置し過ぎでは何処かしらでその籬が外れ取り返しの付かない事態に発展してしまうと云う事もあり得る。

例えばちよつとした言葉の選択ミスに依つて相手の逆鱗に触れて

しまう等、政治や外交の世界でもそれは起こりうる事でもあるし、それによって戦争勃発などと云う事態にさえなりうんのだから。

そんな大人の世界でさえそうなのだから、それがましてや人生経験の浅い十代の少年少女ともなれば尚の事ではないだろうかとヤンは危惧する、尤も願わくばただの杞憂であればとも思うのだが。

「ははっ、まあ八幡も雪ノ下さんも仲が良いのは結構だけでもうそれ位で良いんじゃないかい、ほら折角買った昼食のうどんが冷めて伸びてしまったら美味しく頂けないだろう。」

ヤンはセルフサービスにより盆の上に乗せた昼食のトッピング増々のうどんを指して二人を諷め昼食にしようと促す、そのヤンの言に当の二人は『別で仲良くなどして無い』と少し顔を赤らめながらボソリと言い反論するが、しかしヤンの言うことも尤もであり冷める前に早く昼食を食すべきだと認め取り敢えずは銚子を収める事とした。

奉仕部部員に小町とフレデリカを加えた一同は夫々に購入してきた昼食を、他愛も無い会話を交えつつも楽しみながら摂っていた。

八幡と雪ノ下に依る千葉県産品に対する知識勝負や、ヤンとフレデリカが是迄に訪問した事のある海外の国で味わった美味や珍味の解説などを聞きつつと言った具合に。

「うーん、しかし以前に九州で食したうどんと今頂いているのうどん、同じ日本の同じ料理であるのに麺の味はおろか汁の色も味も全く別物の様だね、うーん私としてはどちらかと言えば九州で頂いた味の方が好みに合っているかな。」

そこに投げ掛けたヤンによる東西のうどんの違いに各人が反応する、由比ヶ浜などはどうやらその話自体が初耳だった様で、驚きの声を上げる。

「ほへっつ、そうなんだねえいやさぁラーメンなんかは味噌とか豚骨とかいろんな味があるけど、うどんにも違いがあったんだね。」

「ですね、パスタ類とかだとスパゲッティとかマカロニとか形状も色々違うのもありますけど、うどんは知りませんでしたよ。」

由比ヶ浜の言に小町がパスタ類を引き合いに出し同意すると、フレ

デリカがそれを引き継ぎちよつとしたうどんの蘊蓄を披露する。

「ええ、讃岐うどんなどはコシの強さが売りだそうですけど九州の方ではコシの無いうどんが有名だそうですね。」

「ああ、そう言えば私が食べたのは九州のコシの無いうどんだったよ、ゆつくりと食べていたら麺がスープを吸ってしまつて何時の間にか少なくなつてきて驚いた物だよ。」

まあ継ぎ足し用の薬缶をお店側が用意していてくれてそれを継ぎ足しながら食べる仕組みだったんだけど、あのスープは甘みもあつてとても美味かつたよ。」

フレデリカの言葉にかつて食したうどんの味を思い起こしてヤンがそう付け加えると、興味を惹かれた女性陣などはその味を味わつてみたい、いつか一緒に行きましようと思つて盛り上がりを見せ、そこに八幡がもう一つうどんのネタを投下するのだった。

「そう言えば聞いた話なんだが、日清のど〇兵衛も出汁の味が東西で違つて話だしな、てか俺は基本的に千葉至上主義者ではあるが事うどんに関してはヤンと同様西の方の味が好みだな、何なら勇者部に入部出来るくらい讃岐うどんが好きまである。」

かの有名なカップ入りのインスタントうどんの味の東西の違い、それはごく一部では有名な話ではあるのだが。

「東西の出汁の違いは水質の違いに依るものなのだそうよ、関東圏は水の硬度が高く関西以西では軟水が多いそうよ。」

日本では出汁と言えば鰹節や昆布が主流だけれど、その出汁を取るのに比較的昆布は軟水に適していて鰹節には硬水が適しているのだそうよ、だからその違いが東西の出汁の味の違いに現れているのよね。」

上品な所作でアイスの烏龍茶を飲みながら雪ノ下が、その彼女の溢れる程の豊富な知識から八幡の言に更に追加で補足を入れる。

内心はアイスティーが販売されて無かつた事を不満に思つていたのだが、その事はおくびにも出さずに。

「うわ、出たよ流石はユキペディアさんにだよな、お前が網羅していない知識はオタク界限くらいなのかよ。」

アイスコーヒーにたっぷりのミルクとガムシロップを継ぎ足した飲み物を味わいながら八幡が突っ込みを入れる、彼女と同じく好物のマックスコーヒーがメニューに無かった事を不満に思いながら。

「そうね、認めるのは業腹ではあるのだけれど貴方やヤン君の影響でそちらの知識も幾らかは仕入れているのだけれどまだまだ貴方達のそれには程遠いと言わざるを得ないわね、それは兎も角比企谷君毎度の様に私が何事か知識を披露する度にそのふざけた呼び方をしないでくれるかしら。」

「あーはいはい、その件に付きましては誠に遺憾ながら可及的速やかに検討を重ねる所存でありまして、付きましては今暫くの猶予を頂きたいと存じておるところです、と言う事にしといてくれ。」

雪ノ下が己に告げた不平を八幡はまるで何処ぞの国会議員の答弁のように、実行に移す気など更々無い答弁の様な返答で韜晦し有耶無耶に終わらせようと試みるが、だが果して雪ノ下を相手に何時までその様な真似が通用するものか。

キツと鋭い視線を八幡に向ける雪ノ下の態度がその事を如実に物語っているのだが、それには知らぬ顔を決め込んで八幡はコーヒー入りのミルクとガムシロップを啜る。

「あつそだヤン君、そう言えばさつきヤン君がヒツキーに聞かれてゆきのんのお姉さんみたいな人が身近に居たからなれてるって言ってたけどさ、それってどんな人だったの？」

ちよつと気になっちゃって、やあヤン君があんま話たく無いってなら別にいいんだけどさ。」

八幡と雪ノ下との間にまたしても不穏な空気が生じようとしている事を逸早く察してか、由比ヶ浜が話題を変換すべく素早く口を開き先にヤンが少しだけ語った彼自身の過去の話掘り下げたの説明を求め、由比ヶ浜としては友人である雪ノ下と想い人たる八幡とがこの衆目の中で反発しあい揉め事を起こしてしまわないで欲しいとの気持ちからの発言であり、人の過去の話を穿り返したいと思っている訳では無いのだが。

「ん？ああうん、まあ確かにそう言ったねえ。」

うどんのお供にと注文したいなり寿司を箸で摘んで口に入れようとしていたタイミングでそう問われたヤンは、本の数十分前の自身の発言を思い返してみても確かにその様な事を言ったなど由比ヶ浜へ返事を返すと、少しだけどうしたものかと思案するが別段隠す様な事でも無し話しても構わないだろうと判断を下し。

「そうだね、時を遡ること……」

ヤンはこの場に居る皆に対して自身の昔話を語り始めるのだった。

魔術師の言葉に彼女は何を見出すか。

大型複合商業施設内のフードコートにて昼食に舌鼓を打ちつつ会話を楽しむ・ウエンリーとその一行、何時もの如く八幡と雪ノ下の舌戦が開始され始めたタイミングを見計らい、由比ヶ浜が機転を効かせ話を逸らす為ヤンに話を振るのだった。

それに対して嫌な顔一つ見せずヤンはあつさりとして承すると、語り始めるのだったが。

「そうだね、時を遡ること…とその前に一つ雪ノ下さん一つ確認をしておきたいのだが、もしかすると君の実家は由緒正しきかどうかは分からないけどそれなりの規模の商売を営んでいるのではないかな、申し訳無い私自身不躱な質問をしていると自覚しているから君が答えたく無ければそれでも構わないんだけど。」

前置き一つ自分の話の前に、雪ノ下へと彼女の实家についての質問と言うよりも、確実にそうなのだろうとの推察の元で事実確認をする様に問うのだった。

ヤン自身が言った様にそれは確かに不躱な質問であろう、問われた雪ノ下が何やら複雑な表情を見せている事からもそれが窺えると云うものだろう。

「ええ、別に隠す様な事でも無いから言ってしまうけれど、ヤン君の推察通りで間違い無いわ。」

私の実家は建設業を営んでいてそれなりに高い実績と業績を残しているし、それに父はこの千葉県県の県議会議員を勤めているわ。」

ヤンからの問いに若干、雪ノ下が渋面を拵えた様に見て取れたが彼女はそれでもヤンの質問に対し肯定、自身の家業に付いて答えてくれた。

「そうなんだね、ありがとう雪ノ下さん、ああそれと序に申し訳無いこれまた不躱な質問になるんだが雪ノ下さんのご家族、雪ノ下さんの御兄弟は先のお姉さんと雪ノ下さんの姉妹二人だけではないかと思うんだが、これも間違い無いだろうか。」

それに謝しヤンは再度雪ノ下に問うと今度はごく普通に頷き『ええその通りよヤン君』との一言を発して肯定する、ヤンもまたその答えを聞くと謝辞を述べつつ『うむ』とばかりに頷く、その様は如何にも得心が言ったと言わんばかりであり加えて下顎を指で摘む仕草などを取っているものだから、その姿をみて小町などは。

「おお、お兄ちゃん何かヤンさんってさ凄腕の名探偵みたいだね、今のポーズとかすつごく様になってるしさ。」

と、妙に感心しそう口にし更に其処に付け足して『まあ、お兄ちゃんにはああ言うのちつとも似合わないだろうけどねえ』などと言うものだから、言われた八幡の方は少し気分を害し反論を試みるも話が進まぬからと周囲から諫められ、眼と表情を腐らせ渋々黙るのだった。

『さっ、続きをどうぞ』と調子よくいたずらっぽく微笑みながら小町がヤンを促すと、それが妙に可笑しく感じ苦笑しつつ頷きヤンは自身の推察した事を述べる。

「雪ノ下さんのお姉さん、ミス雪ノ下は雪ノ下家の長子でありつまりはご実家の後継者の立場に現状在る訳だよな。」

と言う事は、これは私の推察だけど彼女はおそらくご両親から後継者としての教育を施されて来たのではないかと思うんだ、それも多分だけどかなり幼い頃からだったんじゃないかな。」

再度雪ノ下がヤンの推論に頷き無言による肯定の意を示すと、またしても『おお凄い』と小町と由比ヶ浜が合いの手を入れ、フレデリカが咳払いを入れて二人を嗜める。

ペロツと舌を出し戯けた調子で形ばかり頭を下げて詫びる小町と思わず両手で自らの口を塞ぐ由比ヶ浜に、トドメとばかりに雪ノ下と八幡が非難の目を向け二人を黙らせる。

「そして、齢を重ねるに連れご両親と共に公の場に出席する機会も増すだろうし、更にはそのご両親の名代としてそう云った場に出席する何て事もね。」

で以てそれは将来へ向けての有力者やその子弟との面通しだとかも兼ねているのだろうね、なので家業の為にも其処で下手な姿なんぞ見せられやしないスキを晒すなんて以ての外だろう、況してや地方

とは云えど議員のご令嬢となれば尚の事にだらうね。」

『やれやれ実に面倒な事だよ』とヤンとしては雪ノ下姉妹を慮り同情の念を込めてその様に言うのだが、その解説を聞く皆には何処かしら惚けた様な声音に感じられているのだが、まるで「気付かないのは本人ばかりなり」を体現しているかの様に呑気に緑茶を啜り口を湿らせて更に続ける。

「しかもそれに加えミス雪ノ下は、いやこれは雪ノ下さんもそうだがとても見目麗しいお嬢さんだし、おっと失礼これはいかなセクハラ発言と取られてしまうかな。」

失言をしてしまったかと、ヤンは後頭部に手を当てるとゆるりとその後頭部を搔きながら一旦その口を閉じる。

その続きを語るべきか語らざるべきかとヤンは彼なりに気を使い思索し黙考すると、ヤンに対して気を回したと云う訳でも無いのだから八幡がそこから先を彼自身の導き出した考察を述べる。

「つまりは、そこで雪ノ下や雪ノ下さんを見初めて縁談話とかも出て来たとしても可怪しくは無いんだよな、娘を有力者と結び付ける事で自己の権勢をより強固なものにするとか所謂政略結婚の具に供されるって訳だ、ヤンじゃ無いけどそれこそ世界中歴史的にもそんなに珍しい事でも無いだろうし、まあ実際に雪ノ下の両親がそんな事を計画しているかどうかは知らんし、そもそもが俺達には関係無いっちゃ関係無い事なんだよな。」

「……ゆきのん……」

「雪乃さん……」

八幡の語る考察に由比ヶ浜と小町の二人は雪ノ下を氣遣う様に彼女に優しく声を掛ける、彼女の実家や姉に対して八幡が言った様な事態が何れ訪れたとしても可怪しくは無いと彼女も理解しているのだろう。

そしてそれは雪ノ下自身の方にこそ、より可能性が高いのではないかと、何故ならば長子である姉はこのまま順当に行けば雪ノ下家の後継者となるだろうが、対して次女である自分とは云えば母親に逆らい実家を出て我儘に一人暮らしをさせて貰っている、その事実を彼女の

母親が快く思っているのかと問われたら。

「うん確かにね、まあこれ迄はどうだったか知らないけど之からはそう云った話が出て来ても何ら不思議では無いんじゃないかな。

ただこれは私が先程、ミス雪ノ下から受けた印象なんだけど彼女は相当地聡明で優秀な、そうだね遣手な女性の様に思えたんだよね。

なので彼女はそう云った事態にも卒なく上手にあしらい自らが望まぬ縁談などは華麗に往なしてしまっただね。」

姉陽乃をその様に評するヤンの発言に雪ノ下も言葉として発する事はしなかつたが内心に同意する、幼い頃から間近でそれを見てきた妹である彼女であるからこそ姉のその能力の高さを理解しているという物である。

そして顧みて自分はどうかとも考える、果して自分はその姉程に物事にそして自らの置かれた状況に対して都度適切な判断を示せるのかと。

「ただね、そうであつたとしても人の心だとか精神つてものは知らず知らずの内に磨り減つてしまうものだからね、なのでミス雪ノ下も何時か何処かで取り返しの付かないミスを犯してしまう、その可能性もまあ無きにしも在らずってね。

だからまあそうなら無い為にも彼女も何かしら心身のケアを、気分転換の方法を見つけた事が出来ればいいんだろうけどね、それもなるだけ他者に被害が被らない健全な形の物をね、と云う訳で私としては昼寝を推奨するね。

きちんとした寝場所さえ確保すればあれ程他者に迷惑を掛ける事も無く、且つ心も身体もスツキリとリフレッシュされると来ているからね、どうだいこれ程高尚な趣味が他に在るだろうかと私は言いたいね。」

かつて戦場に於いて数多の敵手を、その敵将の心理状態を的確に読み切り策略に嵌め、幾多の勝利を重ねてきた後の世に戦場の心理学者とも呼ばれるヤンなればこそ陽乃の置かれた状況や心理に付いてその様に推察が出来たのがろうか。

しかしその様に彼女を親身に案ずる如き言を発しながらも、最後に

は自分の趣味に付いて力説するヤンの様にフレデリカ以外の女性陣から何とも言えない微妙な視線を送られ、それに気が付いたヤンはハツと我に返ると再び緑茶に口を付け口内を湿らせると一つ咳払いをする。

「おっと、長々と話してしまつたが由比ヶ浜さんからの質問に対する答えの、先ずは此れが前提だと理解して欲しいんだがまあ私の趣味の昼寝に着いては置いとくとしてだけど、はははっ。」

ヤンはその様に前置きをし、いよいよ肝腎の本題へ移ろうと改めて口を開こうとしたその時、ヤンを制し雪ノ下が今度は彼へこれまでの話から彼女が思考し導き出した推測を述べはじめる。

「ヤン君、今貴方が語ってくれた話の流れから鑑みて見たのだけれど、貴方が其処までの的確に私の実家の事や姉の事をあれ程迄に的確に推察出来た理由、それは貴方の推理考察能力や比企谷君と同様に高い観察眼によつて相手の心理状態等を見抜いたのもあるのでしょうか。」

そして貴方が言っていた知っている人と言うのはおそらくだけれど貴方のご家族の方ではないかと推察するのだけれど違つかしら。」

「うん、御名答。」

雪ノ下の言にヤンは一言、そうだと告げると緑茶口に付け美味そうにその口許をほころばせる、紅茶程では無いがヤンは案外緑茶の味も好んでいる様である。

「実を言うとな、その人物とは私の十歳年の離れた兄なんだよ。」

そしてヤンはその種を明かすとまるで合いの手を入れる様に小町が感嘆の声を上げ。

「おお、そうだったんですか、いやあヤンさんつてすつごくシツカリしてそうだから小町は長男さんつてイメージ持っていましたよ。」

ああゝつ、でもうちの兄も長男ではありませんけどもすつごく残念な部類に入っちゃうんですよね。」

序の様に兄である八幡を引き合いに出してこき下ろす、所謂デイスると云う行為である。

しかし小町は知らなかった、実はヤンが生活人として著しく低い能力しか持ち合わせていない事を、そしてヤンが辛うじて人並みの生活

環境に身を置く事が出来ているのは偏にフレデリカが甲斐甲斐しくその身の回りの世話を焼いているからだと言ふ事を。

「なあ小町さんや、お前さん最近兄の扱いがヤケにぞんざいに過ぎるのと違うんじゃないですかね。」

「やだなあお兄ちゃんつてば、そんなの今に始まった事じゃ無いじゃん今更だよい・ま・さ・ら。」

それに対し八幡も異議申し立てを試みるがそれを小町はあつげらかんと笑いながらしらつとあしらうと、八幡は反撃の狼煙と共に对小町用の切り札を切る。

「よし、解ったわ……お前がそのつもりなら冷蔵庫の中の俺が買ってきた『フロリダサン〇ー』のゴールデンパイン味はお前には分けてやらん！」

「え〜っ！ちよつとお兄ちゃんそれつて卑怯じゃん、食べ物^{ものじち}を物質に取るとかあり得ない、小町的に超絶ポイント低いよ。」

睨み合う？二人の兄妹の様子を見かねたフレデリカは、どう止めようかと思案するもどう声を掛けるべきか戸惑い。

雪ノ下は溜め息を吐きつつ額に手を当て首を左右に小さく振り、不干涉を決め込むのだが。

「アハハ、小町ちゃんもヒツキーもさヤン君の話が進まないから取り敢えず兄妹のイチヤイチヤとか喧嘩は後でやりなよ。」

どうにもそれを見かね由比ヶ浜が仲裁に入り、二人揃って『イチヤイチヤなんかしてないし』と彼女に言われた言葉を否定するのだが、由比ヶ浜からみても兄妹二人のその息ピッタリの合わり具合には、口では何と言おうともこの二人の兄妹仲は良好であると言ふ事が伝わってくる。

「そうだね、あれはかれこれ六年、いや七年位前だったかな私の幼少の砌の話なだけど。」

騒がしかったその場が落ち着き一段落が付いた事を見計らいヤンはその様に切り出し語り始めるのだが、またしても其処に待ったを掛

ける声が発せられた。

「つて、ちよつと待てよヤン、何だよ幼少の砌つて!?!お前つてアレか何処ぞのお貴族様のご落胤とかなの、さる止ん事無い一族の血筋なの? いや確かにお前の名字はヤンだけど。」

八幡によりその様な突っ込みがヤンの昔語りのプロローグ部分に加えられる。

「はははっ、ナイスな突っ込みと駄洒落をありがとう八幡、いや昔語りするに当たつての演出つてヤツをを意識してみたんだがね、今一受けが宜しくなかつたかな。」

苦笑しつつヤンは後頭部に手を当てその様な言い訳じみた事を宣い、そして畏まって咳払いを入れると改めて今度は真面目に語り始める。

「私の実家はそれなりの規模の手広い商いを手掛けていてね、その商売人の家の長子として産まれた兄貴はまあ言うなれば所謂大店の若旦那つてやつだね、ミス雪ノ下と同様にね。」

そして語られる今生のヤン家とその長子についての説明、それは性別の差はあれど雪ノ下の姉陽乃の境遇と近いものであり、言わばそれは先程まで彼等が語り合っていたブルジョア家庭に於いてはごくありふれた家庭事情と言つても差し支えの無い事柄であった。

「そんな訳で、当時の私の兄貴も今のミス雪ノ下の様に己を殺し八幡が言うところの強化外骨格を纏い完璧な跡取り息子を演じていたんだよ。」

ヤンがそう述べると雪ノ下は少し俯き己の膝の上に置いた手にギョツと力を込め、そして八幡が無然とした表情で無造作に伸びた髪の毛をガリガリと搔いていた、それはまるでヤンの話を聞いた二人の何ともやるせない気持ちを顕しているかの様に。

「だけどね、さつきも言つたけどうちの兄貴もやはりストレスをため込んでいたようだね、まあそれでも長い事兄貴はそれを隠し続けては居たんだ。」

まあこれは後から兄貴自身に聞いた話なんだけど、最も兄貴がストレスに感じていたのは引つ切り無しに舞い込んでくる婚姻の話だっ

たそうなんだけどね。

何せ兄貴は常々三十過ぎるまでは独身貴族としての生活を謳歌したいと言っているからね。」

そう語りヤンは一旦口を閉じると隣に座るフレデリカを優しく見つめる、それはかつてヤンがフレデリカとの婚約を了承した事を兄に揶揄された事があつた事を思い出したからなのだが。

『運命や宿命』などと云う言葉を前世から今生に於いてもヤンは嫌っているのだが、前世に於いて出会つた自身のつまであつたフレデリカやその父親のドワイト、また自身の父親であるヤン・タイロンと宇宙暦の時代の彼の親しい人達と同一人物なのではと思われる者達までもが存在する現実には、何か作為の様な物を感じてはいるのだがそれでも前世にて共に生涯を全う出来なかつた、妻の移し身だと思われ現世の彼女と共に出来るだけ幸せに暮らして行きたいと彼なりに思っていたりするのだった。

「それでヤン君のお兄様はどの様にされてたのかしら。」

雪ノ下の問いに対ヤンは彼女へと視線を合わせ頷き話を続ける。

「あれは私が十か十一歳の頃か、そんなある日の深夜の事と言つても小学生にとつてのだからそんなに遅くは無かつたんだろうけど、その日はふと夜中にトイレに行きたくなつて目が覚めて用を足しに行つたんだが、その帰りに何気無く寝ぼけ眼の私の視界の片隅に少しだけ兄貴の部屋のドアが開いていてるのが見えたんだ。

兄貴と私は年が十も離れているから幼い時にあまり一緒に行動をしたと云う事も無く家族でありながらも疎遠な関係だつたんだが、まあそれもあつたのかもだけどその時の私には兄の部屋の様子が妙に気になつて目を凝らして見るとね、其処から微かに光が廊下へと漏れ出ている事が解つて私は野次馬的好奇心に駆られその光源たる兄貴の部屋を覗き見てみたんだが、其処で私が目撃した光景は当時の私としてはとても驚くべき物だつたんだ。」

ヤンは常と変わらぬ穏やかな口調で連連と語るのだが、逆にそれ故にであろうか小町などにはその口調に只ならぬ物を感じたのか思わず生唾を飲み込みそうになりながらも、おずおずと彼に尋ねる。

「それは？」

そして問われたヤンはそれに対して少し砕けた口調で返答を告げるのだった。

「いやそれがねえ、深夜に一人ブツブツと不満を口にしながら部屋の中で酒瓶を片手に大量の駄菓子をかっ喰らう兄貴の姿だった、何と云うかこうガツガツと行儀も何もあつたものでは無いと云う感じだね、幼いながらにその姿を見て私も流石に引いてしまったよ。」

「まあでも、アレがああの当時の兄貴にとってのストレスの解消法だったんだろうがね。」

ゼスチャーを交えながらヤンが当時目撃した己の兄の行動を説明すると、奉仕部のメンバーと小町はどの様なリアクションを返すべきかと戸惑い頬を引く付かせている。

『どうも女性陣にはあまり好まれ無い話だったかな』と、皆のその反応にヤンはそう独りごちるのだった。

「まあその後、そんな私を見留た兄貴が手招きをして私を自らの部屋の内へと招いてくれて、他の者には内密にとの条件の元私も兄貴の相伴にあずかったんだけど、中でも一番好みに合ったのは日本のお菓子だったなあ。」

それは何でも兄貴の大学の友人で日本からの留学生からの頂き物だったそうなんだが、思えば私が初めての日本に興味を抱いたのはあの駄菓子の味を知ってからかも知れないね。

アメリカへの留学の経験がある雪ノ下さんなら識っているかも知れないけど、向こうの食べ物は何と云うか大雑把と云うか極端と云うべきか、ざっくり言えば私の好みの味とは程遠いと云うか。」

海の向こうの彼の国の食品事情を思い起こしヤンはうんざりとした声音と表情を見せる、残念な事にそれ程迄にヤンにとってあちらの食品は好みに合わなかったのだろう。

「ああ、何か解る気がするわ……まあ俺のはネットで仕入れた知識ってか画像だが向こうのケーキとか甘味って気持ち悪い位にドギツイ色合いとかしてて、食欲を全く刺激されないってか本当に食べ物なのかと目を疑うレベルのモノばかりで食指が唆られないわ、マジ

で。」

「あく、ソレあたしも知ってる！前にクッキー作り教わった時にあたしも色んなお菓子とかに興味持ってネットで調べてみたんだよね、そしたら画像が出てきてさあたしもアレは食べられないって思ったよ。」

そのヤンの感慨に八幡と由比ヶ浜がネット上で得た情報を元に同感の意を示すのだが、その由比ヶ浜に対して八幡は訝しげな眼差しを送るとつづげさまに彼女に対しての否定的見解を口にする。

「いや、由比ヶ浜の場合はアメリカンな菓子を否定できないレベルだからな、何せお前は食べるはずの食材から食う事の出来無い謎のダークマターを錬成する程の隔絶した料理の腕前の持ち主だし、何ならお前が世界トータスに召喚されたら天職はきつと錬成師になるはずだ、まあお前は不器用だから銃器とか作れないだろうがな。」

「なっ!?ちよつとヒツキーっばヒドい、またあたしの事バカにしてっ、あたしだってアレから少しは成長したんだかね、それにヒツキーあの時言ったじゃん女子が自分の為に頑張って作ってくれたんだって事が解れば、それだけで嬉しいもんだってさ。」

そしてお約束の如く始まる二人の言い合い、少しばかり怒りの成分を混ぜながらも頬を微かに紅く染めて反論をする由比ヶ浜の言い分は恋する乙女のそれであるのだが、そうと知ってか知らずか言われた八幡の方は適当にあしらおうとしていたりして傍目には微笑ましくも思えるのだが。

「八幡さんも結衣さんも仲がよろしいのは結構ですけれど話が進みませんからその辺りで。」

そう判断したフレデリカが仲裁に入り二人を諫め、ヤンへ目配せをし話の続きを促すとヤンもそれに頷くと緑茶を一口啜ると、この一連の話の総括をすべく語り始める。

「まあそう言う訳で兄貴にとつては菓子のバカ食いが一種のストレス解消法になっていたのかも知れないと当時は思っていたんだ、偶にだけどそのおこぼれに預かれる私にとつても良い事尽くめの様に思っていたんだけどね、そうでは無かったんだよ。」

「兄貴は身長が百八十を超える長身で痩せすぎず太すぎずの理想的な体型の好男子だったんだけど、どうやらその暴飲暴食が祟ってしまって遂には体重が百キロの大台に乗ってしまったんだ、まあそうなって初めて両親と兄貴はこれはいかんと互いに腹を割って話し合い兄貴は其処で漸く自身の思いを両親に伝えることが適ったと言うわけさ。」

まあ結論として我慢やため過ぎつてのは心身両方にとって碌な結果にはなりやし無いって事だね、だからそうなる前に何某かの手を打たなきゃならないって事さ、面倒がったり遠慮や躊躇ったりする事無くね。

だいたい物事と云うものにはタイミングとか期限とかかってものがあるからね。

そして往々にしてその機を逃してしまい後になればなる程に対処が리카バリーが困難になるからね。」

語り終えたヤンは何時もの如く、すかさず手中のカップを口元へと運び薄緑色の液体を口中へと流し込み、喉から体内へと流れ込む冷たい感触を愉しむ。

フレデリカがそんなヤンを暖かな眼差しと微小とをもって見つめ、奉仕部のメンバー達は夫々にヤンの話を己の中でかみ砕き整理でもしているのだろう、皆何やら思考を巡らせている様だ。

そして雪ノ下がその顔をあげヤンを見据えて微かにその表情を柔らかに緩め、その口を開く。

「あのありがとうヤン君、今話してくれた貴方の話はとても参考になったわ。」

姉と、いいえ姉を含むうちの家族皆と今後どの様に接して行くべきかの一つの指針とさせていただくわ。」

雪ノ下は軽く頭を下げてヤンへと礼を述べその頭を上げると、彼女のその眼差しには鋭い輝きが宿っている様にヤンには見えた。

「どういたしました、私の与太話が何かの役にたてたのなら何よりだよ。」

ヤンはそう言つて少し照れながら頭を掻くともう一度緑茶を呷る。

「ええ、今はまだ明確な答えは出ていないのだけれどもね。」

『それで結構、急いでは事を仕損じるとも言うしね』と雪ノ下へそう答えるとヤンは心中に思うのだった。

雪ノ下自身で確りとその考えを纏め、どうか彼女やその家族にとってより良い答えに、結果に辿り着いて欲しいと。